岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第492集

野里上遺跡（のざとかみ）・野中遺跡（のなか）発掘調査報告書

一般国道４号小鳥谷バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

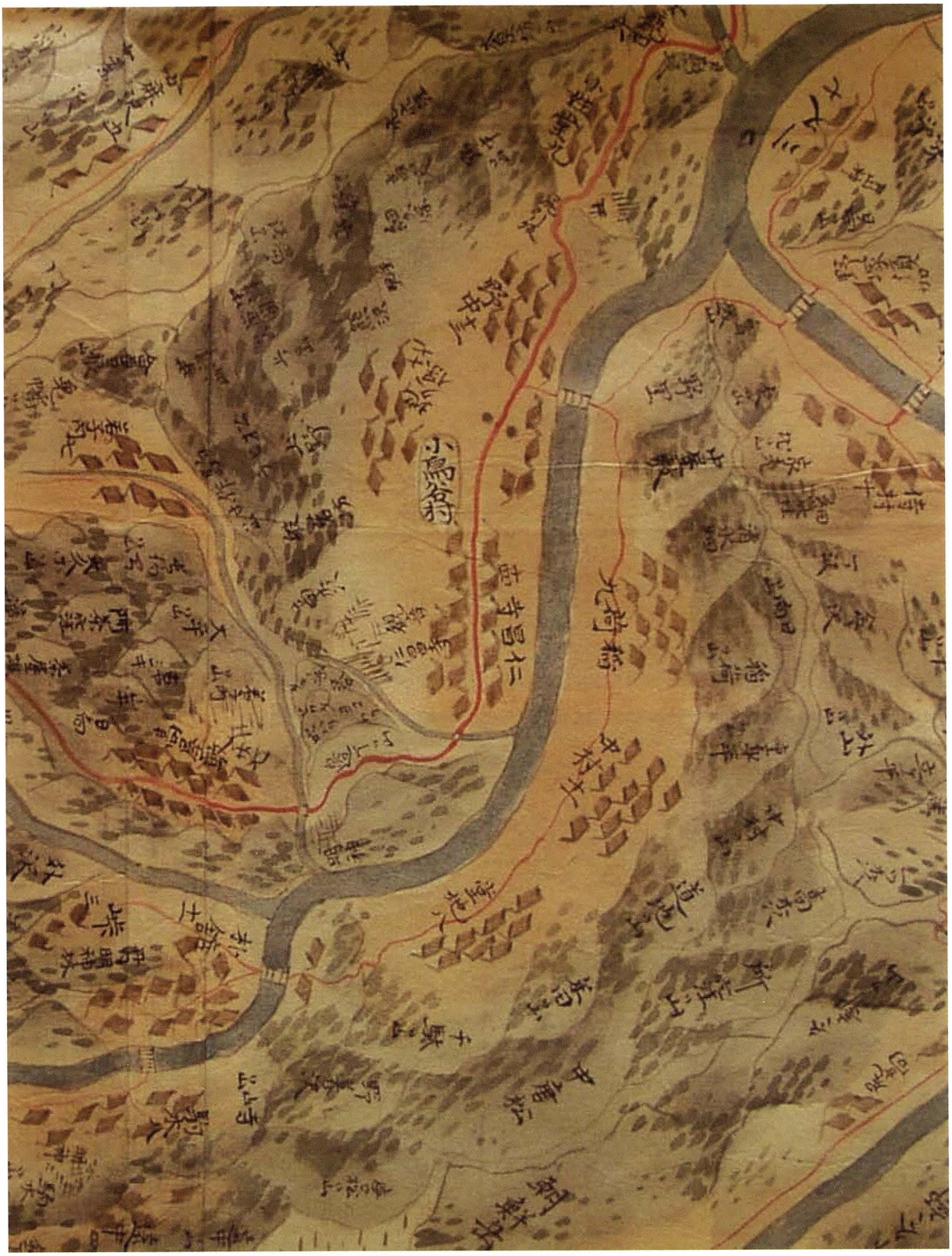
2007

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

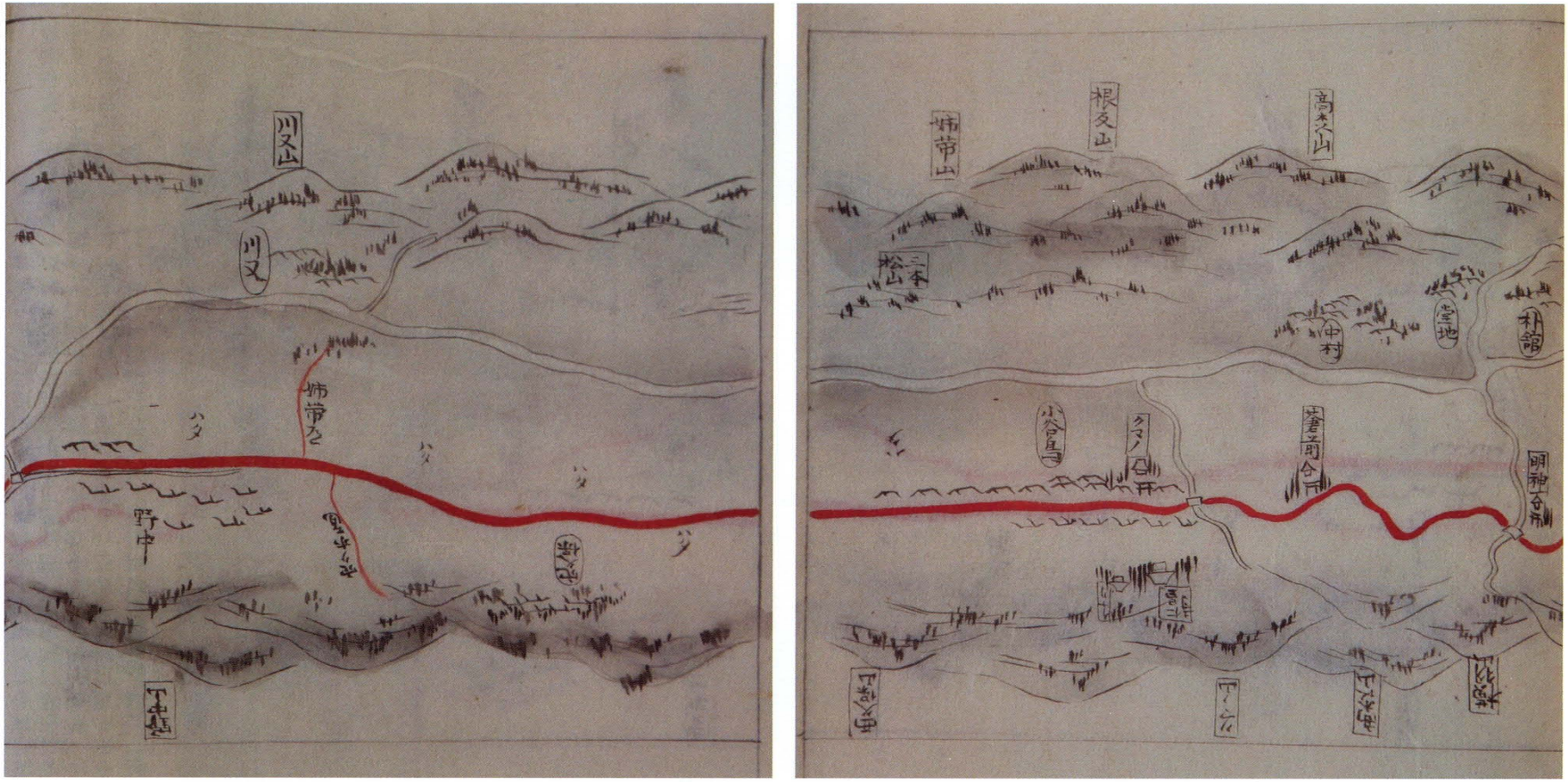
野里上遺跡・野中遺跡発掘調査報告書

一般国道4号小鳥谷バイパス建設事業関連遺跡発掘調査



『御旧領之内福岡通繪図』（盛岡市中央公民館蔵）江戸時代後期？

小鳥谷付近を抜粋。中央を流れる太い河川は平糠川、図右上で馬淵川と合流する。平糠川の赤い太線は奥州街道である。野里上遺跡は「小鳥谷村」と書かれた付近および「地久保」集落の南東端部分にあたり、集落は山際に営まれ、街道沿いは空白地帯であったことが分かる。野中遺跡は、まさに「野中」集落の描かれた部分にあたり、その立地は現在と変わりない。



『北奥路程記』（写本・岩手県立図書館蔵）　江戸時代後期

江戸時代後期、盛岡藩士の漆戸茂樹により描かれた小鳥谷周辺の様子。左が北である。南北にのびる太い赤線は奥州街道（現在の国道４号）、その東に並行するのは平糠川である。野里上遺跡は左図の街道西側「穴久保」と書かれた付近にあたる。『御旧領之内福岡通繪図』（巻頭カラー写真図版１）と同じく、集落は山際に描かれている。いっぽう、街道付近を含め低位部は「ハタ」とあり畑地であったことが窺える。また、野中遺跡は街道沿いの「野中」と書かれた付近にあたり、これも『御旧領…』と共通する。

遺跡遠景（南から）

野里上遺跡調査区全景（西から）

野中遺跡調査区全景（西から）

2 号耕作痕跡検出状況（東から）

序

本県には、旧石器時代をはじめとする１万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、一般国道４号小鳥谷バイパス建設事業に関連して平成17年度に発掘調査された二戸郡一戸町野里上遺跡および野中遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により、野里上遺跡では奈良時代の集落跡と平安時代の耕作域、中世の火葬関連遺構などが検出され、野中遺跡では中世～近世の建物跡などの存在が明らかとなりました。中でも、野里上遺跡における平安期の耕作痕跡（畠作関連）は７区画を数え、当地域におけるTo-a降灰後の農耕、食糧事情などを考える上で重要です。また、中世の火葬関連遺構は検出例が少なく、該期における一戸地域の葬制に関わる様相を考える上で貴重な資料となるものであります。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、一戸町教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年３月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　武田牧雄

例　　言

1　本報告書は、岩手県二戸郡一戸町小鳥谷字穴久保90－２ほかに所在する野里上遺跡と同字野中117－３ほかに所在する野中遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2　両遺跡の調査は、一般国道４号小鳥谷バイパス建設事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課との協議を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3　岩手県遺跡台帳における遺跡番号および遺跡略号は次のとおりである。

野里上遺跡・・・ＪＦ３０－１０８１・ＮＺＫ－０５

野中遺跡・・・・ＪＦ３０－１０３３・ＮＮ－０５

4　調査に関わる期間および面積は次のとおりである。

野里上遺跡

野外調査・・・期間　平成17年４月14日～８月31日

面積　12,230㎡

室内整理・・・期間　平成17年11月１日～平成18年３月31日

野中遺跡

野外調査・・・期間　平成17年９月１日～９月29日

面積　1,685㎡

室内整理・・・期間　平成17年11月１日～平成18年１月31日

5　野外調査は丸山浩治、荒谷伸郎、村木敬、藤原大輔が、整理作業は丸山、荒谷が担当した。報告書の執筆は、第Ⅰ章を国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、その他Ⅵ章以外は丸山と荒谷が担当し、執筆頁末に文責を記した。全ての編集、構成は丸山が担当した。

6　試料の分析・鑑定は次の機関・団体に委託した。

植物珪酸体分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・佐瀬　隆（北方ファイトリス研究室）

土壌分析（植物珪酸体分析・花粉分析）・・・・・・・・吉川昌伸（古代の森研究舎）

炭化種子・樹種同定・・・・・・・・・・・・・・・・・吉川純子（古代の森研究舎）

放射性炭素年代測定・・・・・・・・・・・・・・・・・株式会社　加速器分析研究所

骨類同定・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・パリノ・サーヴェイ株式会社・金子浩昌

石器・石製品の石材鑑定・・・・・・・・・・・・・・・花崗岩研究会

7　遺構図・コンター図作成等、野外調査に関わる図面類はすべて株式会社セビアスに委託した。

7　空中写真撮影は東邦航空株式会社に委託した。

8　調査および報告書作成にあたり、次の方々・機関から御指導・御協力をいただいた（順不同・敬称略）。

高田和徳・中村明央（一戸町教育委員会）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）、菅原　修・小林弘卓（岩手町教育委員会）、東本茂樹（八幡平市教育委員会）、坂本真弓（青森県埋蔵文化財調査センター）、小保内裕之（青森県八戸市教育委員会）、岩手県立博物館、盛岡市中央公民館

9　発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

10　調査成果は現地公開資料、調査概報等に発表してきたが、本書の内容が優先するものである。

凡　　例

1　遺構実測図の用例は下記のとおりである。

（1）　遺構実測図の縮尺は基本的に次のとおりである。ただし一部異なるものもあるため各図にスケールおよび縮尺を付した。

竪穴住居跡・・・・・・・・・1/60
掘立柱建物跡・・・・・・・・1/60
耕作痕跡・・・・・・・・・・1/80
溝跡・・・・・・・・・・・・1/100
焼土遺構・炭化物廃棄遺構・・1/40
土坑・・・・・・・・・・・・1/40
柱穴状土坑・・・・・・・・・1/100
なお、基本土層（1/60）を除き断面はすべて1/40である。

（2）　推定線は破線で示した。

（3）　層位の表記には、基本土層にローマ数字、各遺構埋土にアラビア数字を使用した。

（4）　土層色調の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を使用した。混入物量（%）の目安もこれを参考にした。

（5）　図面中の土器は「p」、石器および礫は「s」の略号で表記した。

（6）　挿図中で使用した網掛けおよびスクリーントーンの主な用例は凡例図のとおりである。これ以外の使用箇所については各図に用例を表記した。

2　遺物実測図の用例は下記のとおりである。

（1）　各遺物の縮尺は基本的に次のとおりである。ただし一部異なるものもあるため各図にスケールおよび縮尺を付した。

縄文土器・・・・・・・・・・1/3
剥片石器・石核・・・・・・・2/3
土師器・・・・・・・・・・・1/3
鉄製品・・・・・・・・・・・1/2
銭貨・・・・・・・・・・・・1/1
木製品・・・・・・・・・・・1/6

（2）　遺物の計測位置およびスクリーントーンの用例は凡例図のとおりである。計測値は、残存値の場合（　）で表記した。

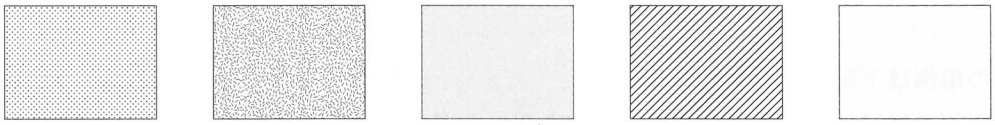
3　本文の一部、ならびに挿図中で用いたテフラ名称は『新編　火山灰アトラス』（町田洋・新井房夫　2003）に従い、次のように略称を用いて表している。

白頭山・苫小牧テフラ → B-Tm
十和田aテフラ　　→ To-a
十和田中掫テフラ　　→ To-Cu

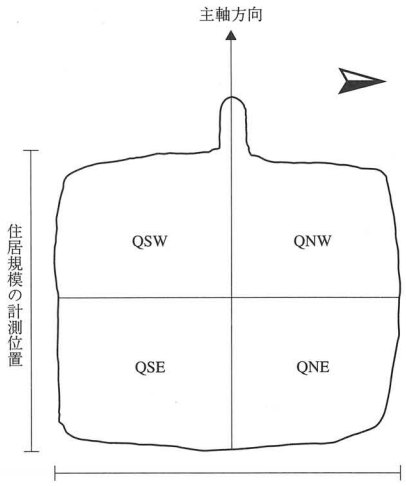
4　国土地理院発行の地形図を転載したものは、図中に図幅名と縮尺を付した。

5　引用・参考文献は各章末に記した。

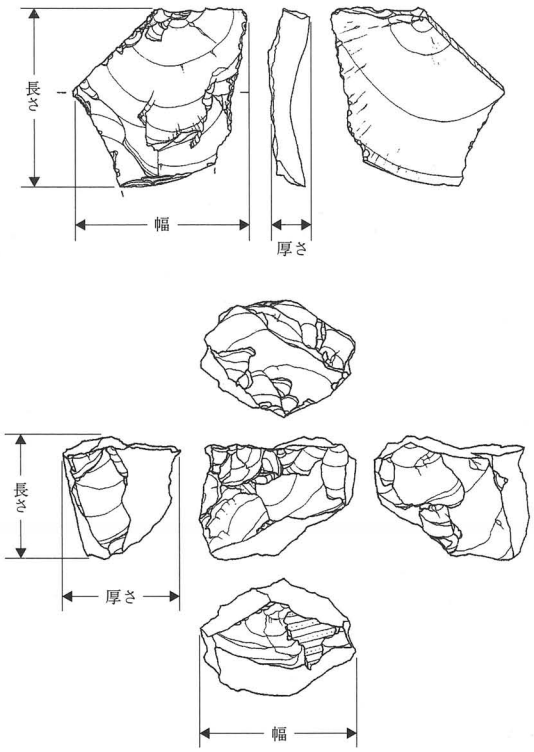
遺構図網掛け用例



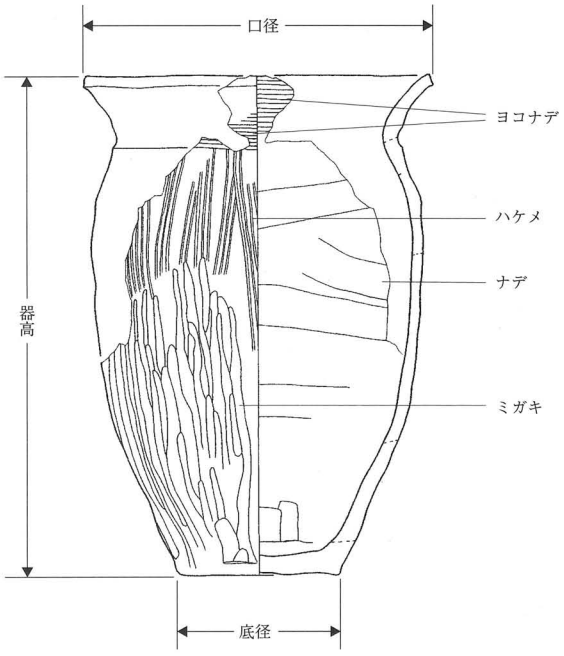
竪穴住居の主軸方向および規模計測用例と平面区割名称例

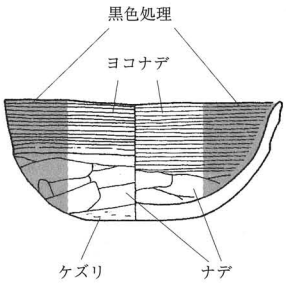


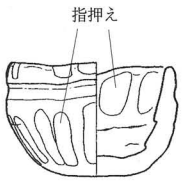
石器計測位置用例



土師器実測図用例







凡例図

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 1

1　遺跡の位置 …… 1

2　地形と地質 …… 1

3　基本土層 …… 5

4　歴史的環境と周辺の遺跡 …… 5

Ⅲ　調査と整理の方法 …… 13

1　野外調査 …… 13

2　室内整理 …… 18

Ⅳ　野里上遺跡 …… 19

1　検出遺構 …… 19

2　出土遺物 …… 78

Ⅴ　野中遺跡 …… 103

1　検出遺構 …… 103

2　出土遺物 …… 133

Ⅵ　自然科学的分析 …… 137

1　野里上遺跡放射性炭素年代測定 …… 137

2　野里上遺跡の耕作痕跡の花粉化石群と植物珪酸体化石群 …… 139

3　野里上遺跡低湿地試掘トレンチ粘土層の植物珪酸体分析 …… 143

4　野里上遺跡・野中遺跡より出土した炭化種実 …… 154

5　野里上遺跡より出土した木製品および加工材の樹種 …… 157

6　野里上遺跡出土骨同定 …… 159

Ⅶ　総　　括 …… 161

1　ま　と　め …… 161

2　考　　察 …… 163

報告書抄録 …… 218

図版目次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　周辺の地形と水系 …… 3
第３図　基本土層（１） …… 6
第４図　基本土層（２） …… 7
第５図　基本土層（３） …… 8
第６図　周辺の遺跡（半径10km圏内）……11
第７図　グリッド設定図 ……15
第８図　ＫⅢ～ＫⅣグリッド付近低湿地
　　試掘トレンチ位置 ……16
第９図　野里上遺跡遺構配置とⅣ層面の標高 ……46
第10図　野里上遺跡北側遺構配置図 ……47
第11図　野里上遺跡南側遺構配置図 ……48
第12図　ＳＩ01 ……49
第13図　ＳＩ02（１） ……50
第14図　ＳＩ02（２） ……51
第15図　ＳＢ01 ……52
第16図　ＳＢ02、ＳＡ01、ＳＤ15（１） ……53
第17図　ＳＢ02、ＳＡ01、ＳＤ15（２） ……54
第18図　ＳＫ01～04・08 ……55
第19図　ＳＫ05～07・09・10 ……56
第20図　１号耕作痕跡 ……57
第21図　２号耕作痕跡 ……58
第22図　３号・５号耕作痕跡 ……59
第23図　４号耕作痕跡 ……60
第24図　６号耕作痕跡、７号耕作痕跡（１） ……61
第25図　７号耕作痕跡（２） ……62
第26図　ＳＤ01・02（１） ……63
第27図　ＳＤ01・02（２）、ＳＤ03・05・06 ……64
第28図　ＳＤ04 ……65
第29図　ＳＤ07～09 ……66
第30図　ＳＤ10～14（１） ……67
第31図　ＳＤ10～14（２） ……68
第32図　ＳＤ16・18 ……69
第33図　ＳＤ17 ……70
第34図　柱穴状土坑群、杭（１） ……71
第35図　柱穴状土坑群、杭（２） ……72
第36図　柱穴状土坑群、杭（３） ……73
第37図　ＳＸ01 ……74
第38図　ＳＸ02～09 ……75
第39図　ＳＸ10～13 ……76
第40図　ＳＸ14～16 ……77
第41図　土師器形態分類模式図 ……82
第42図　縄文土器（１） ……85
第43図　縄文土器（２） ……86
第44図　縄文土器（３） ……87
第45図　縄文土器（４） ……88
第46図　石器（１） ……89
第47図　石器（２） ……90
第48図　石器（３） ……91
第49図　土師器（１） ……92
第50図　土師器（２） ……93
第51図　土師器（３） ……94
第52図　土師器（４） ……95
第53図　鉄製品、銭貨 ……96
第54図　木製品（１） ……97
第55図　木製品（２）、磁器 ……98
第56図　野中遺跡遺構配置とⅥ層面の標高 ……116
第57図　ＳＸ01 ……117
第58図　ＳＫ01～06 ……118
第59図　ＳＫ07～11 ……119
第60図　ＳＫ12～16 ……120
第61図　ＳＫ17～21 ……121
第62図　ＳＫ22～27 ……122
第63図　ＳＫ28～33 ……123
第64図　ＳＫ34～38 ……124
第65図　柱穴状土坑　第１群 ……125
第66図　柱穴状土坑　第２群 ……126
第67図　柱穴状土坑　第３～５群 ……127
第68図　柱穴状土坑群　断面（１） ……128
第69図　柱穴状土坑群　断面（２） ……129
第70図　縄文土器、石器 ……134
第71図　鉄製品、銭貨 ……135

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧 ……10
第２表　土壌採取地点とフローテーション・
　　セパレーション実施量 ……17
第３表　ＳＩ01ピット計測値 ……19
第４表　ＳＩ02ピット計測値 ……21
第５表　ＳＢ01ピット計測値と土層註記 ……21
第６表　ＳＢ02ピット計測値と土層註記 ……22
第７表　ＳＡ01ピット計測値と土層註記 ……23
第８表　ＳＤ07ピット計測値と土層註記 ……33
第９表　柱穴状土坑・杭計測値と土層註記 ……39
第10表　縄文土器地点別出土重量 ……99
第11表　石器地点別出土量 ……99
第12表　石器母岩別出土量 ……99
第13表　土師器地点別出土重量 ……100
第14表　縄文土器観察表 ……101
第15表　石器観察表 ……101
第16表　土師器観察表 ……102
第17表　鉄製品観察表 ……100
第18表　銭貨観察表 ……100
第19表　木製品観察表 ……100
第20表　磁器観察表 ……100
第21表　柱穴状土坑計測値と土層註記 ……130
第22表　縄文土器観察表 ……136
第23表　石器観察表 ……136
第24表　鉄製品観察表 ……136
第25表　銭貨観察表 ……136
第26表　耕作痕跡における溝跡の心心間距離 ……168

写真図版目次

写真図版１　調査前風景、基本土層（１） ……175
写真図版２　基本土層（２） ……176
写真図版３　ＳＩ01 ……177
写真図版４　ＳＩ02 ……178
写真図版５　ＳＢ01・02、ＳＡ01、ＳＤ15 ……179
写真図版６　ＳＢ01・02、ＳＤ15、ＳＫ01・02 …180
写真図版７　ＳＫ03～06 ……181
写真図版８　ＳＫ07～10 ……182
写真図版９　１号耕作痕跡 ……183
写真図版10　２号耕作痕跡 ……184
写真図版11　３号・４号耕作痕跡 ……185
写真図版12　５号・７号耕作痕跡 ……186
写真図版13　ＳＤ01～04 ……187
写真図版14　ＳＤ04～09 ……188
写真図版15　ＳＤ10～14 ……189
写真図版16　ＳＤ16～18 ……190
写真図版17　柱穴状土坑群、杭 ……191
写真図版18　ＳＸ01～07 ……192
写真図版19　ＳＸ08～12 ……193
写真図版20　ＳＸ13～16 ……194
写真図版21　縄文土器（１） ……195
写真図版22　縄文土器（２） ……196
写真図版23　縄文土器（３） ……197
写真図版24　石器（１） ……198
写真図版25　石器（２） ……199
写真図版26　土師器（１） ……200
写真図版27　土師器（２） ……201
写真図版28　土師器（３） ……202
写真図版29　鉄製品、銭貨、磁器 ……203
写真図版30　木製品 ……204
写真図版31　調査前風景、基本土層 ……205
写真図版32　ＳＸ01、ＳＫ01 ……206
写真図版33　ＳＫ02～06 ……207
写真図版34　ＳＫ07～11 ……208
写真図版35　ＳＫ12～15 ……209
写真図版36　ＳＫ18～22 ……210
写真図版37　ＳＫ23～26 ……211
写真図版38　ＳＫ27～31 ……212
写真図版39　ＳＫ33～38 ……213
写真図版40　柱穴状土坑群　第１・２・４・５群…214
写真図版41　柱穴状土坑群　第３群 ……215
写真図版42　縄文土器、石器 ……216
写真図版43　鉄製品、銭貨 ……217

Ⅰ　調査に至る経過

「野里上遺跡」および「野中遺跡」は、小鳥谷バイパス改良工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査を実施することになったものである。

一般国道４号は、東京都中央区を起点として青森県青森市に至る延長約858kmのわが国最長の国道で、東北地方の大動脈を担っている主要幹線道路である。

小鳥谷バイパスは、二戸郡一戸町大字小鳥谷字中村を起点とし同町大字岩舘字子守を終点とした国道４号の人家密集、幅員縮小による交通混雑と急カーブの連続、冬季間の凍結、降雪等による交通隘路の解消を図り、交通安全の確保、沿道環境の改善を図ると共に周辺市町村と連携を強化して地域活性化の支援を目的とする道路として、延長約4.3kmとして昭和63年度に事業着手し、平成７年度に用地着手、平成16年度に工事着手し平成17年度は、起点側の新稲荷橋（仮称）に工事着手した。

平成19年度に起点から野中橋までの約2.6kmを暫定２車線供用を目標に鋭意事業を進めている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が平成元～２年度に分布調査を実施し、「野里上遺跡」および「野中遺跡」を確認している。

同遺跡の試掘調査は平成16年度に実施している。その結果に基づいて岩手県教育委員会は岩手河川国道事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、平成17年４月１日付けで岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長と受託契約を締結し、「野里上遺跡」および「野中遺跡」の発掘調査に着手した。その結果、遺構、遺物等の確認がなされた。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　遺跡の位置（第１図）

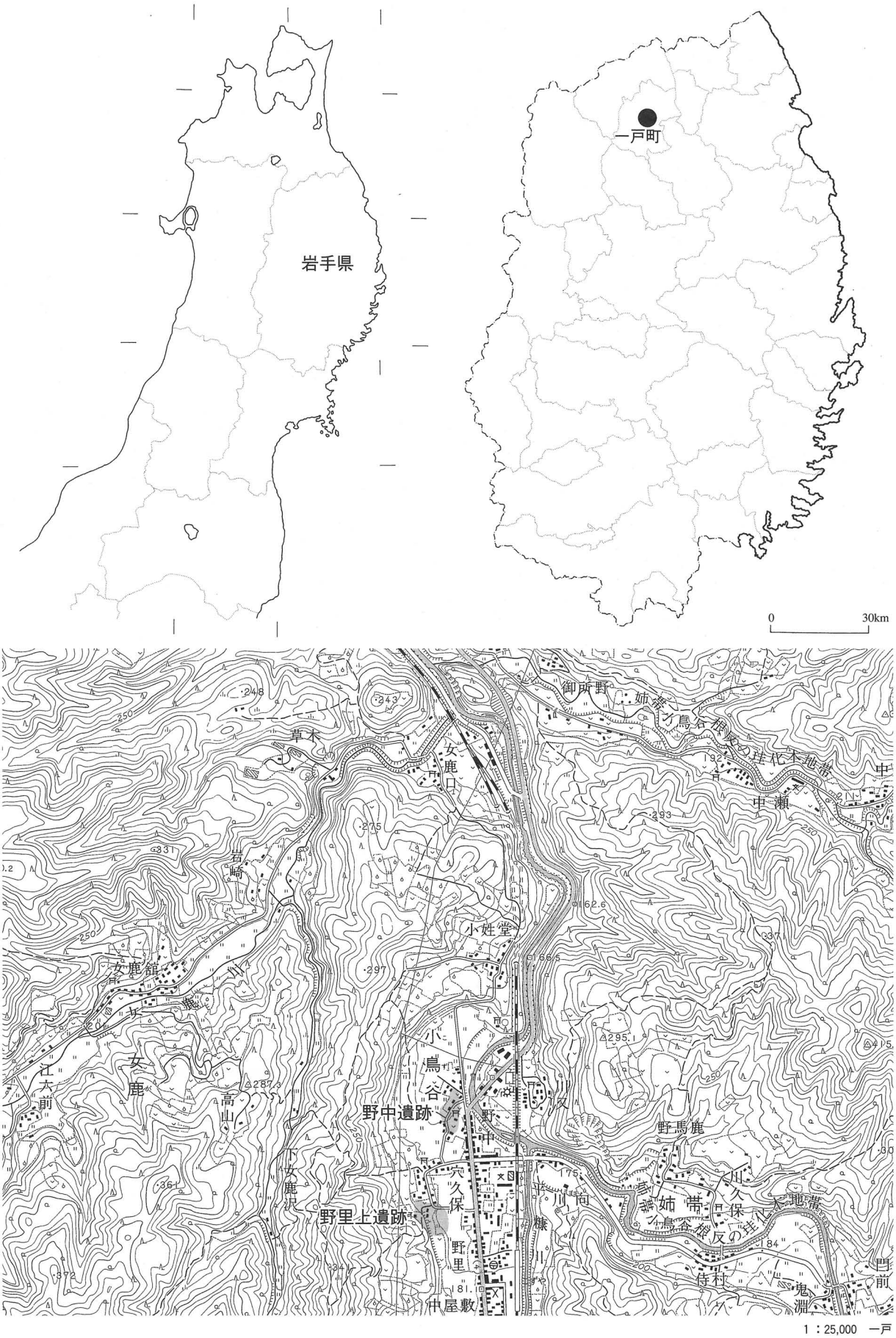
野里上遺跡・野中遺跡は岩手県二戸郡一戸町小鳥谷に所在する。地形図上では、国土地理院発行の１：25,000地形図「一戸」図幅に含まれ、いわて銀河鉄道小鳥谷駅の北西約500～800mに位置する。野里上遺跡の緯度・経度は北緯40度10分27秒、東経141度18分14秒を測る。

２　地形と地質

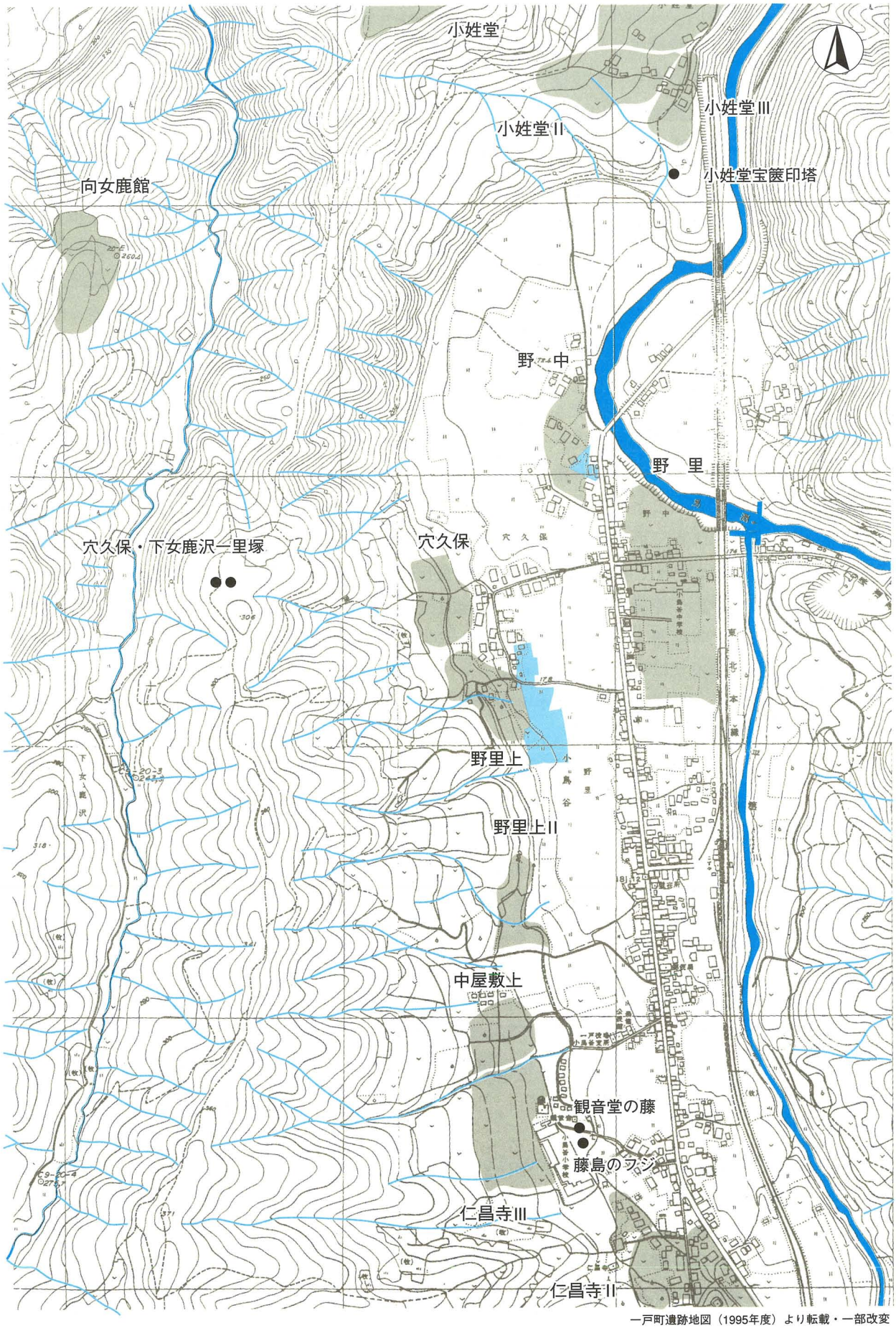
（１）地理的環境と調査区の微地形（第２図）

一戸町の東部には北上山地、西部には奥羽山脈があり、南は国道４号およびＪＲ東北本線の路線上最も標高が高く南北の分水嶺ともなっている奥中山高原（十三本木峠）が存在する、東・南・西を山地によって囲まれた地形を呈している。町域の約80％が山林原野である。奥中山高原を水源地とする主な河川には、南流する北上川と、北流し一戸町内を通る平糠川、小繋川、女鹿川、小滝川があり、後４者は馬淵川と合流してさらに北流する。基本的に馬淵川流域の標高は南高北低で、二戸市、青森県三戸町へと続いていく。馬淵川は県北部第一の規模を誇る河川であり、その流域開析規模も最も大

1　遺跡の位置



第１図　遺跡の位置



一戸町遺跡地図（1995年度）より転載・一部改変

第２図　周辺の地形と水系

きい。これは一戸町内でも例外ではなく、町中心部の子守付近から北部の小井田付近にかけて比較的大規模な河岸段丘が数段形成され、ここを中心に現在の市街地が営まれている。いっぽうで、町南部の河川は合流前の支流であり、小規模であるため平坦面があまり発達せず細長い。とくに平糠川の中山～小鳥谷南部間は流路距離約12～3kmに対し高低差が約400mもある急流で、水平方向への開析が発達していない。このため町南部の集落および耕地は、各河川流域の狭い平坦面とその高位側縁部に沿うように発達している。

遺跡の所在する小鳥谷地区は、平糠川によって形成された最大の開析地で、また同流域中最大の集落が形成されている。東西には小丘陵が南北に連なる。現況において、野中遺跡は小鳥谷地区の北端、平糠川が馬淵川と合流する地点のすぐ西側にあたる平坦面に立地している。また、野里上遺跡は西側丘陵から続く東向き緩斜面とその東に広がる平坦面によって構成されるが、同遺跡の所在する穴久保付近は丘陵の切れ目に当たり、ここから東流して平糠川に注いでいた旧河川が存在していたことから扇状地地形を呈する。両遺跡所在地の段丘区分は大半が砂礫段丘（小鳥谷段丘）に相当し、野里上遺跡の南西部が火山灰砂段丘崖にかかっている（一戸町町誌編纂委員会1982）。調査区の標高は、野里上遺跡が176～181m、野中遺跡が172～174mで、平糠川・馬淵川現河床面との比高差は数mである。

また、調査における堆積土観察の結果、野里上遺跡の南東部および野中遺跡のほぼ全域が南北方向の微高地状を呈していたことが判明している。いずれも砂礫層の検出レベルが他に比して高い。方向的に考えて平糠川によって形成された自然堤防と推定される。これ以西から火山灰砂段丘崖までの間は砂礫層形成レベルが低く、前述の旧河川など西側丘陵～火山灰砂段丘から雨水等が流入する環境にあり、かつ排水性が低く停滞しやすいことから後背湿地を呈していたようである。

現在、自然堤防上は国道４号とＪＲ東北本線、およびこれに沿うように居住域が形成され、後背湿地は水田、火山灰砂段丘は居住域として利用されている。当該地域における選地のあり方ついては、以下の２資料により近世まで遡ることか可能である。１つは江戸時代後期に描かれたとされる『御旧領之内福岡通繪図』（巻頭図版１）で、ここには地名、主要道路および川・橋、集落名と戸数が記載されている。野里上遺跡の調査区は「地久保」集落の東端から奥州街道までの間で、何の表記もない部分に当たる。野中遺跡の調査区はまさに「野中」集落が描かれた部分である。もう１つは同じく江戸時代後期に盛岡藩士漆戸茂樹により著された『北奥路程記』（巻頭図版２）で、奥州街道沿いの風景が簡略な文章とともに描かれている。本資料においても集落位置は基本的に前者と変わりないが（集落名については前者で「地久保」「仁昌寺」であったものが「穴久保」「小谷鳥」と表記されている）、野里上遺跡の調査区付近に「ハタ」という記載があり、畑作耕地として利用されていた場所だったことがわかる。一戸町誌によれば、明治40年代の小鳥谷村（当時）における耕地面積は、水田が明治42年で90町２反歩、同44年で66町歩なのに対し、畑は254町６反歩、578町８反歩を数え、明治44年における水田率は11.4％とされる（一戸町町誌編纂委員会 1982）。このように、農耕の中心は近代以降も畑作であり、少なくとも近世から近代の選地はほぼ変わりないことが窺い知れる。

（2）地　　質

小鳥谷地区の基盤は大半が砂岩で、そのほか泥岩、安山岩質岩石、珪岩質岩石、輝緑凝灰岩で形成される。平糠川流域には砂礫が広く発達し、朴舘から稲荷付近までは東岸に、ここから野中付近までは西岸に広がる。本遺跡群はこの砂礫上に立地する。また、さらに西側には小丘陵頂部までの間に砕屑物が広がり、これは朴舘から野中付近まで続いている。前述のように西岸は扇状地地形を呈しており、これに起因するものであろう。

3　基　本　土　層（第３～５図、写真図版１・２・31）

調査した２遺跡は近接し、地形的にも連続している。土層観察の結果、地点により欠落する層は生じるものの基本的には一連の堆積過程で形成されたものと判断された。ただし、野里上遺跡調査区東部は後背湿地で堆積が異なり、別途断面図を作成した。なお、一戸町域においては十和田火山起源とされる複数種のテフラの堆積が確認されているが、両遺跡で確実に判別されたものは十和田aテフラのみであり、これは遺構埋土および低位面に堆積している。

Ⅰａ層：現表土（耕作土）。
Ⅰｂ層：昭和に行なわれた耕地造成時の盛土。
Ⅱ　層：10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
Ⅲ　層：10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
Ⅳ　層：2.5Y7/1　灰白色　テフラ　粘性なし・しまり強。
　　Ⅲ層下位に堆積。十和田aテフラ（以降、To-aと表記）。
Ⅴ　層：10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中。
　　礫・破砕礫（～５cm）少量混入。水成堆積による礫の多量混入地点あり。
Ⅵ　層：10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまりやや弱。
　　礫・破砕礫（～３cm）少量混入。
Ⅶ　層：10YR3.5/3　暗褐～にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中。
　　礫・破砕礫（～３cm）少量混入。水成堆積による礫の多量混入地点あり。
Ⅷ　層：10YR5.5/2　灰黄褐色　砂質シルト　粘性中・しまり強。
　　水成堆積。ラミナ顕著。

遺構検出面はⅣ～Ⅶ層である。Ⅴ層は色調が褐色土主体で、上下のⅢ層、Ⅵ層が黒色土主体であることから一般的な自然堆積とは異なる要因が働き形成された層と捉えられる。同層は局所的な堆積ではなく、野里上・野中両遺跡に共通して認められることから、その要因は大規模であったことが窺われる。なお、同層は西側斜面部にも同様に認められることから西側丘陵～火山灰砂段丘から流入した可能性が高く、To-aが降下するよりも前の一時期に、おそらく前述した扇状地付近を中心に一定期間連続して堆積したものと推定される。

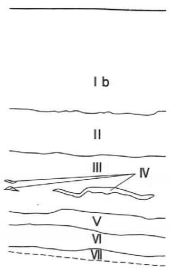
戦後に行なわれた耕地造成および宅地造成により、元々高位であった野里上遺跡西部と野中遺跡東半部は削平され、Ⅰ層直下でⅤ層以下が露出する箇所が多い。

4　歴史的環境と周辺の遺跡（第６図、第１表）

野里上・野中両遺跡で検出された主な遺構の構築・使用時期と推定される古代～近世に絞り、周辺地域、とくに小鳥谷の歴史的環境を概観する。これに関連して、野里上・野中遺跡を中心とした半径10kmの同心円内に所在する該期遺跡を第６図・第１表に示した。この範囲内には、二戸市（旧二戸市・浄法寺町）と九戸村の一部も含まれる。

古代に所属する遺跡は281箇所存在する。このうち、発掘調査により居住域が確認されたものは、一戸町子守Ａ（No.24　以下「No.」省略）・御所野（25）・田中（27）・田中Ⅲ（28）・田中Ⅳ（29）・田中Ⅴ（30）・上野（37）・北舘Ｂ（64）・一戸城跡（65）・小井田Ⅴ（69）・川原田平（143）、二戸市火行塚（203）・大向Ⅱ（208）・大向上平（211）、旧浄法寺町天台寺跡（226～230）、九戸村黒穴の昔穴（241）の各遺跡で、いずれも半径２km圏外である。一戸町内の11遺跡はすべて馬淵川流域に立地しており、とくに同川右

基本土層A



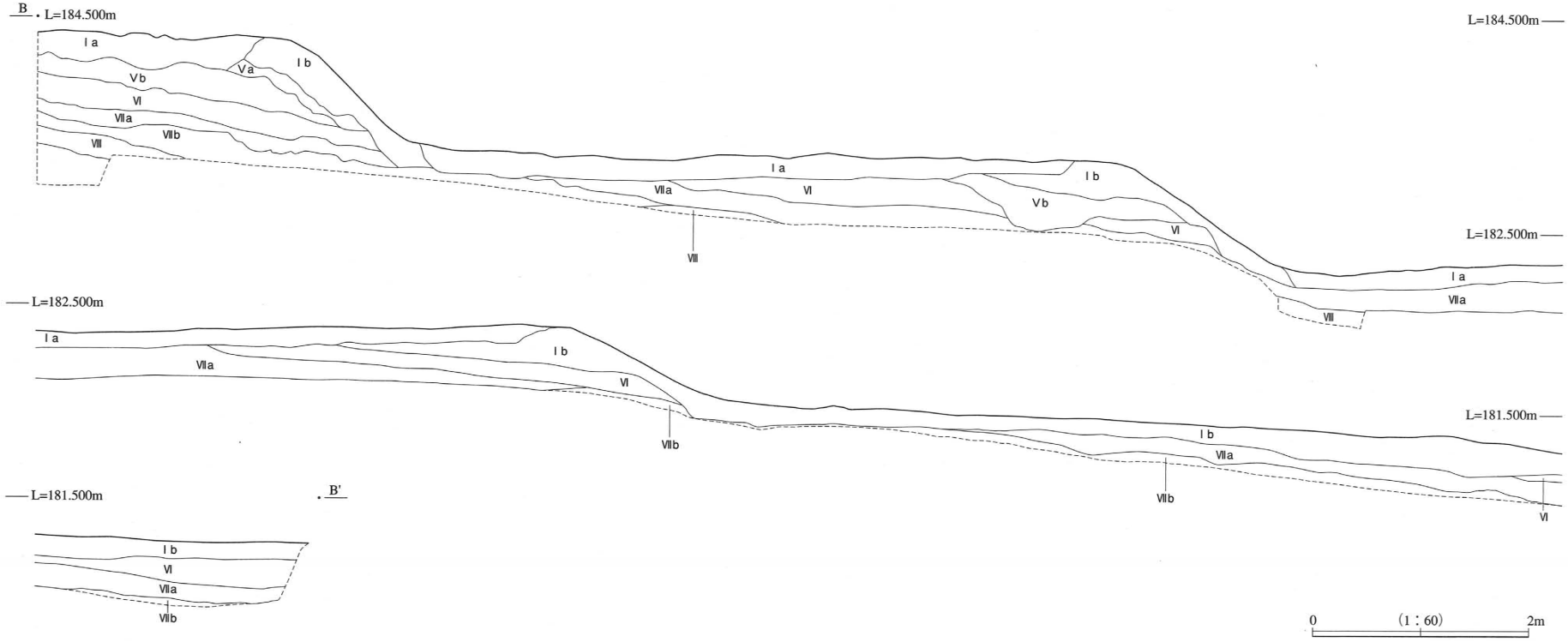
基本土層 A-A'

Ⅰb　現耕地造成時の盛土。
Ⅱ　10YR3/1　黒褐色 シルト　粘性中・しまり中　流入遺物あり。
Ⅲ　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　小礫・破砕礫（～3㎜）3%、下位ほか礫多い。
Ⅳ　5Y6/3　オリーブ黄色　テフラ　粘性なし・しまり強　To-a。
Ⅴ　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）・破砕礫（～1cm）7%。
Ⅵ　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまりやや弱　礫（～5㎜）3%。
Ⅶ　10YR3.5/3　暗褐～にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）1%。

基本土層 B-B'

Ⅰa　水田床土。
Ⅰb　10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　盛土。
Ⅴa　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）5%。
Ⅴb　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～10cm）30～50%。洪水堆積層。
Ⅵ　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）5%。
Ⅶa　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）5～10%。
Ⅶb　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）10%。
Ⅷ　10YR5.5/2　灰黄褐色　砂質シルト　粘性中・しまり強　テフラ？。水平方向のラミナ（水成堆積）。

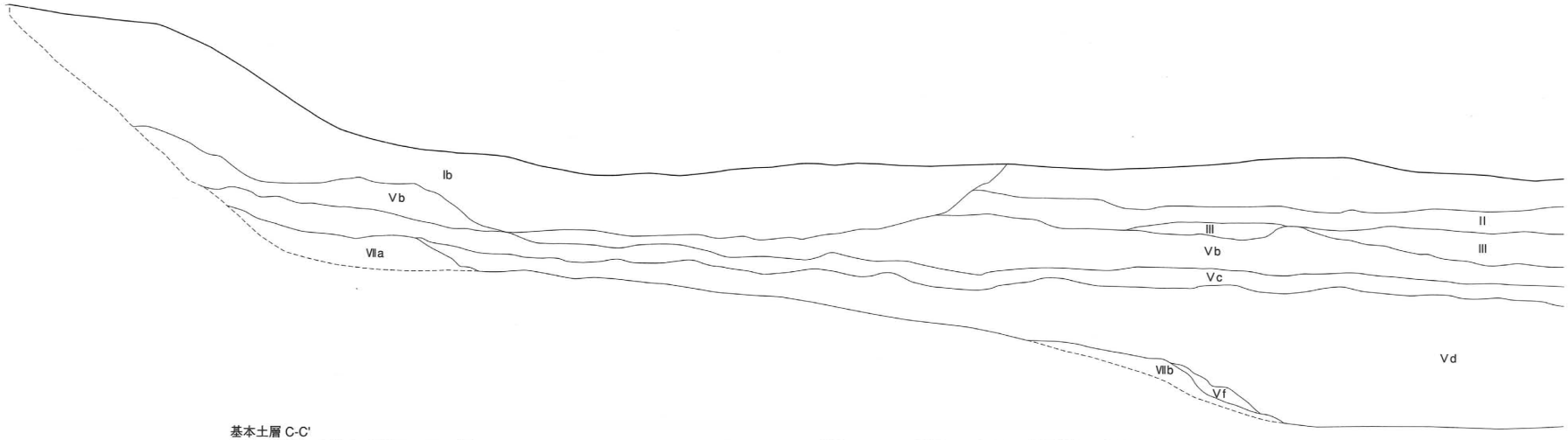
基本土層B



第３図　基本土層（１）

基本土層C

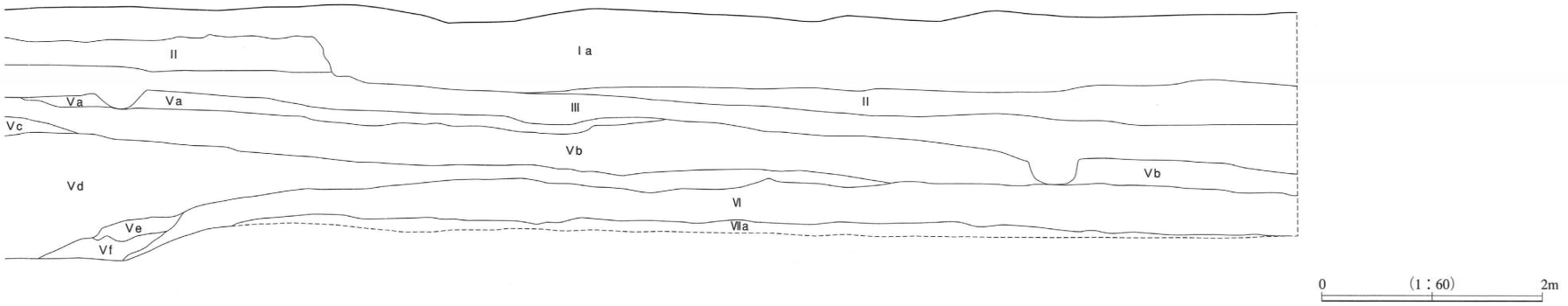
C　・L=181.600m



基本土層 C-C'

Ⅰa　現表土・耕作土。下位10～20cm床土。
Ⅰb　現耕地造成時の盛土。
Ⅱ　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
Ⅲ　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。
Va　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）10%。
Vb　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。
Vc　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）10%。
Vd　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　植物遺体層。水成堆積。
Ve　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫層。水成堆積。
Vf　10YR1.7/1　黒色　粘土　粘性強・しまり中　植物遺体層。水成堆積。
Ⅵ　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）5%。
VIIa　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中。
VIIb　10G2/1　緑黒色　シルト　粘土　粘性強・しまり中　Ⅵ層のグライ化層。

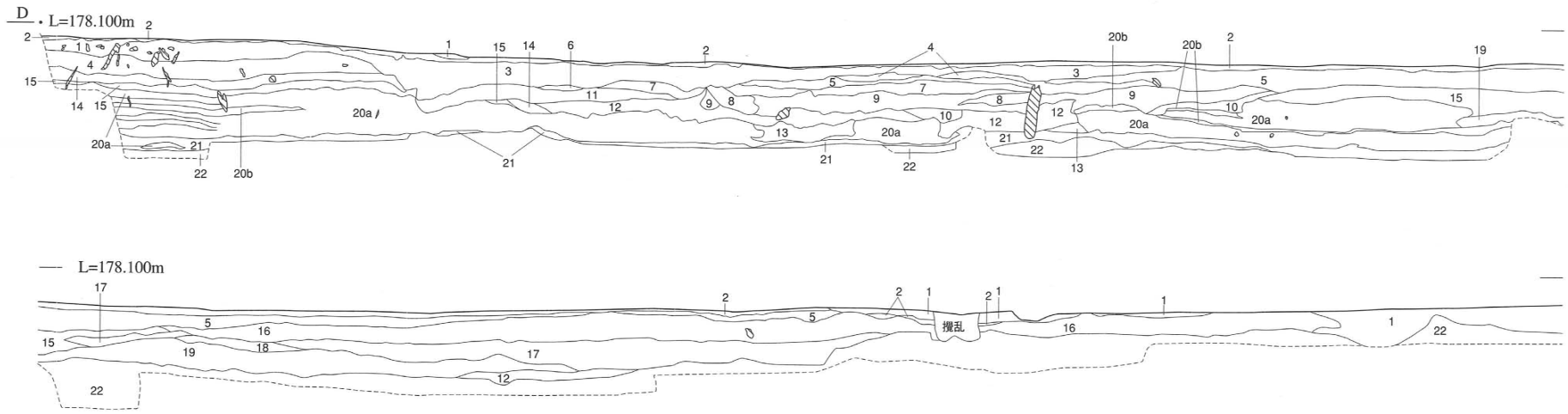
—— L=181.600m　　・C'



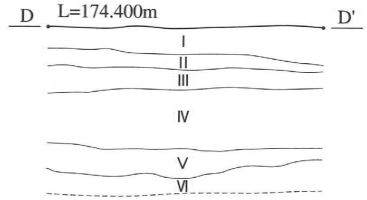
0　(1：60)　2m

第4図　基本土層（2）

基本土層D（低湿部）



野中遺跡　基本土層



第5図　基本土層（3）

基本土層 D-D'

1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
基本層序Ⅲ層。
2　2.5Y7/1　灰白色　テフラ　粘性なし・しまり強　To-a。
基本層序Ⅳ層。
3　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
基本層序Ⅲ層。
4　10YR3.5/1　黒褐～褐灰色　シルト　粘性中・しまり中
礫（～2cm）7%。
5　2.5Y3/1　黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり中　7層ラミナで入る。
6　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　植物遺体多。
7　2.5Y4/1　黄灰色　砂　粘性弱・しまり強　9層ラミナで入る。
8　7層と9層の互層　粘性中・しまり中　ラミナ顕著。
9　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱
7層ラミナで入る。植物遺体多。
10　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　植物遺体多。
6層と同種。
11　2.5Y4/1　黄灰色　砂　粘性中・しまり強　礫（～2cm）10%。
12　2.5Y3/1　黒褐色　砂　粘性中・しまり強　礫（～2cm）10%。
13　9層と12層の混土（3:7）　粘性弱・しまり強。
14　10YR3/1　黒褐色　粘土　粘性強・しまり強。
15　10YR4/1　褐灰色　粘土　粘性強・しまり強。
16　2.5YR3/1　黒褐色　砂　粘性なし・しまり強。
礫（～3cm）50%。
17　2.5Y2/1　黒色　砂質シルト　粘性中　しまり中。
18　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　9層と同種。
19　7層と9層の互層　粘性中・しまり中　ラミナ顕著。
8層と同種。
20a　砂層　粘性なし・しまり強　色調により6層に細分可能。
上位から2.5Y7/1・N6/0・5Y7/1・10BG6/1・10YR6/1・N6/0。
20b　10YR6/1　褐灰色　シルト　粘性なし・しまり強。
21　10YR2/1　黒色　粘土　粘性強・しまり中　植物遺体多。
22　2.5Y3/1　黒褐色　粘土　粘性強・しまり強　砂混。
23　10YR3/1　黒褐色　粘土　粘性強・しまり強　砂混。

※全層とも堆積過程に水の影響が看取される（度合異なる）。

野中遺跡　基本土層

Ⅰ　盛土及び耕作土。
Ⅱ　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）1%、炭化物粒（～1cm）1%以下、5YR4/6赤褐色シルトブロック（～3cm）1%。南西壁でのみ確認、調査区内では削平等により消失。
Ⅲ　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5mm）5%、7.5YR7/6橙色シルトブロック（～2mm）10%。南西壁でのみ確認、調査区内は削平により消失。
Ⅳ　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5mm）1%。南西壁でのみ確認、調査区内は削平により消失。
Ⅴ　10YR3/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　Ⅵ層の漸移層。遺構検出面。残存状態が良好な南東壁で層厚10～20cm。調査区内は削平により層厚0～20cm以下。
Ⅵ　10YR5/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～15cm）0～20%。地点により混入量異なる。遺構最終確認面。層厚不明。
Ⅶ　10YR3/2　黒褐色　砂礫　粘性なし・しまり強　旧河床面。南端部でのみ確認。層厚不明。

沢跡について
調査区南半を東西に分断するように北東流する沢跡を確認した。沢跡部分は撹乱が激しく、加えて遺物も極めて少ないことから時期の特定はできなかった。黒褐色、黒色シルトを主体に、灰黄褐色の砂がラミナ堆積する状態の埋土が堆積していた。

0　(1：60)　2m

岸の岩舘から一戸にかけては一大集落の存在が確認されている。このほか、未調査ながら該期の痕跡が確認されている遺跡の立地は、馬淵川とその右岸支流の姉帯川・小井田川、左岸支流の女鹿川・小友川・二ッ石川・竜頭川の各河川流域に見られ、とくに左岸支流（二ッ石川右岸）における密集度が高いようである。いっぽう、十三本木峠から流れる平糠川と小繋川の流域では、上流の中山（図外）で幾分まとまりが見られるもののそれ以降馬淵川との合流地点までほとんど見られない。前述のように中山から小鳥谷南部までの間は急流で水平方向への開析が発達せず、これに起因するものであろう。しかし、開析の進んだ小鳥谷地内においても該期の遺跡は小姓堂Ⅱ(11)以外登録されておらず、遺構は野里上遺跡の検出例が初見となる。今回の調査では、検出数は少ないものの居住域の存在が明らかとなっており、一辺８ｍ強の大形住居跡の存在から本地域における中心的な場所であった可能性が高い。

中世に比定される遺跡は58箇所存在し、そのほとんどは城館跡である。よって立地は河川流域の高台に集中する。小鳥谷では本遺跡群の南方約１㎞に五月館(８)があり、字名は異なるが半径２㎞圏内には北西約1.3㎞に女鹿館(13)、東方約1.5㎞に発掘調査が実施された姉帯城(18)がある。五月館は延暦・弘仁頃のチャシとされるがはっきりしない。一戸町誌では天正頃に「小鳥谷摂津（小冶屋攝州とも）」が居住した小鳥谷舘は五月館を指したものとしている（一戸町町誌編纂委員会1982)。中世の当地域は天正19年の九戸の乱まで一戸南部氏の支配下であったとされ、文献資料も幾分存在し領主階級以上の様子は比較的窺い知り易い。いっぽうで、城館跡関連以外の「一般集落」に関わる遺構検出遺跡は仁昌寺Ⅱ、田中、上野、西火行塚墳墓群(183)、そして今年度発掘調査した野里上Ⅱ(３)と決して多くない。これらの立地も比較的高位の安定した河岸段丘上に多い。遺構種はいずれも掘立柱建物跡、竪穴建物跡などである。野里上・野中の両遺跡では墓域が検出されており、特にも野里上における火葬関連遺構の存在は特筆される。

近世に比定される遺跡は16箇所存在する。現存しないため未登録であるが、小鳥谷字野中の奥州街道筋に一里塚があったとされており、『北奥路程記』によると穴久保集落と野里集落の間、「姉帯道」の南側に描かれている。近世の奥州街道は五月館の西側を通り、野中まで現国道４号沿いに進み、そのまま渡河せず馬淵川左岸を走って小姓堂へと続く。野中遺跡は一里塚の北側、街道西側に隣接していた。該期の遺跡で発掘調査されたものは少なく、文献資料が豊富な反面、埋蔵文化財面ではほとんど未知であるといってよい。町内で調査が成されているのは仁昌寺Ⅱのみで、掘立柱建物跡のほか、寺院の門前ということもあってか墓坑群が検出されている。

（丸山）

引用・参考文献

一戸町教育委員会　1996　『一戸町遺跡地図（1995年版)』
一戸町町誌編纂委員会　1982　『一戸町誌（上巻)』
一戸町町誌編纂委員会　1986　『一戸町誌（下巻)』
岩手県教育委員会　2005　『岩手県遺跡台帳』(CD-ROM版)
漆戸茂樹　江戸時代後期　『北奥路程記　壹』(写本)
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002　『仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第400集

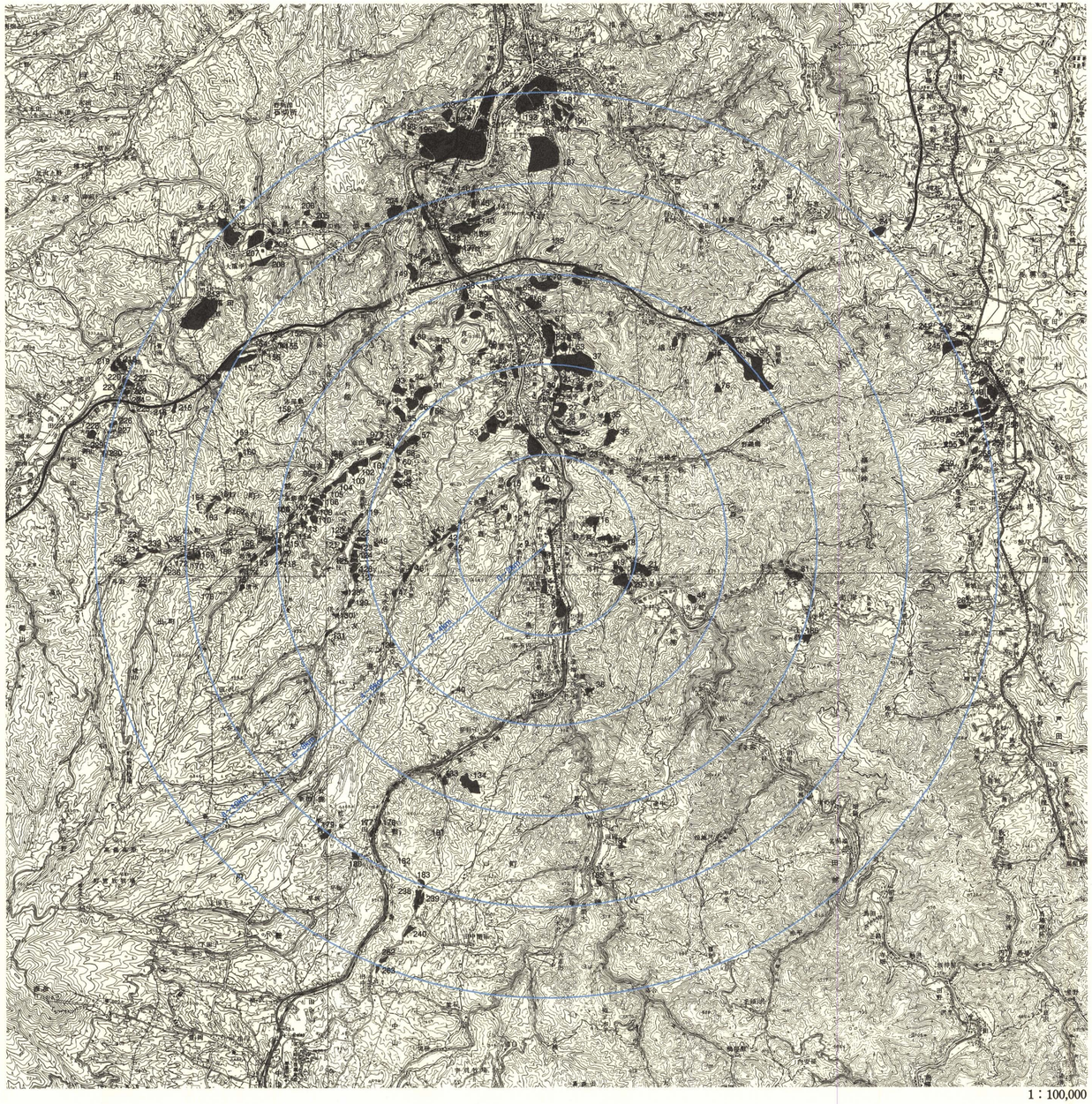
第１表　周辺の遺跡一覧

圏域	No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
	1	野里上	集落跡	縄文・奈良～近世	
	2	野中	集落跡	縄文・中～近世	
～2km	3	野里上Ⅱ	集落跡	縄文・平安・中世	縄文・竪穴住居跡、中世・竪穴建物など
	4	中屋敷上	散布地	縄文	縄文土器
	5	仁昌寺	散布地	縄文	縄文土器
	6	仁昌寺Ⅱ	集落跡	縄文・中～近世	縄文・竪穴住居跡、中世・竪穴建物など
	7	仁昌寺Ⅲ	集落跡	縄文・平安	縄文・竪穴住居跡、平安・焼土遺構など
	8	五月館	城館跡	中世	掘、平場
	9	穴久保・下女鹿沢　一里塚	一里塚	近世	塚
	10	女鹿口Ⅱ	散布地	平安	土師器
	11	小姓堂Ⅱ	散布地	古代	
	12	向女鹿舘	散布地	古代	土師器
	13	女鹿館	城館跡	古代・中世	郭、平場、腰郭
	14	女鹿舘	散布地	平安	土師器
	15	岩崎	散布地	平安	土師器
	16	野馬鹿Ⅱ	散布地	奈良・平安	土師器
	17	野馬鹿	散布地	平安	土師器
	18	姉帯城跡	城館跡	中世	掘、土塁、郭
	19	鬼渕	散布地	平安	土師器、須恵器
	20	鬼渕Ⅱ	散布地	平安	土師器
	21	門前	散布地	奈良	土師器
～4km	22	根反館	城館跡	中世	平場、単郭、堀、土塁
	23	漆畑Ⅱ	散布地	平安	土師器
	24	子守Ａ	散布地	平安	土師器
	25	御所野	散布地	平安	土師器
	26	舘	散布地	縄文・古代	土師器
	27	田中	散布地	中世	土師器
	28	田中Ⅲ	散布地	平安	土師器
	29	田中Ⅳ	散布地	平安	土師器
	30	田中Ⅴ	散布地	平安	土師器
	31	一戸田中	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器
	32	一戸田中Ⅱ	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器
	33	一戸田中Ⅲ	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器
	34	上地切Ⅱ	集落跡	古代（平安）	竪穴式住居跡
	35	上地切	散布地	奈良	土師器
	36	御所野Ⅱ	散布地	平安	土師器
	37	上野	集落跡	古代・中世	土師器、石器
	38	駒木	散布地	縄文・塚	土器塚
	39	川底一里塚	一里塚	近世	塚
	40	笹目子・上女鹿沢一里塚	一里塚	近世	塚
	41	中崎Ⅳ	散布地	平安	土師器
	42	中崎Ⅲ	散布地	平安	土師器
	43	中崎Ⅱ	散布地	平安	土師器
	44	中崎	散布地	平安	土師器
	45	女鹿沢内館	城館跡	古代・中世	
	46	上女鹿	散布地	平安	土師器
	47	大久保Ⅳ	散布地	平安	土師器
	48	月花	散布地	平安	土師器
	49	半在家館	城館跡	古代・中世	
	50	老ケ館	城館跡	中世	堅掘？、平場、腰郭
	51	関屋	散布地	奈良	土師器
	52	大平	集落跡	平安	土師器
	53	大平Ⅱ	散布地	平安	土師器
	54	西法寺Ⅲ	散布地	中世	縄文土器、石鏃、中世遺物
	55	西法寺館	城館跡	中世	堀、平場、郭
	56	小荒木	散布地	平安	土師器
	57	武道平	散布地	古代	土師器
	58	武道平Ⅱ	散布地	平安	土師器
	59	中里館	城館跡	中世	堀、平場、陶磁器、土師器
	60	下川原目	散布地	平安	土師器、須恵器
	61	下川原目Ⅱ	散布地	奈良・平安	土師器、石器
	62	小友館	城館跡	中世	郭、平場
～6km	63	北舘Ｇ	散布地	平安	土師器
	64	北舘Ｂ	散布地	奈良・平安	土師器
	65	一戸城跡	散布地 城館跡	中世	堀、堀立柱建物跡、竪穴状遺構、陶磁器、鉄製品、古銭
	66	北舘Ｆ	散布地	弥生・近世	陶磁器
	67	大沢Ⅲ	散布地	平安	土師器
	68	大沢	散布地	平安	土師器
	69	小井田Ⅴ	集落跡	平安	平安土器
	70	下村向	散布地	古代	土師器
	71	楢山館	城館跡	中世	掘切、平場、帯郭

圏域	No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
～6km	72	下楯山	集落跡	奈良・平安	平安（土師器）
	73	田ノ上Ⅱ	散布地	縄文・平安	赤焼土器
	74	小木田館	城館跡	中世	
	75	野馬Ⅳ	散布地	平安	土師器
	76	来田沢	散布地	平安	土師器、須恵器
	77	深持	散布地	弥生・平安	須恵器
	78	中屋敷	散布地	縄文・古代	土師器
	79	中野	散布地	平安	土師器、土製品
	80	野磯鶏	散布地	平安	土師器
	81	一本木	散布地	平安	土師器
	82	毘沙門堂	城館跡	古代～	塚
	83	茂谷	散布地	平安	土師器
	84	寺屋敷	散布地	平安	土師器
	85	樋ノ口	散布地	奈良・平安	土師器
	86	樋ノ口Ⅱ	散布地	奈良・平安	土師器
	87	樋ノ口Ⅲ	散布地	平安	土師器
	88	樋ノ口館	散布地 城館跡	中世	土師器、須恵器、帯郭、三郭
	89	小滝Ⅱ	散布地	平安	土師器
	90	小滝館	城館跡	中世	堀切、平場、帯郭
	91	袖子田	散布地	平安	土師器、須恵器、鉄滓
	92	袖子田Ⅱ	散布地	平安	土師器
	93	袖子田Ⅲ	散布地	平安	土師器
	94	馬場野Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器
	95	袖越	散布地	平安	土師器
	96	馬場野	散布地	平安	土師器、須恵器
	97	旗鉾	散布地	古代	土師器、須恵器
	98	稲荷	散布地	平安	土師器
	99	樋投館	城館跡	古代・中世	単郭、平場、堀
	100	金葛	集落跡	奈良・平安	土師器
	101	愛宕下	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器
	102	月舘館（泉田館）	城館跡	中世	二重堀、平場、土師器
	103	舘	散布地	古代	
	104	楢上Ⅱ	散布地	平安	土師器
	105	楢上	散布地	平安	土師器
	106	大屋敷	散布地	縄文・平安	土師器
	107	月館中坪Ⅱ	集落跡 城館跡	奈良・平安・中世	土師器、陶磁器、単郭、堀、土塁
	108	月館中坪	集落跡	奈良・平安	土師器、陶磁器
	109	葛沢	集落跡	奈良・平安	土師器、陶磁器
	110	葛沢Ⅱ	散布地	平安	土師器、須恵器
	111	内ノ沢Ⅱ	集落跡	奈良・平安	土師器、須恵器
	112	内ノ沢	集落跡	奈良・平安	土師器、須恵器
	113	内ノ沢館	城館跡	中世	
	114	只屋敷	集落跡	奈良・平安	土師器、陶磁器
	115	長沢田	散布地	奈良・平安	土師器、陶磁器
	116	柏葉	散布地	奈良・平安	土師器
	117	横羽	集落跡	奈良・平安	土師器
	118	柏葉狼久保	集落跡	奈良・平安	土師器、陶磁器
	119	釜屋敷	散布地	平安	土師器
	120	半在家	散布地	平安	土師器
	121	半在家Ⅱ	散布地	奈良	土師器
	122	半在家Ⅲ	散布地	平安	土師器
	123	半在家Ⅳ	散布地	平安	土師器
	124	半在家Ⅴ	散布地	平安	須恵器
	125	坂ノ下	散布地	平安	土師器
	126	坂ノ下Ⅱ	散布地	平安	土師器
	127	坂ノ下Ⅲ	散布地	平安	土師器
	128	坂ノ下Ⅳ	散布地	平安	土師器
	129	桃ノ木	散布地	平安	土師器、須恵器
	130	桃ノ木Ⅱ	散布地	古代	土師器
	131	山井Ⅱ	散布地	古代	土師器
	132	焼切Ⅱ	散布地	平安	土師器
	133	新舘林館Ⅱ	城館跡	中世	
	134	新舘林館	城館跡	中世	
～8km	135	松嶺館	城館跡	中世	
	136	野月内舘	集落跡	平安	土師器
	137	野月道ノ下	散布地	平安	土師器
	138	鳥越館	城館跡	中世	内館、外館、堀
	139	中野平	集落跡	平安	土師器
	140	上ミ平	散布地	平安	土師器
	141	戸屋森	散布地	奈良	土師器
	142	川原田平Ⅱ	散布地	平安	土師器
	143	川原田平	散布地	奈良・平安	土師器
	144	悪戸平	集落跡	平安	土師器
	145	過利石	散布地	平安	土師器
	146	首戸Ⅱ	散布地	平安	土師器
	147	浪打峠一里塚	一里塚	近世	塚
	148	八木沢	散布地	平安	土師器
	149	和山	散布地	古代	土師器

圏域	No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
～8km	150	竹林Ⅱ	散布地	奈良・平安	土師器
	151	八木沢館	散布地 城館跡	平安・中世	土師器、主郭、平場
	152	大倉Ⅱ	散布地	古代	土師器
	153	大倉A	散布地	古代	土師器
	154	福田久保	散布地	古代	土師器
	155	野場塚Ⅰ	散布地	古代	土師器
	156	大倉B	集落跡	古代	土師器
	157	仲口	集落跡	古代	土師器
	158	赤屋敷	散布地	平安	土師器
	159	夏葛Ⅱ	散布地	古代	
	160	鎌倉Ⅱ	散布地	平安	土師器
	161	鎌倉Ⅲ	散布地	平安	土師器
	162	泉沢Ⅱ	散布地	古代	土師器
	163	泉沢Ⅲ	散布地	平安	土師器
	164	泉沢Ⅳ	散布地	平安	土師器
	165	宮田	散布地	平安	土師器
	166	家向館	城館跡	古代・中世	
	167	家向Ⅱ	散布地	古代・奈良・平安	土師器
	168	家向	散布地	奈良・平安	土師器
	169	植木	散布地	奈良・平安	土師器
	170	出ル町	散布地	平安	須恵器
	171	出ル町館	城館跡	古代・中世	
	172	刈又	散布地	平安・中世	土師器、洪水通實
	173	岩清水久保	散布地	平安	土師器、須恵器
	174	岩清水館	城館跡	古代・中世	単郭、三重堀
	175	日影	集落跡	奈良	土師器
	176	炭焼沢	散布地	平安	須恵器
	177	西田子ＸＸＸ	散布地	平安・近世	土師器、陶磁器
	178	西田子ＸＸＸⅠ	散布地	平安・近世	土師器、陶磁器
	179	蛇ノ島	集落跡	奈良・平安	土師器
	180	西田子Ⅷ	散布地	平安・近世	土師器、陶磁器
	181	小繁一里塚	一里塚	近世	塚
	182	東田子一里塚 (塚ノ平一里塚)	一里塚	近世	塚
	183	西火行墳墓群	古墓	中世	古銭、人骨
	184	東Ⅶ	散布地	古代	土器
	185	平籠館	城館跡	中世	掘切、平場
	186	風口	散布地	平安	土師器
～10km	187	村松館	城館跡	中世	
	188	柿木平	散布地	奈良・平安	土師器
	189	天神下Ⅰ	散布地	奈良・平安	土師器
	190	天神下Ⅱ	散布地	奈良・平安	土師器
	191	上穴牛	散布地	奈良・平安	土師器
	192	八幡下	散布地	平安	土師器
	193	在府小路	散布地 城館跡	中近世	堰跡、陶磁器
	194	九戸城（白鳥城、福岡城）	城館跡	中近世	石垣、堀跡、石塁、桝形
	195	橋場	城館跡 散布地	中世	土塁（既破壊）
	196	上里遺跡群	集落跡 城館跡	中世	大型住居、フラスコ土壙群、墨跡、人骨、獣骨、土製品
	197	蒼前館	城館跡	中世	平場、空堀
	198	土川Ⅱ	散布地	古代	土師器
	199	石切所館	城館跡	中世	平場、空堀、板碑
	200	森合	散布地	古代	土師器
	201	枌ノ木	集落跡	中世・近代	陶磁器片数点
	202	前小路	集落跡	平安	土師器、須恵器、鍛冶、製炭土壙墓
	203	火行塚	集落跡	古代	住居跡、土師器
	204	合川	散布地	古代	縄文土器、土師器
	205	似鳥館	城館跡	中世	空堀、平場
	206	似鳥	集落跡	古代	土師器
	207	大向	集落跡	古代	土師器
	208	大向Ⅱ	集落跡	平安	土師器
	209	大向Ⅲ	集落跡	古代	土師器
	210	大向館	城館跡	中世	
	211	大向上平	集落跡	平安	土師器
	212	上平	散布地	平安・中世	土師器、陶磁器
	213	福田館	城館跡 散布地	古代・中世	土師器、空堀、平場
	214	大久保	集落跡	古代	土師器
	215	縫沢	散布地	古代	土師器
	216	孫兵衛Ⅰ	散布地	古代	土師器
	217	稲荷平Ⅰ	散布地	古代	土師器
	218	大畑	散布地	古代	土師器・須恵器
	219	長渡路館	城館跡	中世	
	220	エゾ館	散布地	中世か	
	221	長流部館	城館跡	中世	
	222	長流部上平	散布地	縄文～中世	土師器
	223	上野Ⅵ	散布地	古代	土師器

圏域	No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
～10km	224	沢田	散布地	古代	土師器
	225	上野Ⅴ	散布地	古代	土師器
	226	天台寺跡	散布地	古代	土師器
	227	天台寺跡	散布地	古代	土師器
	228	天台寺跡	寺院跡	古代	土師器
	229	天台寺跡	経塚	古代	土師器
	230	天台寺跡	散布地	縄文～中世	土師器
	231	狼久保	散布地	平安	土師器
	232	高田	散布地	奈良・平安	土師器
	233	狼久保Ⅱ	散布地	平安	土師器
	234	与羽	散布地	平安	土師器、須恵器
	235	与羽Ⅱ	散布地	平安	土師器、石器
	236	寺屋敷	散布地	平安	土師器、須恵器
	237	桃山Ⅱ	散布地	平安	土師器
	238	西火行	散布地	奈良・平安	古代、土師器
	239	東火行Ⅳ	散布地	奈良・平安	土師器
	240	新田	散布地	奈良・平安	土師器、須恵器、陶磁器
	241	黒山の昔穴	集落跡	古代	
	242	小倉Ⅲ	散布地	古代	土師器
	243	沢口Ⅰ	散布地	古代	土師器
	244	沢口Ⅱ	散布地	古代	土師器
	245	小倉Ⅱ	集落跡	古代	土師器
	246	蒔田Ⅲ	集落跡	古代	土師器、甕
	247	伊保内館	集落跡 城館跡	古代・中世	土師器、平場、堀、土塁
	248	伊保内Ⅰ	集落跡	古代	土師器、坏
	249	西山Ⅲ	散布地	古代	土師器
	250	西山Ⅳ	散布地	古代	土師器
	251	川向Ⅰ	集落跡	古代	土師器、坏
	252	川向Ⅱ	集落跡	古代	土師器、甕
	253	川向Ⅳ	集落跡	古代	土師器、甕
	254	荒谷Ⅲ	散布地	古代	土師器
	255	屋形場Ⅱ	散布地	古代	土師器
	256	屋形場Ⅰ	集落跡	古代	土師器、甕
	257	荒谷Ⅰ	集落跡	古代	土師器、坏
	258	遠志内Ⅲ	散布地	古代	土師器
	259	遠志内Ⅴ	散布地	古代	土師器
	260	遠志内Ⅳ	散布地	古代	土師器
	261	館ケ沢館	城館跡	中世	堀、土塁、平場
	262	小稲荷Ⅱ	散布地	中世	陶磁器
	263	小稲荷Ⅲ	散布地	近世	陶磁器



1：100,000

第６図　周辺の遺跡（半径10km圏内）

Ⅲ　調査と整理の方法

1　野　外　調　査

(1) 調　査　経　過

野里上遺跡

4月14日　調査開始。
4月14～26日　試掘。
4月18日　重機稼動開始（バックホー0.4　1台・キャリアダンプ6t　1～2台）。8月31日まで随時。
4月25日　遺構検出開始。
4月27日　基準杭打設。
5月10日　遺構精査開始。
6月1日　県立一戸高等学校生徒4名職場体験学習。
6月23日　町道穴久保線下、SD02延長分、KⅢ～KⅣグリッド付近（当初調査区外だった低湿部）の調査に係る現地協議。これによりSD02東側230㎡とKⅢ～KⅣグリッド付近2,000㎡（トレンチ調査による確認）が追加範囲となる（第8図）。
7月14日　水田跡確認を目的とした植物珪酸体分析のための試料採取（佐瀬隆氏）。
7月25日　KⅢ～KⅣグリッド付近2,000㎡に係る現地協議。これにより同範囲はトレンチ調査のみで終了となる。
8月1日　村木・藤原両調査員合流（村木調査員は11日まで、藤原調査員は18日まで）。
8月5日　現地公開。参加者28名。
8月9日　空撮実施。
　　SK10より出土した人骨供養（仁昌寺）。
8月29日　終了確認。
8月31日　調査終了、撤収。

野中遺跡

9月1日　調査開始。
9月1～2日　試掘。
9月5～8日　重機稼動（バックホー0.4・キャリアダンプ6t　各1台）。
9月6日　基準杭打設。
　　検出開始。
9月7日　遺構精査開始。
9月22日　空撮実施。
9月28日　終了確認。
9月29日　調査終了、撤収。

（2）グリッド設定（第7図）

今年度の小鳥谷バイパス関連調査は、野里上、野中および野里上Ⅱ、中屋敷上の計4遺跡で実施しているが、すべてを共通のメッシュで括るため国土座標を使用しこれを基準軸としてグリッドを設定した。座標の選定に当たっては、小鳥谷バイパス関連事業では一貫して平面直角座標第Ⅹ系を使用しており、以前に実施された同事業関連調査（仁昌寺遺跡・仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺Ⅲ遺跡・五月館跡）においても同様であることからこれに倣い、世界測地系ではなく平面直角座標第Ⅹ系を用いた。グリッドは北西起点とし、規模は大グリッド50m角で北から南へ向かってA～Mのアルファベット大文字、西から東へ向かってⅠ～Ⅵのローマ数字を付した。各大グリッド内をさらに5m角で100分割し、北西隅から東へ、続いて南へ1～100のアラビア数字を付し、小グリッドを設定した。小グリッドの呼称方法は、大・小グリッドの組み合わせにより「AⅠ01」、「FⅣ37」のようになる。報文中のグリッド呼称は基本的に小グリッド名を用いている。

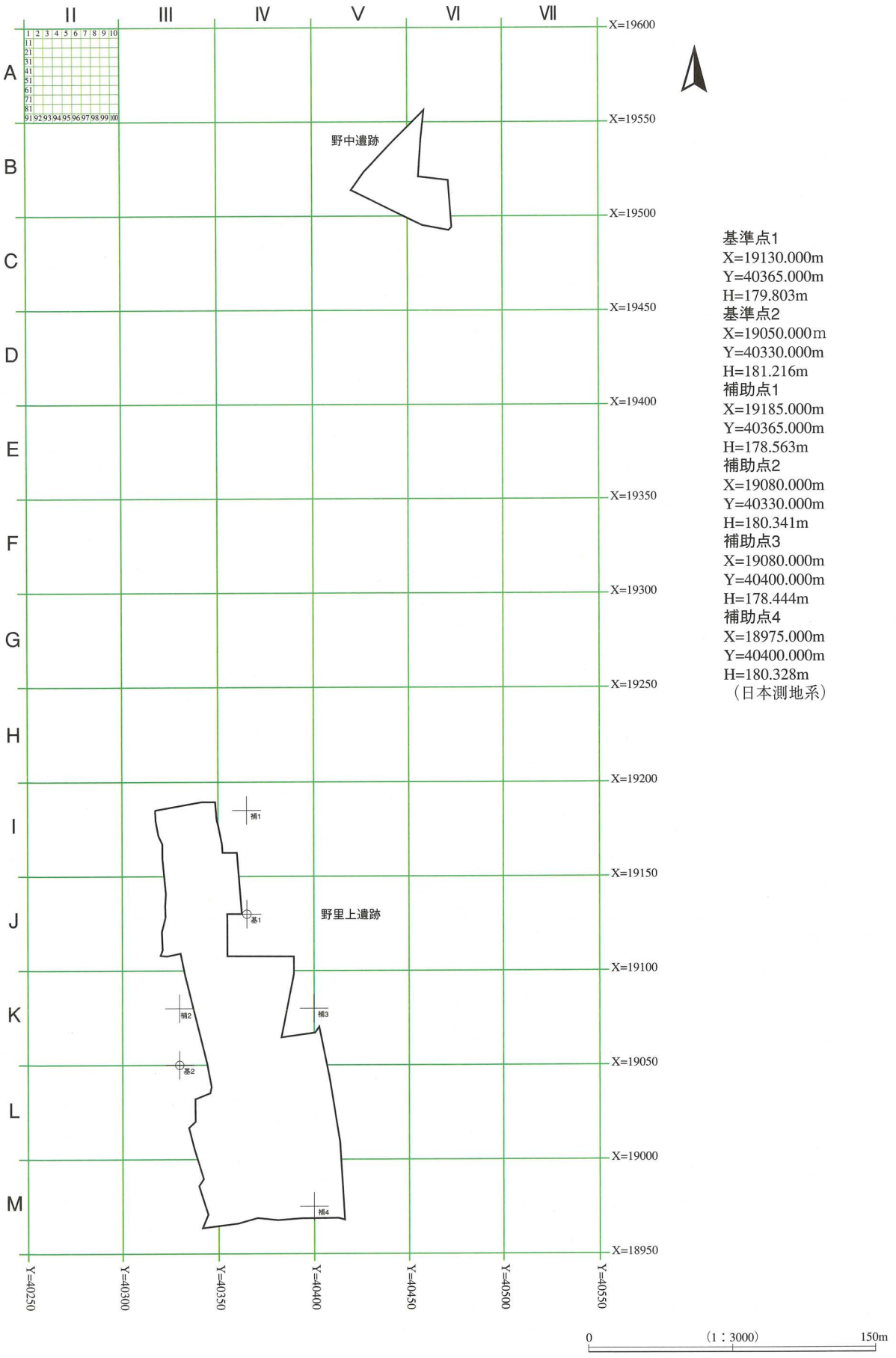
グリッド設定には3級基準点2本、補助点4本の計6本を基準として用いた。カッコ内の数値は世界測地系に変換した際の値である。

基準点1　X＝19,130.000　Y＝40,365.000　H＝179.803m（X＝19,437.166　Y＝40,066.001）
基準点2　X＝19,050.000　Y＝40,330.000　H＝181.216m（X＝19,357.168　Y＝40,031.001）
補助点1　X＝19,185.000　Y＝40,365.000　H＝178.563m（X＝19,492.166　Y＝40,066.002）
補助点2　X＝19,080.000　Y＝40,330.000　H＝180.341m（X＝19,387.167　Y＝40,031.002）
補助点3　X＝19,080.000　Y＝40,400.000　H＝178.444m（X＝19,387.166　Y＝40,100.997）
補助点4　X＝18,975.000　Y＝40,400.000　H＝180.328m（X＝19,282.167　Y＝40,100.995）

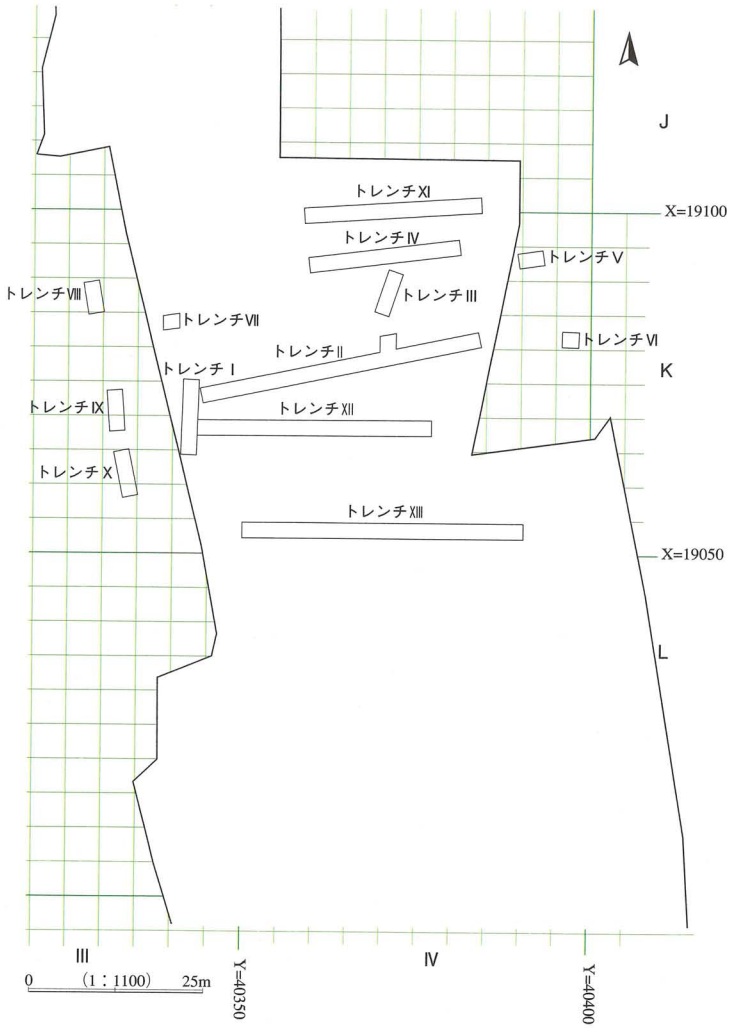
なお、野中遺跡の基準杭打設は、野里上遺跡の基準点1、補助点1を使用し、調査員自らが実施した。これらの方法で定めたグリッド中で、野中遺跡はA～C・V～Ⅵの範囲に、野里上遺跡はⅠ～M・Ⅲ～Vの範囲に収まる。

（3）粗掘・遺構検出

最初に、岩手県教育委員会生涯学習文化課により実施された試掘結果に基づき、主として遺構・遺物既検出の試掘坑を掘削し、その検出層位と状態、および堆積土層の確認と把握を行った。同作業を実施したトレンチは、野里上遺跡ではT4・6・7～9・11・12・15・16・18・26・28～30・32～34・46～48の合計20本、野中遺跡ではT6～9の合計4本である。（トレンチ名はいずれも生文課命名）。作業に際しては、遺構・遺物検出付近はその検出面まで、それ以外の部分は地山と想定される褐色土をめやすに掘り下げ、層理面にて検出を順次行った。褐色土面到達後はさらに30㎝下まで掘り抜き、より下位に黒色土層がないか確認している。結果、野里上遺跡では調査区東側（T12一帯）以外の範囲に、前節で記述のとおり現地表面から続く厚い黒色土（Ⅲ層）→部分的にTo-a（Ⅳ層）→褐色土（V層）→黒色土（Ⅵ層）→褐色土（Ⅶ層）の順に堆積しており、褐色土と黒色土が交互に堆積する特異な状態を呈することが明らかとなった。この堆積状況を受けて、主たる検出面はⅣ層上面（残存部のみ）、V層上面、Ⅵ層上面、Ⅶ層上面の4面とし、それぞれ検出・精査を実施している。いっぽう、T12の位置する東側低位部はTo-aが比較的厚く堆積しており、以下はV層が次第にグライ化してその下位は礫層となる。ここに関しては、Ⅳ層上面およびV層上面にて検出・精査を行い、以下はまず面積比の50％のみ掘削対象として礫層まで掘り下げ、遺構・遺物の有無を確認している。結果、いずれも検出されず、同部分についてはこの時点で調査終了とした。また、野中遺跡ではTo-aは確認さ


II
III
IV
V
VI
VII
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
X=19600
X=19550
X=19500
X=19450
X=19400
X=19350
X=19300
X=19250
X=19200
X=19150
X=19100
X=19050
X=19000
X=18950
Y=40250
Y=40300
Y=40350
Y=40400
Y=40450
Y=40500
Y=40550
野中遺跡
野里上遺跡
補1
基1
補2
補3
基2
補4
基準点1
X=19130.000m
Y=40365.000m
H=179.803m
基準点2
X=19050.000m
Y=40330.000m
H=181.216m
補助点1
X=19185.000m
Y=40365.000m
H=178.563m
補助点2
X=19080.000m
Y=40330.000m
H=180.341m
補助点3
X=19080.000m
Y=40400.000m
H=178.444m
補助点4
X=18975.000m
Y=40400.000m
H=180.328m
（日本測地系）
0
(1：3000)
150m

第７図　グリッド設定図



第８図　ＫⅢ～ＫⅣグリッド付近低湿地試掘トレンチ位置

れず、Ⅴ層下が礫層となる。検出はⅤ層上面にて実施している。

（４）遺構の調査方法・遺物の取り上げ方

竪穴住居跡の調査は四分法で、その他の遺構については二分法を原則として、それぞれ堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。この際、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の完掘状況を中心に写真撮影および実測を順次行った。

なお、野外調査に関する実測は、平面図・断面図・コンター図等すべてをデジタルカメラ撮影画像による写真測量とし、株式会社セビアスに委託した。撮影自体は調査員が行っている。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については遺構名と出土層位名または相対的層位（上位、中位、下位、床・底面直上、床・底面）を記し、このうち床・底面直上以下出土分については平面的出土位置も記録した。遺構外出土分はグリッド毎に層位を記して取り上げた。

（５）遺 構 の 名 称

遺構種別の名称（冠名）は、４遺跡統一する意味で共通の略号を用い、これに検出順に01～の連番を付した。各遺構種別名は以下のとおりである。

竪穴住居跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ＳＩ

掘立柱建物跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ＳＢ
柱列・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ＳＡ
土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ＳＫ
溝跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ＳＤ
焼土遺構　骨片・焼土・炭化物廃棄遺構　炭化物集中・・ＳＸ
竪穴状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ＳＸ

なお、同方式に該当しない遺構種（耕作痕跡）については略号を用いていない。また、柱穴状土坑については小グリッド単位での連番とし、グリッド名に連番を付して「ＡＩ11　Ｐ１」のように呼称した。

個々の遺構名については、野外調査時に欠番が生じたもの等に対し室内整理時に連番となるよう名称変更したばあいがある。変更した遺構の新旧名称の対応は以下のとおりである。

野里上遺跡

旧→新	旧→新
ＳＤ04→ＳＫ06	ＳＤ12→ＳＤ11
ＳＫ09→ＳＫ08	ＳＤ13→ＳＤ12
ＳＫ10→ＳＫ09	ＳＤ14→ＳＤ13
ＳＫ11→ＳＫ10	ＳＤ15→ＳＤ14
ＳＤ05→ＳＤ04	ＳＤ16→ＳＤ15
ＳＤ06→ＳＤ05	ＳＤ17→ＳＤ16
ＳＤ07→ＳＤ06	ＳＤ18→ＳＤ17
ＳＤ08→ＳＤ07	ＳＤ19→ＳＤ18
ＳＤ09→ＳＤ08	
ＳＤ10→ＳＤ09	
ＳＤ11→ＳＤ10	

野中遺跡

旧→新	旧→新	旧→新
ＳＫ09→ＳＸ01	ＳＫ20→ＳＫ19	ＳＫ31→ＳＫ30
ＳＫ10→ＳＫ09	ＳＫ21→ＳＫ20	ＳＫ32→ＳＫ31
ＳＫ11→ＳＫ10	ＳＫ22→ＳＫ21	ＳＫ33→ＳＫ32
ＳＫ12→ＳＫ11	ＳＫ23→ＳＫ22	ＳＫ34→ＳＫ33
ＳＫ13→ＳＫ12	ＳＫ24→ＳＫ23	ＳＫ35→ＳＫ34
ＳＫ14→ＳＫ13	ＳＫ25→ＳＫ24	ＳＫ37→ＳＫ35
ＳＫ15→ＳＫ14	ＳＫ26→ＳＫ25	ＳＫ38→ＳＫ36
ＳＫ16→ＳＫ15	ＳＫ27→ＳＫ26	ＳＫ39→ＳＫ37
ＳＫ17→ＳＫ16	ＳＫ28→ＳＫ27	ＳＫ40→ＳＫ38
ＳＫ18→ＳＫ17	ＳＫ29→ＳＫ28	
ＳＫ19→ＳＫ18	ＳＫ30→ＳＫ29	

（6）遺構内土壌の採取とフローテーション

野里上遺跡ＳＩ02カマド燃焼部直上堆積土、耕作痕跡作土層および溝内堆積土、ＳＸ埋土、野中遺跡ＳＸ埋土をサンプリングし、ウォーターフローテーション・セパレーション法による微細自然遺物の回収を行った。土壌は一度袋から出して乾燥させた後、10リットルのバケツ中で水洗した。炭化浮遊物を0.5㎜メッシュのフルイで回収する作業を数回繰り返した後、沈殿物を0.5㎜メッシュおよび0.3㎜メッシュのフルイで回収した。浮遊物はアルミホイル上にのせ保管・乾燥した後、肉眼あるいは15倍のルーペ下で自然遺物の１次選別を行った。なお、サンプル採取地点およびフローテーション・セパレーション実施土壌量は以下のとおりである（第２表）。

第２表　土壌採取地点とフローテーション・セパレーション実施量

遺跡名	採取地点	土壌量(ℓ)
野里上	ＳＩ02カマド燃焼部東端堆積土（焚口）	3.5
野里上	１号耕作痕跡　１層溝内埋土（土壌サンプルNo１）	3.5
野里上	２号耕作痕跡　11層畝頂部（土壌サンプルNo２）	3.5
野里上	２号耕作痕跡　13層溝内埋土（土壌サンプルNo３）	3.5
野里上	４号耕作痕跡　１層溝内埋土（土壌サンプルNo１）	3.5

遺跡名	採取地点	土壌量(ℓ)
野里上	７号畠作痕跡　１層溝内埋土（土壌サンプルNo１）	3.5
野里上	７号畠作痕跡　１層溝内埋土（土壌サンプルNo２）	3.5
野里上	ＳＸ05 埋土１層	7
野里上	ＳＸ12 埋土２層	7
野中	ＳＸ01 埋土最下位	14

（7）写　真　撮　影

写真撮影にあたっては、35㎜モノクローム・カラーリバーサル、および６×９判モノクロームの３種のフィルムを使用し、さらにデジタルカメラをメモ的に使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。その他、調査終了間際にセスナ機による航空写真撮影を遺跡ごとに各１回実施している（平成17年８月９日、同９月28日）。

2　室　内　整　理

（1）遺物整理の方法

遺物は、各種別に分類したのち出土地点ごとに重量計測を行い、接合作業を実施して掲載分・要観察分と不掲載分に細分類し、前者については仮番号を付し登録を行った。登録にあたっては、種別ごとに異なる冠名の番号を付している。その後、報告書掲載分をさらに抽出し、これらについては新たにアラビア数字の連番による掲載番号を付した。

なお、掲載遺物の選択に際しては、各遺物種別共通してまず第１に出土地点を優先し、Ⅰ層あるいは攪乱出土遺物は基本的に除外した。遺構別および遺物種別毎の出土量については次章に詳しく記述している。各遺物種別の掲載基準は下記のとおりである。

本報告書では、出土遺物量の記載をすべてｇあるいはkg単位での重量表記とした。石器、鉄製品、木製品については点数記載を主とし、これに重量記載を併記している。石器類に関しては、事前にトゥールと剥片および素材に分類し、トゥールについては個々に仮番号を付して登録台帳作成と計量を行っている。剥片および素材については個々の計量はせず、母岩別分類を実施した後、土器と同様に出土地点単位で計量し、また遺物数を数えて出土地点および母岩別分類結果と重量・点数を記載した台帳を作成している。

縄文土器・土師器

ａ．掲載遺物の選択基準･･･形態変化が集中するため口縁部が残存するものを優先している。平面５×５㎝以上且つ重量20ｇ以上という基準に適うものを掲載した。胴部は器形を復元できるもののみ、底部は底径が復元できるもの、底面に調整痕が残存するものに限定して掲載している。

ｂ．実測･･･径の推定可能なもの（1/4以上残存）は復元実測を行った。

石器

ａ．掲載遺物の選択基準･･･点数が少ないため、円形礫を除く全点を掲載した。

ｂ．実測･･･調整部位や打面・打点など、最低限必要と判断した部位のみ展開し、省力化に努めた。

鉄製品・銭貨・木製品

ａ．掲載遺物の選択基準･･･点数が少ないこと、および遺物の希少性を鑑み全点掲載した。

ｂ．実測･･･鉄製品は定型的であるため展開を最小限とした。木製品は全面実測し、柱材・杭については調整の明瞭な面を中心に展開した。

（2）写　真　撮　影

当センター写真室において、専属の期限付職員が35㎜カメラを用いモノクロームフィルムで撮影した。

（3）遺　構　図　面

前述のとおり、平面図・断面図・コンター図等野外調査に関わるすべてをデジタルカメラ撮影画像による写真測量とし、株式会社セビアスに委託した。

（丸山）

Ⅳ　野里上遺跡

1　検　出　遺　構（第９～11図）

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡２棟、掘立柱建物跡２棟、柱列１列、土坑10基、耕作痕跡７区画、溝跡18条、柱穴状土坑26個、杭１本、焼土遺構・炭化物廃棄遺構16基である。

（1）竪穴住居跡

ＳＩ01竪穴住居跡

遺構（第12図、写真図版３）

［位置・検出状況］ＪⅢ16・17・26・27グリッドに位置する。本付近は現在宅地として利用されており、その造成時に削平され他所より土層残存状態が悪い。検出層位はＩ層直下のＶ層中で、黒褐色土の広がりとして確認された。

［微地形］削平され旧地形を留めないが、東側に緩く傾斜していたものと思われる。現況はほぼ平坦である。

［重複関係］なし。東側にＳＩ02がある。

［規模・平面形・主軸方向］南側半分程度が床面下まで削平され、全容は不明である。残存辺長は東―西4.2ｍで、平面形は隅丸方形と推定される。住居主軸方向はＮ―101°―Ｗである。

［埋土］５層に分層される。黒色から暗褐色のシルトで構成され、下位層は礫を比較的多く含む。全体的に斜面上位にあたる西側から流入堆積した状態を呈している。なお、北西側埋土中位から凝灰岩の板状礫および破片が多量に出土した。カマド芯材を一括廃棄したものと考えられる。

［壁・床面］住居構築時の掘削はⅥ層中まで及んでいる。床面の状態を確認したところ、以下の掘削痕跡がほとんどなく、掘削底面をほぼそのまま床面とし貼り床は構築されていない。残存床面範囲はほぼ平坦で、場所による硬度差は確認されない。壁は西・北・東の３壁が残存しており、西・東壁はほぼ直立、北壁は45°程度で外傾している。検出面から底面までの深さは、最も残存する東壁で26cmを測る。

［カマド］東壁の中央に設置されている。袖の芯材には板状の凝灰岩が立位状態で設置され、暗褐色シルトで構築されている。芯材下半は床面下に埋め込まれており、深さ12～13cmの掘り方が確認された。また、焚口東側から約30×20×５cmの凝灰岩も出土しており、おそらく天井石あるいは構成材と推定される。煙道は検出面下17cmまで掘り込まれており、底面はほぼ平坦である。煙出し部分は柱穴状にさらに深く掘り込まれ、深さは検出面下44cmを測る。煙道長は1.2ｍ、幅は30cm、断面は半円形である。燃焼部は47×35cmの楕円形で、厚さは最厚部で６cmを測る。

［柱穴・ピット］柱穴は四隅近くから各１個計４個検出された。開口部径は30cm程度で、深さは削平されていないPit３および４で24～32cmを測る。Pit４は断面観察で径約15cmの柱痕が確認されている。

第３表　ＳＩ01ピット計測値

遺構名	底面標高(m)	床面からの深さ(cm)
Pit1	180.430	20.7
Pit2	180.323	18.7
Pit3	180.394	24.3
Pit4	180.306	31.7

［その他］床面中央で南北に細長い不整形の焼土が検出された。焼成が弱く、厚さ１cmに満たない。

遺物（第42・49・50・53図、写真図版21・26・29）

［土師器］2,542.99ｇ出土した。内訳は、床面、床面直上、カマド上1,739.55ｇ、埋土803.44ｇである。

このうち12点・1,671.47ｇを掲載した（73～84）。
［鉄製品］床面直上から１点・44.82ｇ出土し、掲載した（118）。
［縄文土器・石器］土器は242.88ｇ出土した。内訳は、床面128.77ｇ、埋土114.11ｇである。このうち床面出土の１点・36.44ｇを掲載した（１）。石器は床面から頁岩の素材１点・151.23ｇが出土した。不掲載である。
時期　床面出土遺物から７世紀後葉～８世紀前半頃と推定される。

ＳＩ02竪穴住居跡

遺構（第13～14図、写真図版４）
［位置・検出状況］ⅠⅢ98・99、ＪⅢ08・09・18・19グリッドに位置する。本付近は現在宅地として利用されており、その造成時に削平され他所より土層残存状態が悪い。検出層位はⅠ層直下のⅤ～Ⅵ層中で、黒褐色～暗褐色土の広がりとして確認された。
［微地形］削平され旧地形を留めないが、東側に緩く傾斜していたものと思われる。現況はほぼ平坦である。
［重複関係］なし。西側にＳＩ01がある。
［規模・平面形・主軸方向］東―西6.95ｍ、南―北7.93ｍで、平面形は隅丸長方形を呈する。住居主軸方向はＮ―93°―Ｗである。
［埋土］堆積土は主として色調と礫の混入状態の相違から９層に分層される。おもに黒色、黒褐色、暗褐色のシルトで構成されており、これらは基本層序Ⅴ・Ⅲ層起源と考えられる。中位から下位に堆積する２・３層はテフラで、２層は明褐色を呈し極めて断続的な層状堆積を成す。３層は灰黄色を呈し最大厚16㎝で厚く成層する。その下位数㎜は粒子が大きく（火山豆石？）一次堆積と見られ、上位はラミナの顕著な水成二次堆積である。全層とも自然堆積と考えられる。
［壁・床面］住居構築時の掘削はⅦ層中まで及んでおり、おもに斜面下方にあたる東半に貼り床（10層）が施されている。元地形の傾斜と並行に掘削を行い（６～７°）、水平になるよう東半に偏って貼り床を施した結果であろう。結果構築された床面は全体的に堅緻で、東側にごく緩く傾斜しており、その角度は約３°である。壁は西・北の２壁がほぼ直立しており、東壁は段状を呈する。南壁は残存状態が悪く判然としない。検出面から底面までの深さは、最も残存する西壁で29㎝を測る。
［カマド］東壁の中央に設置されている。袖の芯材および煙道側壁には板状に加工された凝灰岩が用いられている。袖のばあい、基礎となる板状礫を貼り床構築と同時に立位状態で設置し、その上部は数㎝に砕けた破片を核としてにぶい黄褐色～褐色シルトで固めて構築されている。また、燃焼部上から約60×30×５㎝の板状礫も出土しており、おそらく天井石あるいは構成材と推定される。煙道は意図的に破壊し埋めたのか、凝灰岩およびチャート、頁岩の礫などが多量に堆積している。同部の構築は側壁の礫設置状況から掘り込みによるものといえ、底面は外側にあたる西へ向かって約７°の上り勾配を呈する。側壁部分は一段低く掘り込まれ、板状の凝灰岩が設置されている。煙出し部分は柱穴状に検出面下77㎝まで掘り込まれ、煙道底面西端より35㎝程度下がる。煙道長は1.18ｍで、幅は掘削時約60㎝、使用時（側壁礫設置時）約45㎝を測る。断面形は、底面が半円形で、両側面はほぼ直立する。燃焼部は85×80㎝のほぼ円形で、厚さは最厚部で12㎝を測る。
［柱穴・ピット］柱穴は四隅近くから各１個計４個検出された（Pit１～４）。開口部径は50～60㎝程度と広いが、内部径は25～30㎝程度である。深さは最大約55㎝である。Pit４は断面観察で径約20㎝の柱痕が確認されている。Pit３西側の西壁際で検出されたPit５は、開口したまま使用された穴と推

定され、土師器甕（94・98）が出土している。開口部径は約35cmで、断面は椀形を呈する。

なお、Pit４の南西側に不整形の落ち込みが確認された。これは住居廃棄後、５・６層が堆積したのちの人為掘削で、用途は不明である。３層To-aに被覆されていることから、その降下以前の所産といえる。

第４表　ＳＩ02ピット計測値

遺構名	底面標高(m)	床面からの深さ(cm)
Pit1	178.747	33.5
Pit2	178.551	55.6
Pit3	179.026	26.4
Pit4	178.702	36.2
Pit5	179.193	14.5

［壁溝・間仕切り溝］東壁から北壁・南壁の東端にかけて壁溝が掘削されている。底面幅・床面からの深さともに10cm以下である。東壁には確認されなかった。また、Pit１から南壁へ、Pit３から北壁へそれぞれ直角に間仕切り溝が掘削されている。規模は、前者が長さ90cm・底面幅７～13cm・床面からの深さ４cm以下、後者が同70cm・５cm前後・６cm以下である。

［その他］Pit２東側の東壁際床面で白色粘土塊が検出された。長さ85cmで細長く広がっている。

遺物（第42・46・50・51・53図、写真図版21・24・26～29）

［土師器］5,837.86ｇ出土した。内訳は、床面、床面直上、カマド構築土内4,102.19ｇ、貼り床内3.36ｇ、埋土1,732.31ｇである。このうち17点・2,923.75ｇを掲載した（85～102）。

［鉄製品］床面から１点・55.73ｇ（119）、埋土から１点・22.17ｇ（120）出土し、いずれも掲載した。

［縄文土器・石器］土器は埋土中から242.88ｇ出土し、１点・31.73ｇ（２）を掲載した。石器は床面から台石１点・198.86ｇ（53）、剥片１点・3.79ｇが出土し、前者を掲載した。

［動・植物遺体］カマド燃焼部手前焚き口堆積土に対しフローテーションを実施し、骨類2.33ｇ、炭化種子・実７点を検出した。同定結果は、前者がサケ・マス類の椎骨椎体片、魚類の鰭棘等、鳥類/小中型獣類の破片、ニホンジカの基節骨、獣類の破片等および獣骨の針状加工品、後者がキビ、オニグルミである（Ⅵ章４・６節参照）。

時期　床面出土遺物から７世紀後葉～８世紀前半頃と推定される。

（２）掘立柱建物跡

ＳＢ01掘立柱建物跡

遺構（第15図、写真図版５・６）

［位置・検出状況］ＪⅢ47・48グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出された。

［微地形］約４°で南東側に下る。

［重複関係］なし。

［平面形式・規模］平面形式は総柱式掘立柱建物跡であり、９個の柱穴から構成されると考えられるが、６個の柱穴のみ確認している。規模は２間×２間であり、桁行き（南北）が4.66m、梁間（東西）が4.2mである。面積は19.57㎡である。建物方位はN―17°―Wである。柱間寸法は210cmを基本とし、Ｐ４～５間が256cmと広い。

［柱穴規模］掘り方の形状はすべて円形で、開口部径は26～33cmと概ね30cm前後である。検出面からの深さは18～52cmを測る。

第５表　ＳＢ01ピット計測値と土層註記

遺構名	土層註記	底面標高(m)	床面からの深さ(cm)
Pit1	10YR212黒褐色シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～５㎜）１%。	179.801	39.5
Pit2	第14図参照。	179.794	43.8
Pit3	10YR212黒褐色シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～５㎜）１%。	178.998	51.6
Pit4	10YR212黒褐色シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～５㎜）３%。	179.730	27.8
Pit5	10YR212黒褐色シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～３㎜）５%・炭化物粒１%。	179.554	18.0
Pit6	10YR212黒褐色シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～５㎜）５%。	179.273	22.4

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体である。柱痕部分は黒色で、色調・しまり状態などが異なる。

遺物　Ｐ１埋土から土師器が15.40ｇ出土した。細片のため不掲載である。

時期　検出層位から古代の可能性が高いが、詳細については不明である。

ＳＢ02掘立柱建物跡

遺構（第16・17図、写真図版５・６）

［位置・検出状況］ＫⅣ93・94、ＬⅣ03～05・14～15グリッドに位置する。Ⅲ層下位～Ⅴ層上面で検出された。

［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く北東側に下る。

［重複関係］4号耕作痕跡、ＳＤ12・13と重複し、前者を切り後２者に切られる。

［平面形式・規模］２間×４間の８本柱で、桁行き6.8ｍ、梁間4.2ｍである。面積は約31㎡である。建物方位はＮ―47°―Ｗである。柱間寸法は梁間の両端に当たるＰ１～５間およびＰ４～８間、桁行きの北側に当たるＰ１～２間およびＰ５～６間で210㎝を基本とし、中央の桁行きＰ２～３間およびＰ６～７間が230㎝、梁間Ｐ２～６およびＰ３～７が400㎝、南側に当たる桁行きＰ３～４間およびＰ７～８間が240㎝である。また、Ｐ６と７の東側100㎝に直径25㎝以下の小穴が２基検出された（Ｐ10・11）。出入り口？あるいは庇の可能性がある。

［柱穴規模］掘り方の形状はすべて円形で、開口部径は概ね40㎝前後である。検出面からの深さは21～58㎝を測る。

第６表　ＳＢ02ピット計測値と土層註記

遺構名	土層註記	底面標高(m)	床面からの深さ(cm)
Pit 1	10YR211黒色シルト　粘性中・しまり中。	177.739	21.3
Pit 2	上位に10YR2/1黒色シルト、下位に10YR3/1黒褐色シルト。粘性中・しまり　中灰黄色砂ブロックが上位5%、下位20%。	177.631	27.5
Pit 3	上位に10YR2/1黒色シルト、下位に10YR3/1黒褐色シルト。粘性中・しまり　中灰黄色砂ブロックが上位5%、下位20%。	177.553	47.4
Pit 4	上位に10YR2/1黒色シルト、下位に10YR3/1黒褐色シルト。粘性中・しまり　中灰黄色砂ブロックが上位5%、下位20%。	177.511	42.2
Pit 5	第16図参照。	177.492	47.0
Pit 6	第16図参照。	177.652	30.5
Pit 7	第16図参照。	177.395	58.1
Pit 8	第16図参照。	177.620	32.6
Pit 9	10YR211黒色シルト　粘性中・しまり中。	177.537	31.6
Pit10	10YR211黒色シルト　粘性中・しまり中。	177.563	25.3

［埋土］Ｐ５・７の１・２層は柱痕で、径15㎝程度である。３層は柱設置時の埋土で、Ⅴ層が混入する。

［関連施設］本遺構と軸方向を同じくし北西側に並ぶＳＡ01、および本遺構と軸を同じくし方形に取り囲むように廻るＳＤ15は本遺構の関連施設と推定される。ＳＡ01からＳＤ15北西辺までの間は何も検出されず、空白地帯となっている。

遺物　出土していない。

時期　検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以降）といえる。なお、本遺構と同面で検出され、軸線を同じくするＳＡ01のＰ３に残存していた柱材のＡＭＳ法による放射性炭素年代測定値が^{14}Ｃ年代で940±40yrBP、較正暦年代は95.4％の信頼度で1010ＡＤ～1190ＡＤの可能性があると出ており（Ⅵ章１節参照）、この結果は層位的見地とも調和的である。

（３）柱　　列

ＳＡ01柱列

遺構（第16・17図、写真図版５）

［位置・検出状況］ＬⅣ03・04、ＫⅣ94グリッドに位置する。Ⅲ層下位～Ⅴ層上面で検出された。

［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く北東側に下る。
［重複関係］なし。
［平面形式・規模］３個の柱穴が柱間295cmで一列に並ぶ。軸方向はN―44°―Eである。
［柱穴規模］掘り方の形状はすべて円形で、開口部径は概ね30cm前後である。検出面からの深さは13～25cmを測る。

第７表　ＳＡ01ピット計測値と土層註記

遺構名	土層註記	底面標高(m)	床面からの深さ(cm)
Pit 1	10YR3/2黒褐色シルトと10YR2/1黒色シルトの混土　粘性中・しまり中　埋め戻し土。	177.799	17.7
Pit 2	10YR3/2黒褐色シルトと10YR2/1黒色シルトの混土　粘性中・しまり中　埋め戻し土。	177.613	24.6
Pit 3	10YR3/2黒褐色シルトと10YR2/1黒色シルトの混土　粘性中・しまり中　埋め戻し土。	177.655	13.4

［埋土］黒褐色シルトと黒色シルトの混土。人為堆積である。Ｐ３には柱材が残存していた（125）。
［関連施設］本遺構と軸方向を同じくするＳＢ02、ＳＤ15は本遺構の関連施設と推定される。
遺物（第54図、写真図版30）
［柱材］Ｐ３の底面上に柱材の一部が残存していた（125）。樹種はクリである（Ⅵ章５節参照）。
時期　検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以降）といえる。なお、Ｐ３に残存していた柱材（125）に対し、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施している。これによる年代値は^{14}Ｃ年代で940±40yrBP、較正暦年代は95.4％の信頼度で1010ＡＤ～1190ＡＤの可能性があるとしている。（Ⅵ章１節参照）。この結果は層位的見地とも調和的である。

（４）土　　坑

ＳＫ01土坑

遺構（第18図、写真図版６）
［位置・検出状況］ＪⅣ71グリッドに位置する。Ⅳ層上面～Ⅴ層上面で、黒色土の円形プランとして検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約３°で緩く東側に下る。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］開口部径173×169cmのほぼ円形を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒色シルトおよび粘土質シルト主体で、中位に炭化物粒が多量に混入する。下位にはTo-aがブロック状に混入する。
［壁・底面］底面は丸く、各壁とも椀状に外傾して立ち上がり上半は外反する。掘削はⅦ層中まで行われており、検出面からの深さは最深部で60cmを測る。
遺物　縄文土器が埋土中位の２層から30.76ｇ出土した。細片のため不掲載である。
時期　検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以降）といえるが、詳細および下限については不明である。

ＳＫ02土坑

遺構（第18図、写真図版６）
［位置・検出状況］ＪⅢ78グリッドに位置する。Ⅶ層上面で、黒色土の円形プランとして検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約３°でごく緩く東側に下る。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］開口部径130×109cmのほぼ円形を呈する。
［埋土］黒～黒褐色シルト主体で、自然堆積と思われる。７層は壁面の崩落土である。

［壁・底面］底面は平坦で、各壁とも直立気味に立ち上がり断面形はビーカー状を呈する。掘削はⅦ層中まで行われており、検出面からの深さは最深部で38cmを測る。

遺物（第42図、写真図版21）

［縄文土器］埋土5層などから841.83ｇ出土し、２点・385.93ｇを掲載した（３・４）。

［土師器］埋土中から8.82ｇ出土した。細片のため不掲載である。

時期　層位的に古代以前の構築であることは確実だが、詳細な比定要素に欠ける。出土遺物から縄文時代後期以降の遺構と推定される。

ＳＫ03土坑

遺構（第18図、写真図版７）

［位置・検出状況］ＬⅣ81グリッドに位置する。Ⅶ層上面で、黒褐色土の長楕円形プランとして検出された。

［微地形］西から東に約５°で下る緩斜面である。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］開口部径169×82cmの長楕円形を呈する。

［埋土］黒褐色シルト主体で、礫および炭化物粒の混入状態で分層した。おもに斜面上方から流入する形の自然堆積と思われる。

［壁・底面］各壁とも緩く外傾して立ち上がり断面形は擂り鉢状を呈する。掘削はⅦ層中で止まっており、検出面からの深さは最深部で31cmを測る。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

ＳＫ04土坑

遺構（第18図、写真図版７）

［位置・検出状況］ＬⅢ88・89グリッドに位置する。Ⅶ層上面で、黒色土の円形プランとして検出された。

［微地形］ほぼ平坦だが約３°でごく緩く東側に下る。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］開口部径72×60cmのほぼ円形を呈する。

［埋土］上半が黒色シルト、下半が黒褐色シルトで構成される。自然堆積と思われる。

［壁・底面］底面は丸く、各壁とも緩く外傾して立ち上がり断面形は皿状～椀状を呈する。掘削はⅦ層中で止まっており、検出面からの深さは最深部で16cmを測る。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

ＳＫ05土坑

遺構（第19図、写真図版７）

［位置・検出状況］ＭⅣ32グリッドに位置する。Ⅰ層直下のⅥ～Ⅶ層中で、ＳＫ06とともに黒褐色土の長楕円形プランとして検出された。

［微地形］付近は耕地造成時の地形改変により原形を留めていない。本遺構付近がちょうど区画境に

あたり、東側がⅦ層中まで大きく削平されている。原形は北東へ下る緩斜面だったと推定される。
［重複関係］北東側がＳＫ06と重複し、これに切られる。
［規模・平面形］削平および重複により不明であるが、残存値は開口部径140×78cmで長楕円形を呈する。
［埋土］黒褐色シルト主体で、礫の混入状態で分層した。自然堆積と思われる。
［壁・底面］底面は丸く、斜面上方の南西壁ほど緩やかに立ち上がる。同方向からの流水により削られた結果と推定される。掘削はⅦ層中で止まっており、深度は最深部で検出面下43cmを測る。
遺物　出土していない。
時期　不明である。

ＳＫ06土坑
遺構（第19図、写真図版７）
［位置・検出状況］ＭⅣ33グリッドに位置する。Ⅰ層直下のⅥ～Ⅶ層中で、ＳＫ05とともに黒褐色土の長楕円形プランとして検出された。
［微地形］付近は耕地造成時の地形改変により原形を留めていない。本遺構付近がちょうど区画境にあたり、東側がⅦ層中まで大きく削平されている。原形は北東へ下る緩斜面だったと推定される。
［重複関係］南西側がＳＫ05と重複し、これを切る。
［規模・平面形］北東側の大半が削平され規模・平面形ともに不明である。残存する開口部長は180cmを測る。
［埋土］黒褐色シルト主体で、礫の混入状態で分層した。自然堆積と思われる。
［壁・底面］底面は丸く、北壁は直立気味に立ち上がる。これ以外は緩く外傾する。掘削はⅦ層中で止まっており、検出面からの深さは最深部で50cmを測る。
遺物　出土していない。
時期　不明である。

ＳＫ07土坑
遺構（第19図、写真図版８）
［位置・検出状況］ⅠⅣ81グリッドに位置する。Ⅴ層上面で、黒色土の長楕円形プランとして検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約３°でごく緩く東側に下る。
［重複関係］ＳＤ01と重複し、これに切られる。
［規模・平面形］開口部径134×77cmの長楕円形を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒色シルトの単層である。
［壁・底面］底面は丸く、各壁とも椀状に外傾して立ち上がる。掘削はⅦ層中まで行われており、検出面からの深さは最深部で36cmを測る。
遺物　出土していない。
時期　検出層位から平安時代前期以前（To-a降下以前）といえるが、詳細および上限については不明である。

ＳＫ08土坑
遺構（第18図、写真図版８）

［位置・検出状況］ＬⅢ48・49グリッドに位置する。Ⅶ層上面で、黒褐色土の長楕円形プランとして検出された。西側は調査区外へ延びており未調査である。
［微地形］西から東に約７°で下る緩斜面である。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］短軸155cm、長軸360cm以上で、長楕円～溝状を呈するものと推定される。
［埋土］Ⅵ層起源の黒褐色シルト主体で構成される。中～下位の層はⅦ層がブロック状に混入し、人為堆積の様相を呈する。他は自然堆積と思われる。
［壁・底面］底面、壁ともに凹凸が多く不整形である。掘削はⅦ層中まで行われており、検出面からの深さは最深部で80cmを測る。
遺物（第42図、写真図版21）
［縄文土器］埋土上位から27.22ｇ出土しており、掲載した（５）。
［石器］埋土上位から頁岩２製の素材が１点・25.01ｇ出土した。
時期　層位的に古代以前の構築であることは確実だが、詳細な比定要素に欠ける。出土遺物から縄文時代中期以降の遺構と思われる。

ＳＫ09土坑

遺構（第19図、写真図版８）
［位置・検出状況］ＬⅣ52グリッドに位置する。Ⅴ層上面で、黒褐色土の楕円形プランと灰オリーブ色のテフラの堆積によって検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約３°でごく緩く東側に下る。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］開口部径239×184cmの楕円形を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体で構成される。２層はTo-aの水成堆積で、ラミナが顕著である。４・５層にもブロック状に混入する。３～５層は幾分動いた形跡があるが、他は自然堆積と思われる。
［壁・底面］底面は凹凸が多い。北東壁は段状を呈し、他は緩く外傾している。掘削はⅦ層中まで行われており、検出面からの深さは最深部で35cmを測る。
遺物　出土していない。
時期　埋土の状態からTo-a降下前の平安時代前期頃と推定される。

ＳＫ10土坑（近世墓）

遺構（第19図、写真図版８）
［位置・検出状況］ＫⅢ29・30グリッドに位置する。Ⅴ層上面で加工材が出土したことにより検出された。
［微地形］ほぼ平坦だがごく緩く東側に下る。
［重複関係］なし。
［規模・平面形］開口部径100×85cmのほぼ円形を呈する。
［埋葬状態］北方向に背を向けて座した状態の屈葬である。
遺物　人骨（頭蓋、大腿など）のほか、漆塗りの椀４点、曲物１点、櫛１点、銭貨（寛永通寶）５枚、断面六角形の加工材３本、クルミの種実１点などが出土した。
時期　副葬品から近世といえる。

（5）耕　作　痕　跡

耕起の痕跡を示す遺構で、２号の事例からいずれも畠作によるものと推定される（Ⅶ章２節２項で詳述）。埋土が基本層序Ⅲ層主体で構成されるためⅢ層中での検出が極めて困難で、大半がⅣ層To-aテフラ上面で確認された。ただし構築面はⅢ層中にあると推定される。

１号耕作痕跡

遺構（第20図、写真図版９）

［位置・検出状況］ＪⅣ31・41グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅤ層上面において黒褐色土の筋状プラン群として検出された。南東部の溝①～③付近では検出面にTo-aがブロック状に堆積しており、これを掘り込んで構築されている。

［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く南東側に下る。

［重複関係］なし。

［範囲・溝の条数・配列・規模］検出範囲は18.7㎡である。条数は18（溝①～⑱）で、等高線と直交するように東西方向に延びる。検出長は3.3m以下、幅は上端が６～54cm、下端が６～31cm、検出面からの深さは２～27cm、条間の心心距離は28～64cmで、断面形は大半が皿状で一部漏斗状を呈する。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体で、To-aおよび礫の混入状態から９層に分層され、条単位では最多で２層に分けられる。礫は大半が破砕状態である。溝②・③埋土にはTo-aがブロック状に混入している。

遺物　埋土１層から土師器が63.54ｇ出土した。細片のため不掲載である。

時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、土壌サンプルNo.１からフローテーションにより抽出された炭化物に対し、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施している。これにより得られた年代値は^{14}Ｃ年代で2430±40yrBPで（Ⅵ章１節参照）、層位的見地と相容れない。

２号耕作痕跡（畠跡）

遺構（第21図、写真図版10）

［位置・検出状況］調査区西端のＬⅢ48・49・58グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面において平面観察により黒褐色土の筋状プラン群として、また断面Ａ－Ａ'においてⅣ層上面に載る断面カマボコ状の高まりと凹みの連続として検出された。前者と後者の位置は必ずしも一致しない。この一帯はTo-aが成層～ブロック状に堆積しており、遺構の下位はこれを掘り込んで構築されている。

［微地形］約５～６°で北東側に下る。

［重複関係］なし。ＳＤ05が東側に隣接する。

［範囲・溝の条数・配列・規模］検出範囲は13.0㎡であるが、遺構自体は調査区外西側へ続いている。平面で検出した黒褐色土の筋状プラン群の調査区内における確認条数は13（溝①～⑬）で、溝①～⑪は等高線と直交するように東西方向に延びる。溝⑫・⑬はこれらと軸方向が異なり、南西―北東方向に延びており別区画の可能性がある。検出長は1.65m以下、幅は上端が７～53cm、下端が３～35cm、深さは６～20cm、条間の心心距離は36～122cmで、断面形は大半が皿状で一部漏斗状を呈する。

断面Ａ－Ａ'で検出した凸部（11層）は、確実なもので13箇所ある。この間に凹部（10層）が12箇所存在する。各凹部間の心心距離は35～91cmである。平面範囲は不明である。なお、この凹凸と筋状

プランの位置は一部が一致するもののすべては対応せず、同時に構築されたものとはいえない。

［埋土］調査区際断面により表土からの連続した観察が可能である。基本土層Ⅱ層以下にあたる８層は西側斜面上方からの流入土で、礫が多量に混じる。短期間での崩落、土石流と推定される。10層は平面検出の際に筋状プランとして捉えたTo-a層を切る黒褐色土、11・12層はTo-aが攪拌された状態で混じる黒褐色土、13層は10層の下位に位置し断面椀状の形態を呈する層、14層はTo-aである。以上のような状態から、①To-a降下・堆積→②15層までの耕起と土壌攪拌および畝立て→③放置（放棄？）→④畝間埋没→⑤土石流の堆積、という時間的経過が推定される。②の段階で攪拌土である11層が断面波状・平面筋状を呈することから、本遺構はこれを作土とした畠跡と認定することが可能で、その凸部が畝、凹部が畝間、検出段階で筋状に認識した10層が畝間埋土となる。13層は畝立て前の土壌攪拌（天地返しなど）の一部と推定される。

遺物　出土していない。

時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、11層内畝頂部付近で採取した土壌サンプルNo.２からフローテーションにより抽出された炭化物に対し、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施している。これにより得られた年代値は^{14}Ｃ年代で1190±40yrBPである（Ⅵ章１節参照）。層位的見地と比して、^{14}Ｃ年代は合わないものの較正暦年代は7.8％の信頼度で690ＡＤ～750ＡＤ、87.6％の信頼度で760ＡＤ～970ＡＤの可能性があるとされ、To-a降下年代を915年と仮定すればそれ以降～970年（10世紀代）という年代観が導き出される。

３号耕作痕跡

遺構（第22図、写真図版11）

［位置・検出状況］ＫⅣ91・92、ＬⅣ02・12グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面において、To-aを掘り込む黒褐色土の不連続な筋状プラン群として検出された。途切れ途切れの検出であり、本来の範囲を表してはいない。

［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く北東側に下る。

［重複関係］なし。ＳＤ10・11間にあたる。

［範囲・溝の条数・配列・規模］検出範囲は6.3㎡である。条数は５（溝①～⑤）で、等高線とほぼ並行するように南―北方向に延びる。検出長は1.4ｍ以下、幅は上端が10～30㎝、下端が３～15㎝、検出面からの深さは５㎝以下、条間の心心距離が計測できるのは１箇所しかなく、溝①～②間で78㎝である。断面形は皿状を呈する。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルトで、To-aがブロック状に混入している。

遺物　出土していない。

時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、同一面上に立地する７号耕作痕跡と同時もしくは近接時期の所産と推定される。

４号耕作痕跡

遺構（第23図、写真図版11）

［位置・検出状況］ＫⅣ83・93・94、ＬⅣ03～05グリッド付近に位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面において黒褐色土の筋状プラン群として検出された。この一帯はTo-aが成層しており、最下位にパミスを含んだ１次堆積が確認されるほかはすべて水成の再堆積である。遺構はこれを掘り込んで構築されている。

［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く北東側に下る。
［重複関係］ＳＤ12・13と重複し、これらに切られる。また、ＳＢ02範囲とも重複するが、直接の切りあいはない。
［範囲・溝の条数・配列・規模］検出範囲は59.9㎡である。条数は19（溝①～⑲）で、いずれも等高線と並行するように北東―南西方向に延びる。検出長は5.34ｍ以下、幅は上端が10～30㎝、下端が３～19㎝、検出面からの深さは３～10㎝を測り、断面形は皿～椀状を呈する。条間の心心距離は24～220㎝とさまざまであるが、溝①～③は110㎝前後、溝⑫～⑯は50㎝前後と比較的等間隔に並列する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルトで、Ⅴ層がブロック状に混入する。溝⑯のみ分層でき、下位に暗褐色シルトの堆積が確認された。
遺物　出土していない。
時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、同一面上に立地する７号耕作痕跡と同時もしくは近接時期の所産と推定される。

５号耕作痕跡

遺構（第22図、写真図版12）
［位置・検出状況］ＫⅣ83・84グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面において黒褐色土の筋状プラン群として検出された。この一帯はTo-aが成層しており、最下位にパミスを含んだ１次堆積が確認されるほかはすべて水成の再堆積である。遺構はこれを掘り込んで構築されている。
［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く東側に下る。
［重複関係］なし。
［範囲・溝の条数・配列・規模］検出範囲は8.8㎡である。条数は７（溝①～⑦）で、溝①～⑥は等高線とほぼ並行するように南―北方向に延びる。溝⑦は本群に含めたが、東西方向に延びて溝④と重複しこれに切られる。大きな時間差は有さないと推定されるが、本来的には別群として捉えるべきものである。
検出長は2.2ｍ以下、幅は上端が10～35㎝、下端が５～24㎝、検出面からの深さは２～６㎝、条間の心心距離は62～137㎝で、断面形は皿状を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体である。
遺物　出土していない。
時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、同一面上に立地する７号耕作痕跡と同時もしくは近接時期の所産と推定される。

６号耕作痕跡

遺構（第24図）
［位置・検出状況］ＬⅣ13・15グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面においてTo-aを掘り込む黒褐色土の筋状プラン群として検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く北東側に下る。
［重複関係］なし。
［範囲・溝の条数・配列・規模］条数は８（溝①～⑧）で、ほぼ１グリッド分の空白地帯を挟み、西側に３条（溝①～③）、東側に５条（溝④～⑧）がまとまる。検出範囲はそれぞれ4.6㎡、4.3㎡である。いずれも軸方向は等高線とほぼ並行するように南―北方向に延びる。検出長は1.95ｍ以下、幅は上端

が12～40cm、下端が３～17cm、検出面からの深さは５cm以下、条間の心心距離は40～170cmで、断面形は皿状を呈する。なお、溝⑤は南半が二又に分かれており、重複している可能性がある。また、溝⑦はＬ字形を呈する。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体である。

遺物　出土していない。

時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。なお、同一面上に立地する７号耕作痕跡と同時もしくは近接時期の所産と推定される。

７号耕作痕跡

遺構（第24・25図、写真図版12）

［位置・検出状況］ＫⅣ95、ＬⅣ05～07・15～18・25～27グリッド付近に位置する。Ⅳ層上面からＶ層上面において黒～黒褐色土の筋状プラン群として検出された。この一帯はTo-aが成層しており、最下位にパミスを含んだ１次堆積が確認されるほかはすべて水成の再堆積である。遺構はこれを掘り込んで構築されている。

［微地形］ほぼ平坦だが約１～３°でごく緩く北東側に下る。

［重複関係］ＳＤ16と重複し、これに切られる。

［範囲・溝の条数・配列・規模］検出範囲は107.2㎡である。条数は34（溝①～㉞）で、いずれも等高線と並行するように北―南方向に延びる。検出長は6.02m以下で、幅は２条重複するもの（溝㉔・㉗）を除き、上端が10～47cm、下端が３～19cm、検出面からの深さは３～12cmを測り、断面形は基本的に皿～椀状で、凹凸が激しく不整な箇所が多い。条間の心心距離は30～292cmと多様で重複するものもあるが、溝⑪～⑭および溝㉑～㉓は35～40cm、溝㉗～㉛は55～60cm、溝⑧～⑩・⑮～⑰は50～70cm程度で等間隔に並列する。

［埋土］Ⅲ層起源の黒～黒褐色シルトで、Ｖ層がブロック状に混入する。また、To-aがブロック状に少量混入する。

遺物　出土していない。

時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。土壌サンプルNo.２（埋土１層）より採取した炭化物に対し、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施している。これにより得られた年代値は^{14}Ｃ年代で990±30yrBP、較正暦年代は56.8％の信頼度で980ＡＤ～1060ＡＤ、38.6％の信頼度で1070ＡＤ～1160ＡＤの可能性があるとしている（Ⅵ章１節参照）。この結果は層位的見地と調和的である。

（６）溝　　跡

埋土が基本層序Ⅲ層主体で構成されるためⅢ層中での検出が極めて困難で、大半がⅣ層To-aテフラ上面あるいはＶ層上面で確認された。ただし構築面はⅢ層中にあると推定される。

ＳＤ01溝跡

遺構（第26・27図、写真図版13）

［位置・検出状況］ＩⅢ50・60・70・80、ＩⅣ71・81・91、ＪⅣ01・11・22グリッド付近に位置する。Ｖ層上面で黒～黒褐色シルトの広がりとして検出された。

［微地形］約４°で緩く東側に下る。

［重複関係］なし。ＳＤ02が東側約２ｍに並行している。
［規模・平面形・断面形］等高線にほぼ並行して北―南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定される。確認できた長さは46.4ｍで、上幅は82㎝以下、検出面からの深さは31㎝以下である。断面形は皿～椀状を呈する。Ⅰ Ⅲ70グリッド付近の底面は２条に分かれている。
［埋土］Ⅲ層起源の黒～黒褐色シルト主体で、下位にはⅤ層が混入する。検出面にはTo-aがブロック状に堆積している。いずれも自然堆積の様相を呈する。
遺物　埋土最上位の検出面で縄文土器が9.65ｇ、埋土中で土師器495.26ｇが出土した。いずれも細片のため不掲載である。
時期　検出層位から平安時代前期頃（To-a降下直前）といえる。

ＳＤ02溝跡

遺構（第26・27図、写真図版13）
［位置・検出状況］Ⅰ Ⅲ50・60、Ⅰ Ⅳ61・71・81・82・92、Ｊ Ⅳ02・12・22・33グリッド付近に位置する。Ⅳ層上面からⅤ層上面で黒～黒褐色シルトの広がりとして検出された。To-aがブロック状に混入する層を切り込む。
［微地形］約４°で緩く東側に下る。
［重複関係］なし。ＳＤ01が西側約２ｍに並行している。
［規模・平面形・断面形］等高線にほぼ並行して北―南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定される。確認できた長さは50.2ｍで、上幅は118㎝以下、検出面からの深さは20㎝以下である。断面形は椀状を呈する。Ⅰ Ⅲ60グリッド付近は２条に分かれている。
［埋土］Ⅲ層起源の黒～黒褐色シルト主体で、下位にはⅤ層が混入する。自然堆積の様相を呈する。
遺物　底面、底面直上から土師器が82.43ｇ出土した。細片のため不掲載である。
時期　検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以後）である。隣接するＳＤ01とはTo-a堆積イベントに関する時間差を介在するが、大きく乖離するものではない。

ＳＤ03溝跡

遺構（第27図、写真図版13）
［位置・検出状況］ＭⅣ51～53グリッドに位置する。Ⅴ層上面およびⅠ層直下のⅦ層中で黒褐色シルトの広がりとして検出された。
［微地形］付近は耕地造成時の地形改変により原形を留めていない。元は東へ下る緩斜面だったと推定されるが、平坦化目的で段々に削平されており各平坦面とも西側がⅦ層以下まで大きく削られている。
［重複関係］なし。ＳＤ04が南側約３ｍに並行する。
［規模・平面形・断面形］等高線にほぼ直交して西―東方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定される。確認できた長さは13.3ｍで、上幅は108㎝以下、検出面からの深さは52㎝以下である。断面形は一様ではないが、比較的残存状態のよい部分は逆台形状を呈する。
［埋土］黒褐色シルト主体で、混入物から５層に分層される。下位の４層は砂主体層である。自然堆積の様相を呈する。
遺物　出土していない。
時期　検出層位からTo-aテフラ降下以前といえるが、詳細および上限については不明である。

ＳＤ04溝跡

遺構（第28図、写真図版13・14）

［位置・検出状況］ＭⅢ70、ＭⅣ46・47・54～56・61～63グリッドに位置する。Ⅴ層上面およびⅠ層直下のⅦ層中で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

［微地形］付近は耕地造成時の地形改変により原形を留めていない。元は東へ下る緩斜面だったと推定されるが、平坦化目的で段々に削平されており各平坦面とも西側がⅦ層以下まで大きく削られている。

［重複関係］なし。ＳＤ03が北側約３ｍに並行する。

［規模・平面形・断面形］等高線にほぼ直交して西―東方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定される。確認できた長さは35.9ｍで、上幅は1.75ｍ以下、検出面からの深さは110㎝以下である。断面形は一様ではないが、深い部分は漏斗状を呈する。

［埋土］黒褐色シルト主体で、色調のほか礫・砂の混入量と状態などで７層に分層される。下位の２層には比較的砂が多い。自然堆積の様相を呈する。

遺物　埋土から縄文土器が38.85ｇ出土した。細片のため不掲載である。

時期　検出層位からTo-aテフラ降下以前といえるが、詳細および上限については不明である。

ＳＤ05溝跡

遺構（第27図、写真図版14）

［位置・検出状況］ＬⅢ49・58・59グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒褐色シルトの広がりとして検出された。

［微地形］北東に約５～６°で下る緩斜面である。

［重複関係］なし。西側に２号耕作痕跡が、東側にＳＤ06が近接する。２号耕作痕跡の区画溝である可能性がある。

［規模・平面形・断面形］等高線に斜行する形でほぼ北―南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定されるが、北側はまもなくＳＤ06と重複するため、合流もしくは切りあっていたはずであるが詳細不明である。確認できた長さは7.8ｍで、上幅は55㎝以下、検出面からの深さは10㎝以下である。断面形は皿状を呈する。

［埋土］黒褐色シルトが堆積しており、炭化物の有無で２層に分層された。自然堆積の様相を呈する。

遺物　出土していない。

時期　検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。２号耕作痕跡と同時期の可能性がある。

ＳＤ06溝跡

遺構（第27図、写真図版14）

［位置・検出状況］ＬⅢ39・49・50グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒～黒褐色シルトの広がりとして検出された。

［微地形］北東に約５～６°で下る緩斜面である。

［重複関係］なし。西側にＳＤ05と２号耕作痕跡が近接する。

［規模・平面形・断面形］等高線にほぼ並行して北西―南東方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定される。確認できた長さは９ｍで、上幅は70㎝以下、検出面からの深さ

は14cm以下である。断面形は椀状を呈する。

［埋土］Ⅲ層起源の黒～黒褐色シルト主体で、To-aおよび礫の混入状態から４層に分層される。斜面上位の南西側から流入した自然堆積の様相を呈する。

遺物　出土していない。

時期　検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえるが、下限は特定できない。

ＳＤ07溝跡

遺構（第29図、写真図版14）

［位置・検出状況］ＬＶ91・ＭＶ01・11・21・31・41グリッドに位置する。Ⅳ層上面～Ⅴ層上面で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

［微地形］約４°で緩く東側に下る。

［重複関係］なし。東側にＳＤ08・09が近接しほぼ並行に走る。

［規模・平面形・断面形］等高線にほぼ並行して北―南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと思われる。確認できた長さは26.6ｍで、上幅は72cm以下、検出面からの深さは32cm以下である。断面形は椀状を呈する。底面には掘削痕と思われる小穴が多数確認された。底面幅に対し２個が互い違いに並列している箇所が多く、左右振り分けて掘削した痕跡と考えられる。

［付属施設］溝の両側に２個ずつの柱穴状土坑が並行して確認された（Pit１～４）。大きさは直径22cm以下、検出面からの深さは20cm以下である。溝を跨ぐ柱間距離（Pit１～２および３～４）は1.25ｍ、その群間（Pit１～３および２～４）は1.75ｍである。

第８表　ＳＤ07ピット計測値と土層註記

遺構名	土層註記	底面標高(m)	床面からの深さ(cm)
Pit 1	第29図参照。	178.806	15.9
Pit 2	第29図参照。	178.706	16.0
Pit 3	未取得。	178.769	30.6
Pit 4	未取得。	178.786	17.8

［埋土］溝、柱穴状土坑ともにⅢ層起源の黒褐色シルト主体である。溝はⅤ層および礫の混入状態から３層に分層され、斜面上位の西側から流入した自然堆積の様相を呈する。Pit１・２にはTo-aがブロック状に混入する。

遺物　埋土から縄文土器が59.70ｇ出土した。細片のため不掲載である。

時期　検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえるが、下限は特定できない。

ＳＤ08溝跡

遺構（第29図、写真図版14）

［位置・検出状況］ＬＶ93・ＭＶ03・13・23・33グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

［微地形］約３°で緩く東側に下る。

［重複関係］なし。すぐ東側にＳＤ09が近接しほぼ並行に走る。

［規模・平面形・断面形］等高線に並行してほぼ北―南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと思われる。確認できた長さは25.4ｍで、上幅は85cm以下、検出面からの深さは25cm以下である。断面形は椀状を呈する。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体である。自然堆積の様相を呈する。

遺物（第42・46図、写真図版21・24）

［縄文土器］埋土から283.28ｇ出土し、２点・111.1ｇを掲載した（６・７）。
［石器］埋土からスクレイパー１点・18.28ｇ（54）、石皿？１点・108.35ｇ（55）、剥片4.8ｇが出土し、前２者を掲載した。
時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）である。下限は特定できない。

ＳＤ09溝跡

遺構（第29図、写真図版14）
［位置・検出状況］ＬＶ93・ＭＶ03グリッドに位置する。Ⅳ層上面からⅤ層上面で黒褐色シルトの広がりとして検出された。
［微地形］約３°で緩く東側に下る。
［重複関係］なし。すぐ西側にＳＤ08が近接しほぼ並行に走る。
［規模・平面形・断面形］等高線に並行してほぼ北―南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと思われる。確認できた長さは6.35ｍで、上幅は79㎝以下、検出面からの深さは14㎝以下である。断面形は椀状を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体で、一部上位ににぶい黄褐色シルトが被覆する。自然堆積と思われる。
遺物　埋土から縄文土器が9.03ｇ、土師器が6.03ｇ出土した。いずれも細片のため不掲載である。
時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）である。下限は特定できない。

ＳＤ10溝跡

遺構（第30・31図、写真図版15）
［位置・検出状況］ＫⅣ81・91、ＬⅣ01・11グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒色シルトの広がりとして検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く東側に下る。
［重複関係］なし。ＳＤ11が東側約2.5ｍに並行しており、その間に３号耕作痕跡が存在する。
［規模・平面形・断面形］等高線にほぼ並行して北―南方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定される。確認した規模は、長さ12.55ｍ、上幅82㎝以下、検出面からの深さ８㎝以下である。断面形は皿状を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒色シルトである。自然堆積と思われる。
遺物　出土していない。
時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）である。３号耕作痕跡との関係および時期差は不明である。

ＳＤ11溝跡

遺構（第30・31図、写真図版15）
［位置・検出状況］ＫⅣ82・92、ＬⅣ02・12グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒色シルトの広がりとして検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く東側に下る。

［重複関係］なし。ＳＤ10が西側約2.5ｍに並行しており、その間に３号耕作痕跡が存在する。
［規模・平面形・断面形］等高線にほぼ並行して北―南方向に直線的に延びる（①）。ＫⅣ92グリッド付近およびＬⅣ02グリッド中央付近で二又に分かれる（②）。前者はＳＤ12として別個登録している。①②とも本来はさらに続く。確認した規模は、①が長さ12.7ｍ、上幅88㎝以下、検出面からの深さ８㎝以下である。②が長さ3.3ｍ、上幅50㎝以下、検出面からの深さ８㎝以下である。断面形はいずれも皿状を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルトと黒色シルトの混土で構成される。
遺物　出土していない。
時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）である。３号耕作痕跡との関係および時期差は不明である。

ＳＤ12溝跡

遺構（第30・31図、写真図版15）
［位置・検出状況］ＫⅣ92・93、ＬⅣ03・04・14・15グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒色シルトの広がりとして検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く東側に下る。
［重複関係］４号耕作痕跡、ＳＢ02と重複し、両者を切る。ＳＤ13が北東側約2.8ｍに並行している。
［規模・平面形・断面形］北西―南東方向に直線的に延びており、ＫⅣ92グリッド付近でＳＤ11と合流している。南東側はさらに先へ続いていたものと推定される。確認した規模は、長さ21.65ｍ、上幅75㎝以下、検出面からの深さ８㎝以下である。断面形は皿状を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルトと黒色シルトの混土で構成される。底面にはTo-aがブロック状に確認される。
遺物　出土していない。
時期　検出層位および重複関係から11～12世紀以降と推定される。

ＳＤ13溝跡

遺構（第30・31図、写真図版15）
［位置・検出状況］ＫⅣ82・83・93グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒色シルトの広がりとして検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く東側に下る。
［重複関係］４号耕作痕跡、ＳＢ02と重複し、両者を切る。ＳＤ12が南西側約2.8ｍに並行している。
［規模・平面形・断面形］北西―南東方向に直線的に延びており、両方向へさらに続いていたものと推定される。確認した規模は、長さ5.6ｍ、上幅75㎝以下、検出面からの深さ８㎝以下である。断面形は皿状を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒色シルトである。自然堆積と思われる。
遺物　出土していない。
時期　検出層位および重複関係から11～12世紀以降と推定される。

ＳＤ14溝跡

遺構（第30・31図、写真図版15）

［位置・検出状況］ＬⅣ11～14・24・25グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅤ層上面で黒褐色シルトの広がりとして検出された。
［微地形］約３°で緩く北東側に下る。
［重複関係］なし。途中攪乱（生文課試掘）によって消失している。また、６号耕作痕跡が北側に隣接する。
［規模・平面形・断面形］西―東方向に直線的に延びており、両方向へさらに続いていたものと推定される。確認した規模は、長さ18.4ｍ、上幅48㎝以下、検出面からの深さ10㎝以下である。断面形は椀状を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルトである。自然堆積と思われる。
遺物　出土していない。
時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえる。ＳＤ10～13と乖離しない時期であろう。６号耕作痕跡の区画溝である可能性がある。

ＳＤ15溝跡

遺構（第16・17図、写真図版５・６）
［位置・検出状況］ＫⅣ93～94、ＬⅣ03・13・14グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅤ層上面で黒色シルトの広がりとして検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く北東側に下る。
［重複関係］ＳＤ12・13と重複し、これらに切られる。また４号耕作痕跡の区画内にあたるが、これとの重複は確認できていない。
［規模・平面形・断面形］「コ」の字形を呈し、軸方向は北西―南東およびこれに直交する方向である。これはＳＢ02、ＳＡ01、４号耕作痕跡と同方向にあたる。確認した規模は、長さが南西辺9.2ｍ、北西辺6.8ｍ、北東辺2.2ｍで、南西辺および北東辺はさらに南東方向へ続いていた可能性がある。上幅35㎝以下、検出面からの深さ10㎝以下である。断面形は椀状を呈する。
［埋土］Ⅲ層起源の黒色シルトである。自然堆積と思われる。
［関連施設］本遺構と軸方向が同一で重複のない南東側に並ぶＳＡ01とＳＢ02は本遺構の関連施設と推定される。
遺物　出土していない。
時期　検出層位から平安時代前期以降（To-a降下以降）といえる。なお、本遺構と同面で検出され、軸線を同じくするＳＡ01のＰ３に残存していた柱材のＡＭＳ法による放射性炭素年代測定値が^{14}Ｃ年代で940±40yrBP、較正暦年代は95.4％の信頼度で1010ＡＤ～1190ＡＤの可能性がある出ており（Ⅵ章１節参照）、この結果は層位的見地とも調和的である。

ＳＤ16溝跡

遺構（第32図、写真図版16）
［位置・検出状況］ＫⅣ75・85・86・96、ＬⅣ06・16・26グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒褐色シルトの広がりとして検出された。
［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く北東側に下る。
［重複関係］７号耕作痕跡と重複し、これを切る。ＳＤ17が東側約10ｍに並行している。
［規模・平面形・断面形］北―南方向に直線的に延びており、両方向へさらに先へ続いていたものと

推定される。確認した規模は、長さ27.9m、上幅63cm以下、検出面からの深さ21cm以下である。断面形は逆台形状を呈する。

［埋土］色調から３層に分層されるが、すべてⅢ層起源である。斜面上方の西側から流入した自然堆積の様相を呈する。

遺物　出土していない。

時期　検出層位および重複関係から、10世紀末～12世紀中葉以降と推定される。

ＳＤ17溝跡

遺構（第33図、写真図版16）

［位置・検出状況］ＫⅣ77・87・97・98、ＬⅣ08・18・19・29・39・49・59・69・70グリッドに位置する。Ⅲ層下位からⅣ層上面でTo-aを切る黒褐色シルトの広がりとして検出された。

［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く北東側に下る。

［重複関係］なし。７号耕作痕跡が西側に隣接し、軸方向を同じくする。ＳＤ18が西側約10mに並行している。

［規模・平面形・断面形］北―南方向に直線的に延びており、両方向へさらに先へ続いていたものと推定される。確認した規模は、長さ52.4m、上幅108cm以下、検出面からの深さ40cm以下である。断面形は薬研状を呈する。

［埋土］色調から４層に分層される。２層にＶ層が混入するほかはすべてⅢ層起源の黒色～黒褐色シルトである。

遺物　出土していない。

時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以降）である。７号耕作痕跡の区画溝である可能性がある。

ＳＤ18溝跡

遺構（第32図、写真図版16）

［位置・検出状況］ＬⅣ47・48グリッドに位置する。Ⅴ層上面で黒褐色シルトの広がりとして検出された。

［微地形］ＳＤ10～17の存在する面から西側へ一段上がる途中の緩斜面上に位置している。傾斜は南西から北東に約７°で下る。

［重複関係］なし。

［規模・平面形・断面形］等高線にほぼ並行して北西～南東方向に直線的に延びる。本来はさらに両方向へ続いていたものと推定される。確認できた長さは6.18mで、上幅は44cm以下、検出面からの深さは10cm以下である。断面形は皿状を呈する。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体の単層である。自然堆積の様相を呈する。

遺物　出土していない。

時期　比定要素が少なく不明であるが、埋土状態からＳＤ10～17と大きく乖離しないものと思われる。

（７）柱穴状土坑群（第34図、第９表、写真図版17）

開口部径が約50cm以下で、明確な建物配置の判明しなかったものを柱穴状土坑として登録した。総数は26個で、ＪⅢ26グリッド、ＪⅢ78～ＫⅢ30グリッド付近、ＫⅣ93・ＬⅣ03・04グリッドの３地点

に集中する。これらの集中を「群」とし、前者から第１群、第２群、第３群とした。以下、この単位ごとに記述する。

第１群

遺構（第35・36図）

［検出状況］２個検出された。検出面はＰ１がＶ層中、Ｐ２がＳＩ01床面である。

［微地形］削平され旧地形を留めないが、東側に緩く傾斜していたものと思われる。現況はほぼ平坦である。

［重複関係］Ｐ１はＳＩ01のカマド煙出しと、Ｐ２は同燃焼部と重複し、これらを切る。。

［規模・平面形］いずれも開口部径30cm強の円形である。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体の単層である。自然堆積の様相を呈する。

遺物　Ｐ２の埋土１層下位から土師器が11.16ｇ出土した。細片のため不掲載である。

時期　重複関係から奈良時代以降といえるが、下限は不明である。

第２群

遺構（第35・36図）

［検出状況］20個検出された。検出面はⅣ層上面からＶ層上面である。

［微地形］約３°で緩く東側に下る。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］開口部の長軸が20～50cmの円形あるいは楕円形で、検出面からの深さは25～69cmである。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体の単層である。自然堆積の様相を呈する。

遺物（第55図、写真図版30）

［柱材］ＫⅢ30Ｐ２に柱材が残存していた（126）。上端は欠損しているが下部は劣化がほとんどなく、直径19.1cm、残存長83.9cmを測る。

時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以後）といえるが、下限は不明である。

第３群

遺構（第35図）

［検出状況］４個検出された。検出面はⅣ層上面からＶ層上面である。

［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く東側に下る。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］開口部の長軸が23～56cmの円形あるいは楕円形で、検出面からの深さは30～35cmである。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体の単層である。自然堆積の様相を呈する。

遺物　出土していない。

時期　検出層位および埋土状態から平安時代前期以降（To-a降下以降）といえるが、下限は不明である。

（8）　杭　（第34～36図、第10表、写真図版17）

ＫⅢ60グリッドのⅣ層To-a上面で杭を１本検出した。断面観察の結果、掘り方が確認されず、そのいっぽうで杭周囲の土層が下位にずれる打ち込み痕跡が認められたことから、杭と認定した。検出面は前記のとおりTo-a上面であったものの、杭上部に欠損痕が確認されることから、さらに上方へ延びていたはずであるが残存していない。打ち込み角度は垂直ではなく、約10°東側へ傾いている。杭の大きさは残存長71.2cm、直径約８cmで、樹種はムシカリである（Ⅵ章５節参照）。なお、検出本数が１本のみであるため、その用途・性格等は不明である。

（9）焼土遺構・炭化物集中・火葬関連遺構

野外調査時、焼土および炭化物に関連する遺構を「ＳＸ」として一括し連番で登録した。本群は状態により、単純な焼土遺構、炭化物のみ散在するいわゆる炭化物集中遺構、異地性の焼土・炭化物・骨片などが充填された浅い土坑（骨片・焼土・炭化物廃棄遺構）の３種に細分される。うち後者については分布が纏まる傾向が見られるほか、近接して現地性の焼土遺構が確認されており、これらは一連の遺構群といえるものである。同土坑出土遺物に対し、分析鑑定（炭化物に対するＡＭＳ法による放射性炭素年代測定、骨片同定）を実施した結果、これらは中世の火葬に関わる遺構（「火葬関連遺構」と呼称）と判明した。ここでは、焼土関連遺構という観点から野外調査時の大分類である「ＳＸ」のまま報告していくが、構築時期、性格ともに異なる可能性があるため上記の３種別を連番表記後に付記し、区別することとした。

なお、本報告ではあえて「火葬墓」と断定的に呼称することを避けて「火葬関連遺構」としたが、その理由は本遺構から出土する人骨量が全部ではなく一部であり、主体は別の場所に埋葬された可能性が高いことに起因する。あくまでも主体的・本来的な「墓」とは一線を画す、火葬行為に関わる付随遺構の１つと捉えたからである。

第９表　柱穴状土坑・杭計測値と土層註記

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
第1群	ＪⅢ26Ｐ１	第35図参照。	28.8	180.516
	ＪⅢ26Ｐ２	第35図参照。	22.4	180.445

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
第2群	ＪⅢ78Ｐ１	10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）上層1/3に10%・以下3%、炭化物粒1%。	39.8	178.039
	ＪⅢ78Ｐ２	10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）3%、炭化物粒3%。	51.8	177.875
	ＪⅢ78Ｐ３	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）5%、炭化物粒1%。	29.0	178.059
	ＪⅢ78Ｐ４	10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）3%、炭化物粒1%。	45.5	177.976
	ＪⅢ79Ｐ１	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）5%、炭化物粒3%。	31.7	177.973
	ＪⅢ87Ｐ１	10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）5%、破砕礫（～5mm）5%、炭化物粒3%。	27.0	178.211
	ＪⅢ87Ｐ２	10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）1%、破砕礫（～5mm）5%、炭化物粒3%。	31.4	178.168
	ＪⅢ88Ｐ１	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）3%、炭化物粒3%。	40.4	177.691
	ＪⅢ98Ｐ１	10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）5%、炭化物粒1%。埋土中央に15cmの礫。	26.0	178.208
	ＪⅢ98Ｐ２	10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）2%、炭化物粒1%。	36.8	177.859
	ＪⅣ71Ｐ１	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）3%、炭化物粒1%。	71.4	176.692
	ＫⅢ30Ｐ１	10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）3%、炭化物粒1%。	34.4	177.053
	ＫⅢ30Ｐ２	第35図参照。	68.6	176.302
	ＫⅣ01Ｐ１	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）5%、炭化物粒3%。	14.3	176.991
	ＫⅣ01Ｐ２	第35図参照。	57.8	176.597
	ＫⅣ01Ｐ３	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）5%、炭化物粒3%。下半に砂混。	52.0	176.724
	ＫⅣ01Ｐ４	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒3%。下半に砂混。	24.6	176.990
	ＫⅣ01Ｐ５	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）2%、炭化物粒3%。下半に砂混。	45.1	176.733
	ＫⅣ11Ｐ１	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒3%。下半に砂混。	56.4	176.613
	ＫⅣ11Ｐ２	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒3%。下半に砂混。	55.0	176.748

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
第3群	ＫⅣ93Ｐ１	10YR3/2黒褐色シルトと10YR2/1黒色シルトの混土　粘性中・しまり中　埋め戻し土。	34.5	177.464
	ＬⅣ03Ｐ１	10YR3/2黒褐色シルト　粘性中・しまり中。	30.2	177.637
	ＬⅣ03Ｐ２	10YR3/2黒褐色シルト　粘性中・しまり中。	34.9	177.557
	ＬⅣ04Ｐ１	10YR3/2黒褐色シルト　粘性中・しまり中。	34.5	177.504

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
杭	ＫⅢ60杭	第35図参照。	83.8	177.376

ＳＸ01焼土遺構

遺構（第37図、写真図版18）

［位置・検出状況］ＪⅢ47グリッドに位置する。県教委生涯学習文化課の試掘により確認されていたもので、Ⅲ層下位～Ⅴ層上位で検出された。遺構北側が消失しているが、これは生文課トレンチによるものである。また、焼土の南東側に異地性の焼土ブロックや被熱礫、土器の集中が存在する。

［微地形］北西から南東に約５～７°で下る緩斜面である。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］残存最長部は108cmを測る。平面形は不明である。燃焼による変色層の厚さは24cmである。

遺物（第51・52図、写真図版28）

焼土に直接伴うものはなく、すべて南東側から散在状態で出土したものである。出土層位はⅢ層下位である。

［縄文土器］5.61ｇ出土した。細片のため不掲載である。

［土師器］1,139.11ｇ出土し、５点・568.46ｇを掲載した（103～107）。

時期　Ⅳ層が介在しないためテフラとの前後関係は不明であるが、層位的にはその降下時期と大きく変わらないものと思われる。

ＳＸ02焼土遺構（火葬関連）

遺構（第38図）

［位置・検出状況］ＫⅢ10グリッド北部に位置する。Ⅴ層上面で検出された。焼土と炭化物集中が東西に隣接する。

［微地形］約２～３°で緩く東側に下る。

［重複関係］なし。ＳＸ03・04と近接する。

［規模・平面形］焼土の規模は25×15cmで、不整形を呈する。焼成が弱く厚さはごく薄い。炭化物集中の範囲は28×23cmで、不整形を呈する。堆積はごく薄く、掘り込みは確認されない。

遺物　出土していない。

時期　検出層位および遺構状態が類似し近接するＳＸ05と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

ＳＸ03焼土遺構（火葬関連）

遺構（第38図）

［位置・検出状況］ＫⅢ10グリッド中央に位置する。Ⅴ層上面で検出された。焼土と炭化物集中が南北に隣接する。

［微地形］約２～３°で緩く東側に下る。

［重複関係］なし。ＳＸ02・04と近接する。

［規模・平面形］焼土の規模は22×17cmで、楕円形を呈する。焼成が弱く厚さはごく薄い。炭化物集中の範囲は27×18cmで、不整形を呈する。堆積はごく薄く、掘り込みは確認されない。

遺物　出土していない。

時期　検出層位および遺構状態が類似し近接するＳＸ05と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

ＳＸ04炭化物集中（火葬関連）

遺構（第38図）

［位置・検出状況］ＫⅢ10グリッド南東部に位置する。Ⅴ層上面で検出された。

［微地形］約２～３°で緩く東側に下る。

［重複関係］なし。ＳＸ02・03と近接する。

［規模・平面形］38×22cmの楕円形である。堆積はごく薄く、掘り込みは確認されない。

遺物　出土していない。

時期　**時期**　検出層位および遺構状態が類似し近接するＳＸ05と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

ＳＸ05骨片・炭化物廃棄遺構（火葬関連）

遺構（第38図、写真図版18）

［位置・検出状況］ＪⅣ81グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出された。小形の浅い土坑に焼土、炭化物、骨片などを廃棄した状態である。

［微地形］約２～３°で緩く東側に下る。

［重複関係］なし。ＳＸ06と近接する。

［規模・平面形］土坑の規模は56×51cmのほぼ円形で、断面は皿状を呈する。検出面からの深さは最深部で６cmを測る。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体で、炭化物が多量に混入する。骨片も全体的に散在する。

遺物　骨片38.92ｇと炭化種子・実15点が出土している。いずれもフローテーションを実施し採取したものである。なお、両者について分析鑑定を行い、前者は約800℃以上で焼かれた人骨（肋骨や四肢骨含む）、後者はイネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、シロザ近似種、エノキグサ、オニグルミ、トチノキと同定された（Ⅵ章４・６節参照）。

時期　検出層位からは平安時代前期以降（To-a降下以降）といえる。埋土より採取した炭化物に対し、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施しており、これにより得られた年代値は^{14}Ｃ年代で430±40yrBP、較正暦年代は83.9％の信頼度で1410ＡＤ～1530ＡＤ、11.5％の信頼度で1570ＡＤ～1630ＡＤの可能性があるとしている（Ⅵ章１節参照）。この結果から、中世後半（15～16世紀前半）に所属する可能性が高い。

ＳＸ06骨片・炭化物廃棄遺構（火葬関連）

遺構（第38図、写真図版18）

［位置・検出状況］ＪⅢ80グリッドに位置する。Ⅳ層上面で検出された。小形の浅い土坑に炭化物、焼土、骨片などを廃棄した状態である。

［微地形］約２～３°で緩く東側に下る。

［重複関係］なし。ＳＸ05と近接する。

［規模・平面形］土坑の規模は70×43cmの楕円形で、断面は皿状を呈する。検出面からの深さは最深部で５cmを測る。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体で、炭化物が多量に、焼土粒が局所的に混入する。

遺物　フローテーションを実施した結果、骨片が微量検出された。

時期　検出層位および遺構状態が類似し近接するＳＸ05と同時期のものである可能性が極めて高く、

中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

ＳＸ07焼土・炭化物廃棄遺構

遺構（第38図、写真図版18）

［位置・検出状況］ＪⅢ30グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出された。小形の浅い土坑に焼土、炭化物などを廃棄した状態である。

［微地形］ほぼ平坦だが約１～２°でごく緩く南東側に下る。

［重複関係］なし。１号耕作痕跡と近接する。

［規模・平面形］土坑の規模は49×36cmの楕円形で、断面は皿状を呈する。検出面からの深さは最深部で10cmを測る。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体で、ブロック・粒状の焼土が多量に混入する。

遺物（第52図、写真図版28）

［土師器］本遺構の北東1.1ｍから土師器の球胴甕（Ｐ１・108）と甕口縁部片（Ｐ２・109）が出土した（698.27ｇ）。いずれも掲載している。また、その北東側からカマドの芯材と思われる被熱した凝灰岩が出土した。検出面から本遺構と同時期のものと推定される。

時期　遺物から奈良時代前～中葉頃と推定される。

ＳＸ08炭化物集中遺構

遺構（第38図、写真図版19）

［位置・検出状況］ⅠⅢ98グリッドに位置する。Ⅰｂ層直下のⅤ層中で検出された。

［微地形］削平され原形を留めない。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］200×173cmの不整形で、間に空白地帯を２箇所挟む。堆積はごく薄く、掘り込みは確認されない。

遺物　出土していない。

時期　不明である。

ＳＸ09炭化物集中遺構

遺構（第38図、写真図版19）

［位置・検出状況］ＬⅣ82グリッドに位置する。Ⅶ層上面で検出された。

［微地形］削平され原形を留めない。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］220×217cmの不整形である。皿状を呈するが、掘り込みは確認されない。

［埋土］Ⅵ層起源の黒褐～暗褐色シルト主体で、炭化物粒が混入する。焼土は確認されない。堆積の厚さは最深部で17cmである。

遺物　出土していない。

時期　層位的に縄文時代と推定されるが、詳細については不明である。

ＳＸ10焼土遺構（火葬関連）

遺構（第39図、写真図版19）

［位置・検出状況］ＬⅢ50グリッドに位置する。Ⅲ層下位～Ⅴ層上面で検出された。付近には所々にTo-aの堆積が確認され、これを切る。
［微地形］約５～６°で東側へ下る。
［重複関係］なし。ＳＸ11・12・13と近接する。
［規模・平面形］後世（現代ではない）の攪乱を受け、原形を留めていない。残存規模は105×46cmの楕円形である。燃焼による変色層の厚さは13cmである。
遺物　出土していない。
時期　検出層位および遺構状態が類似し近接するＳＸ12と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

ＳＸ11焼土遺構（火葬関連）
遺構（第39図、写真図版19）
［位置・検出状況］ＬⅢ39グリッドに位置する。Ⅲ層下位～Ⅴ層上面で検出された。付近には所々にTo-aの堆積が確認され、これを切る。
［微地形］約５～６°で東側へ下る。
［重複関係］なし。ＳＸ10・12・13と近接する。
［規模・平面形］北側が後世（現代ではない）の攪乱を受け、原形を留めていない。残存規模は103×93cmの楕円形である。　燃焼による変色層の厚さは14cmである。
遺物　出土していない。
時期　検出層位および遺構状態が類似し近接するＳＸ12と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

ＳＸ12骨片・炭化物廃棄遺構（火葬関連）
遺構（第39図、写真図版19）
［位置・検出状況］ＬⅢ40・ＬⅣ31グリッドに位置する。Ⅲ層下位～Ⅴ層上面で検出された。付近には所々にTo-aの堆積が確認され、これを切る。小形の浅い土坑に炭化物、骨片などを廃棄した状態である。
［微地形］約５～６°で東側へ下る。
［重複関係］なし。ＳＸ10・11・13と近接する。
［規模・平面形］土坑の規模は90×50cmの楕円形で、断面は台形状を呈する。検出面からの深さは最深部で19cmを測る。また、底面に浅い凹みが４箇所確認された。掘削痕と思われる。
［埋土］Ⅲ層起源の黒色シルト主体で、炭化物が多量に混入する。骨片も全体的に散在する。
遺物　フローテーションを実施した結果、骨片4.11ｇが検出された。
時期　検出層位からは平安時代前期以降（To-a降下以降）といえる。埋土より採取した炭化物に対し、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を実施しており、これにより得られた年代値は^{14}Ｃ年代で390±30yrBP、較正暦年代は69.2％の信頼度で1440ＡＤ～1530ＡＤ、26.2％の信頼度で1550ＡＤ～1640ＡＤの可能性があるとしている（Ⅵ章１節参照）。この結果から、中世後半（15～16世紀前半）に帰属する可能性が高い。なお、この結果はＳＸ05採取試料の数値とも極めて近いもので、同時期の所産といえる。

ＳＸ13焼土遺構（火葬関連）

遺構（第39図、写真図版20）

［位置・検出状況］ＬⅢ40グリッドに位置する。Ⅲ層下位～Ⅴ層上面で検出された。付近には所々にTo-aの堆積が確認され、これを切る。

［微地形］約５～６°で東側へ下る。

［重複関係］なし。ＳＸ10・11・12と近接する。

［規模・平面形］後世（現代ではない）の攪乱を受け、原形を留めていない。残存規模は121×64cmの長楕円形である。燃焼による変色層の厚さは７cmである。

遺物　出土していない。

時期　検出層位および遺構状態が類似し近接するＳＸ12と同時期のものである可能性が極めて高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

ＳＸ14炭化物廃棄遺構

遺構（第40図、写真図版20）

［位置・検出状況］ＭⅣ44グリッドに位置する。Ⅰ層直下のⅥ層中で検出された。この周辺は耕地造成時の地形改変が激しく、Ⅱ～Ⅴ層は残存しない。不整形の土坑に炭化物などを廃棄した状態である。

［微地形］東へ下る緩斜面だが、詳細は不明である。

［重複関係］なし。

［規模・平面形］検出層位から推定して、上部が相当失われているものと思われる。土坑の規模は242×77cmの長楕円形で、南西端が浅く張り出す。底面は狭く、断面は椀状を呈する。検出面からの深さは最深部で26cmを測る。

［埋土］To-a、炭化物、黒褐色シルトで構成される。最上位（１層）には水成堆積のTo-a層が確認され、その下層にテフラのブロック堆積層（６層）、炭化物ブロックの多量混入層（７層）が介在し、さらに下層にふたたびTo-aの水成層（８層）が堆積する。６・７層は人為堆積である。成層するTo-aは流水による上部からの流れ込みによるものと推定される。

遺物　埋土から縄文土器が7.40ｇ出土した。細片のため不掲載である。

時期　遺構の構築は、埋土状態から平安時代前期頃（To-a降下直前）といえる。To-aが降下・堆積した直後、炭化物を伴う何らかの行為がなされ、さほど時間差なくふたたびTo-aが流入したものと推定される。

ＳＸ15焼土廃棄遺構

遺構（第40図、写真図版20）

［位置・検出状況］ＭＶ02グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出された。不整形の土坑に焼土、炭化物などを廃棄した状態である。

［微地形］約４°で東側へ下る。

［重複関係］なし。ＳＤ08と近接する。

［規模・平面形］土坑の規模は190×53cmの不整形で、断面は台形状を呈する。検出面からの深さは最深部で77cmを測る。

［埋土］Ⅲ層起源の黒褐色シルト主体で、１層に焼土が多量に混入する。

遺物　埋土中から頁岩６（5.69ｇ）、赤色頁岩（25.85ｇ）、チャート１（6.62ｇ）の剥片が出土した。

不掲載である。

時期　検出面から古代の可能性があるが、詳細は不明である。

ＳＸ16焼土・炭化物廃棄遺構（火葬関連）

遺構（第40図、写真図版20）

［位置・検出状況］ＬⅣ42グリッドに位置する。Ⅴ層上面で検出された。不整形の土坑に焼土、炭化物などを廃棄した状態である。

［微地形］約３°で東側へ下る。

［重複関係］なし。

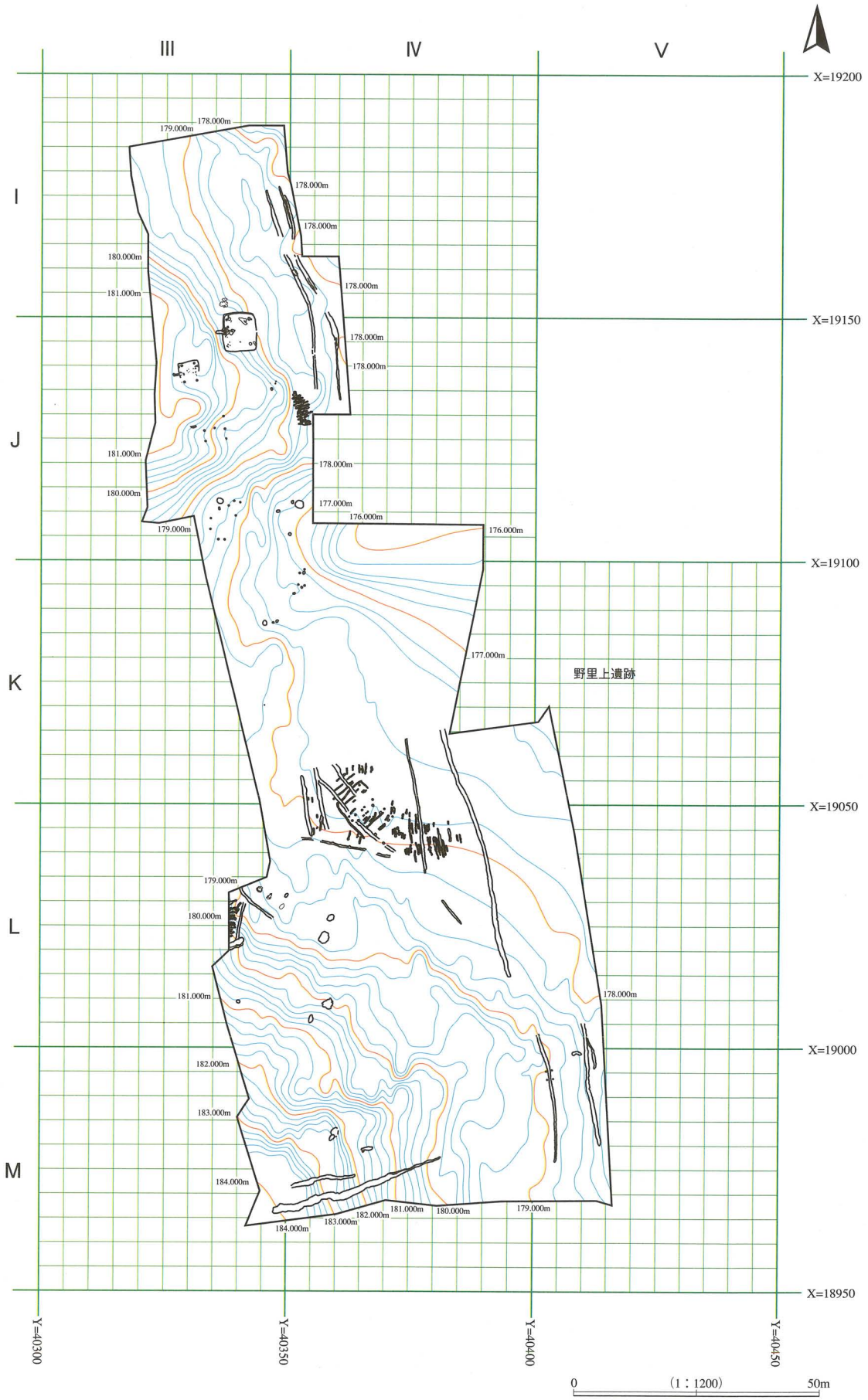
［規模・平面形］土坑の規模は157×111cmの楕円形で、底面が狭く、断面形は漏斗状に近い。検出面からの深さは最深部で85cmを測る。

［埋土］４層に分層される。Ⅲ層起源の黒色～黒褐色シルト主体で、各層に焼土粒や炭化物が混入する。２層は焼土が大半を占め、Ⅴ層あるいはⅦ層が混在する。全層とも人為堆積である。

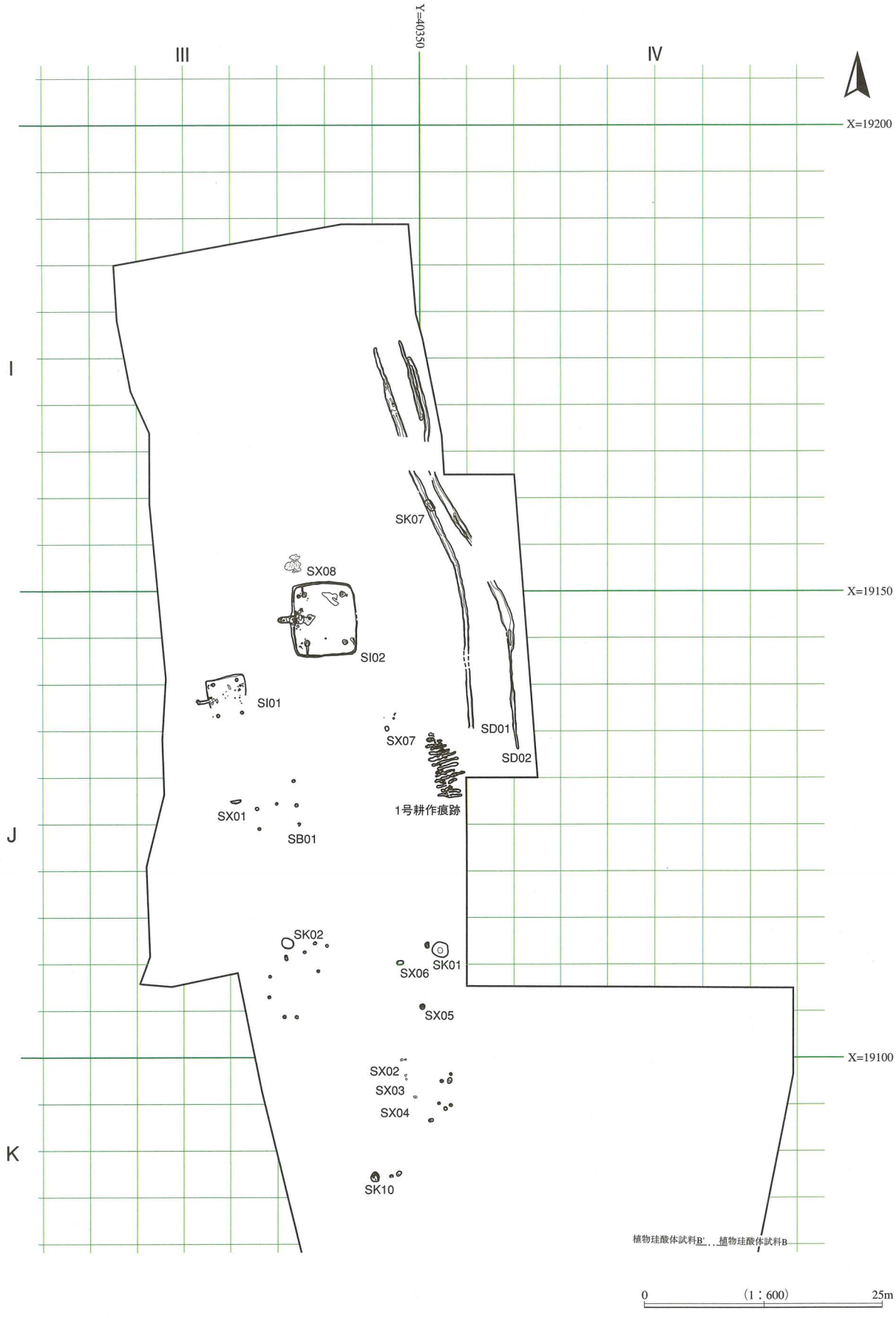
遺物　埋土中から頁岩３の剥片が6.16ｇ出土した。不掲載である。

時期　検出層位および遺構状態が類似し近接するＳＸ12と同時期のものである可能性が高く、中世後半（15～16世紀前半）の所産と推定される。

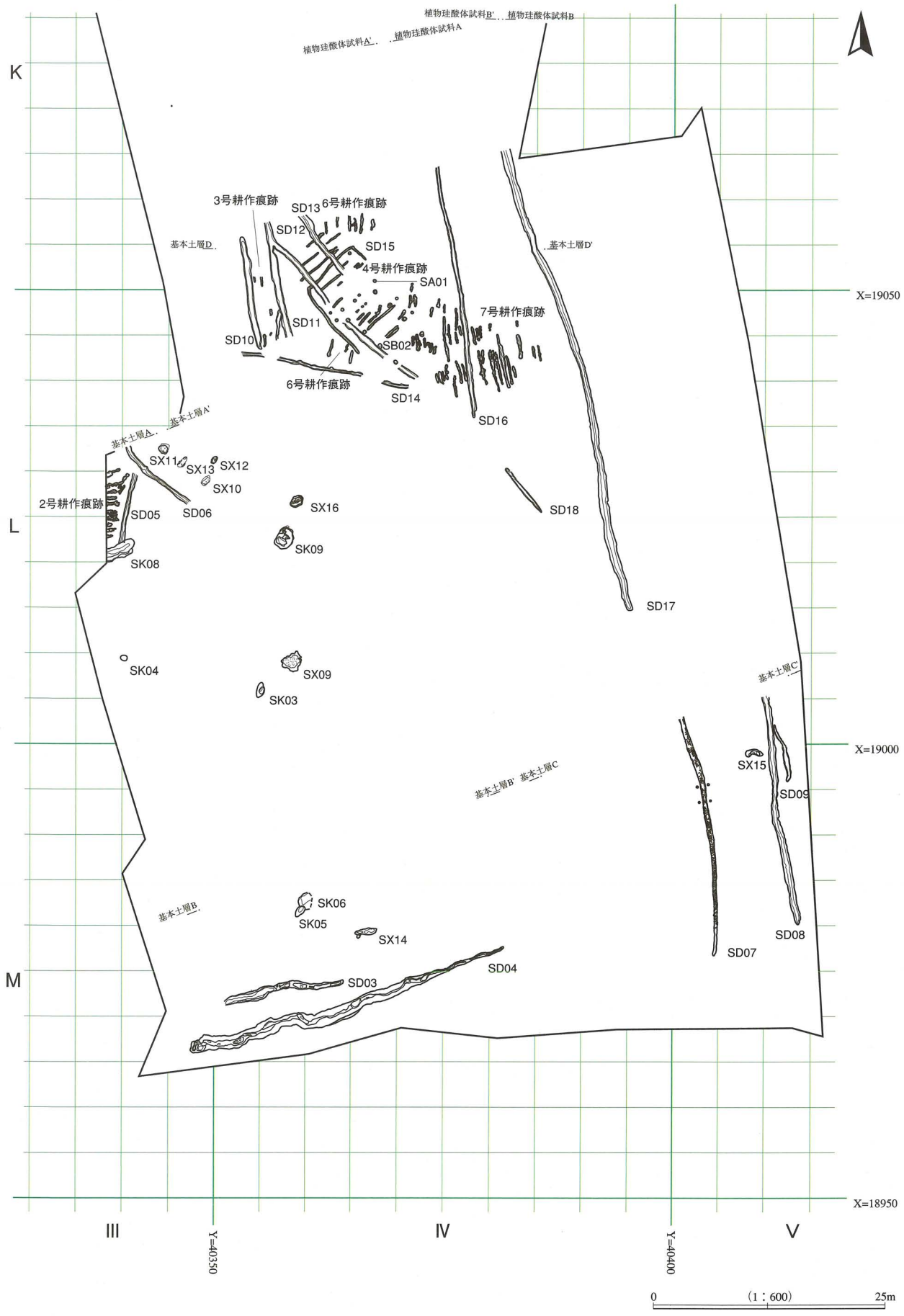
（丸山）



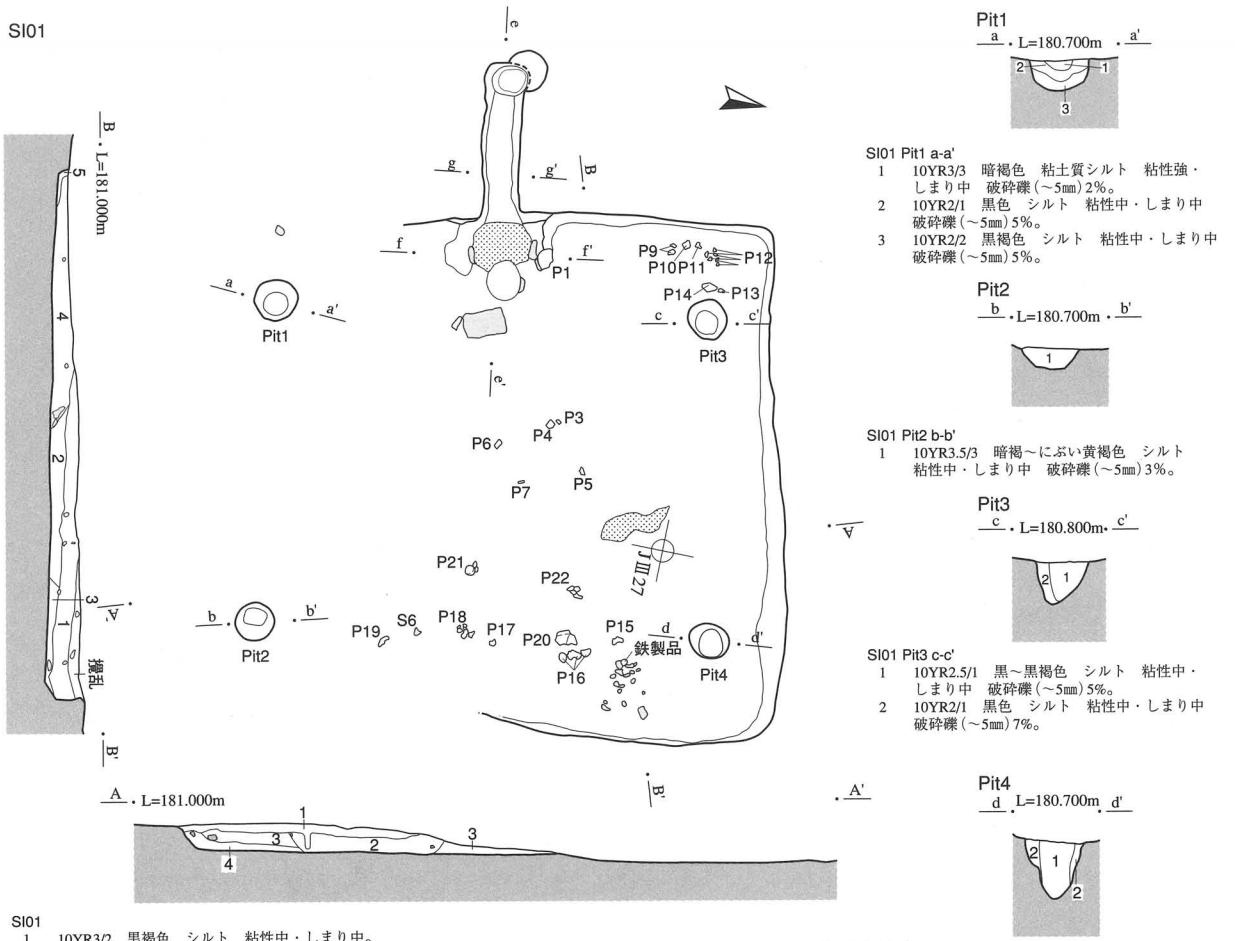
第９図　野里上遺跡遺構配置とⅣ層面の標高



第10図　野里上遺跡北側遺構配置図



第11図　野里上遺跡南側遺構配置図



SI01 Pit1 a-a'
1　10YR3/3　暗褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　破砕礫(～5㎜)2%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)5%。
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)5%。

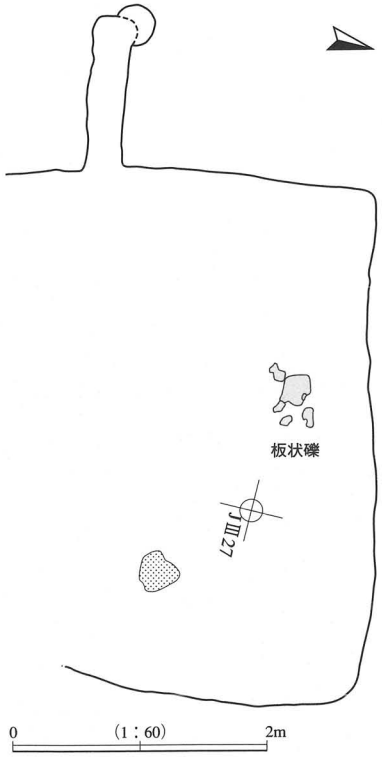
SI01 Pit2 b-b'
1　10YR3.5/3　暗褐～にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)3%。

SI01 Pit3 c-c'
1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)5%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)7%。

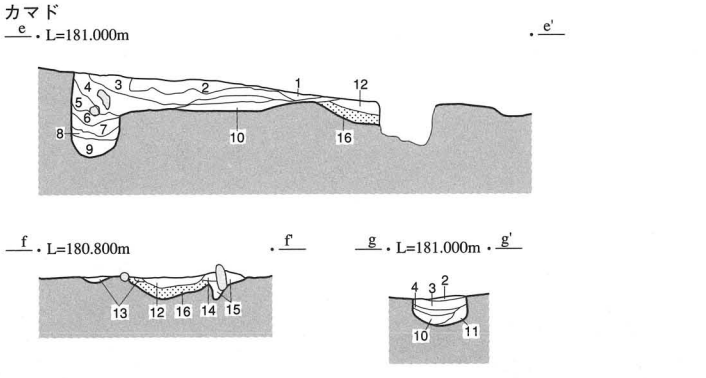
SI01
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
2　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)3%、炭化物粒1%。所々に焼土ブロック有。
3　10YR2/1.5　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～1cm)5%。
4　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～1cm)7%。
5　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～1cm)7%。

SI01 Pit4 d-d'
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　柱痕。
2　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)2%。

埋土中検出状況

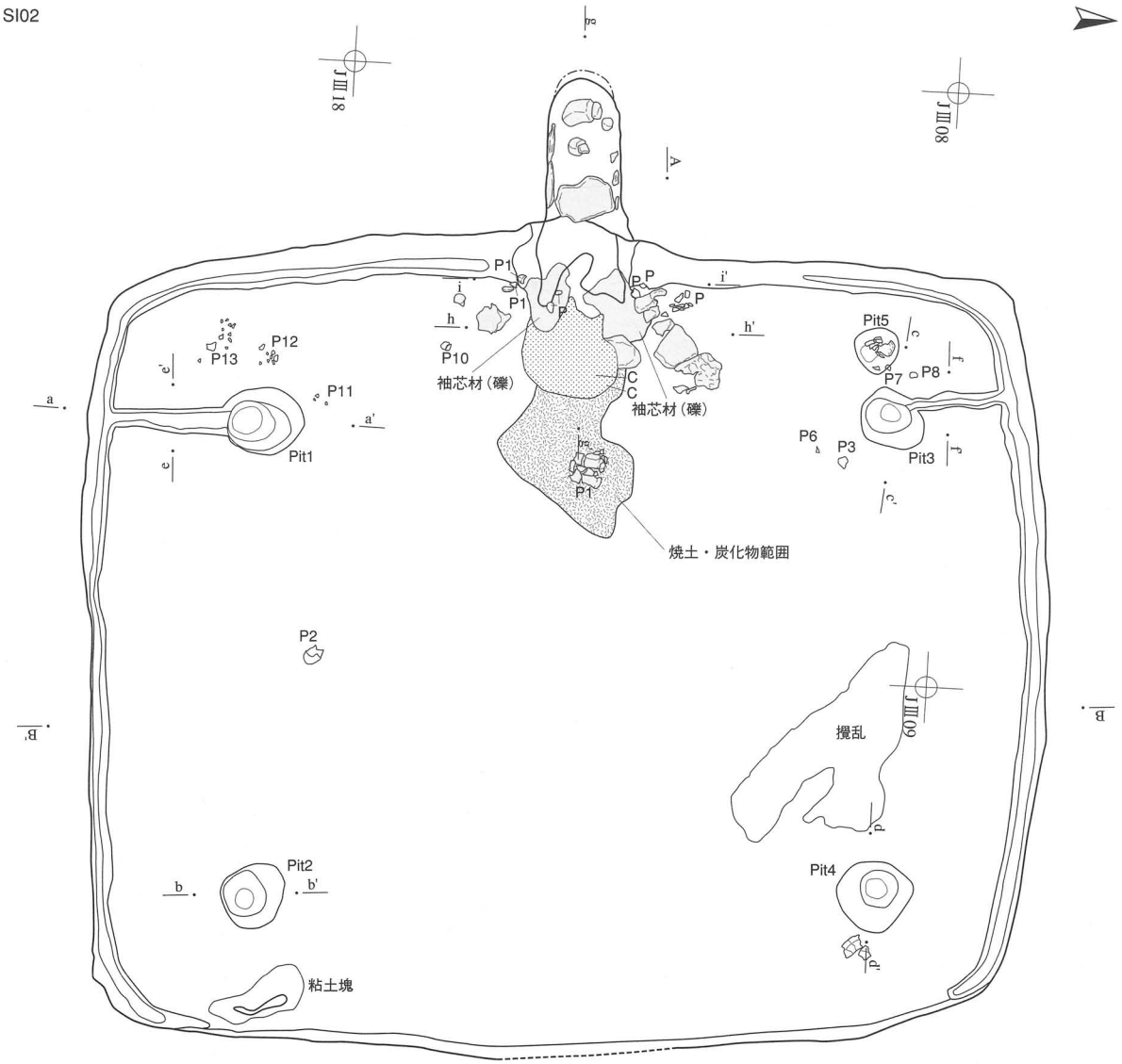


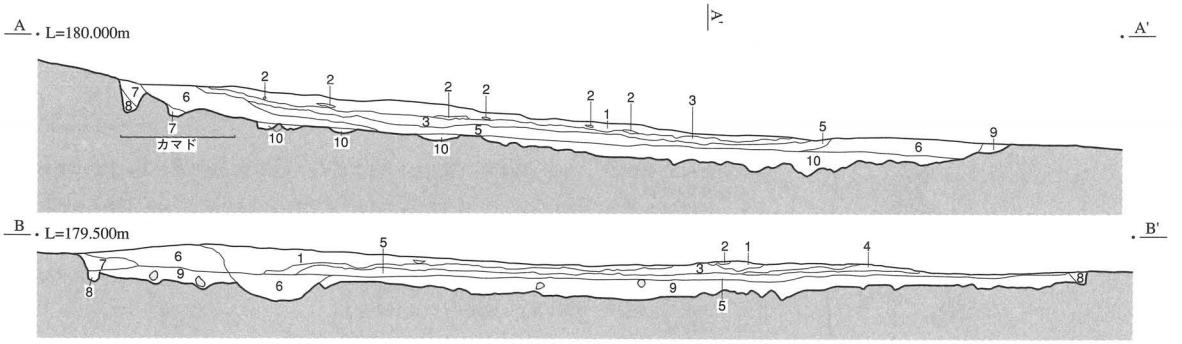
カマド



SI01 カマド e-e', f-f', g-g'
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土ブロック(～3㎜)5%、破砕礫(～1cm)7%、炭化物粒1%。カマド崩落土?。
2　10YR2.5/3　黒褐～暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～1cm　5㎜中心)10%。煙道上部構築土。
3　2層と4層の混土　粘性中・しまり弱　炭化物粒3%、礫(～5cm)5%、破砕礫(～1cm)5%。
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　炭化物粒3%、礫(～5cm)5%。
5　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　礫微量、破砕礫(～1cm)5%、炭化物粒5%。
6　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　炭化物(～3cm)30%、礫(～5cm)50%。人為的な埋め戻し。
7　10YR3/2　黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり弱。
8　10YR3/1　黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり弱。
9　7層と同じ。
10　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　破砕礫(～5㎜)2%。
11　10層と10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)3%。
12　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり弱　焼土粒7%、炭化物粒3%。天井崩落土と思われる。
13　10YR4/4　褐色　シルト　粘性中・しまり中　中央側一部被熱。袖構築土。
14　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)5%。中央側一部被熱。袖構築土。
15　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)5%。芯材埋設土。
16　2.5YR3/4　暗赤褐色　シルト　粘性弱・しまり中　焼土。

第12図　ＳＩ01





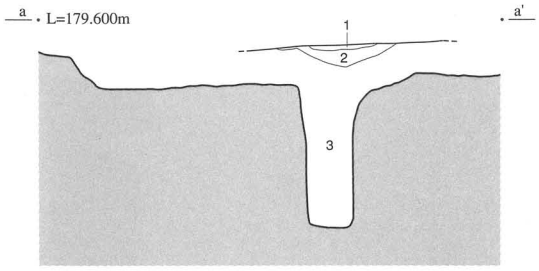
SI02

1　10YR3/2.5　黒褐～暗褐色　シルト　粘性中・しまり中。
2　2.5Y6/6　明黄褐色　テフラ　粘性なし・しまり中　B-Tm？。
3　2.5Y7/2　灰黄色　テフラ　粘性なし・しまり強　To-a。下位数mmは１次、他は水成再堆積。
4　10YR3/2.5　黒褐～暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）3%。
5　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。
6　10YR２/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～2cm）10%。
7　10YR３/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～2cm）10%。
8　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）5%。基本層序Ⅵ層主体。壁崩落土。
9　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）3%。
10　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土（8:2）　粘性中・しまり強　基本層序Ⅵ層とⅦ層。

0　（1：60）　2m

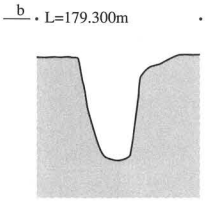
第13図　ＳＩ02（１）

Pit1

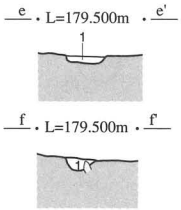


SI02 Pit1 a-a'
1　10YR3.5/2　黒褐～灰黄褐色　シルト 粘性中・しまり中　To-aブロック10%。
2　2.5Y6.5/2　灰黄色 テフラ　粘性なし・しまり強　To-a。
3　2.5Y3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）1%。

Pit2

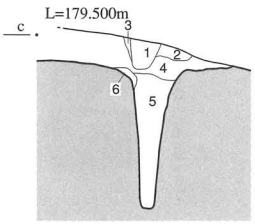


間仕切溝



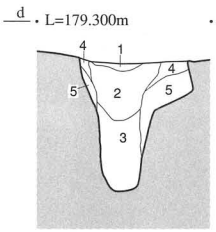
SI02 間仕切溝
1　10YR3/2黒褐色シルトと10YR2.5/1黒～黒褐色シルトの混土　粘性強・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。

Pit3



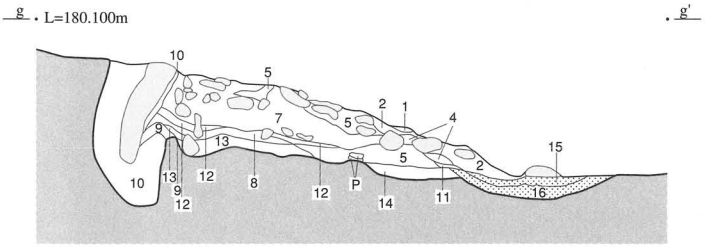
SI02 Pit3 c-c'
1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　柱痕。
2　2.5Y6/2　灰黄色　テフラ　粘性なし・しまり強　To-a。
3　10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）1%、To-a粒3%。柱外周のクラック。
4　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%、住居埋土5層。
5　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　柱痕。
6　10YR4/3にぶい黄褐色シルトと10YR2/1黒色シルトの混土　粘性中・しまり中　Ⅵ層の混土。

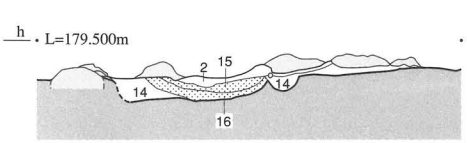
Pit4

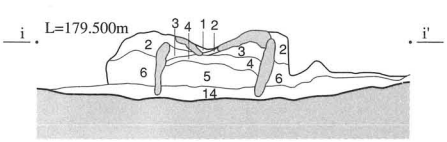


SI02 Pit4 d-d'
1　10YR7/1　灰色　テフラ　粘性なし・しまり強　To-a。
2　10YR3.5/1　黒褐～褐灰色　粘土　粘性強・しまり中　破砕礫（～1cm）3%、炭化物粒2%。
3　10YR3.5/1　黒褐～褐灰色　粘土　粘性強・しまり極弱い　破砕礫（～1cm）3%、炭化物粒2%。
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）5%。
5　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）5%。

カマド



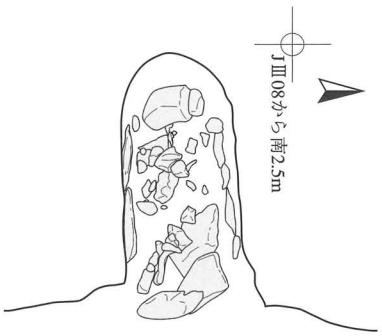




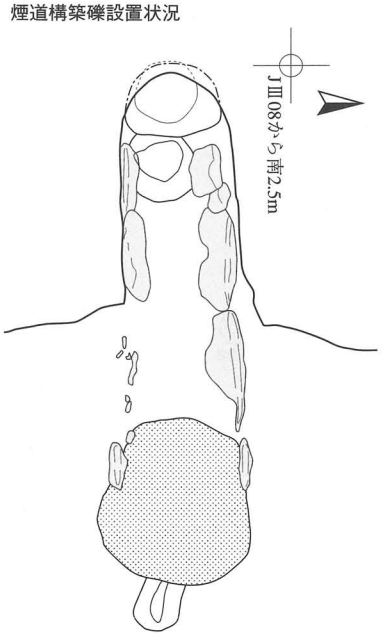
0　（1：40）　2m

SI02 カマド g-g', h-h', i-i'
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　粘土ブロック（～3㎜）5%、破砕礫（～1cm）7%、炭化物粒1%。カマド崩落土？。
2　10YR2.5/3　黒褐～暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm　5㎜中心）10%。煙道上部構築土。
3　2層と4層の混土　粘性中・しまり弱　炭化物粒3%、礫（～5cm）5%、破砕礫（～1cm）5%。
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　炭化物粒3%、礫（～5cm）5%。
5　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　礫微量、破砕礫（～1cm）5%、炭化物粒5%。
6　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　炭化物（～3cm）30%、礫（～5cm）50%。人為的な埋め戻し。
7　10YR3/2　黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり弱。
8　10YR3/1　黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり弱。
9　7層と同じ
10　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　破砕礫（～5㎜）2%。
11　10層と10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）3%。
12　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり弱　焼土粒7%、炭化物粒3%、天井崩落土と思われる。
13　10YR4/4　褐色　シルト　粘性中・しまり中　中央側一部被熱。袖構築土。
14　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土（8:2）粘性中・しまり強　基本層序Ⅵ層とⅦ層。貼り床。
15　2.5YR4/6　赤褐色　シルト　粘性中・しまり強。
16　2.5YR3/4　暗赤褐色　シルト　粘性中・しまり中　弱い焼土。

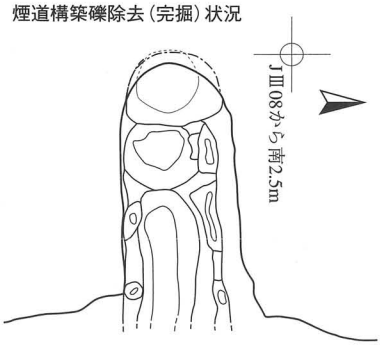
カマド　礫廃棄状況



煙道構築礫設置状況

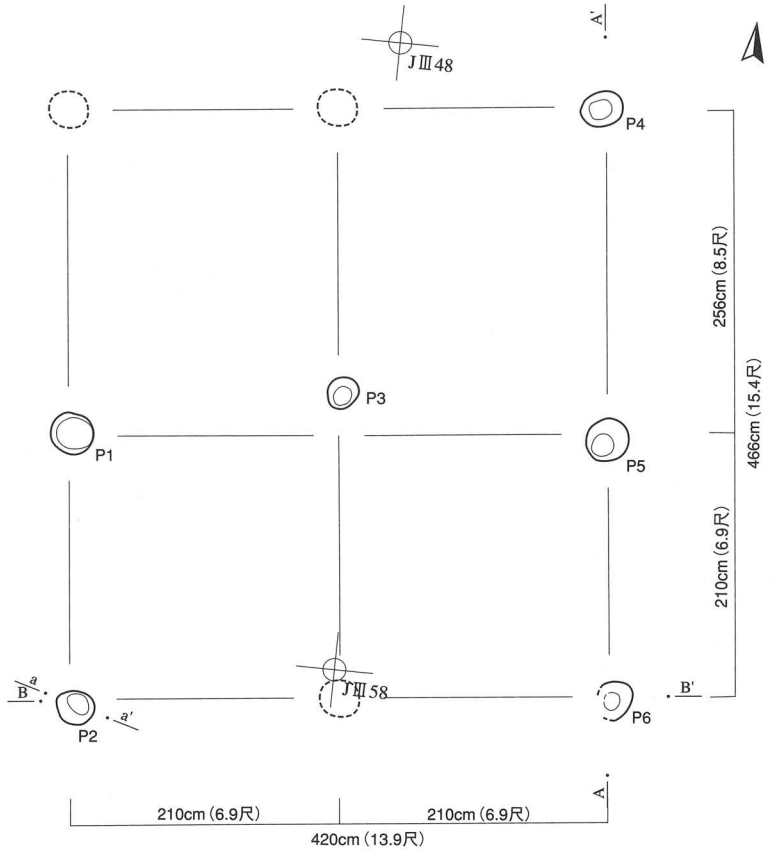


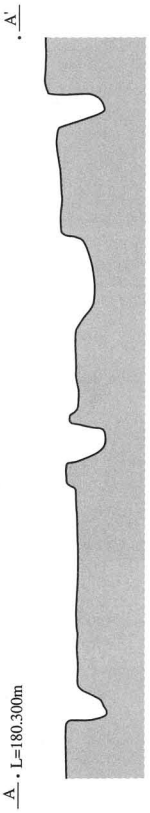
煙道構築礫除去（完掘）状況

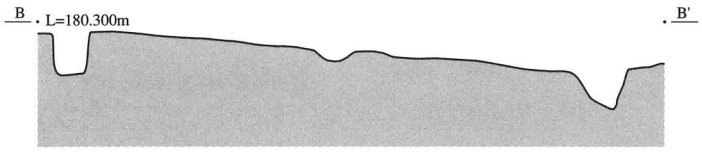


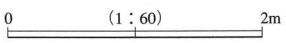
第14図　ＳＩ02（２）

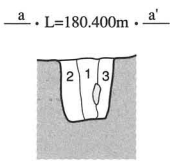
SB01





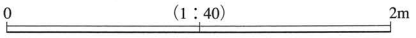




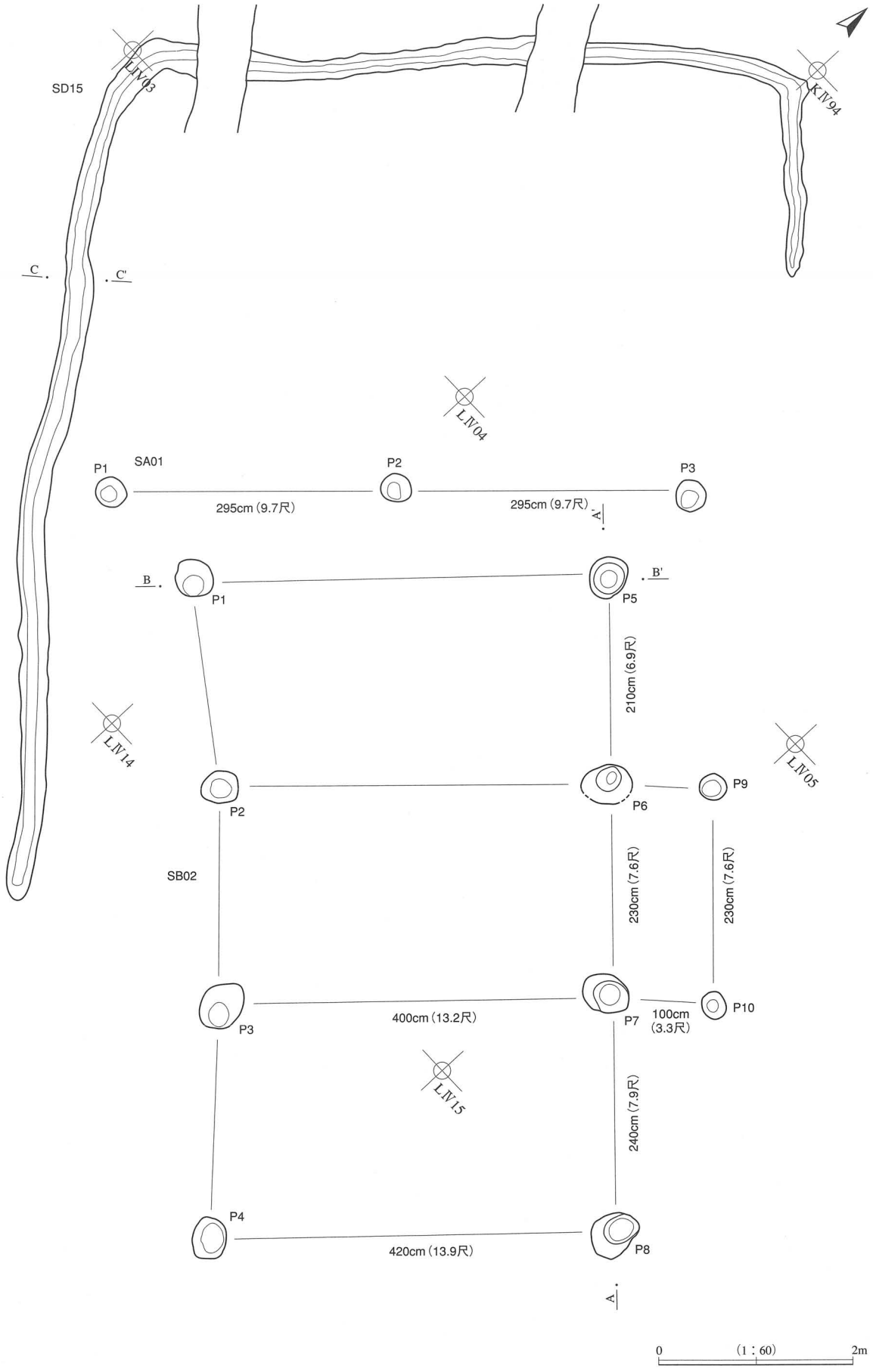


P2

1	10YR2/1	黒色	シルト	粘性中・しまり弱　破砕礫（～5㎜）3%、炭化物粒（～2㎜）3%。柱痕。
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）3%、ロームブロック（～1cm）5%。
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中　炭化物粒（～3㎜）1%。

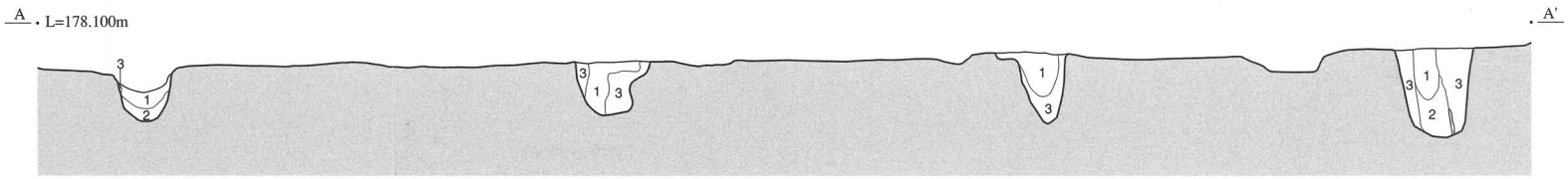


第15図　ＳＢ01

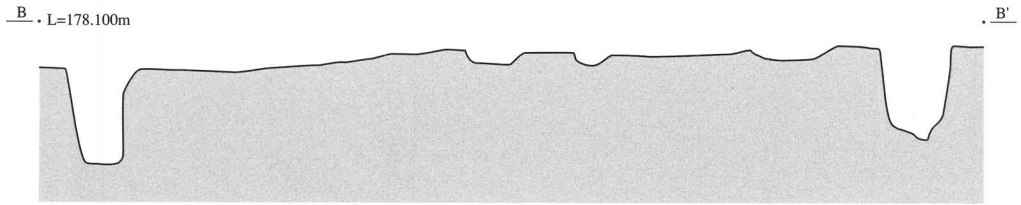


第16図　ＳＢ02、ＳＡ01、ＳＤ15（１）

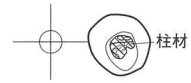
SB02



SB2 P5～8
1　10YR2/1　黒色　シルト・粘性中・しまり弱　To-aブロック1%。
2　10YR3/1　黒褐色　砂質シルト　粘性中・しまり弱。
3　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトと10YR2/1黒色シルトの混土(7:3)　粘性中・しまり中　破砕礫(～1㎝)5%、To-aブロック3%。

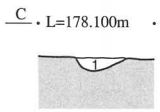


SA01 P3 柱材出土状況



KⅣ94から
東2m、南4m

SD15

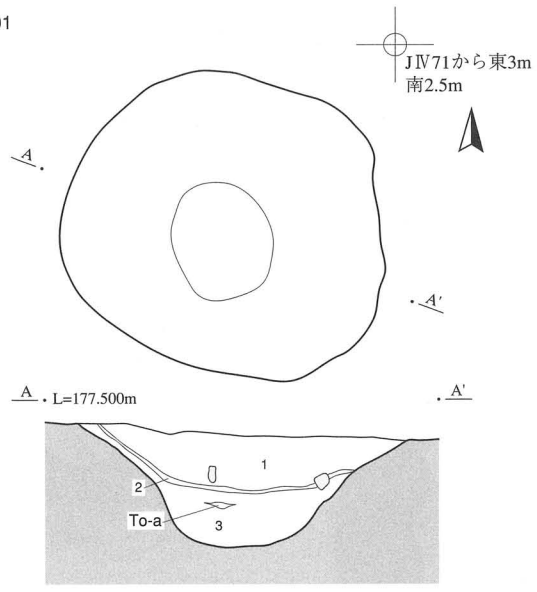


SD15
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　黒褐色シルトブロックが下位に5%。

0　(1：40)　2m

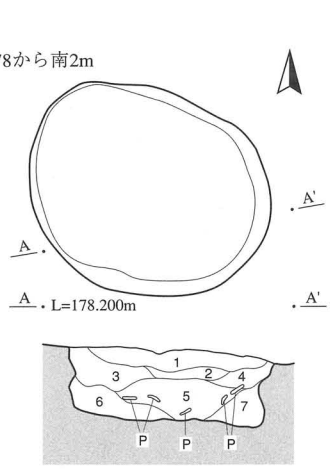
第17図　ＳＢ02、ＳＡ01、ＳＤ15（２）

SK01



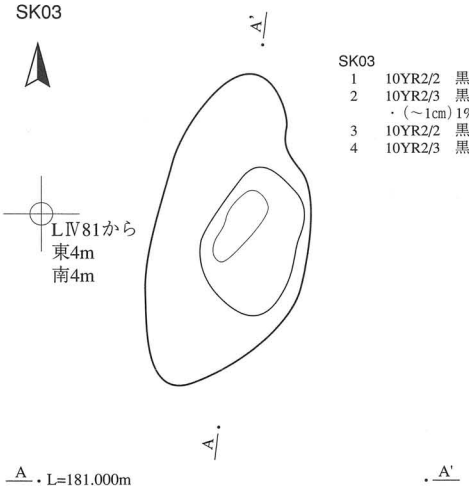
SK01
1　2.5Y2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）2%。
2　2.5Y2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒50%。
3　N2/0　黒色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）2%、To-aブロック少量。

SK02



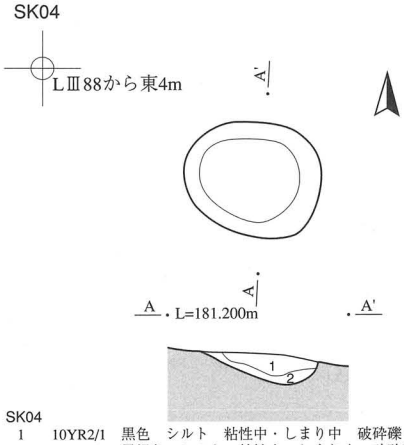
SK02
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）3%。
2　2.5Y2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）極小量。
3　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～2㎜）5%。
4　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～2㎜）3%、ロームブロック（～3cm）5%。
5　5YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）3%、炭化物粒（～1㎜）小量。
6　5YR2/2　オリーブ黒色　シルト　粘性やや強・しまり中　ロームブロック（～3cm）20%。
7　2.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。

SK03



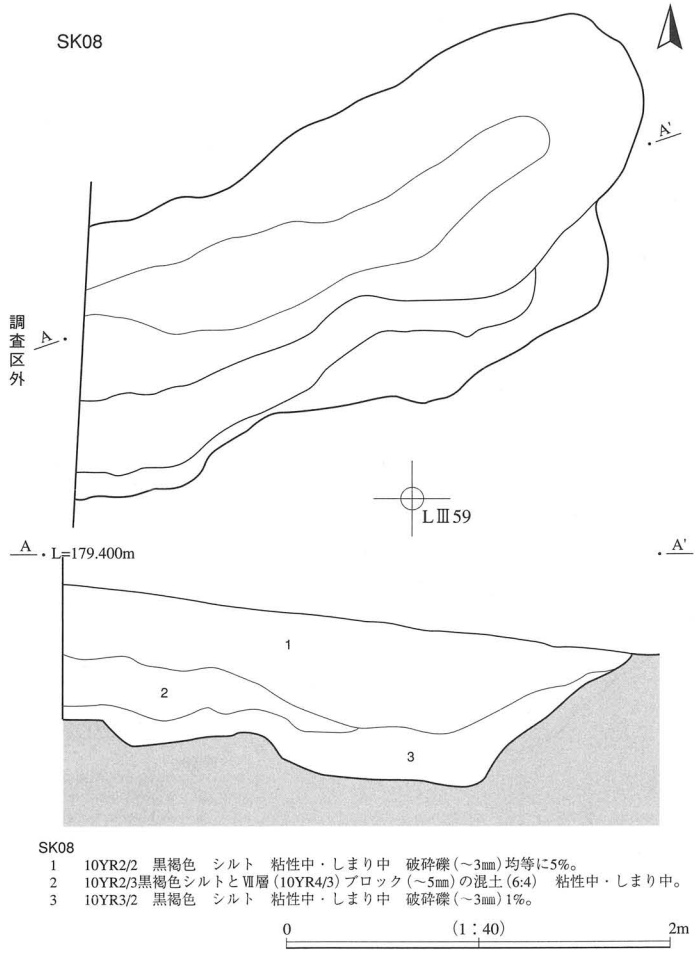
SK03
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）1%。
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%・（～1cm）1%、炭化物粒（～3㎜）少量。
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）1%。
4　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）3%。

SK04



SK04
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）1%。
2　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫極少量。

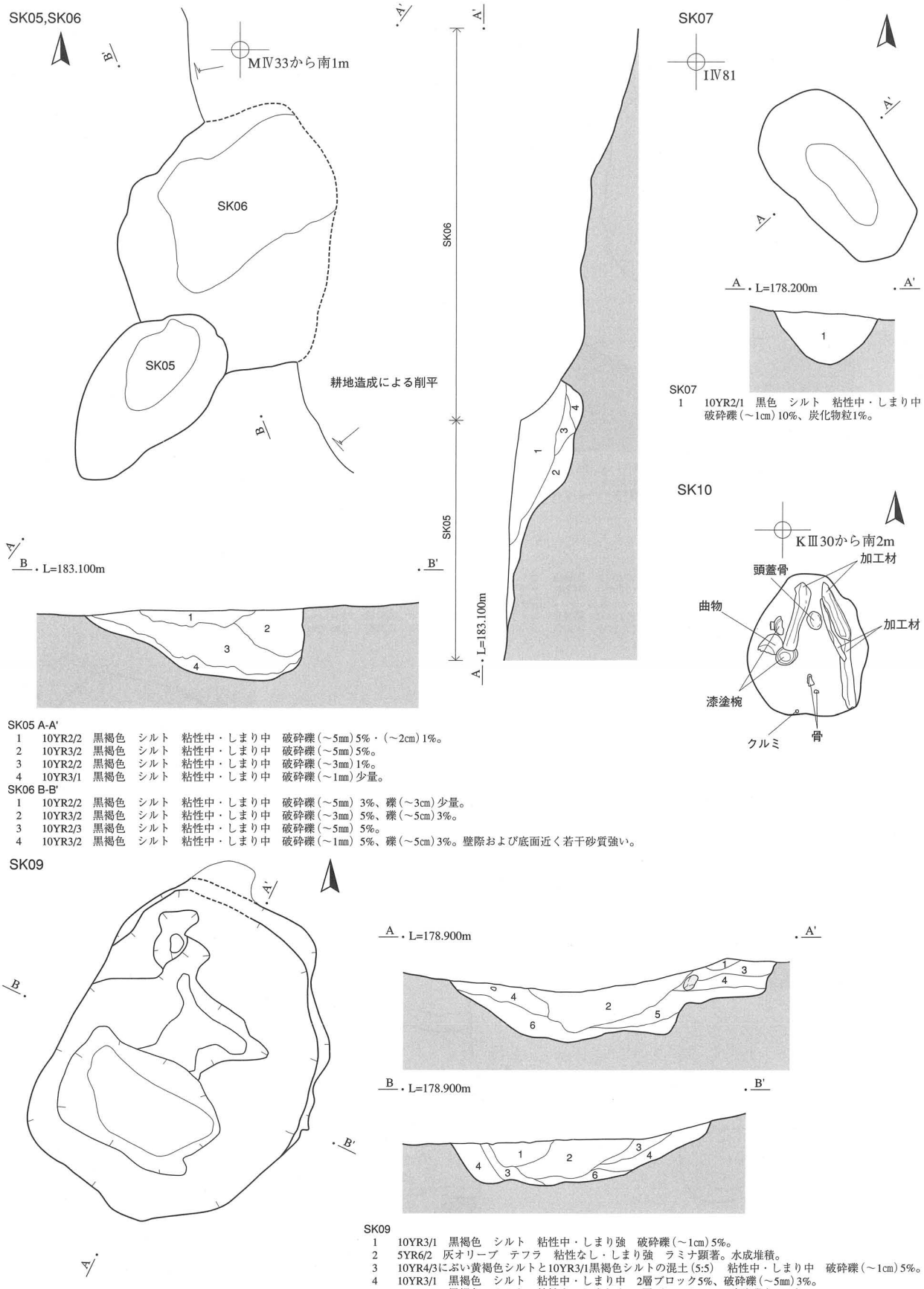
SK08



SK08
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）均等に5%。
2　10YR2/3黒褐色シルトとⅦ層（10YR4/3）ブロック（～5㎜）の混土（6:4）　粘性中・しまり中。
3　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）1%。

0　(1：40)　2m

第18図　ＳＫ01～04・08



SK05 A-A'
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%・（～2㎝）1%。
2　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）1%。
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1㎜）少量。

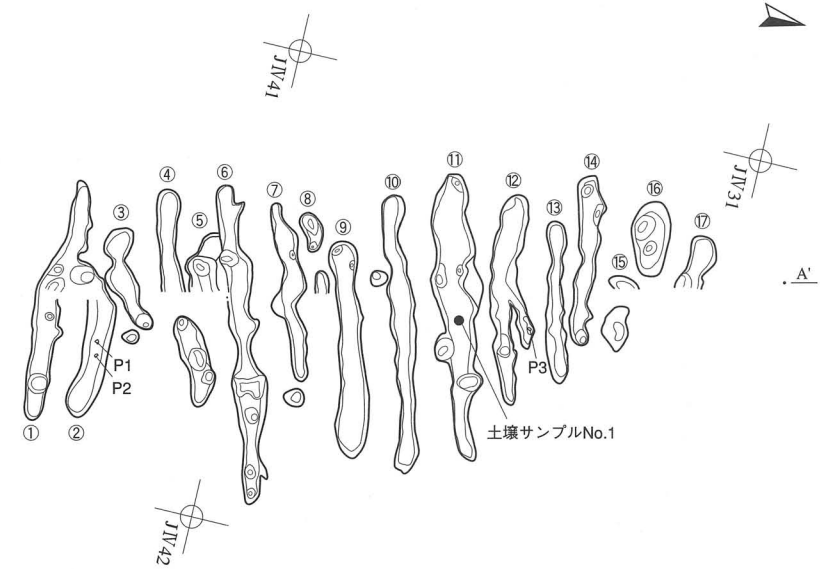
SK06 B-B'
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）3%、礫（～3㎝）少量。
2　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）5%、礫（～5㎝）3%。
3　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。
4　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1㎜）5%、礫（～5㎝）3%。壁際および底面近く若干砂質強い。

SK07
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1㎝）10%、炭化物粒1%。

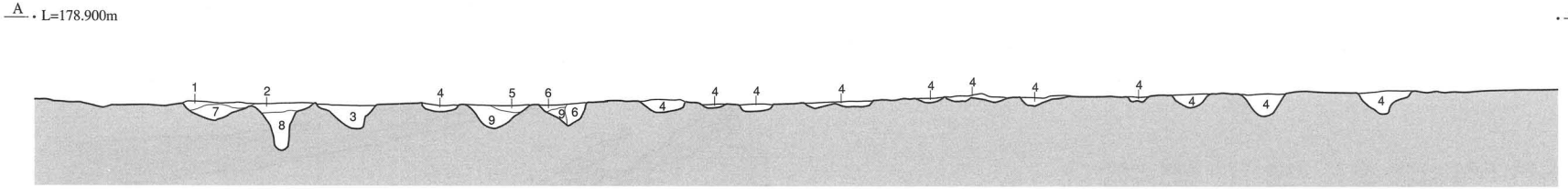
SK09
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり強　破砕礫（～1㎝）5%。
2　5YR6/2　灰オリーブ　テフラ　粘性なし・しまり強　ラミナ顕著。水成堆積。
3　10YR4/3にぶい黄褐色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混土（5:5）　粘性中・しまり中　破砕礫（～1㎝）5%。
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　2層ブロック5%、破砕礫（～5㎜）3%。
5　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　2層ブロック10%、破砕礫（～5㎜）3%。
6　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）3%。

第19図　ＳＫ05～07・09・10

1号耕作痕跡



0　(1：80)　2m



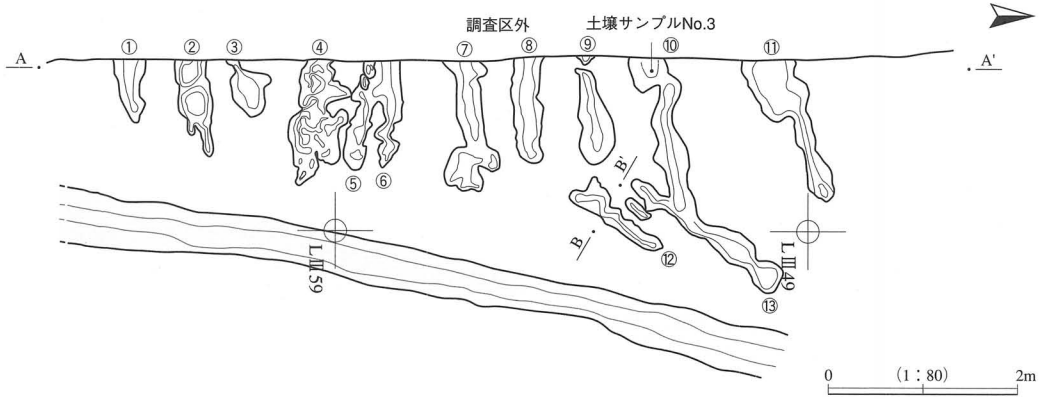
1号耕作痕跡

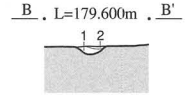
1	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中	破砕礫（～5㎜）少量。
2	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中	破砕礫（～2㎜）少量、To-aブロック（～5㎜）1%。
3	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中	上部にTo-aブロック（～1cm）3%。
4	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中	破砕礫（～2㎜）1%。
5	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中	破砕礫（～5㎜）3%。
6	10YR3/1	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中	破砕礫（～1cm）少量。
7	10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中	破砕礫（～5㎜）3%。
8	10YR2/2	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中。	
9	10YR3/2	黒褐色	シルト	粘性中・しまり中	破砕礫（～2㎜）1%。

0　(1：40)　2m

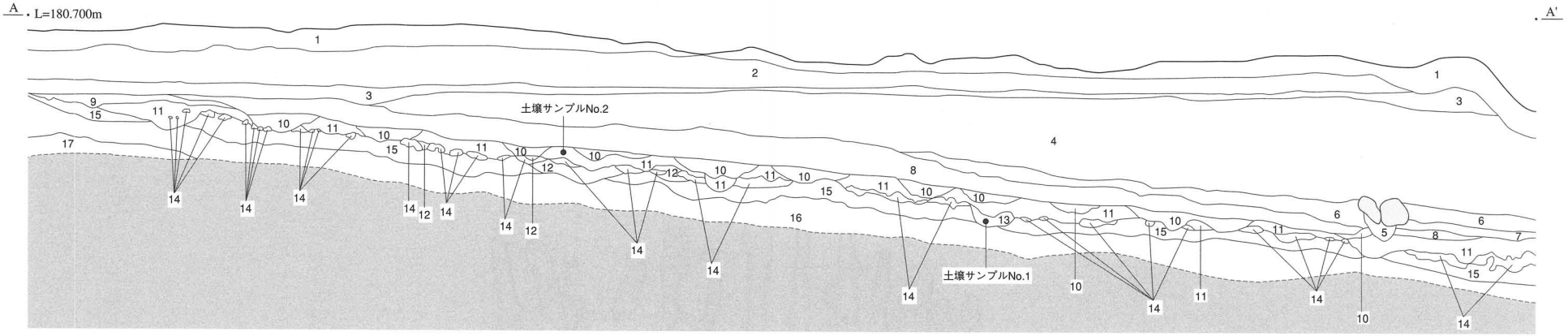
第20図　1号耕作痕跡

2号耕作痕跡

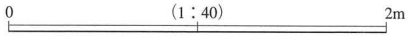




2号耕作痕跡 B-B'
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり弱　炭化物粒1%。
2　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中　しまり弱　To-aブロック粒3%、全体に淡く混入。

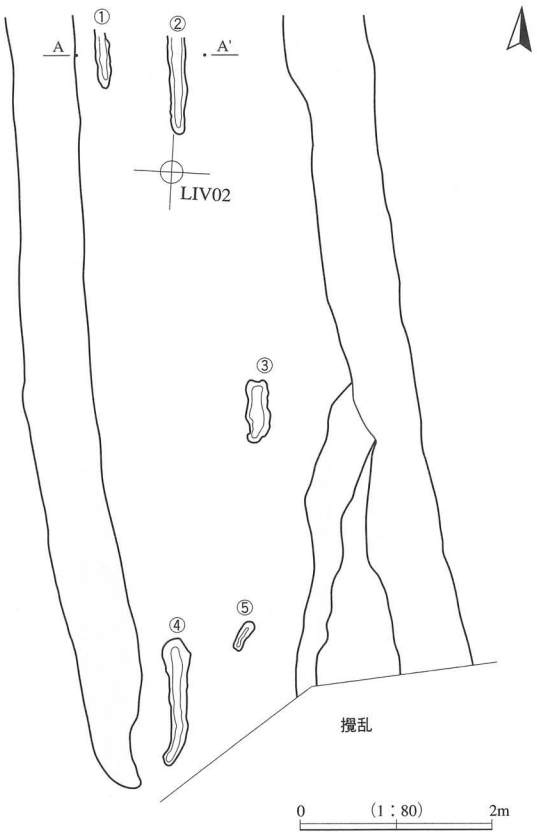


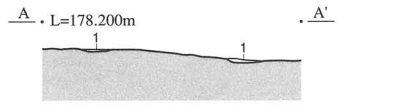
2号耕作痕跡 A-A'
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　表土。基本層序Ⅰ層。
2　10YR3.5/1　黒褐～褐灰色シルト　粘性強・しまり強　水田床土。基本層序Ⅰ層。
3　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　水田下部。基本層序Ⅰ層。
4　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　基本層序Ⅱ層。
5　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　人為の堀削痕？。
6　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1㎝）7%。
7　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒2%。
8　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm,～1㎝ピーク）20%。土石流。
9　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。
10　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）2%、炭化物粒1%。
11　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　テフラ（14層）がブロック・粒・モヤ状に混じる。炭化物粒1%。耕作土。
12　2.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　テフラ（14層）がブロック・粒・モヤ状に混じる。破砕礫（～5㎜）3%。
13　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　耕作土あるいは耕作痕埋土。
14　2.5Y7/1　灰白色　テフラ　粘性なし・しまり強　To-a。基本層序Ⅳ層。
15　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）2%。基本層序Ⅴ層。
16　10YR2.5/1　黒～黒褐色　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。
17　10YR2/1　黒色 シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）2%。基本層序Ⅵ層。



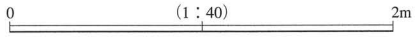
第21図　2号耕作痕跡

3号耕作痕跡

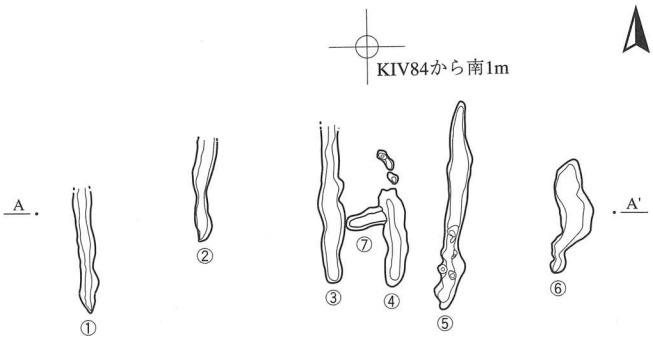


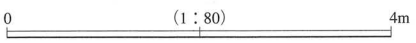


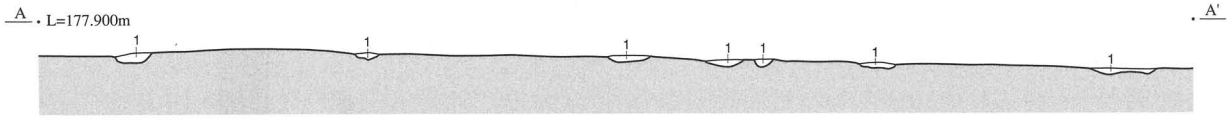
3号耕作痕跡
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
破砕礫（～2㎜）2%、To-aブロック3%、炭化物粒1%。



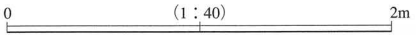
5号耕作痕跡



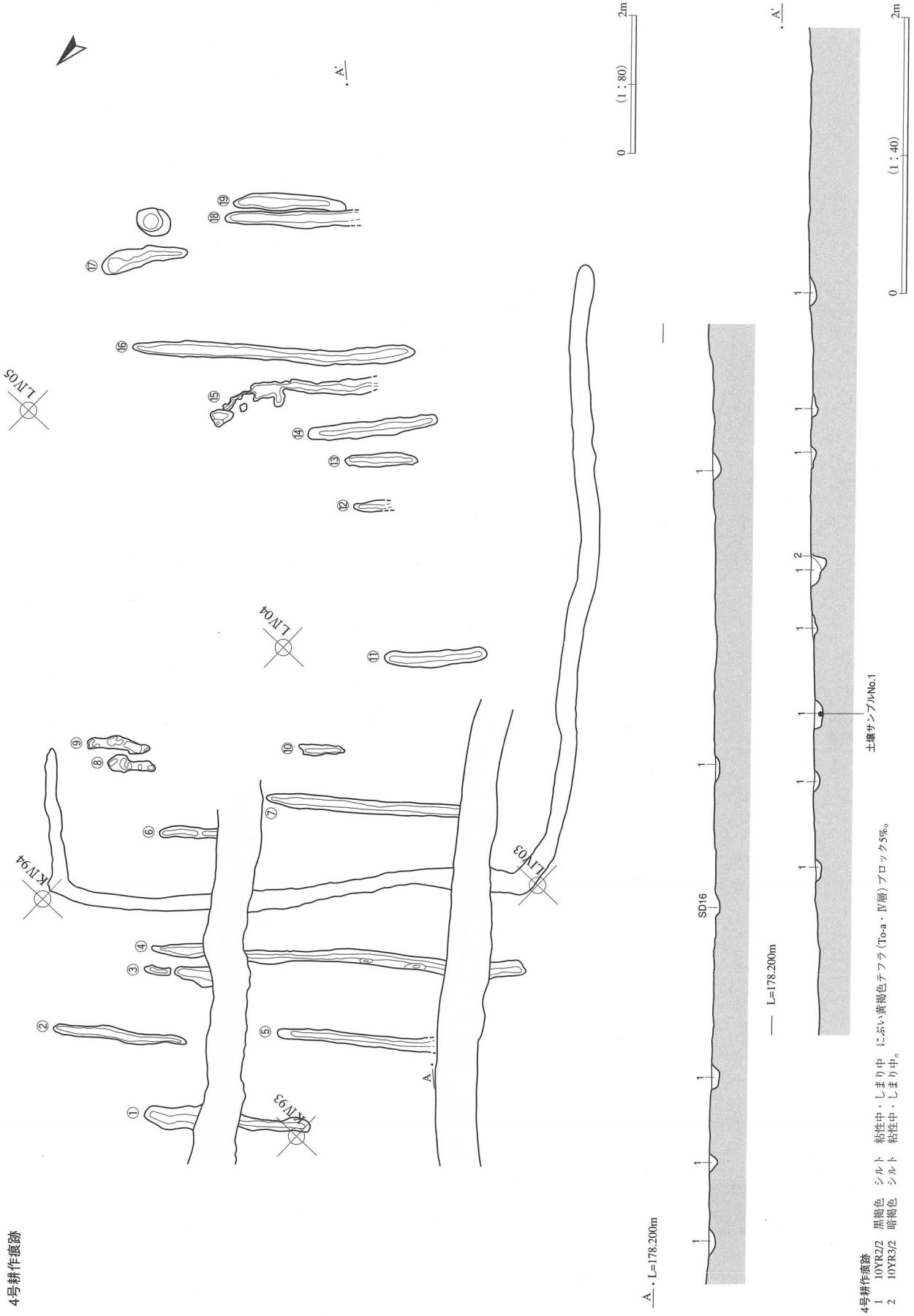




5号耕作痕跡
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。

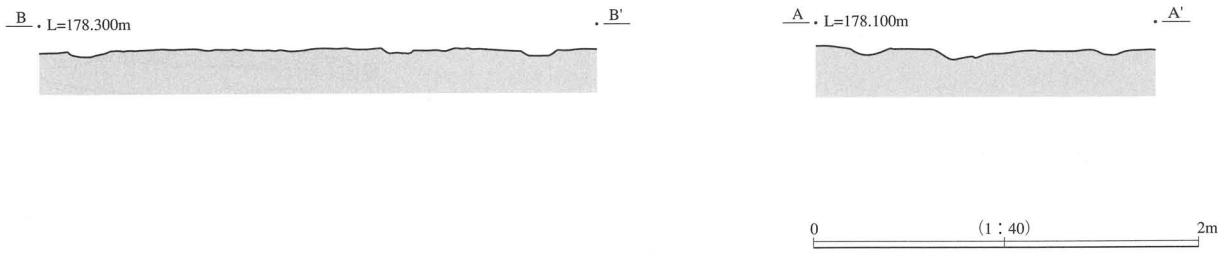


第22図　3号・5号耕作痕跡

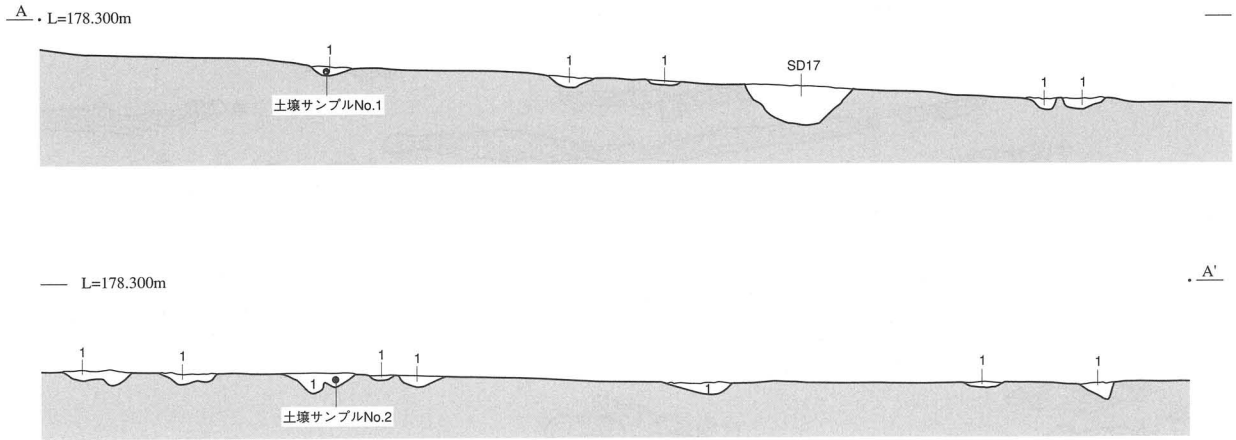

4号耕作痕跡
A
A'
L IV05
L IV04
L IV03
K IV94
K IV93
SD16
L=178.200m
0
(1：80)
2m
(1：40)
土壌サンプルNo.1
4号耕作痕跡
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　にぶい黄褐色テフラ（To-a・Ⅳ層）ブロック5%。
2　10YR3/2　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中。

第23図　4号耕作痕跡

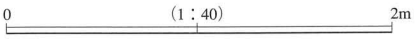
6号耕作痕跡



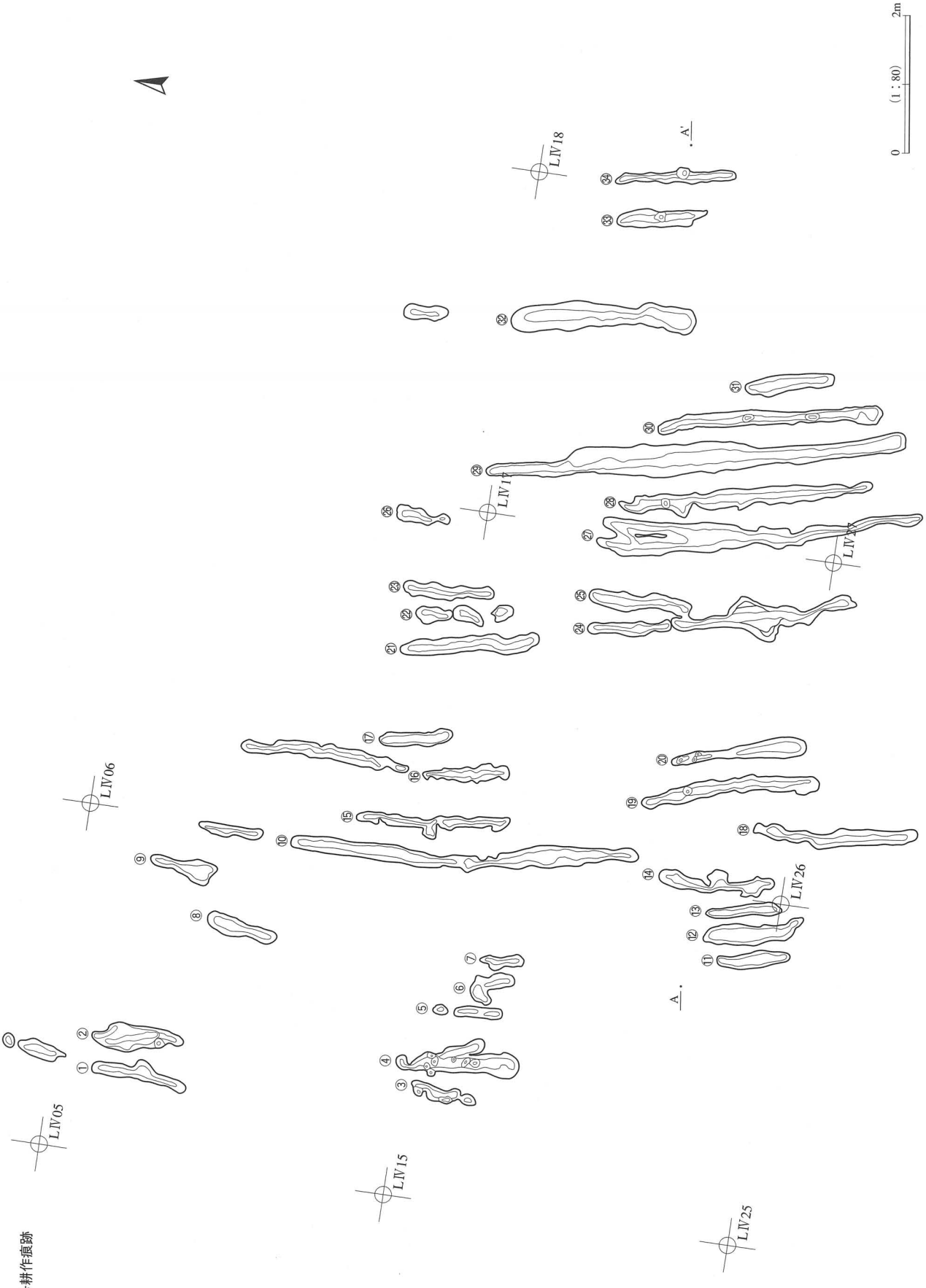
7号耕作痕跡



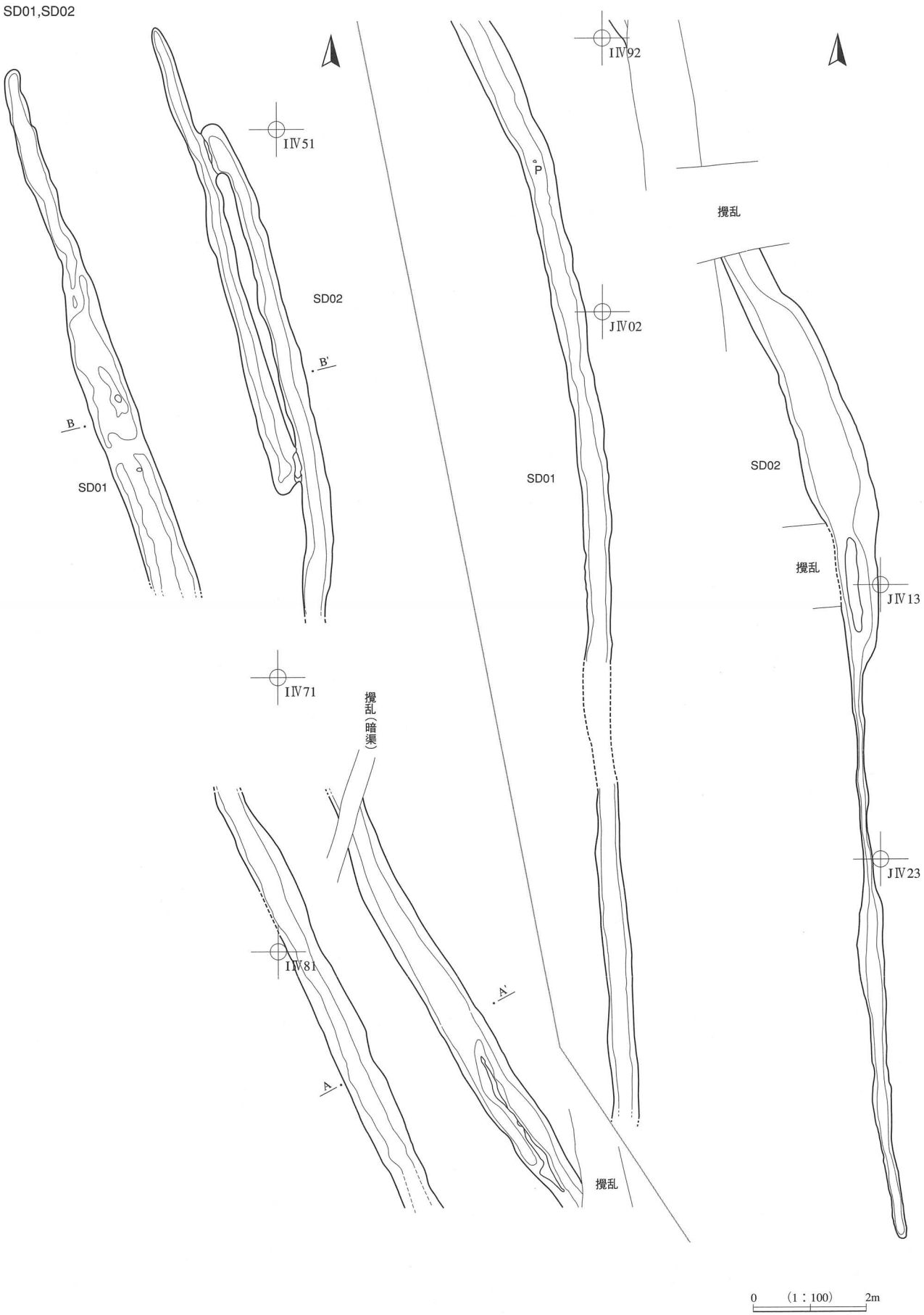
7号耕作痕跡
1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中 灰黄褐色シルトブロック（V層相当）5%、破砕礫（～5㎜）3%、炭化物粒1%、To-aブロック1%。
※To-aを切る



第24図　6号耕作痕跡、7号耕作痕跡（1）

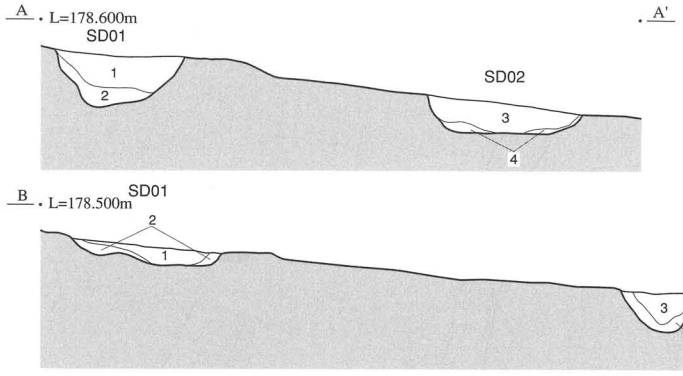


第25図　7号耕作痕跡（2）



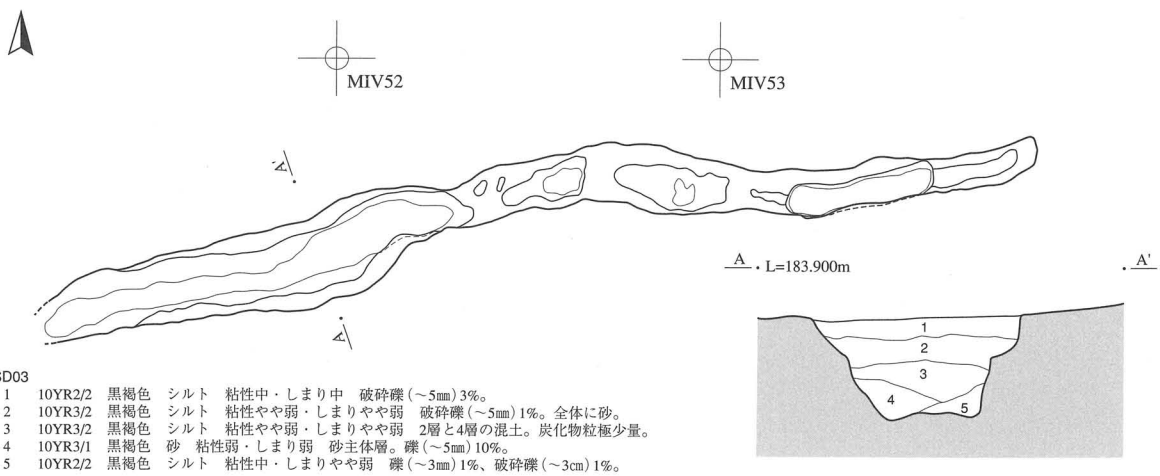
第26図　ＳＤ01・02（１）

SD01,SD02



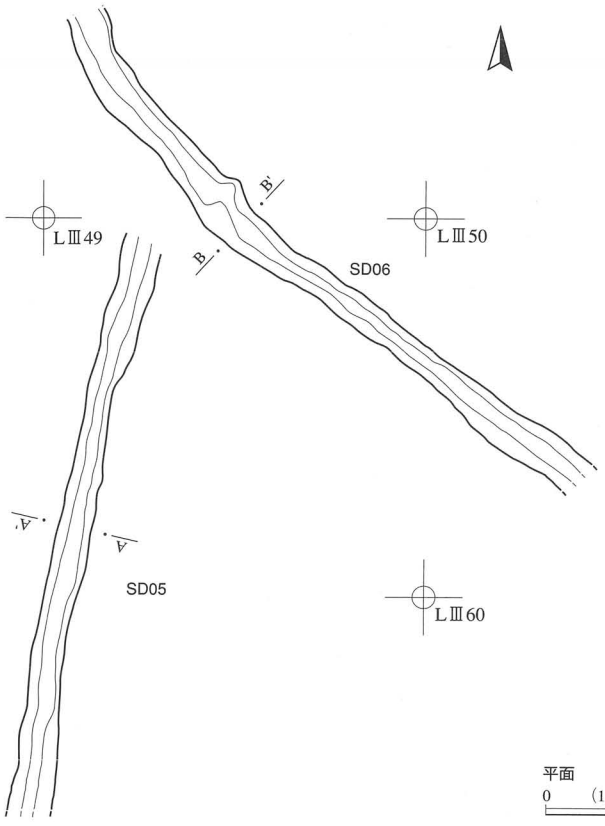
SD01,02
1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　破砕礫（～5㎜）3%。
2　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　破砕礫（～5㎜）3%、10YR4/3にぶい黄褐色シルト（V層）10%。
3　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　破砕礫入らず。
4　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　10YR3/3暗褐色シルト（V層）10%。

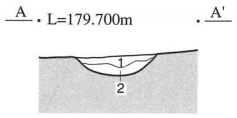
SD03



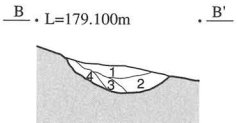
SD03
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）3%。
2　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　破砕礫（～5㎜）1%。全体に砂。
3　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　2層と4層の混土。炭化物粒極少量。
4　10YR3/1　黒褐色　砂　粘性弱・しまり弱　砂主体層。礫（～5㎜）10%。
5　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまりやや弱　礫（～3㎜）1%、破砕礫（～3㎝）1%。

SD05,SD06





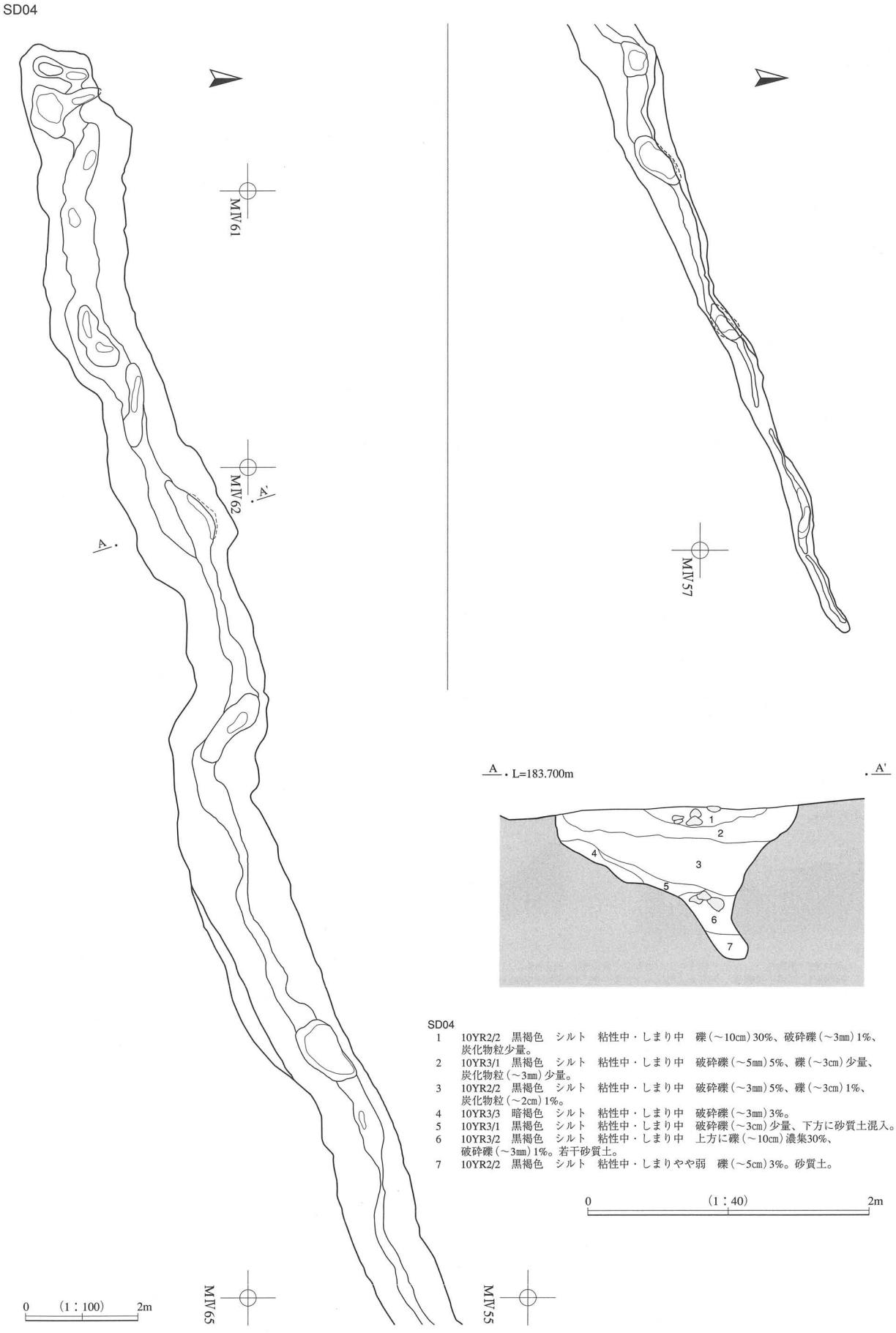
SD05 A-A'
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱
　破砕礫（～5㎜）3%、炭化物粒1%。
2　10YR3/1.5　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　破砕礫（～5㎜）5%。



SD06 B-B'
1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱
　礫（～5cm）1%、破砕礫（～5㎜）3%、炭化物粒1%。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱
　礫（～1cm）5%。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱
　破砕礫（～5㎜）1%。
4　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱
　To-aブロック1%。

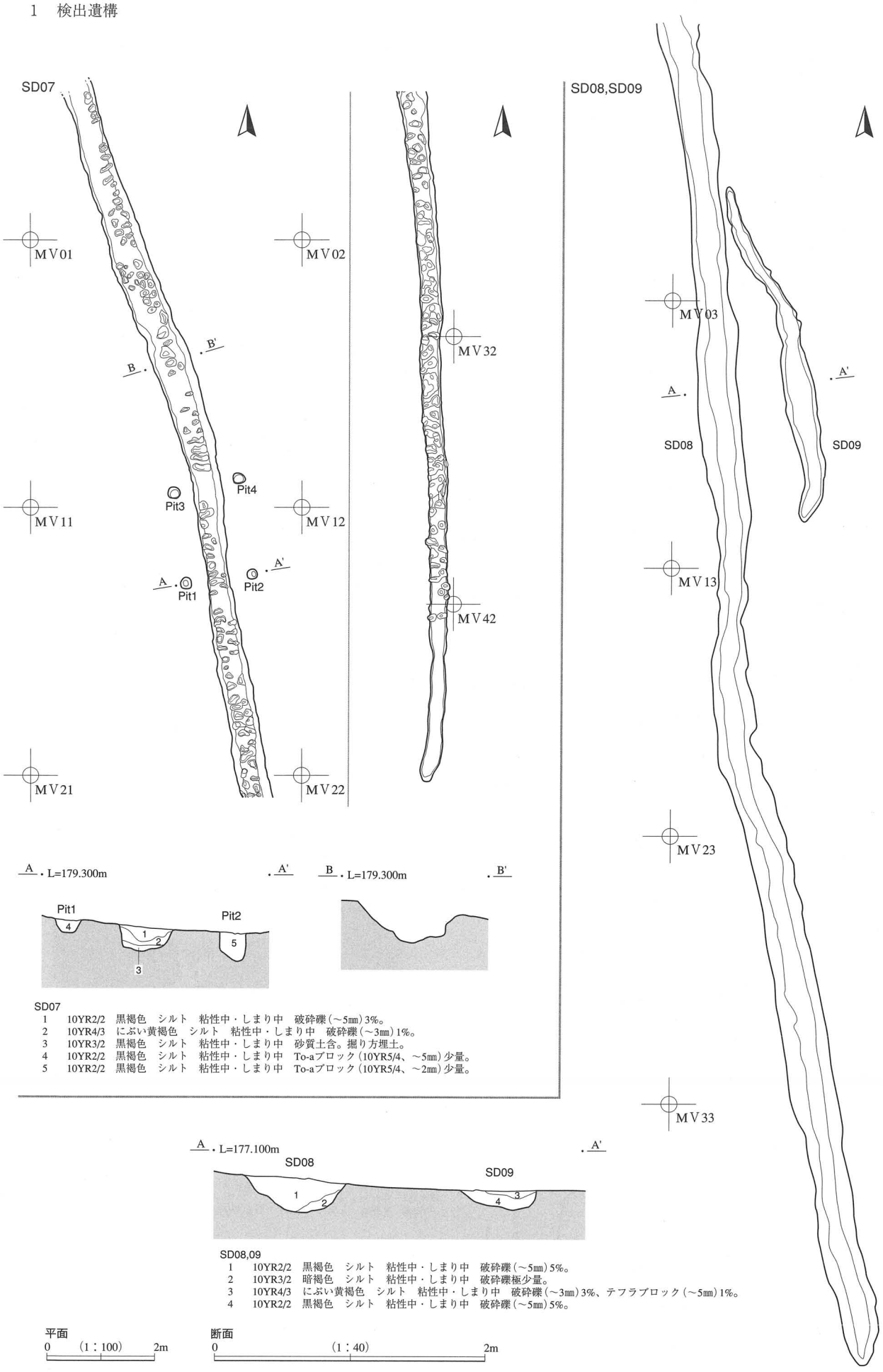
平面　0　（1：100）　2m
断面　0　（1：40）　2m

第27図　ＳＤ01・02（２）、ＳＤ03・05・06



SD04
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～10cm）30%、破砕礫（～3mm）1%、炭化物粒少量。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）5%、礫（～3cm）少量、炭化物粒（～3mm）少量。
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3mm）5%、礫（～3cm）1%、炭化物粒（～2cm）1%。
4　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3mm）3%。
5　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3cm）少量、下方に砂質土混入。
6　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　上方に礫（～10cm）濃集30%、破砕礫（～3mm）1%。若干砂質土。
7　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまりやや弱　礫（～5cm）3%。砂質土。

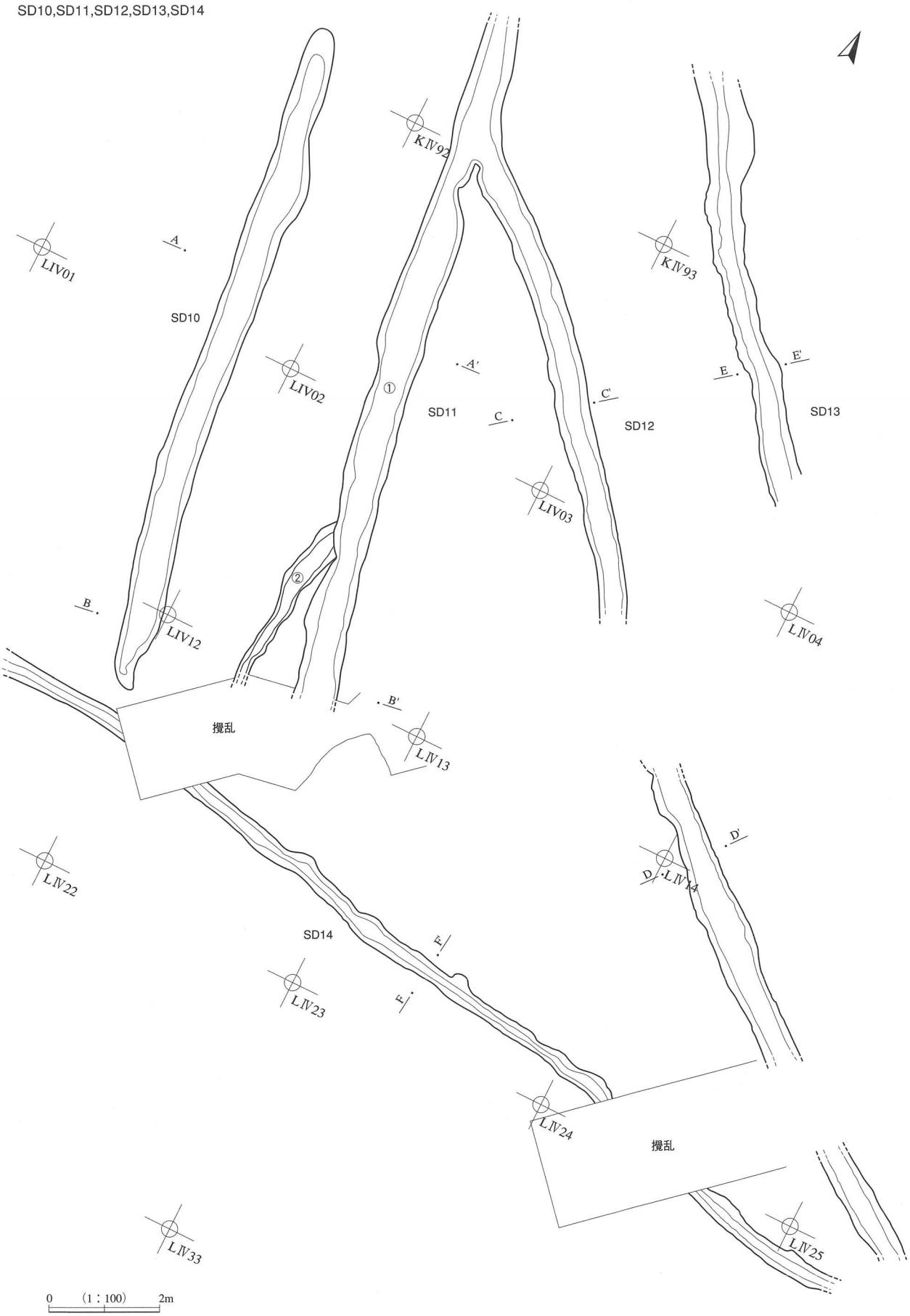
第28図　ＳＤ04



SD07
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）3%。
2　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）1%。
3　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　砂質土含。掘り方埋土。
4　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　To-aブロック（10YR5/4、～5㎜）少量。
5　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　To-aブロック（10YR5/4、～2㎜）少量。

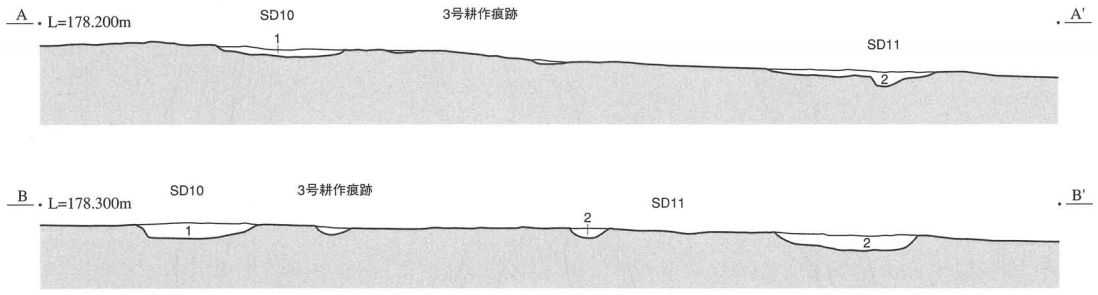
SD08,09
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。
2　10YR3/2　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫極少量。
3　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）3%、テフラブロック（～5㎜）1%。
4　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。

第29図　ＳＤ07～09



第30図　ＳＤ10～14（１）

SD10,11

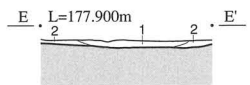


SD10,11
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～2㎜）2%。
2　10YR3/1黒褐色シルト（粘性強・しまり強）と10YR2/1黒色シルト（粘性中・しまり中）の混土　破砕礫（～2㎜）2%。

SD12

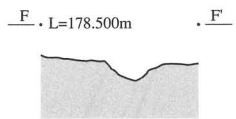
SD12
1　10YR2/1黒色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混土　粘性中・しまり中　底面にTo-aブロック確認される。
2　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　3号耕作痕跡埋土。

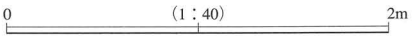
SD13



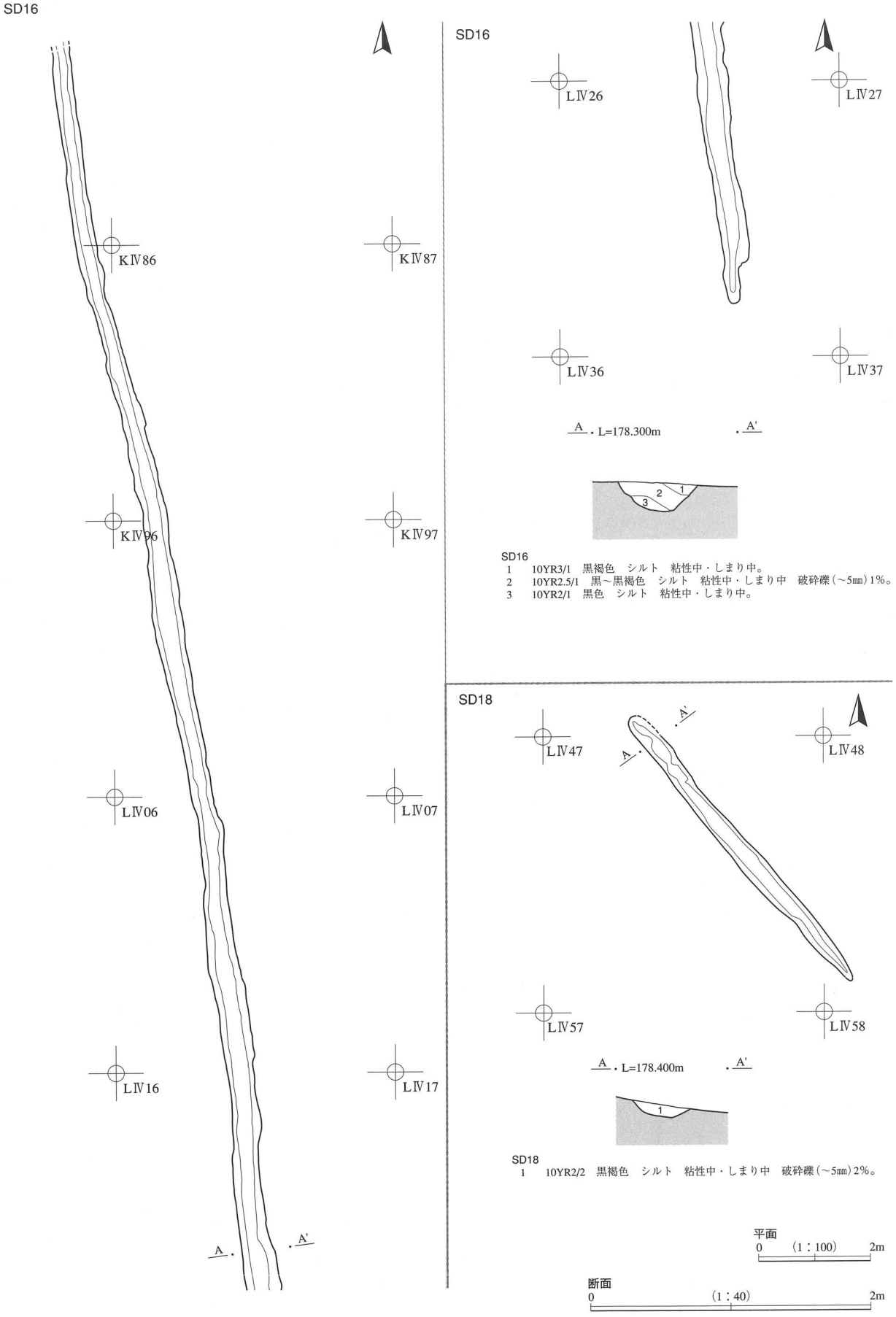
SD13
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
2　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　3号耕作痕跡埋土。

SD14

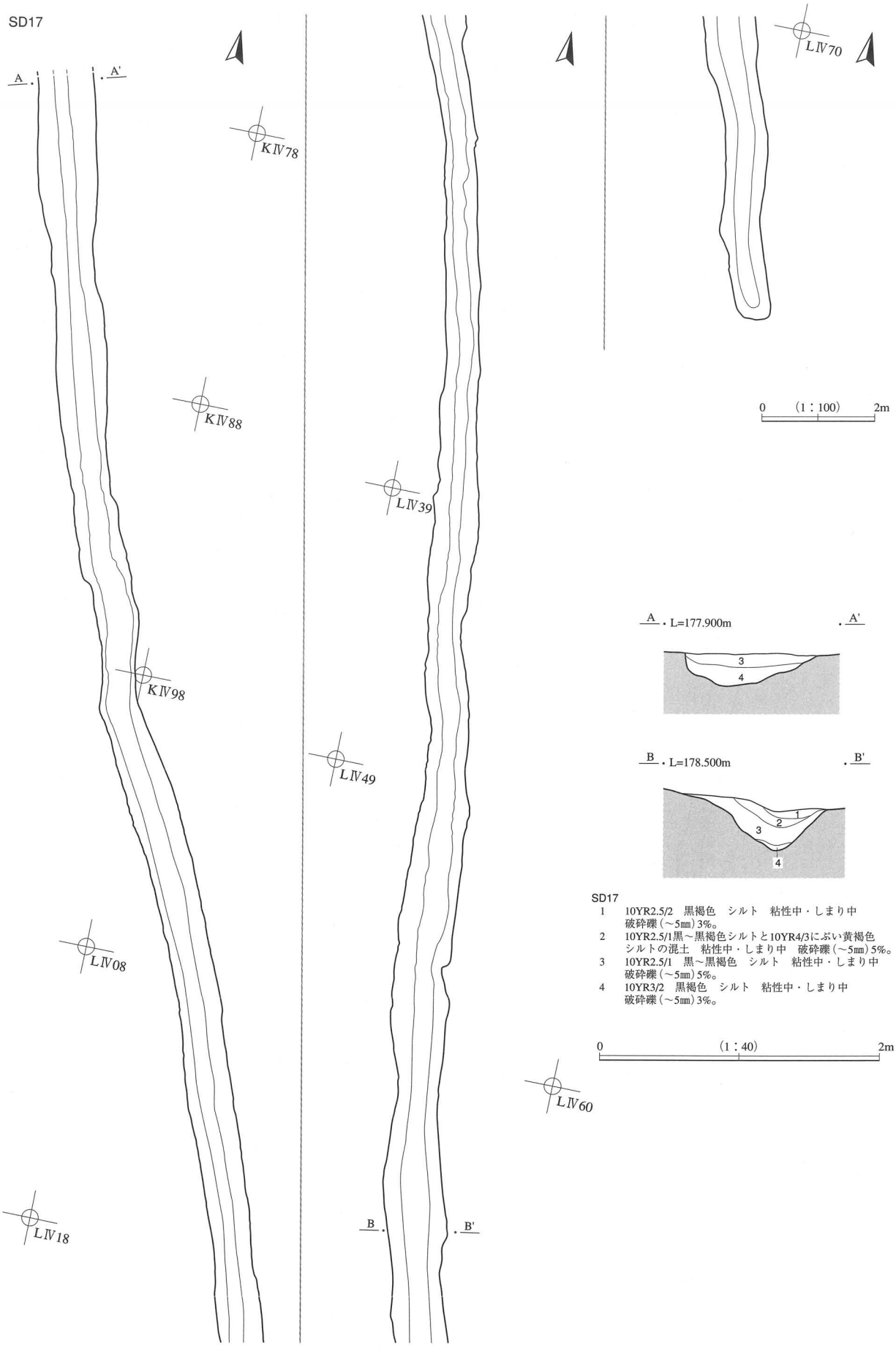




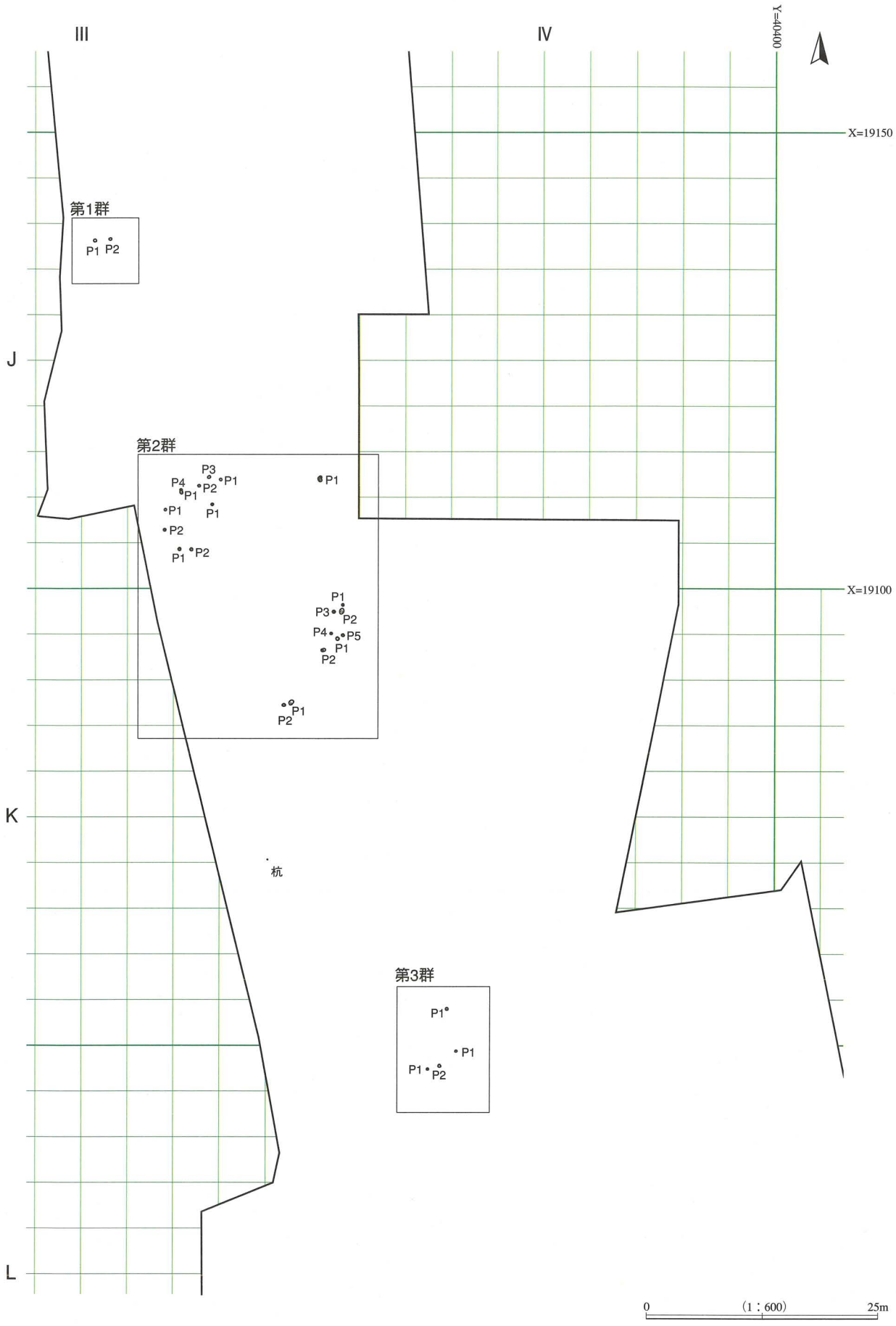
第31図　ＳＤ10～14（２）


SD16
KⅣ86
KⅣ87
KⅣ96
KⅣ97
LⅣ06
LⅣ07
LⅣ16
LⅣ17
A
A'
SD16
LⅣ26
LⅣ27
LⅣ36
LⅣ37
A
L=178.300m
A'
1
2
3
SD16
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
2　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）1%。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
SD18
LⅣ47
LⅣ48
LⅣ57
LⅣ58
A
A'
L=178.400m
1
SD18
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）2%。
平面
0　（1：100）　2m
断面
0　（1：40）　2m

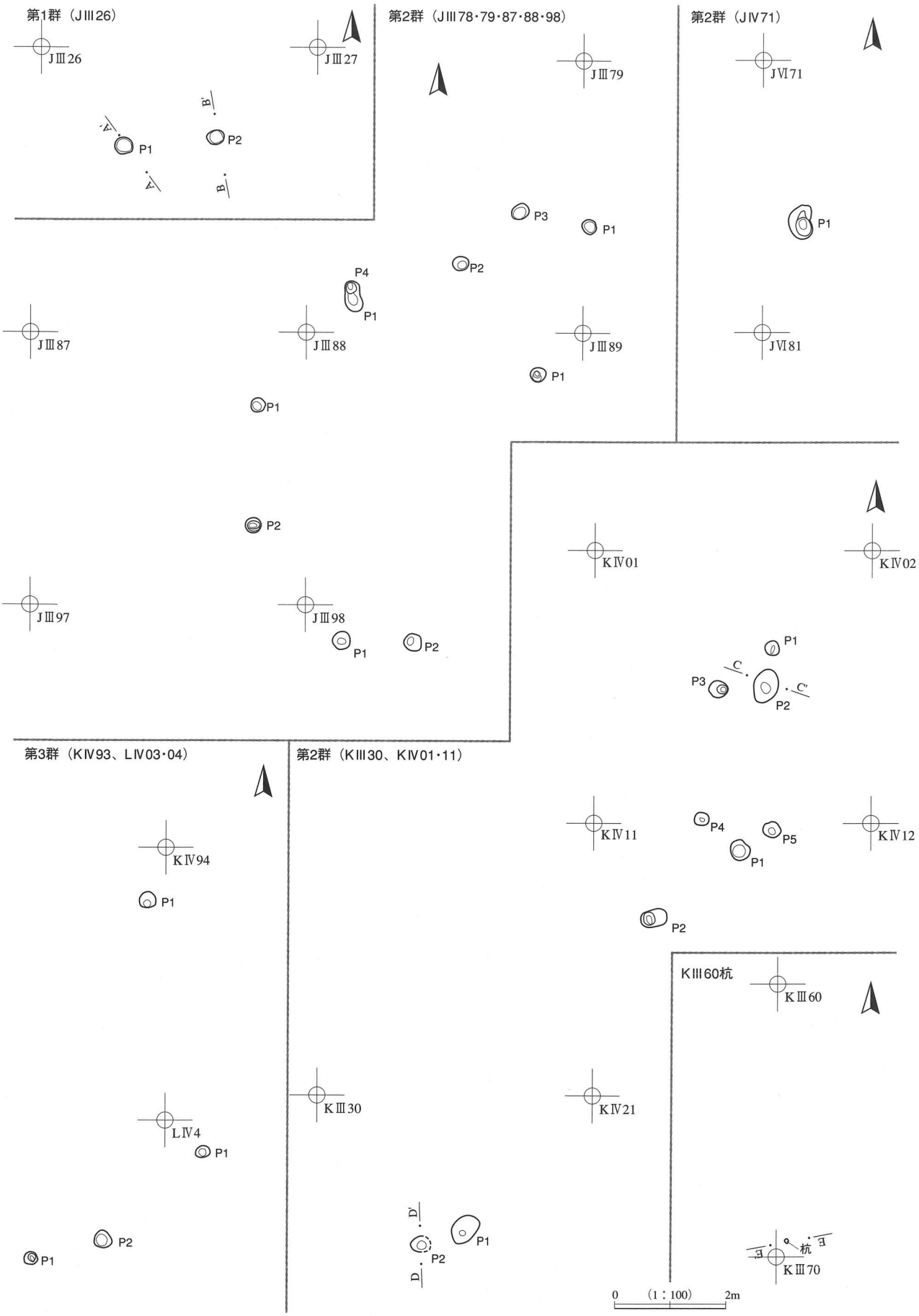
第32図　ＳＤ16・18


SD17
A
A'
KⅣ78
KⅣ88
KⅣ98
LⅣ08
LⅣ18
LⅣ39
LⅣ49
LⅣ60
LⅣ70
B
B'
0　(1：100)　2m
A・L=177.900m　・A'
3
4
B・L=178.500m　・B'
1
2
3
4
SD17
1　10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
破砕礫（～5㎜）3%。
2　10YR2.5/1黒～黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色
シルトの混土　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。
3　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
破砕礫（～5㎜）5%。
4　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
破砕礫（～5㎜）3%。
0　(1：40)　2m

第33図　ＳＤ17

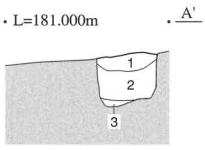


第34図　柱穴状土杭群、杭（1）



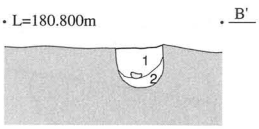
第35図　柱穴状土杭群、杭（2）

JⅢ26 P1



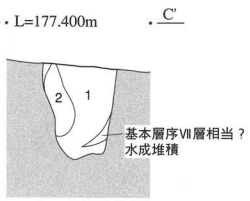
JⅢ26 P1
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土ブロック（～3㎜）5%、破砕礫（～1cm）7%、炭化物粒1%。SI01カマド崩落土?。
2　10YR2.5/3　黒褐～暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm　5㎜中心）10%。SI01煙道上部構築土。
3　2層と4層の混土　粘性中・しまり弱　炭化物粒3%、礫（～5cm）5%、破砕礫（～1cm）5%。

JⅢ26 P2



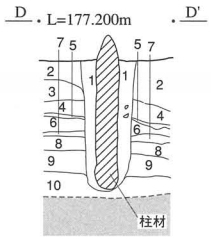
JⅢ26 P2
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）2%。
2　10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　基本層序Ⅴ層ベース。Ⅳ層ブロック10%。

KⅣ01 P2



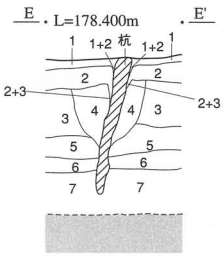
KⅣ01 P2
1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　To-aブロック1%、破砕礫（～5㎜）1%、炭化物粒1%。
2　1層と10YR4/1褐灰色砂の混土　破砕礫（～1cm）5%。

KⅢ30 P2

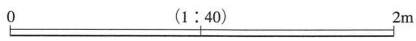


KⅢ30 P2
1　10YR4/1　褐灰色 粘土　粘性強・しまり中　2～6各層ブロック10%、To-aブロック1%。
2　10YR3/2　黒褐色 粘土　粘性強・しまり強　小礫（～5㎜）10%。
3　2.5Y5/4　黄褐色 砂　粘性弱・しまり強　小礫（～5㎜）10%、酸化鉄多量。
4　5B4/1　暗青灰色　砂　粘性弱・しまり強　小礫（～5㎜）5%。
5　10G4/1　暗緑灰色 粘土　粘性強・しまり中。
6　10G4/1　暗緑灰色 砂　粘性弱・しまり強　小礫（～5㎜）5%。
7　10G4/1　暗緑灰色 粘土　粘性強・しまり中。
8　N4/1　灰色　粘土　粘性強・しまり中。
9　2.5Y7/1　灰白色 砂　粘性弱・しまり中。
10　10YR4/1　褐灰色 粘土　粘性強・しまり中　砂混。

KⅢ60 杭

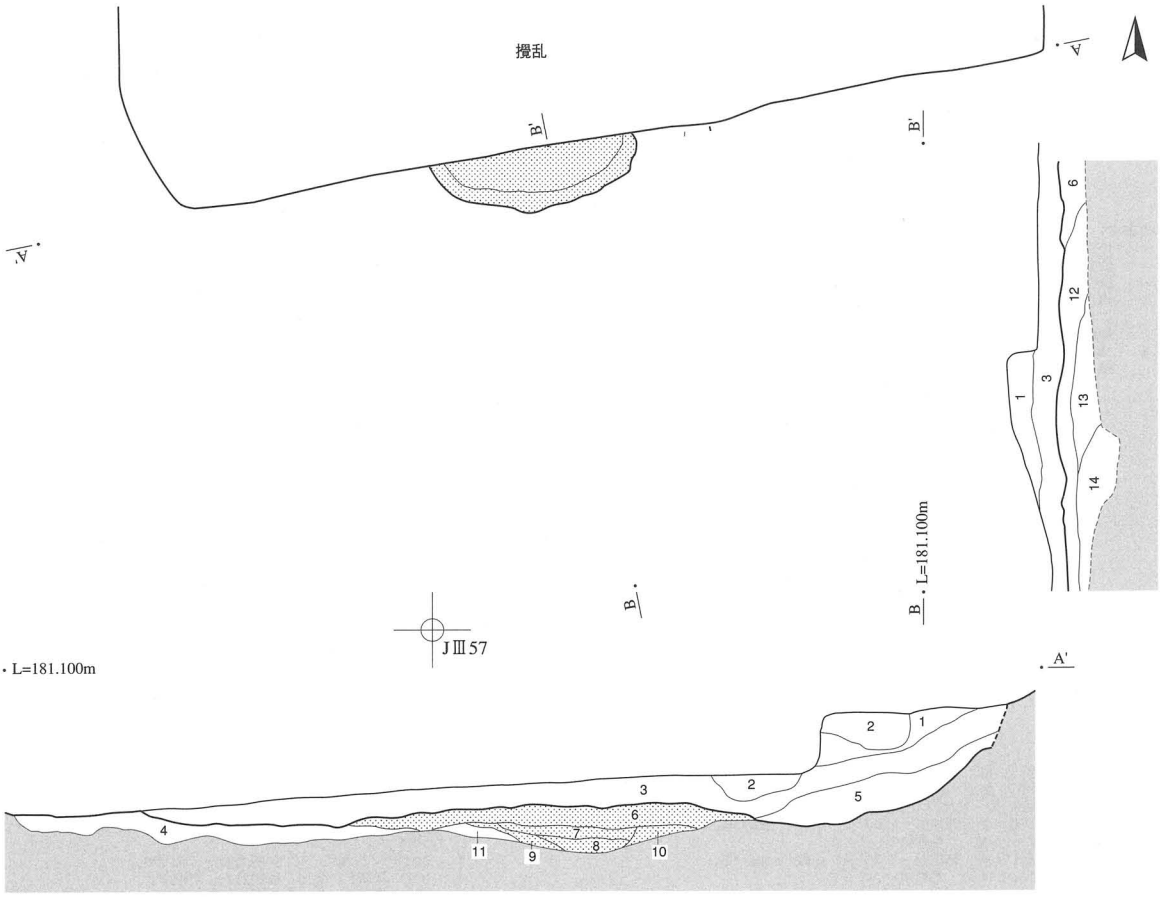


KⅢ60 杭
1　2.5Y7/1 灰白色　テフラ　粘性なし・しまり強　To-a。基本層序Ⅳ層。
2　10YR3/1　黒褐色　粘土　粘性強・しまり強。
3　10YR3/3　暗褐色　粘土　粘性強・しまり強　礫（～3cm）10%。
4　N3/0　暗灰色　粘土　粘性強・しまり強　礫（～3cm）10%。3層がグライ化したもの。
5　2.5Y3/1　黒褐色　粘土　粘性強・しまり中。
6　N3/0　暗灰色　粘土　粘性強・しまり強。
7　N3/0　暗灰色　砂　粘性弱・しまり中。



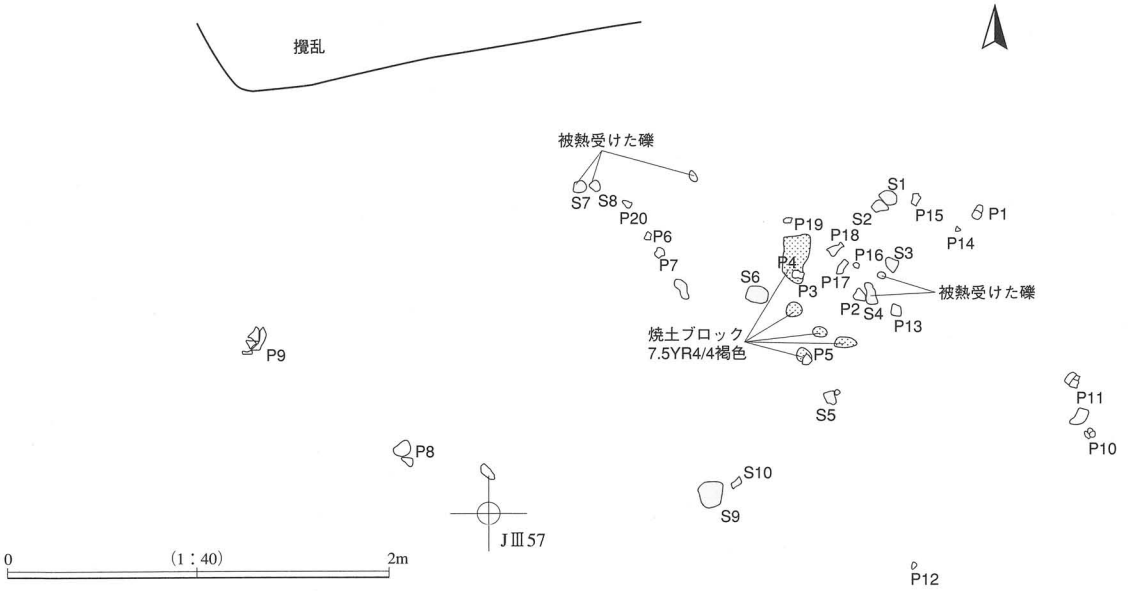
第36図　柱穴状土杭群、杭（3）

SX01



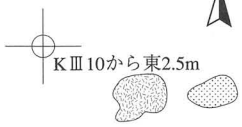
SX01
1　基本層序Ⅱ層。
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　破砕礫（～5cm）5%。撹乱。
3　基本層序Ⅲ層。
4　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3cm）少量、炭化物粒（～1cm）1%、To-a（2cm）少量。基本層序Ⅲ層・Ⅴ層上位に類似。
5　10YR2.5/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）1%、炭化物粒（～5mm）5%。基本層序Ⅲ層に類似。
6　7.5YR4/4　褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物粒（～3mm）1%。焼土。燃焼面。
7　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土。赤変（強）。
8　5YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土。赤変（中）。
9　5YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒（～1mm）少量。焼土。赤変（弱）。
10　5YR2/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土。赤変（弱）。
11　基本層序Ⅴ層。
12　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3cm）少量、炭化物粒（～5mm）5%。基本層序Ⅲ層に類似。
13　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒（～5mm）5%、褐色粒（～3mm）3%。
14　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒（～2mm）1%、褐色粒（～1mm）1%、To-aブロック（～5mm）少量。基本層序Ⅲ層に類似。

遺物出土状況

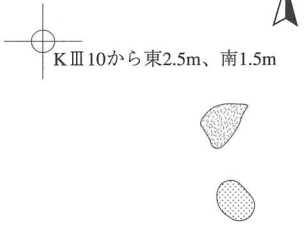


第37図　ＳＸ01

SX02

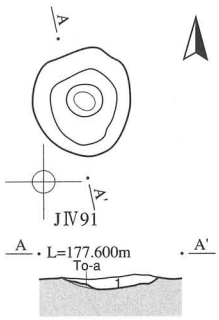


SX03



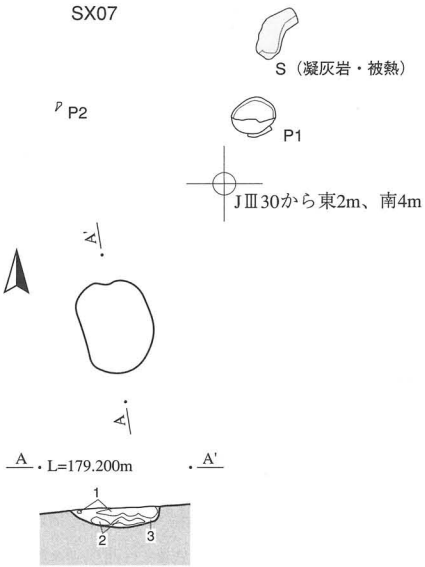
SX04

SX05



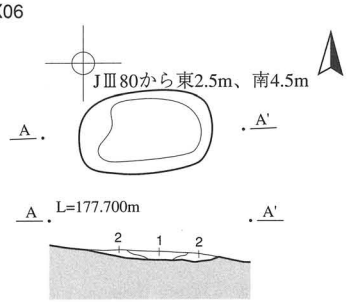
SX05
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物多量、骨片含む。To-aの直上。

SX07



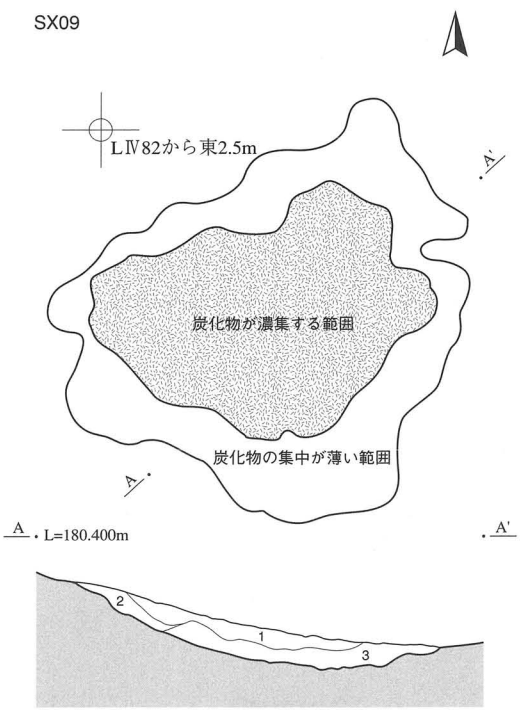
SX07
1　5YR4/6　赤褐色　シルト　粘性なし・しまり中　焼土ブロック。3層との混土。
2　5YR3/6　暗赤褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土粒と3層の混土。
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　基本層序Ⅲ層。

SX06



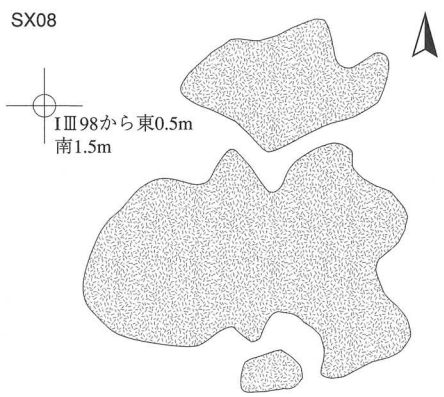
SX06
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒5%。
2　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物多量、焼土粒局所的に入る。To-aの直上。

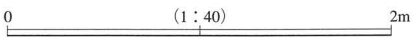
SX09



SX09
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%、炭化物粒（～1cm）5%。
2　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）3%、炭化物粒（～1㎜）少量。
3　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒（～3㎜）1%。基本層序Ⅵ・Ⅶ層の混土。

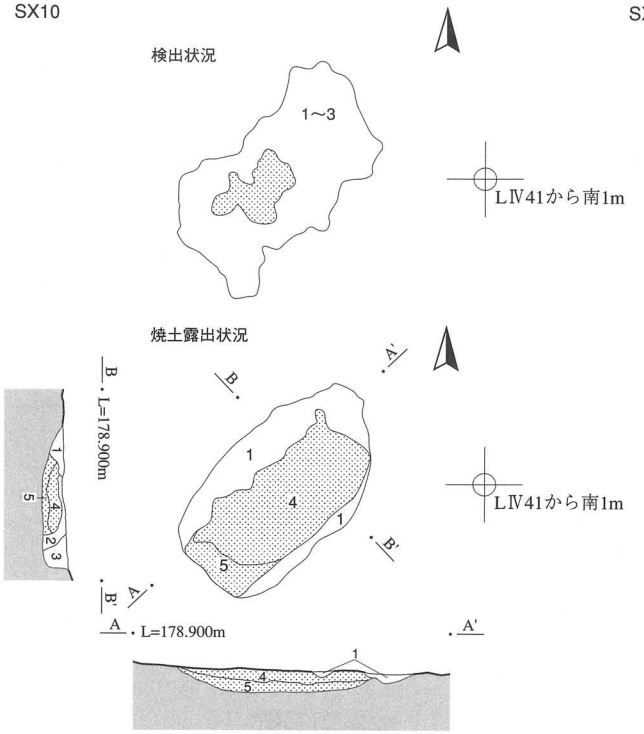
SX08





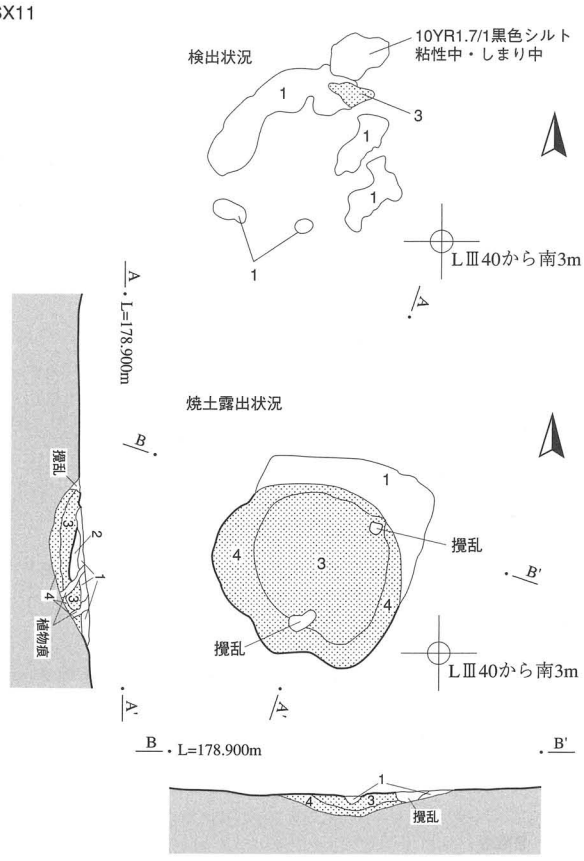
第38図　ＳＸ02～09

SX10



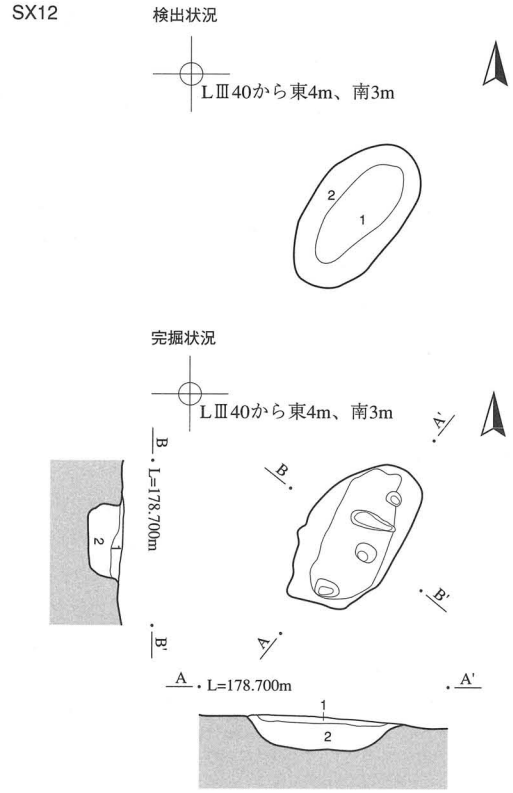
SX10
1　7.5YR2/1黒色シルト（基本層序Ⅲ層）と5YR3/4 暗赤褐色焼土の混土　粘性中・しまり中。
2　7.5YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　4層焼土と6層の混土。
3　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
4　5YR3/4　暗赤褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土。被熱強。
5　7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土。被熱弱。

SX11



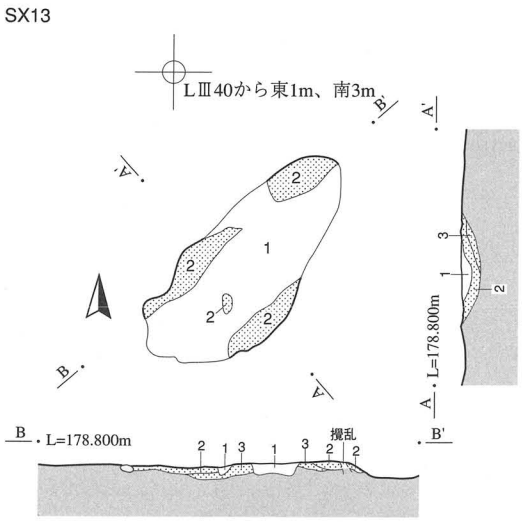
SX11
1　5YR5/6明赤褐色焼土と10YR2/1黒色シルト（基本層序Ⅲ層）の混土　粘性中・しまり中。
2　7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
3　5YR5/6　明赤褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土。被熱強。
4　7.5YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土。被熱弱。

SX12



SX12
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒5%、破砕礫（～5㎜）5%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　炭化物粒80%、骨片含む。

SX13



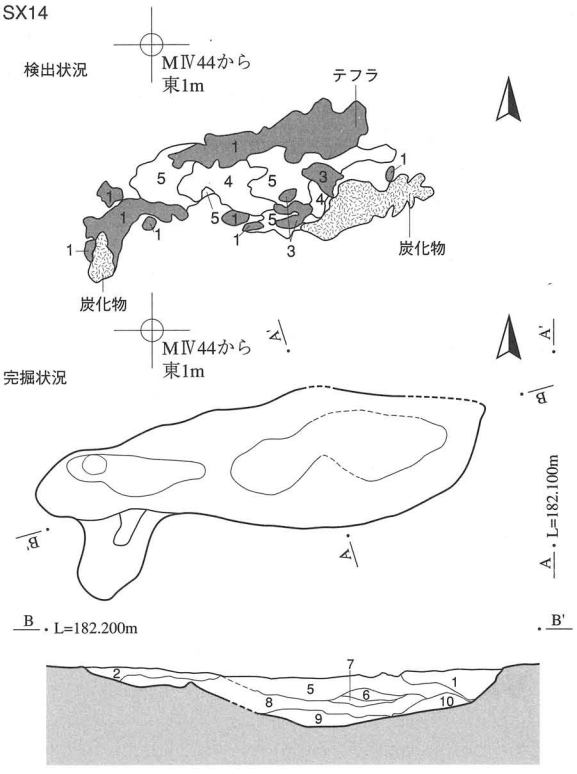
SX13
1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　焼土ブロック・炭化物粒5%。
2　2.5YR4/6　赤褐色　シルト　粘性中・しまり強　焼土。
3　2.5YR3/2　暗赤褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土。
※　各層に礫（～3cm）3%

※平面中の数字は各断面註記と同一

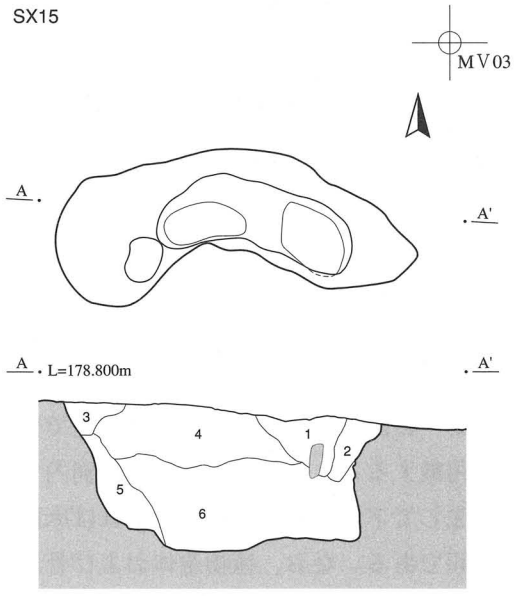
0　(1：40)　2m

第39図　ＳＸ10～13

SX14



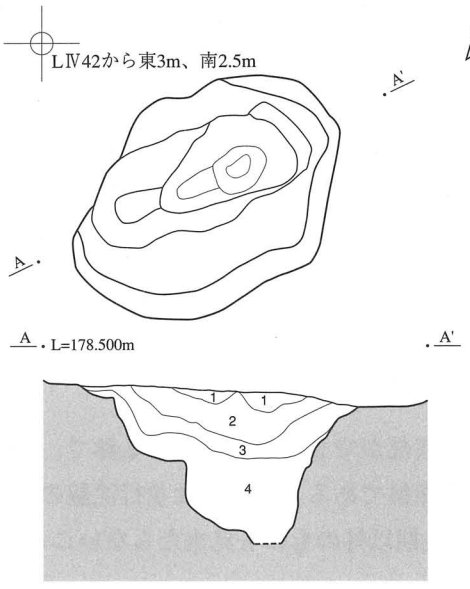
SX15

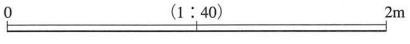


SX15
1　7.5YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
暗赤褐色焼土40%均等に混入。
2　10YR3/4　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中。
3　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
破砕礫（～3㎜）3%。
4　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
Ⅴ層ブロック20%均等混入。炭化物粒（～2㎜）極少量。
5　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
6　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中。

SX14
1　10Y2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　2.5Y6/2灰黄色テフラ（To-a）30%、水成堆積で成層（ラミナ顕著）。
2　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　灰黄色テフラブロック（～5㎜）3%、礫（～3cm）3%。
3　2.5Y4/3オリーブ褐色テフラブロックと10YR3/3暗褐色シルトの混土　粘性中・しまり中。
4　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）3%、炭化物ブロック（～3cm）30%。
5　10Y2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）5%、炭化物粒（～2cm）5%、2.5Y4/3オリーブ褐色テフラブロック（～1cm）1%。
6　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　オリーブ褐色テフラブロック（～5cm）40%。
7　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物ブロック 80%。
8　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　灰黄色テフラ（To-a）30%、上半はブロックだが下半は水成堆積で成層（ラミナ顕著）。
9　10Y3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
10　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）混入。

SX16





SX16
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土粒・炭化物粒10%。
2　2.5YR4/8赤褐色シルト・2.5YR5/6明赤褐色シルト（焼土）・10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土（3:5:2）
粘性中・しまり中　廃棄土と思われる。
3　10YR2/1黒色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混土（6:4）　粘性中・しまり弱　炭化物粒5%。
4　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　焼土粒3%。

第40図　ＳＸ14～16

2　出　土　遺　物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器約14.8kg（中コンテナ…42×32×20cm³換算約1.1箱）、石器（剥片・素材含む）58点・約1.8kg（中コンテナ換算約0.1箱）、土師器13.4kg（中コンテナ換算約１箱）、鉄製品３点（122.72ｇ）・銭貨４点（9.67ｇ）、木製品４点、磁器１点（18.19ｇ）、針状骨製品１点、人骨片、獣・魚骨片、植物遺体である。

以下、図の掲載方法について述べておく。なお、掲載基準については、Ⅲ章２節１項「遺物整理の方法」を参照いただきたい。

掲載順序

第一に出土地点を問わず遺物種別で分類し、縄文土器→石器→土師器→鉄製品・銭貨→木製品の順に掲載することとした。次に各種別内で出土地点（遺構内・外）ごとに分類し、それぞれ出土層位を優先して下位から（遺構内であれば床面・底面から）順に掲載した。遺構の掲載順は、Ⅳ章１節の記述順である。なお、植物遺体および骨片についてはⅥ章「自然科学的分析」の４節および６節で写真を掲載している。

（１）縄　文　土　器（第42～45図、第10・14表、写真図版21～23）

ａ）概　　要

出土総量14,791.64ｇのうち遺構内出土分は1,613.68ｇで、さらに遺構に伴う可能性のあるものはＳＫ02出土分の841.83ｇのみである。このほか、遺構外分13,177.96ｇも含め、すべての地点別出土量を第10表に示した。

既存の土器型式から比定される時期は、縄文時代前期初頭～前葉、同後期、同晩期～弥生時代初頭である。

本報告書では、総量の35.9％にあたる5,302.90ｇ・52点を掲載している。個々の遺物についての記載は第14表の遺物観察表に記載してあるのでそちらを参照いただきたい。ここでは各遺構・遺構外別に特徴的・代表的な遺物に絞って詳細を記載し、遺構外分については出土地点の概要についても記す。

ｂ）詳　細　の　記　載

遺構内（１～７）

ＳＫ02の３・４はいずれも粗製の深鉢である。３は非結束の羽状縄文、４は口唇下が無文となる。後期の所産と考えられる。このほか、１・２・５～７は古代以降の遺構に混入したものである。１はＳＩ01床面出土であるが、床面＝縄文遺物包含層であったことの結果と思われる。口縁部が無文で外反する深鉢であり、後期前葉頃のものと思われる。６はＢ突起を有する晩期の鉢？である。２・５・７は地紋のみの胴部で、２は後期に比定される。

遺構外・Ⅵ層（８～12）

集中はなく、各地点で散見された。数量自体少ない。８は底部が窄まり上げ底となる鉢で、口唇部に11単位の大刻目が廻る。９は突き起こし状の刺突列が廻る深鉢である。11・12は並行沈線の廻る深鉢頸部である。これら５点は後期後葉に属するものが多く、後期以外のものも見当たらないことから、本層は該期の堆積と考えてもよさそうである。

遺構外・Ⅴ層（13～16）

集中はなく、各地点で散見された。数量自体少ない。13は口縁部に並行沈線の施される大洞Ｃ２式の鉢、14は台部を有し、羊歯状文の施される大洞ＢＣ式の鉢である。

遺構外・Ⅲ層（17～52）

調査区東際中央のＬＶ区で集中して出土した。が、Ⅳ層To-aより上位にあたり、遺物時期も前期初頭から弥生初頭まで混じることから二次堆積である。17～41は胎土に繊維を含む土器を一括した。17～28は器厚が厚く、凹凸が著しい。17・18は口縁部に結節回転文が施される。28は尖底である。これらは前期初頭～前葉の早稲田第６類相当と考えられる。20はループ文が入り、表館式風である。29～41は胎土が17～28に比べ緻密で、砂粒の混入が目立つ。大木系の影響を受けたものと考えられ、型式的には大木２ａ～ｂ式の範疇に含まれる。29～31は組紐回転文が施されるもので、唯一の底部である31は平底である。口縁部が未出土のため判断に苦しむが、35のような口唇部に刻目列の付されるものに施される例が知られている。32～35、37・39は横位の結節回転文が施されるもので、胴部にも及ぶ。42～52は胎土に繊維を含まない土器を一括し、口縁部・胴部・底部の順に載せた。42～44は後期初頭～前葉と考えられ、42は口縁部突起と肥厚、並行沈線、43はＳ字状沈線が施文されている。45は三叉文が施されており中葉以降と推定される。46は３条の並行沈線による変形工字文と粘土瘤が施されており、弥生時代前期初頭の砂沢式に比定される。

（２）石　　器（第46～48図、第11・12・15表、写真図版24・25）

ａ）概　　要

石器の出土総数・量は58点・1797.16ｇで、その内訳はトゥール21点・906.35ｇ、剥片および素材38点・890.81ｇである。これらの地点別出土量を第11表に示した。遺構内出土点数は12点であるが、実際に遺構に伴うと考えられるものはＳＩ02出土の１点のみである。また、遺構外出土分のうちＩ層もしくは攪乱出土分は１点のみで、45点（全体の約76％）は遺構外Ⅱ層以下出土分である。中でも調査区東際中央のＬＶ区Ⅲ層で集中して出土した。が、Ⅳ層To-aより上位にあたることから縄文土器と同様に二次堆積である。

なお、本報告書ではトゥール21点のうち円形礫を除く20点を掲載した。これは出土総数の約33％にあたる。

ｂ）石　材　分　類

石材分類の結果と出土点数・重量は第12表のとおりである。頁岩（７種）、赤色頁岩、チャート（３種）、デイサイト、瑪瑙、安山岩、閃緑岩の７石材15母岩が存在する。比率は頁岩が大半である。

ｃ）器　種　分　類

前述のとおり、ＳＩ02出土のNo.１以外ははっきりと縄文時代以外の所産といえるものがないため、これらはすべて一括して器種分類を行った。おそらく縄文石器と考えて差し支えない。以下、まずNo.１について記載し、他は器種ごとに解説していく。

ＳＩ02竪穴住居跡（１）

カマド左袖の左側床面から出土した。安山岩製の台石で、４分の３が欠損している。

石鏃（57）

１点のみで、Ⅲ層から出土した。石材は頁岩４で、凸基の有茎鏃である。

石錐（58）

１点のみで、Ⅲ層から出土した。石材は頁岩４で、刃部が嘴状を呈する。

尖頭器（59）

１点のみで、Ⅲ層から出土した。石材は赤みのほとんどない赤色頁岩で、長さ12.99cm・厚さ1.68cmと大形で厚い。先端・末端ともに丸みを帯びる。

石匙（60・61）

Ⅲ層から２点出土した。60は斜型で尖頭状を成す。石材は頁岩１である。61は刃部調整が右側縁に限られており、製作途中と推定される。石材は頁岩４である。

スクレイパー（54・62・63）

調整縁・面を問わず、連続する剥離調整が１辺の２分の１以上におよぶものをスクレイパーとして登録した。刃部角は60°以下であり削器といえるものである。ＳＤ08から１点、Ⅲ層から２点出土した。54・62の石材は頁岩１で、54は縦長剥片の右側縁全域に調整が入る。62は欠損しており形態不明である。63の素材は頁岩２製の寸詰まりの剥片で、右側縁腹面側に刃部が形成されている。

二次加工ある剥片（64・65）

刃部調整と思われる剥離が１辺の２分の１に満たないもの、もしくは連続しないものをここに登録した。Ⅲ層から２点出土している。64は瑪瑙製で、石鏃未成品の可能性がある。65は頁岩１製で、右側縁に抉入状の調整が入る。

使用痕ある剥片（66・67）

剥離調整とは異なる微細剥離のみが確認されるものである。Ⅲ層から２点出土しており、石材はいずれも頁岩４である。66は不整形の小形剥片で、１辺の両面に微細剥離が連続する。67は規則的な剥片剥離により作出された剥片で、右側縁の両面全域に微細剥離が連続する。

石核（68～71）

Ⅲ層から４点出土した。石材は68～70が頁岩２、71は頁岩５である。いずれも両極剥離を多用している。69と70は接合するが、破局的な失敗剥離と考えられる。

磨製石斧（72）

Ⅲ層から１点出土した。片面には剥離調整痕が多く残存する。安山岩製である。

石皿？（55）

ＳＤ08から１点出土した。閃緑岩製で、磨痕が顕著である。破片であり形態は不明である。

円形礫

Ⅲ層から１点出土した。直径約５㎝のほぼ円形である。図・写真は掲載していない。

（３）土　師　器（第41・49～52図、第13・16表、写真図版26～28）

ａ）概要と分類の意味

出土総量は13,391.28ｇで、この地点別出土量を第13表に示した。遺構内出土分は10,900.87ｇで、全体の81.4％を占める。大半はＳＩ01・ＳＩ02の両竪穴住居跡から出土したものである。なかでも床面等出土遺物の重量は5,841.74ｇで、これは土師器総量の43.6％を占める。遺構検出数、遺物出土総量は少ないものの、良好な資料といえよう。なお、本報告書では全体の56.1％にあたる7,515.52ｇ・45点を掲載している。

以下、坏および甕に対しての分類を行う。といっても、前述のとおり少数量かつ少遺構数で、同時性を有する一括資料が主体であるため、従来の編年観的には大きく２時期に分かれるのみで、住居床面出土分にいたっては１時期に収まるものである。ただし、より細かい属性を設定することにより細分は可能で、それが共時的な空間検討の観点からは決して無意味ではないと判断し、細別を実施することとした。

ｂ）分　　類

坏

まず、全個体が有する共通属性について記載する。

・　体部から口縁部へかけて内湾する器形である。

・　体部外面に段あるいは沈線を有する。(75はあてはまらず。ただし口縁部上位破片で下位の様相不明のため対象外。)

また、底部形については残存するものが3点しかなく（85・114・115)、分類属性として抽出することができない。これら3点の形態は、85と115が体部と底部の境目の稜線が明瞭でない平底（いわゆる「平底風丸底」)、114が平底である。85はＳＩ02床面出土で、住居跡の年代決定指標足りえるものである。

分類に用いる属性と分類結果

段および沈線の状態を用いた。段であるのか沈線であるのか、施される部位、条数、状態により分類している。形態模式を第41図に示した。なお、各分類に該当する個体の器面調整方法を付記した。

A…体部中央に明瞭な沈線が1条施されるもの（87・115・116)。内・外面ともにヘラミガキ。前述のように115は「平底風丸底」である。

B…体部中央に太く稜の不明瞭な沈線の施されるもの（73)。外面は口縁部ヨコナデ、体部ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。なお、坏ではないが88の手づくね土器も同様の沈線が施される。

C…口唇下に浅い沈線が1条、体部中央に浅い段が1条施されるもの（111)。内・外面ともにヘラミガキ。大形で、サラダボール状の鉢の可能性がある。

D…口縁部に浅く不明瞭な沈線および段差が3条施されるもの（86)。中央の1条は沈線であるが、上下の2条は屈曲は確認されるもごく浅く、段とも沈線とも区別できない。立ち上がり方が他に比して直線的である。外面調整は劣化が激しく不明、内面はヘラミガキである。

E…体部中央に浅い段が1条施されるもの（85・101)。口縁部ヨコナデ、体部ヘラナデ。前述のように85は「平底風丸底」で、外面の一部にヘラケズリが認められる。

F…口縁部から体部にかけて浅い段が2条施されるもの（74)。調整の判別は摩滅が激しく困難であるが、口縁部にヨコナデ、内面にヘラミガキが確認される。

G…体部下位に明瞭な沈線が施されるもの（114)。底部のみの破片で、上位の状態は不明であることをお断りしておく。調整の判別は摩滅が激しく困難であるが、内面にヘラミガキが確認される。前述のように平底である。

甕

現在までの多くの研究事例では、甕は全体形によって長胴型、樽型、球胴型、小型に大別され、さらにそれぞれが最大径の位置により細分されてきた。後者の属性は時期差を示す指標として用いられるばあいがある。しかし今回の資料では、残存状態の関係上この属性を取得できるものが一部に限られるため、全体の分類基準とはせず、概要を述べるにとどめる。なお、前者の3分類は器種の組み合わせ・セット関係から年代を考える上での基本的な指標足りえる属性であり、ぎゃくにこれが判別できなければより細部の属性を用いた分類を実施しても意味を成さないと思われることから、分類対象資料は全体形が復元されたものおよび長胴型、樽型、球胴型、小型の4分類が推定可能なもの（胴部上半以上が残存するもの）とした。なお、今回は口縁部から頸部にかけての形態から看取された属性を用いて分類を試みるため、同部の残存は必須となる。以上のことを踏まえ、口縁部から胴部上半まで残存している資料を対象とし分類を実施した。なお、全個体に共通する属性はない。ここで付け加えておくが、全体形が復元された個体の特徴として、長胴型・小型に関しては体部最大径の位置が上半にあること、底径が大きく、体部最大径との比が小さめであることが言える。

分類に用いる属性と分類結果

前述のとおり、口縁部から頸部にかけての形態を用いた。大分類から小分類に至る属性の優先順位は次のとおりである。

① 口縁部の長さ。相対的に、長いもの…A、短いもの…Bの２種に分類した。

② 口唇部から口縁部上位にかけての形態。口唇部断面が山形を呈するもの…Ⅰ、口唇部が受け口状を呈するもの…Ⅱ、口唇部が曲線的に内湾しながら薄化するもの…Ⅲ、口縁部上位に段が１条施されるもの…Ⅳ、口縁部上位に段が１条、口唇部に沈線が１条施されるもの…Ⅴ、口唇部が丸いもの…Ⅵ、口唇部が平坦なもの…Ⅶ、口唇部が薄く尖るもの…Ⅷ、口唇部に沈線が１条施されるもの…Ⅸの８種に分類した。

③ 頸部の状態。段状を呈するもの…ａ、沈線の施されるもの…ｂ、単純に屈曲するもの…ｃの３種に分類した。

分類結果はこれらの組み合わせにより「ＡⅠａ」のように表記し、模式を第41図に示した。以下に各分類に該当する個体の器形、器面調整方法、底部の残存するものについてはその状態を記す。

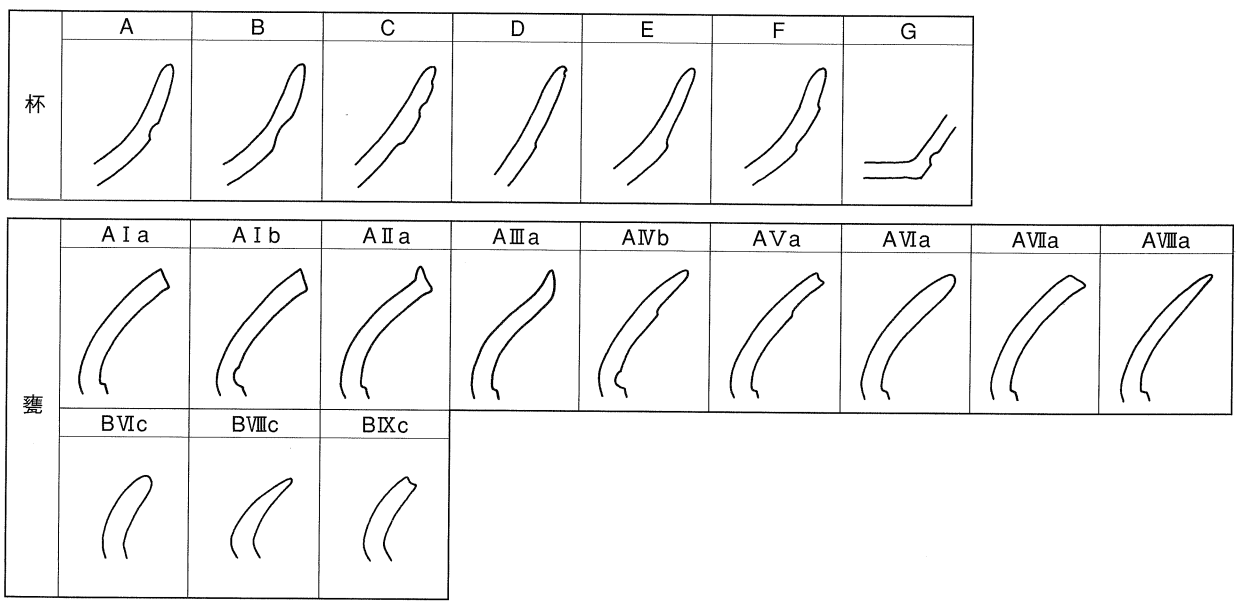
ＡⅠａ（76）…口唇部断面が山形を呈する。Ⅱと類似するが、口唇先端が受け口状か否かで分離している。器形は長胴型で、胴部最大径を上位にもつ。調整は外面口縁ヨコナデ、胴部ヘラミガキ。内面口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ。

ＡⅠｂ（91）…口唇部形態はＡⅠａと同様で、頸部に明瞭な沈線が入る。器形は長胴型で、胴部最大径を上位にもつ。調整は外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。

ＡⅡａ（77・89・90）…口唇部断面が山形を呈し、口唇先端は摘み上げたように受け口状に先細る。胴部最大径を最上位にもつ。77は底部が張り出す。調整は口縁内外面ヨコナデ、胴部は77が外面ヘラナデとハケメ、内面ハケメ。89・90が外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。

ＡⅢａ（108）…口唇部の薄化調整は曲線的で、内・外面とも連動して直立することから摘み上げ的な手法と考えられる。器形は球胴型である。調整は口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ、ハケメ。

ＡⅣｂ（95）…口縁部上位に段があり広く薄化する。器形は樽型である。調整は外面ヘラミガキ、内



第41図　土師器形態分類模式図

面ヘラナデ、ヘラミガキ。
ＡＶａ（96）…口唇部に沈線、口縁部上位に段があり広く薄化する。器形は球胴型である。調整は口縁ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。焼成が良く、他に比して異質である。
ＡⅥａ（117）…小型（壺）で、胴部最大径を中央にもつ。調整は口縁ヨコナデ、胴部外面ヘラナデ、ハケメ、内面ヘラナデ。
ＡⅦａ（112）…口唇断面が山形を呈さない。器形は長胴型で、胴部最大径を上位にもつ。調整は口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ。
ＡⅧａ（94）…口縁は強く外反し、口唇が薄く尖る。器形は長胴型である。調整は口縁部ヨコナデで、胴部は不明。
ＢⅥｃ（82・83）…口縁は短く、口唇が丸い。立ち上がり方が異なり、82は直立気味である。調整は82はヘラナデ、83はヨコナデ、胴部外面ヘラミガキ、内面ヘラナデ。
ＢⅧｃ（80）…口縁は短く強く外反し、口唇が薄く尖る。調整は口縁ヨコナデ、胴部ヘラナデ。
ＢⅨｃ（103）…口縁が短く、口唇に沈線が施される。器形は厚さが薄いことから小型と推定される。調整は口縁ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。
なお、製作時期的な検討についてはⅦ章で行う。

（4）鉄　製　品（第53図、第17表、写真図版29）

いずれも竪穴住居跡内から出土したものである。

板状鉄製品（118）

ＳＩ01床面中央付近から１点出土した。破片のため詳細不明だが、鍋の可能性がある。

刀子（119・120）

ＳＩ02のカマド左側西壁床面と埋土から１点ずつ出土した。119は４つに折損しているがほぼ完形である。120は基部側が欠損している。

（5）銭　　貨（第53図、第18表、写真図版29）

紹聖元寶１点、洪武通寶１点、寛永通寶２点が出土した。いずれも径が小さい、薄いなどの点から模鋳銭と思われる。

紹聖元寶（121）

遺構外のＪⅣ41グリッドⅢ層から出土した。北宋銭で初鋳造年は1094年である。篆書である。

洪武通寶（122）

市道穴久保線以北で表採された。明銭で初鋳造年は1368年である。

寛永通寶（123・124）

124は市道穴久保線以北で表採、123は出土地点不明である。劣化が激しく、古・新の別は不明である。

このほか、ＳＫ10近世墓から寛永通寶５枚が出土した。図示はしていない。

（6）木　製　品（第54・55図、第19表、写真図版30）

木材３点と製品１点が出土した。

柱材（125・126）

２点出土した。125はＳＡ01Ｐ３に残存していたもので、最下部のみである。劣化が激しく、正確

な径は不明。12.1cm以上である。樹種はクリで、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定結果は^{14}Ｃ年代で940±40yrBP、較正暦年代は95.4％の信頼度で1010ＡＤ～1190ＡＤの可能性があるとされた（Ⅵ章１節参照）。126はＫⅢ30Ｐ２に残存していたもので、Ⅳ層To-aを掘り込んでいる。面取りしてあり、多角形（十角形ほど）を呈する。上端は欠損・収縮しているが下部は劣化がほとんどなく、直径19.1cm、残存長83.9cmを測る。

杭（127）

ＫⅢ60グリッドのⅣ層To-a上面で検出された。欠損しており、残存長71.2cm、直径8.2cmを測る。樹種はムシカリである。

掘り棒状木製品（128）

ＫⅣ21グリッドから出土した。当初、Ⅳ層To-a以下から出土したものと思われたが、ＳＫ10近世墓プランと隣接しており、この土坑埋土に含まれていた可能性がある。両面とも調整されており、先端部は尖頭状に、基部は筒状に整形されている。形態から掘り棒状としたが、用途は不明である。墓標の可能性も考えられる。樹種はクリで、ＡＭＳ法による放射性炭素年代測定結果は^{14}Ｃ年代で130±40yrBP、較正暦年代は39.8％の信頼度で1660ＡＤ～1780ＡＤ、55.6％の信頼度で1790ＡＤ～1950ＡＤの可能性があるとされた（Ⅵ章１節参照）。この結果もＳＫ10近世墓に伴うという可能性を強化するものである。

このほか、ＳＫ10近世墓から漆塗りの椀４点、曲物１点、櫛１点、断面六角形に加工された木材３点が出土した。図示はしていない。

（７）磁　　器（第55図、第20表、写真図版29）

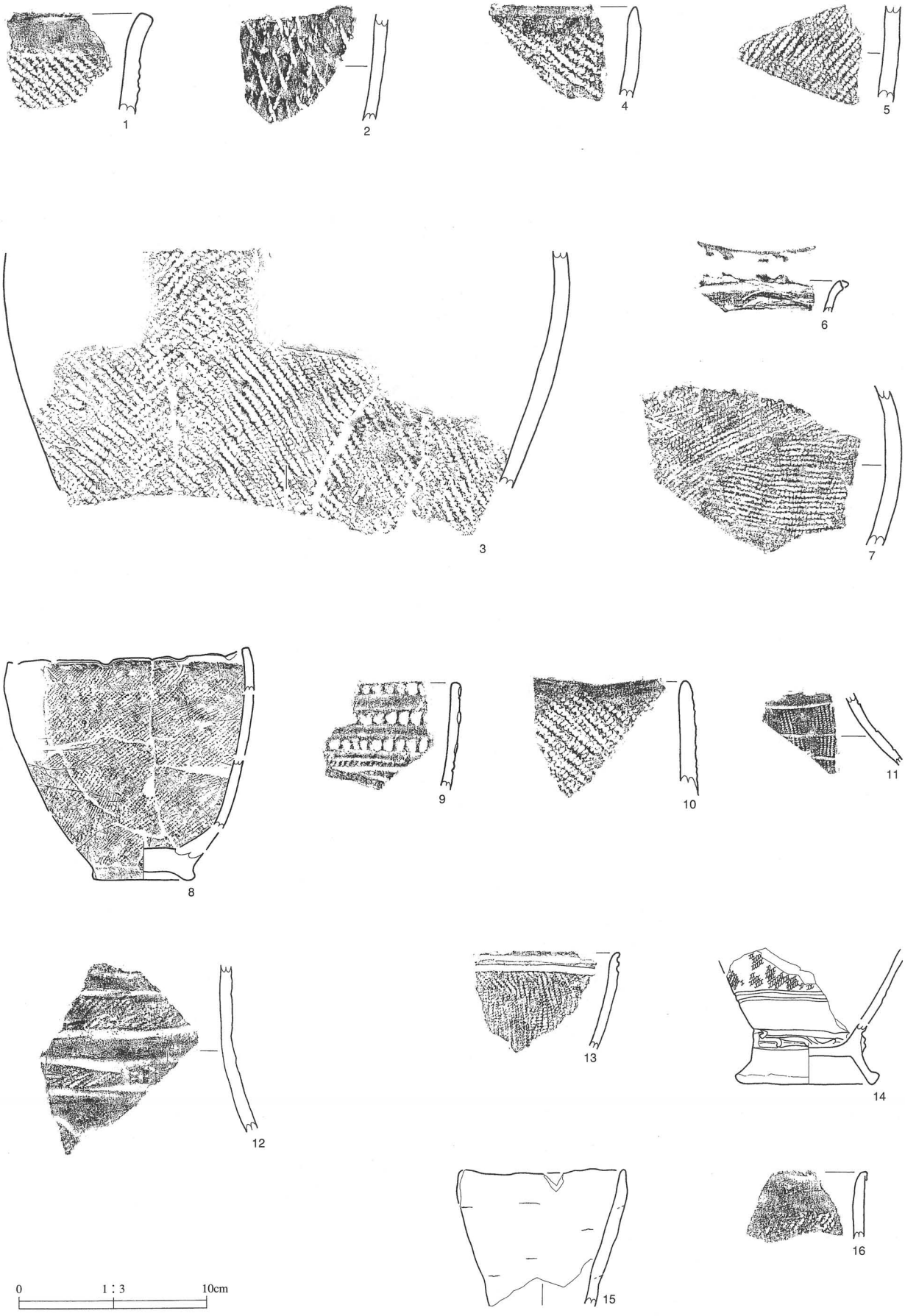
129は町道穴久保線北側において表採された中国産青磁皿の底部破片である。底径は5.3cm、残存高は1.0cmである。底部は円周の約1/4が残存する。釉薬は7.5GY6/1緑灰色の色調を呈し、器内面と高台内部を除く外面全体に施されている。釉の厚さは0.8mm程で、全体に細かい貫入が入る。高台の畳付にも釉が施されている。胎土は非常に緻密で硬く、Ｎ６/灰色を呈する。見込みには、釉で埋もれて明瞭ではないが、線彫りの花文が認められる。この花文と残存している器形等から、本品は口縁部が輪花で腰部が折れる、「青磁劃花文稜花皿」と判断できる。

（８）植　物　遺　体

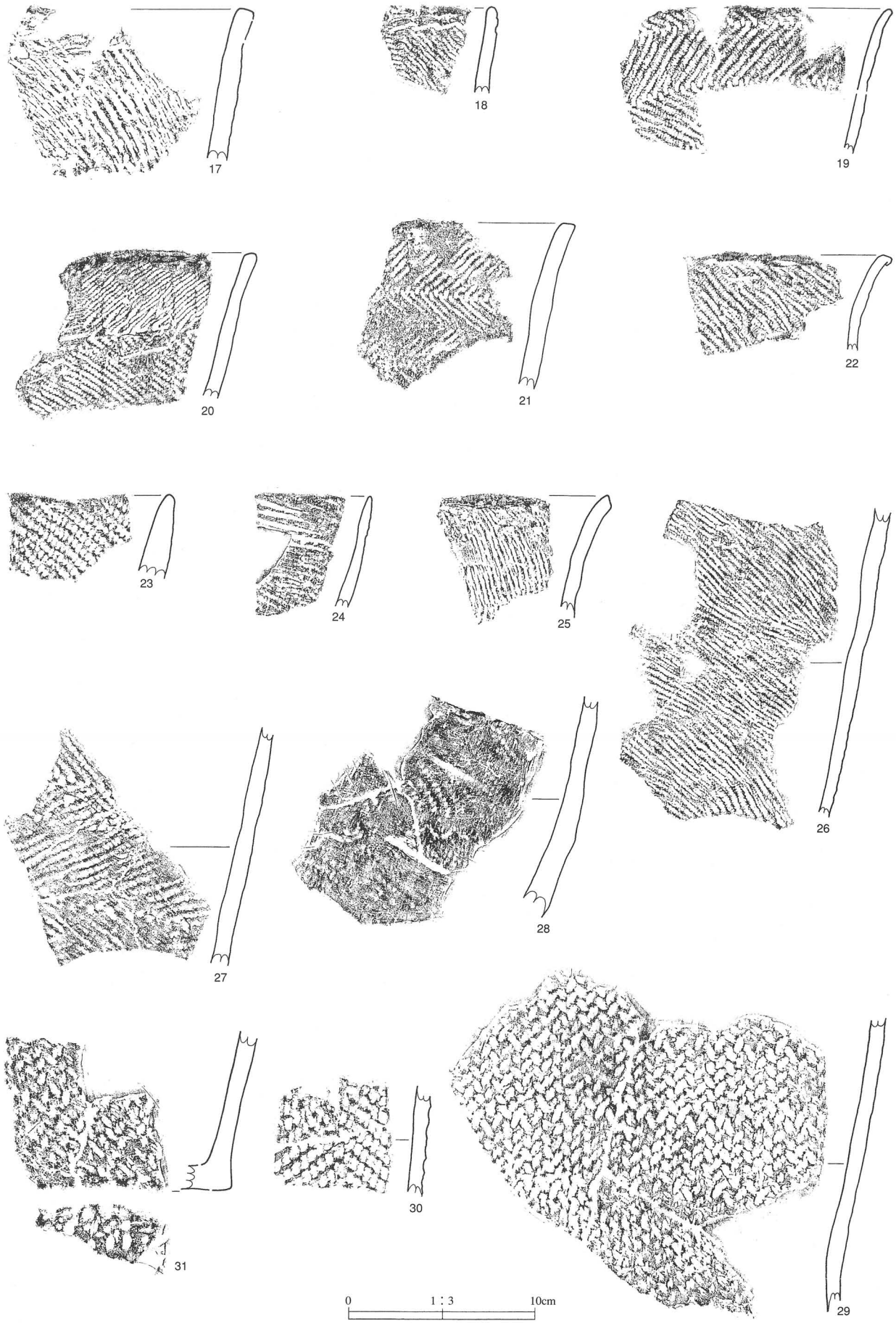
ＳＩ02カマド燃焼部上堆積土からキビ、オニグルミ、ＳＸ05・ＳＸ06埋土からイネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、オニグルミ、トチノキ等が検出された。詳細はⅥ章４節を参照いただきたい。

このほか、ＳＫ10近世墓からクルミ１点が出土した。図示はしていない。

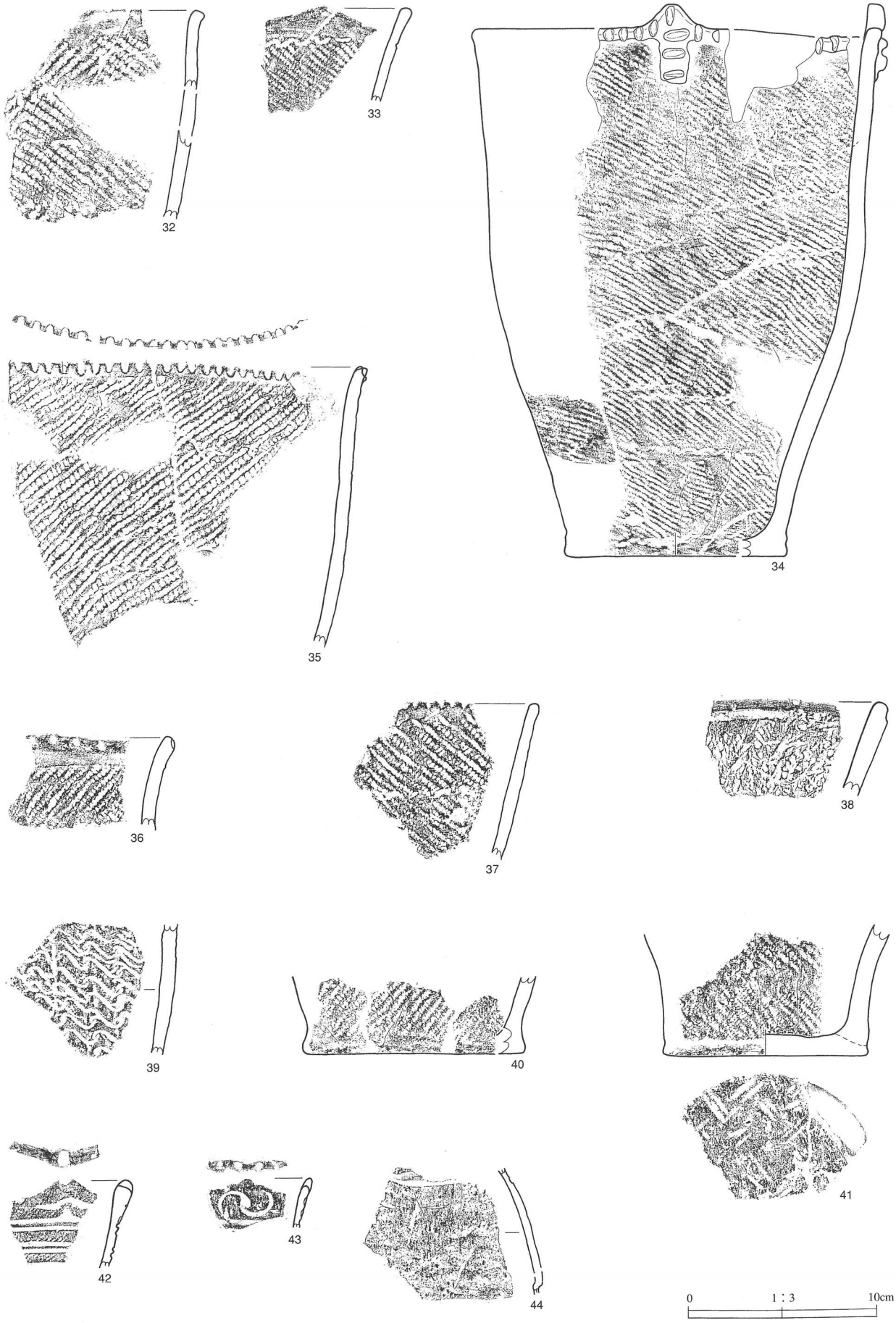
（丸山）



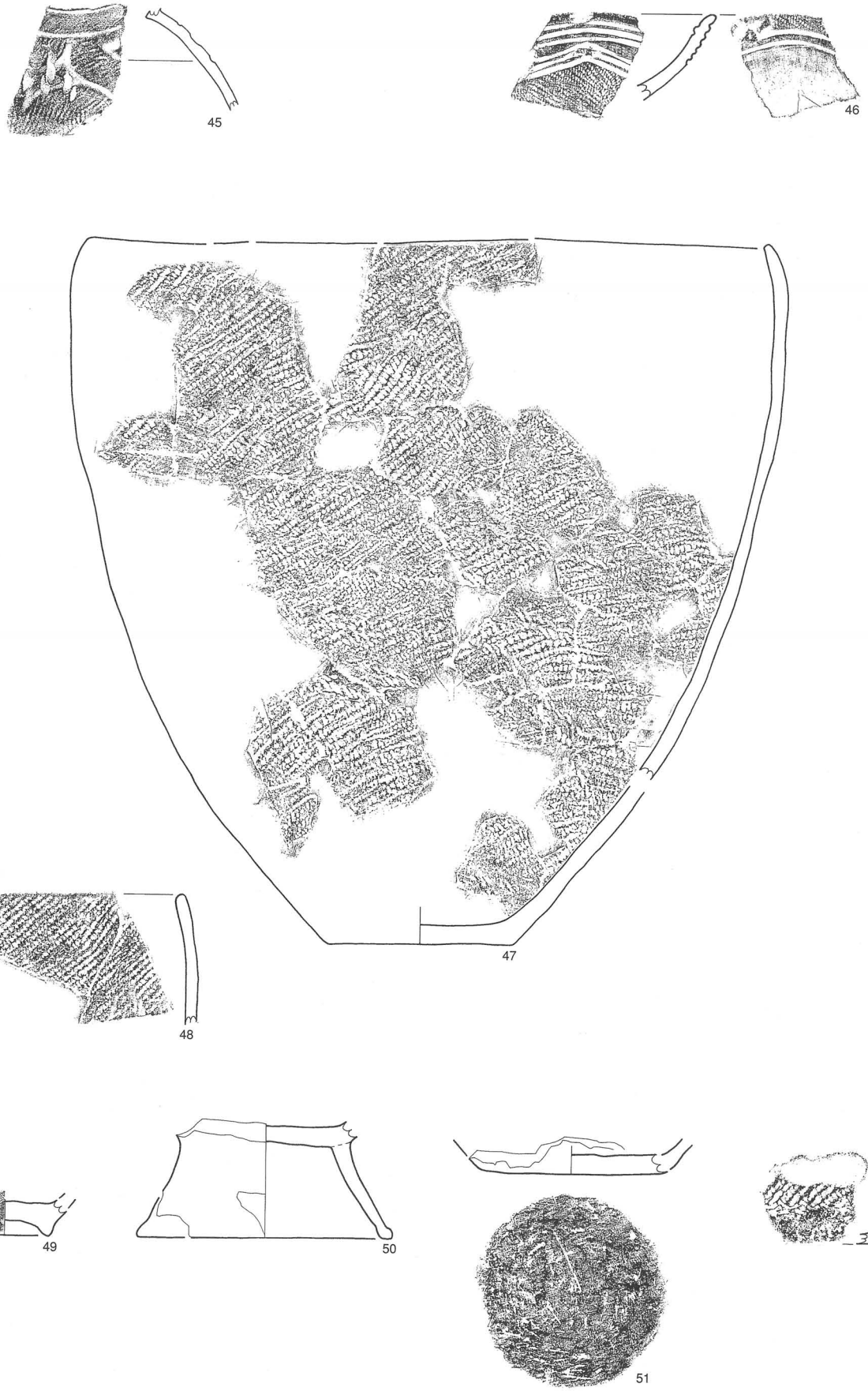
第42図　縄文土器（1）



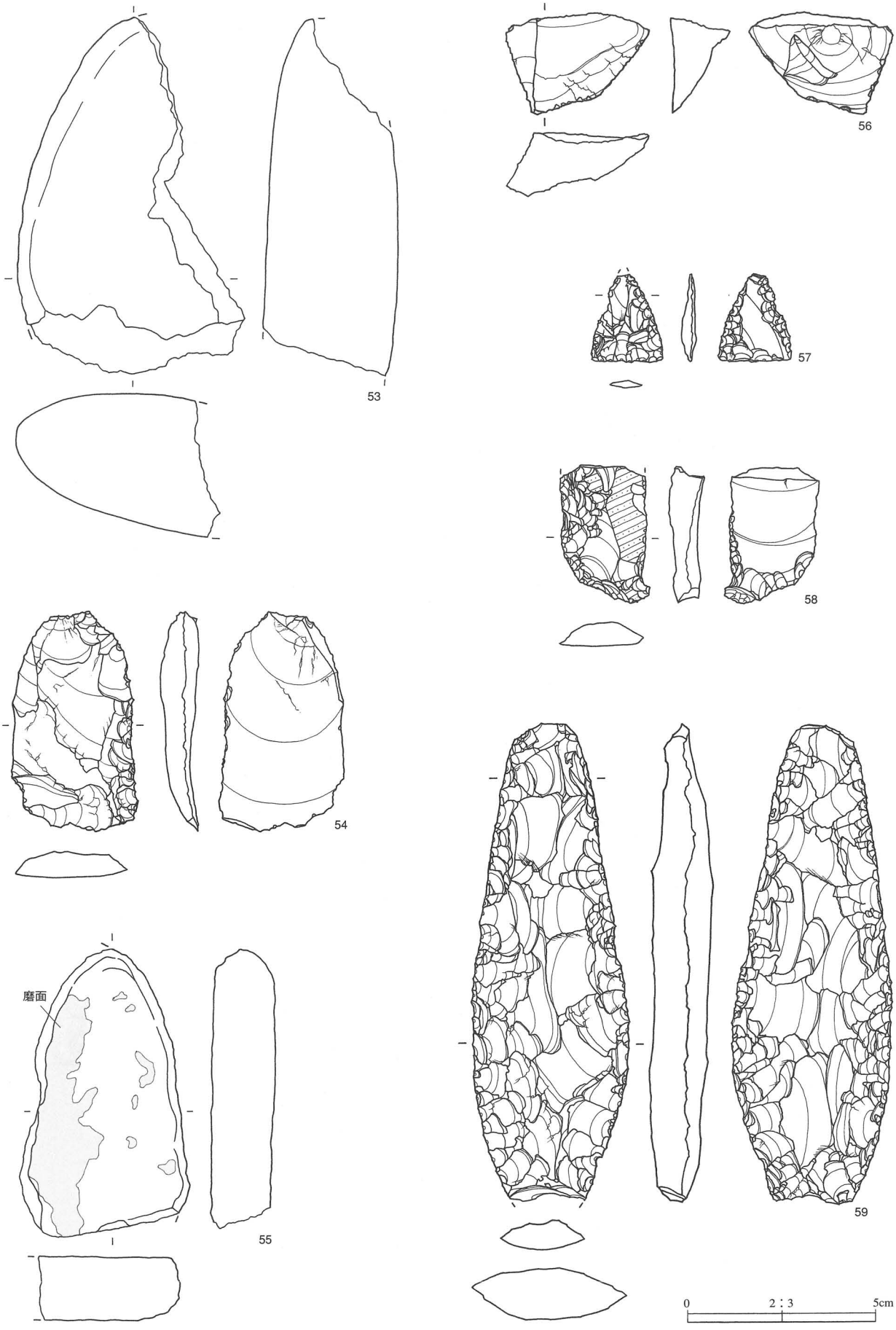
第43図　縄文土器（2）



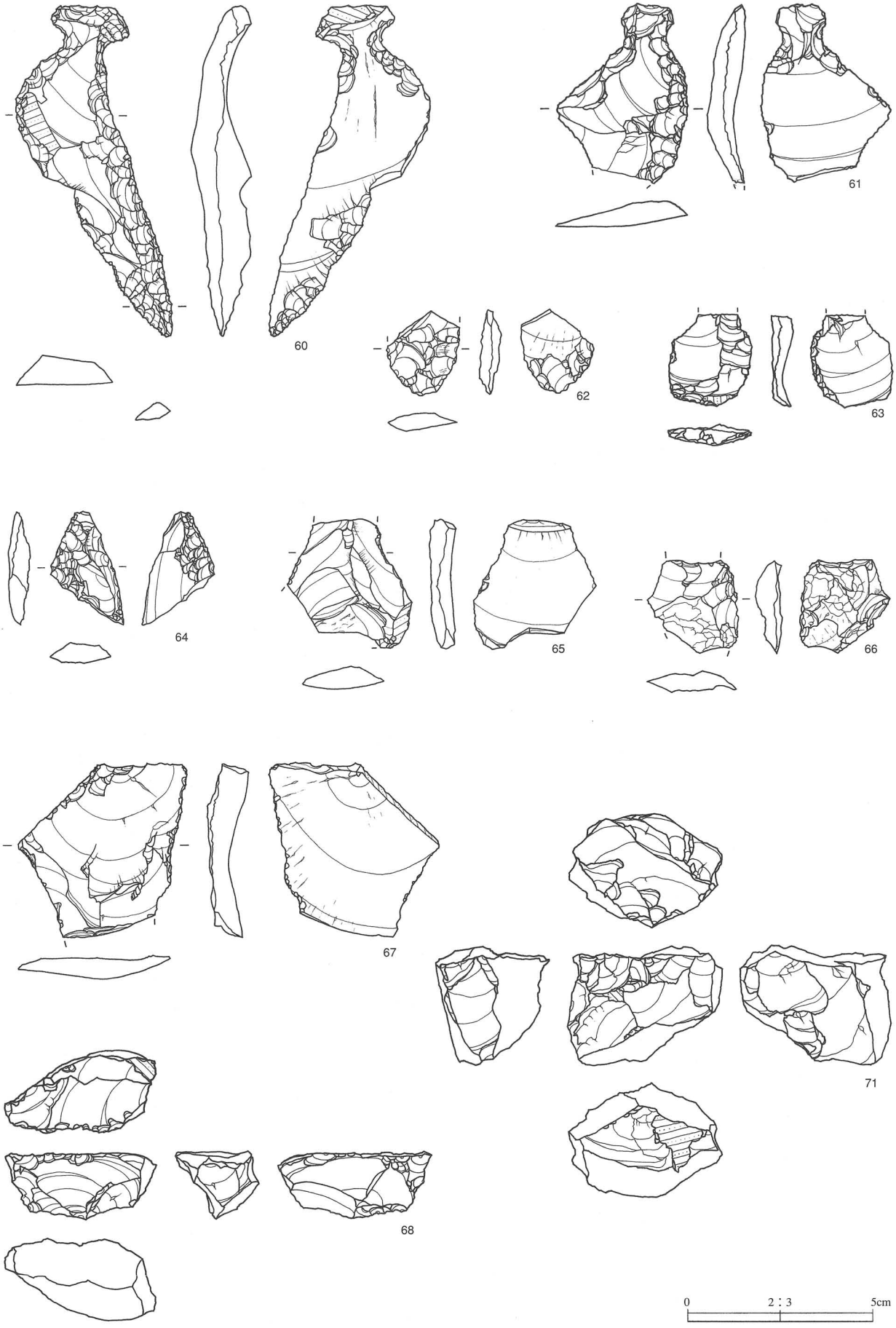
第44図　縄文土器（３）



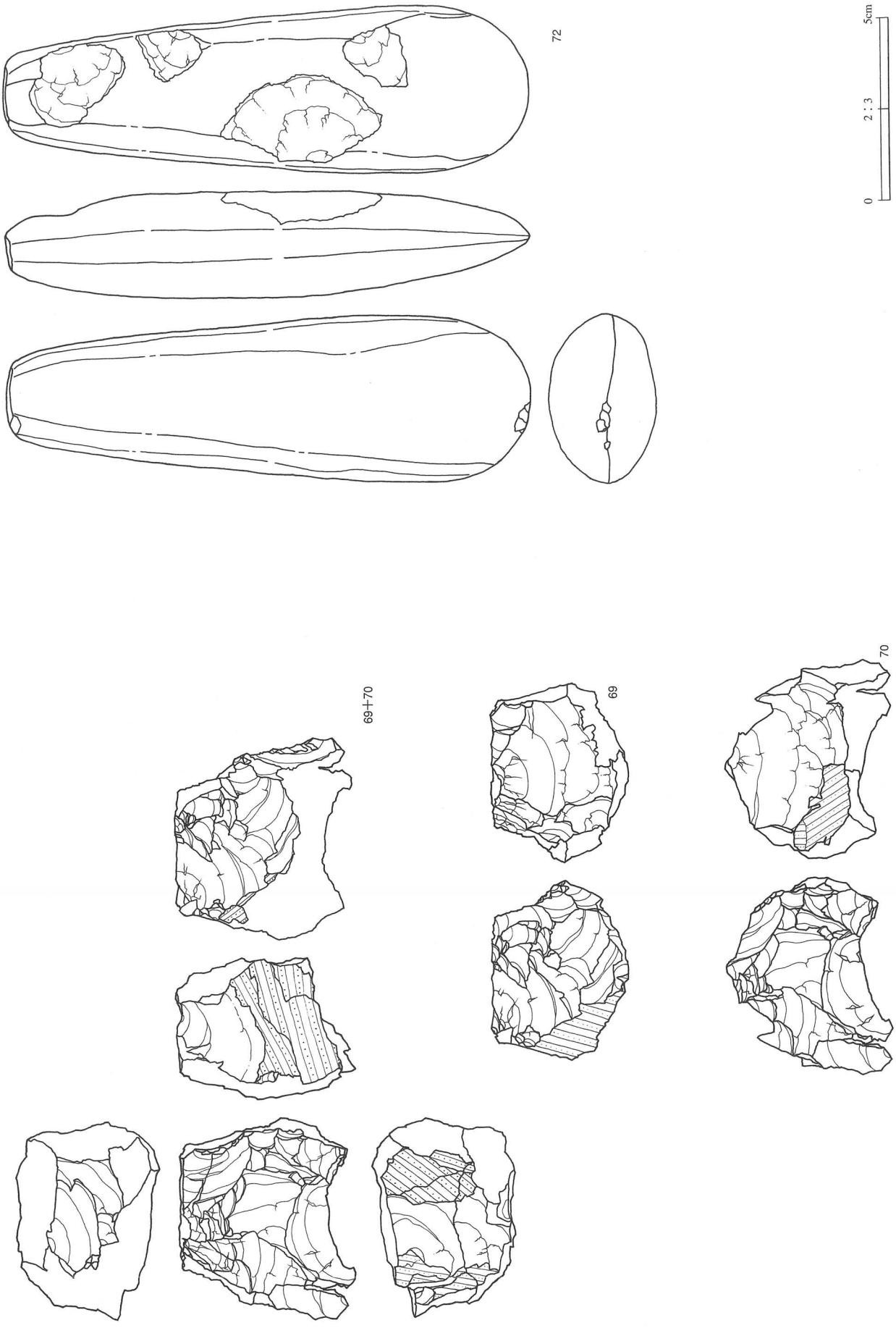
第45図　縄文土器（4）



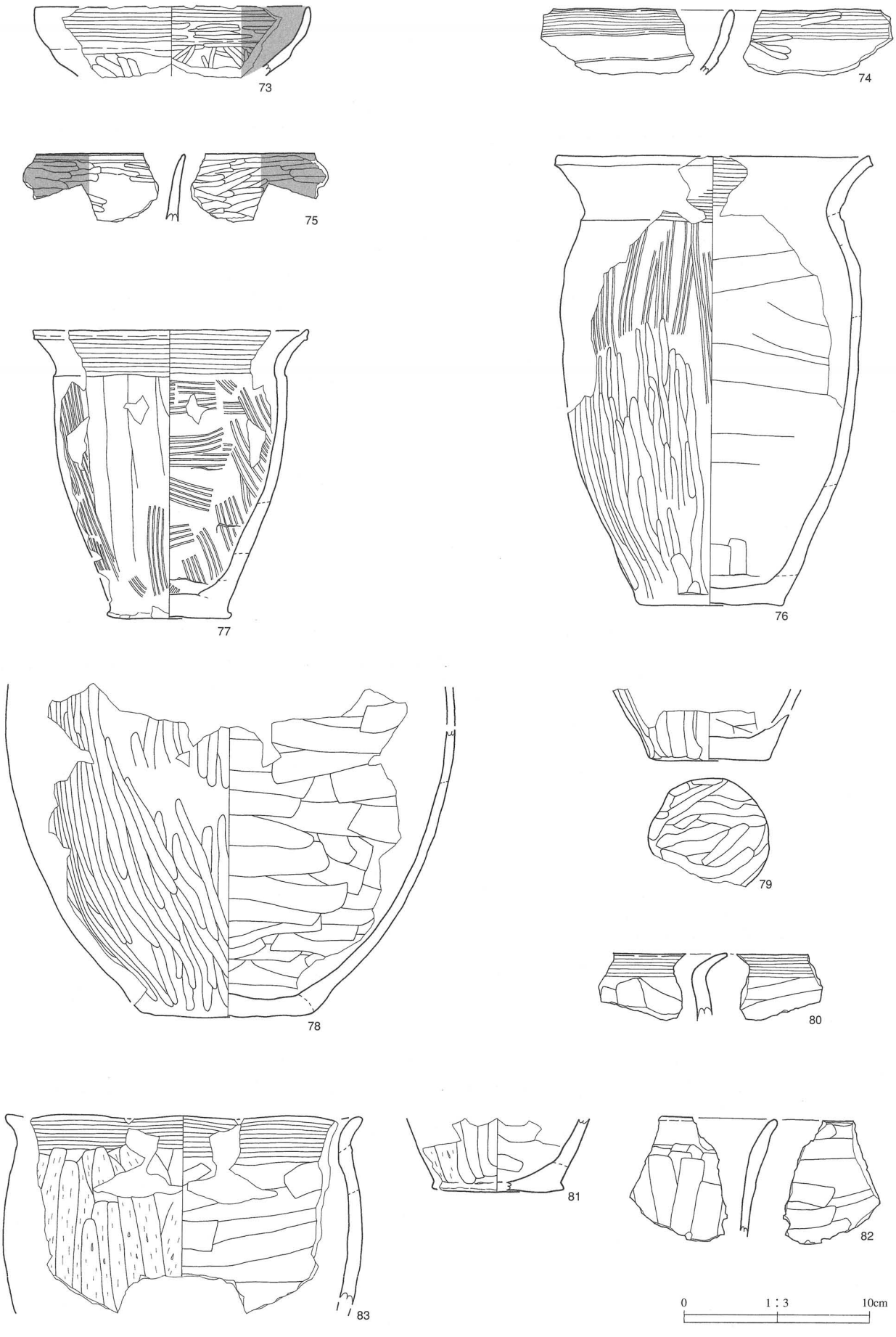
第46図　石器（1）



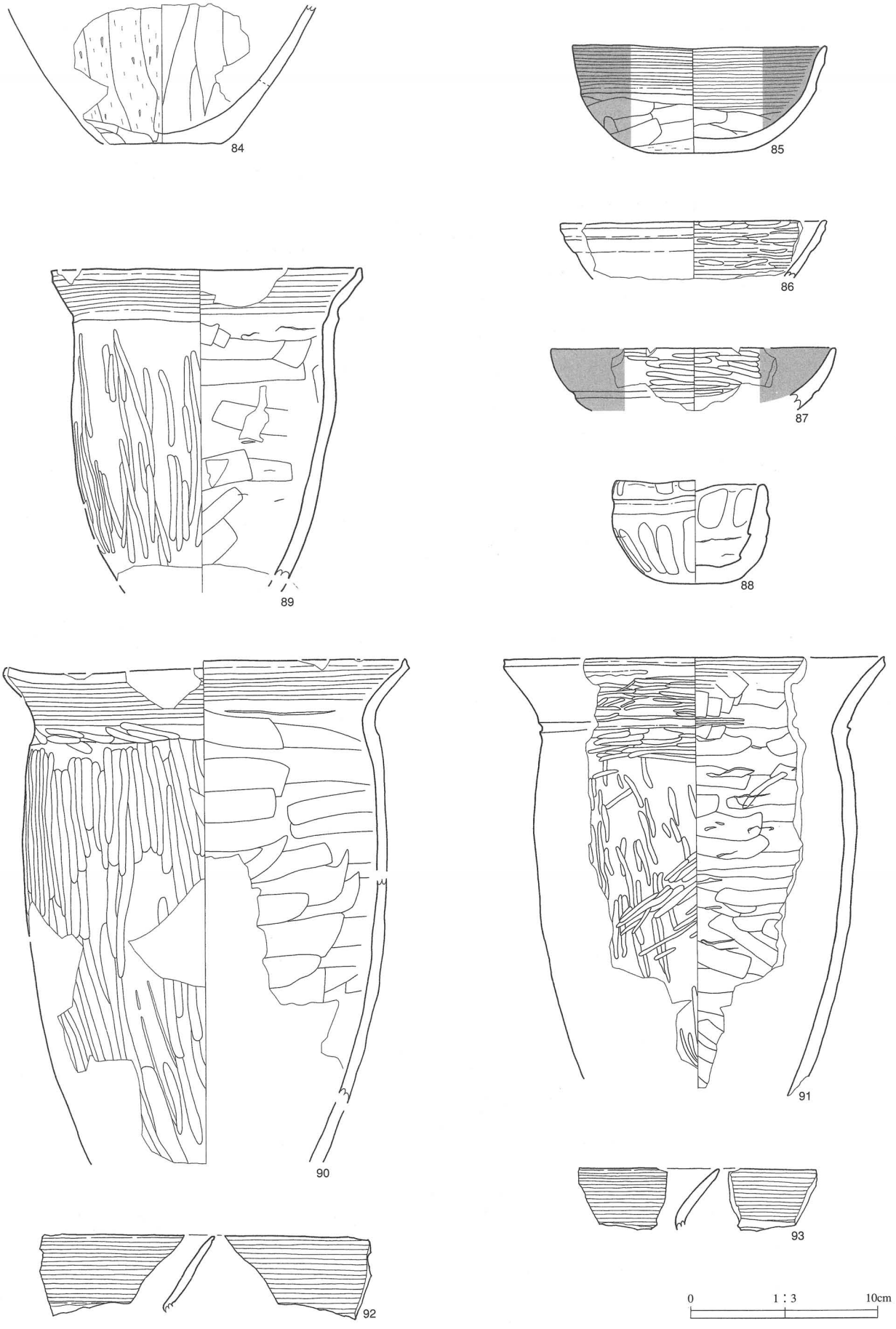
第47図　石器（2）



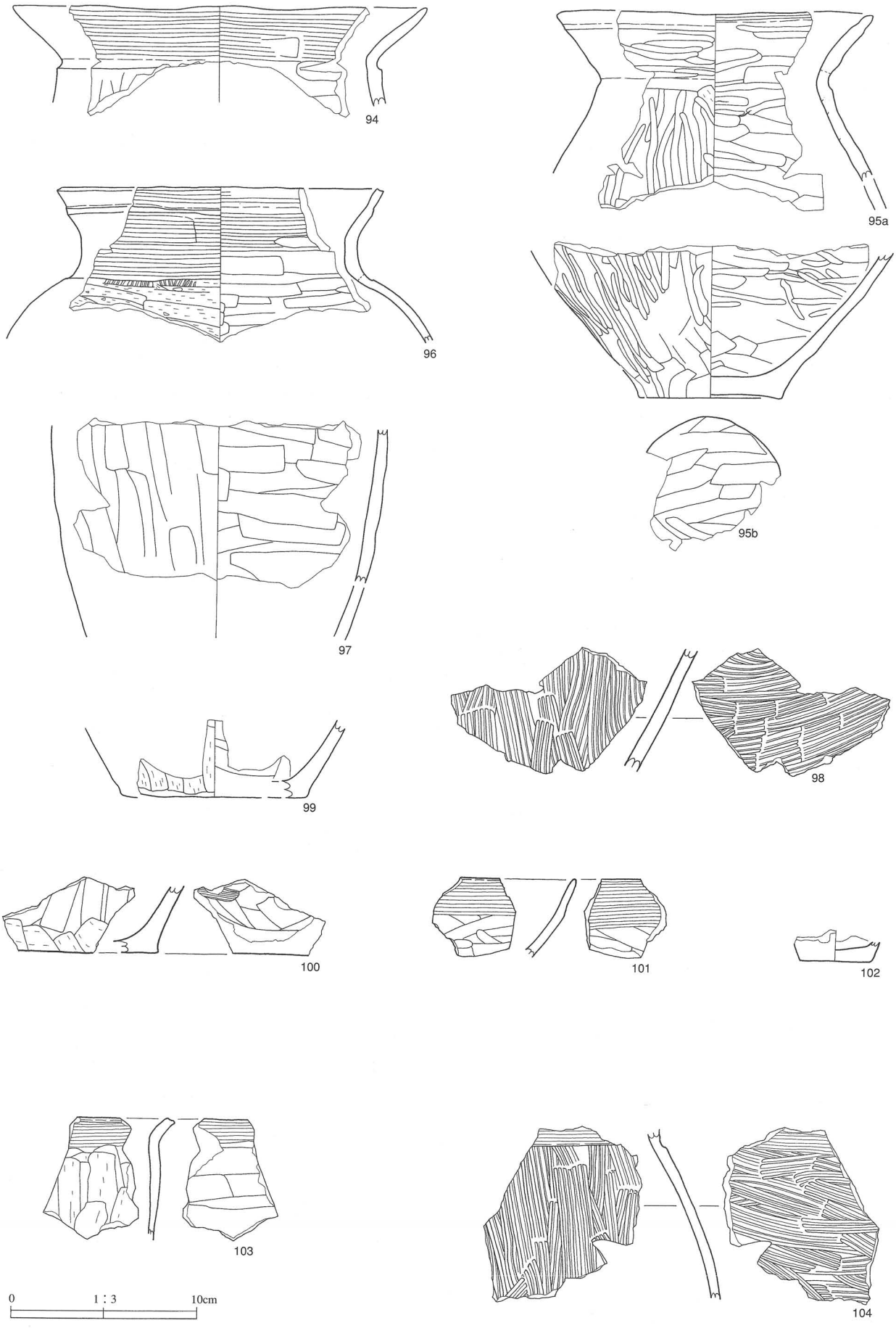
第48図　石器（3）



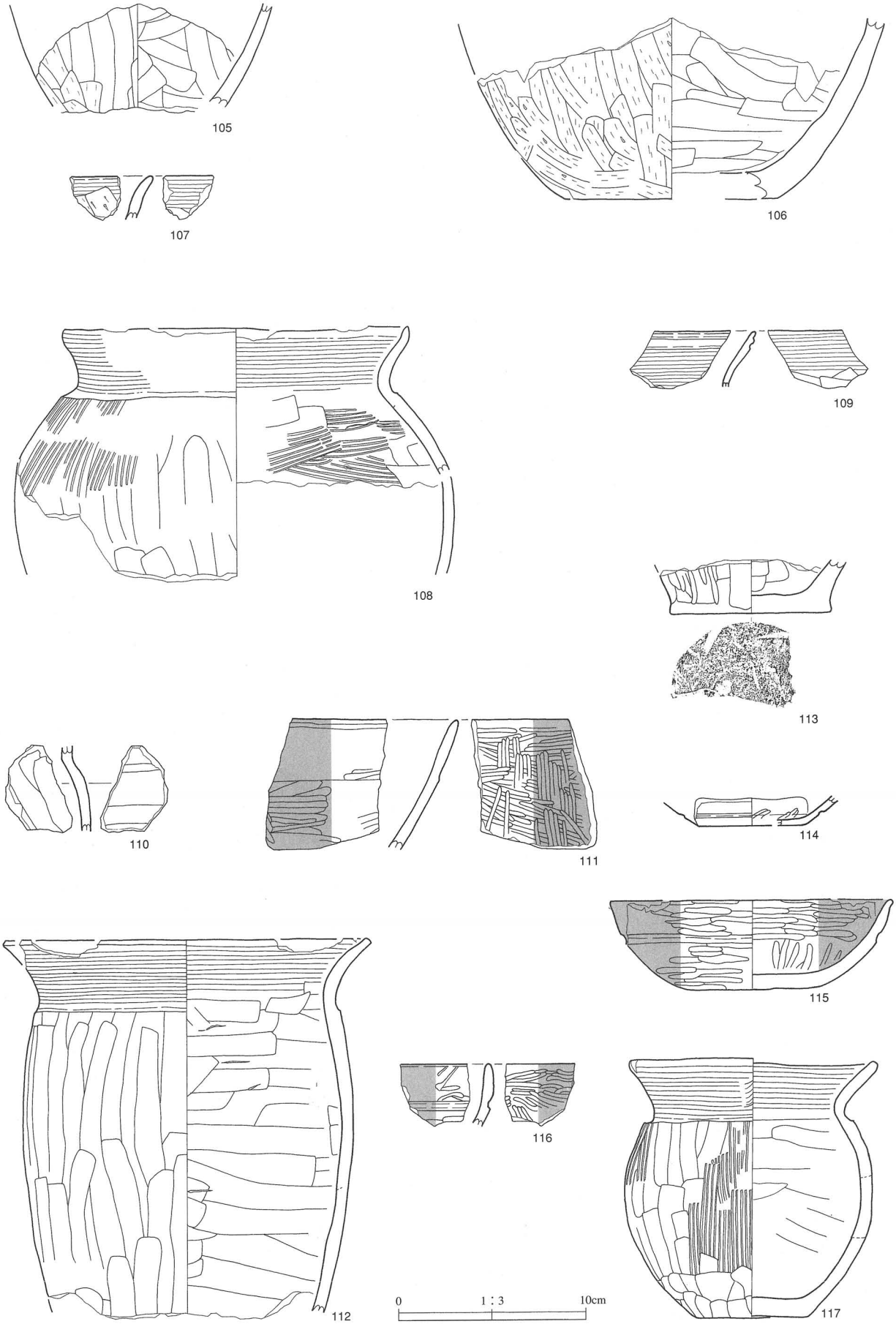
第49図　土師器（1）



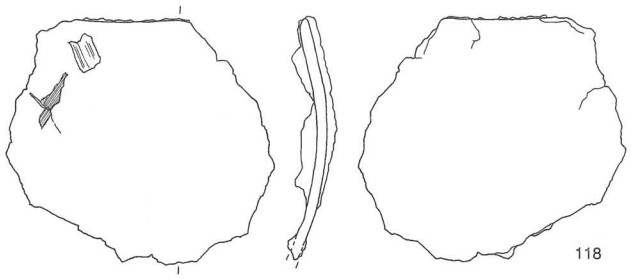
第50図　土師器（2）

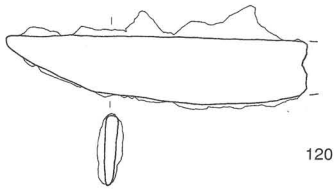


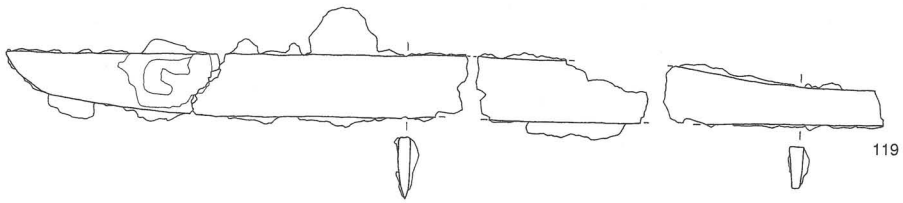
第51図　土師器（3）



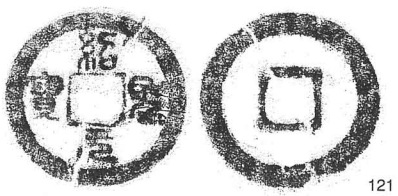
第52図　土師器（４）

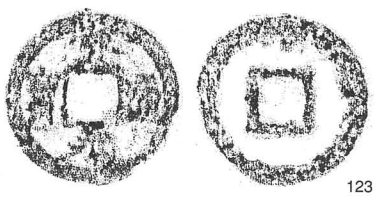

118

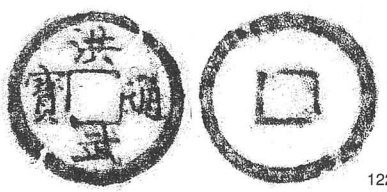

120

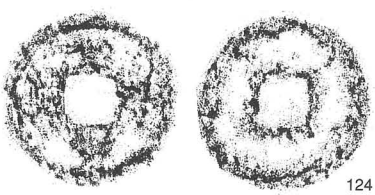

119

0　1：2　5cm


121

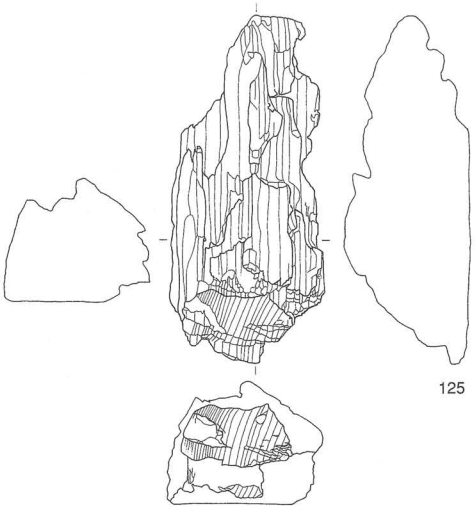

123

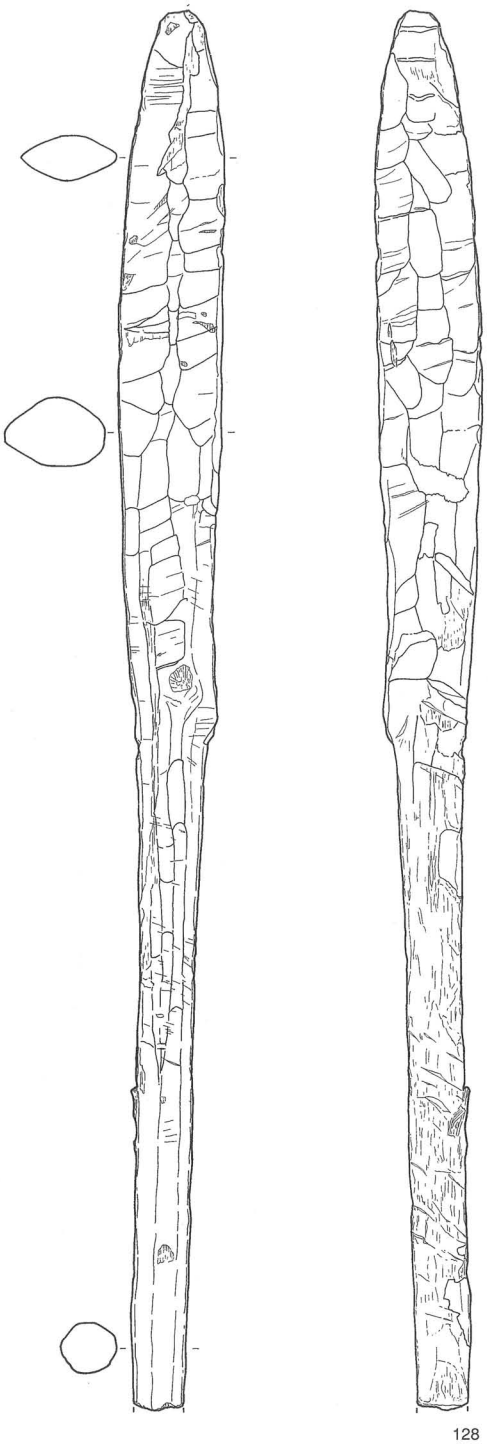

122

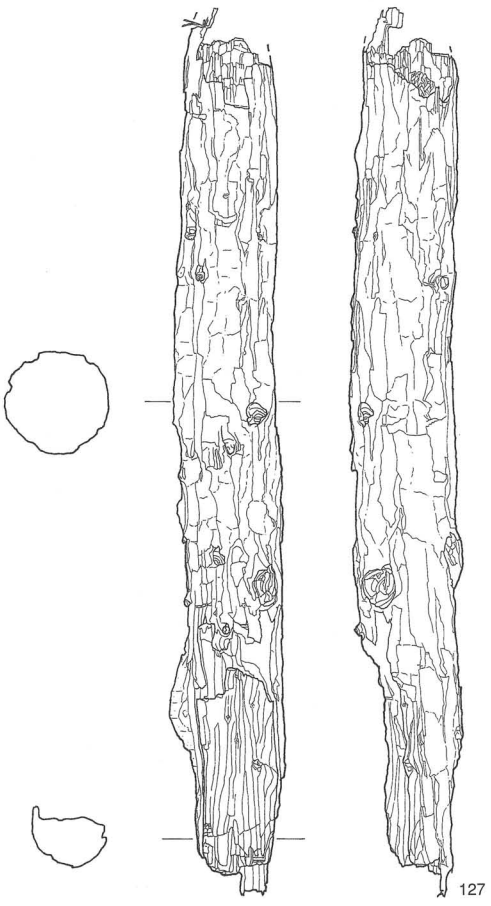

124

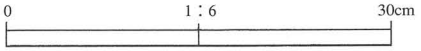
0　1：1　5cm

第53図　鉄製品、銭貨

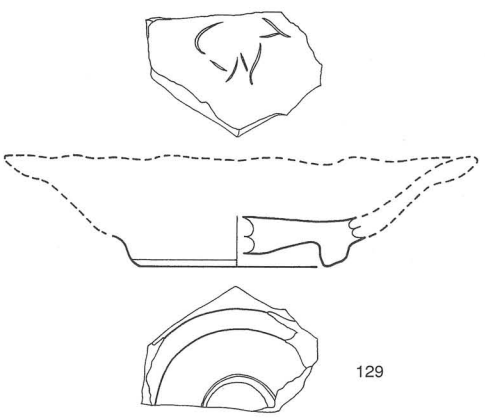


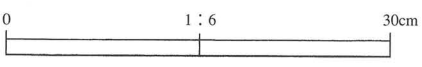


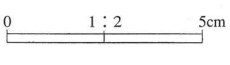




第54図　本製品（1）







第55図　木製品（2）、磁器

第10表　縄文土器地点別出土重量

出土地点　層位　その他	重量（g）	出土地点　層位　その他	重量（g）	出土地点　層位　その他	重量（g）
ＳＩ01 Ｎベルト３層	3.39	ⅠⅣ51 Ⅳ層	40.64	ＬⅣ08 Ⅲ層	242.37
ＳＩ01 Ｐ16	38.22	ⅠⅣ91 Ⅲ層	16.04	ＬⅣ19 Ⅲ層	21.81
ＳＩ01 Ｐ７	35.74	ＪⅢ16 Ⅰ層	12.10	ＬⅣ21 Ⅱ層	17.27
ＳＩ01 床面Ｐ４	54.81	ＪⅢ19 Ⅳ層	19.80	ＬⅣ21 Ⅱ層	124.34
ＳＩ01 QNE北壁際４層	3.86	ＪⅢ20 Ⅲ層	34.09	ＬⅣ21 Ⅴ層	422.41
ＳＩ01 QNW埋土４層	87.30	ＪⅢ26 Ⅰ層	88.71	ＬⅣ21 Ⅴ層	59.94
ＳＩ01 QSW埋土３層	9.19	ＪⅢ30 Ⅲ層	14.83	ＬⅣ31 Ⅴ層	57.36
ＳＩ01 QNE東壁際１層	1.77	ＪⅢ46 Ⅰb層	3.62	ＬⅣ50 Ⅳd層相当砂層	786.27
ＳＩ01 QSE東壁際１層	8.60	ＪⅢ47 Ⅳ層	8.01	ＬⅤ02 Ⅲ層	15.07
ＳＩ02 QNE床面③Ｐ４埋土２層	18.99	ＪⅢ48 Ⅱ層	4.13	ＬⅤ11 Ⅲ層	98.22
ＳＩ02 QSW５層上位	7.41	ＪⅢ50 Ⅳ層	95.27	ＬⅤ12 Ⅲ層	2,294.14
ＳＩ02 QNE埋土	31.07	ＪⅢ78 Ⅴ層	396.20	ＬⅤ22 Ⅲ層	293.21
ＳＫ01 埋土２層	30.76	ＪⅢ88 Ⅴ層	45.07	ＬⅤ23 Ⅲ層	28.50
ＳＫ02 Ｐ２(５層)	79.57	ＪⅢ89 Ⅲ層	32.14	ＬⅤ32 Ⅲ層	948.82
ＳＫ02 Ｐ３(５層)	42.92	ＪⅢ93 Ⅲ層	10.20	ＬⅤ33 Ⅲ層	3,087.14
ＳＫ02 Ｐ４(５層)	24.45	ＪⅢ100 Ⅲ層（To－a面）	36.16	ＬⅤ42 Ⅲ層	119.51
ＳＫ02 Ｐ６(５層)	33.75	ＪⅢ100 Ⅲ層（To－aより上）	12.76	ＬⅤ43 Ⅲ層	452.38
ＳＫ02 埋土	661.14	ＪⅣ01 Ⅲ層	26.94	ＬⅤ52 Ⅲ層	64.11
ＳＫ08 埋土上位	27.22	ＪⅣ41 Ⅲ層	33.22	ＬⅤ53 Ⅲ層	524.10
ＳＤ01 確認面～埋土	9.65	ＪⅣ81 Ⅲ層（To－aより上）	6.20	ＬⅤ54 Ⅲ層	894.98
ＳＤ04 埋土	38.85	ＪⅣ91 Ⅲ層（To－aより上）	21.42	Ｔ47 埋め戻し土	23.74
ＳＤ07 埋土	59.70	ＫⅢ08 Ⅲ層	15.40	Ｔ28 盛土	31.11
ＳＤ08 埋土	283.28	ＫⅣ89 Ⅲ層	115.45	Ｔ33	294.12
ＳＤ09 埋土	9.03	ＫⅣ93 植物遺体層トレンチ②	81.72	Ｔ33 埋め戻し土	150.90
ＳＸ01 14層	5.61	ＫⅤ81 Ⅲ層	28.79	Ｔｂ 盛土	78.23
ＳＸ14 埋土	7.40	ＬⅢ49 Ⅲ層	16.24	Ｔｅ	23.87
ⅠⅢ95 Ⅴ層	66.46	ＬⅢ50 Ⅲ層	25.98	表採 北区	56.51
ⅠⅢ98 Ⅴ層	26.78	ＬⅢ59 Ⅲ層	66.23	表採	97.66
ⅠⅢ99 Ⅴ層	13.16	ＬⅢ69 Ⅲ層	33.24	合計重量	14,791.64
ⅠⅢ100 Ⅴ層	416.30	ＬⅣ02 Ⅳ層相当（To－a下）	6.57		

第11表　石器地点別出土量

出土地点　層位　その他	点数	重量（g）
ＳＩ01 床面	1	151.23
ＳＩ02 床面	2	202.65
ＳＫ08 埋土	1	25.01
ＳＤ08 埋土	4	131.43
ＳＸ15 埋土	3	38.16
ＳＸ16 埋土	1	6.16
ＬⅣ21 Ⅱ層	1	20.33
ＪⅢ20 Ⅲ層	1	14.60
ＪⅢ99 Ⅲ層	1	247.49
ＫⅢ20 Ⅲ層	1	273.37
ＫⅣ88 Ⅲ層	1	21.66

出土地点　層位　その他	点数	重量（g）
ＬⅤ22 Ⅲ層	2	138.10
ＬⅤ32 Ⅲ層	8	136.46
ＬⅤ33 Ⅲ層	19	304.75
ＬⅤ43 Ⅲ層	4	11.23
ＬⅤ53 Ⅲ層	1	12.41
ＬⅤ54 Ⅲ層	2	6.33
ＬⅣ50 Ⅴｄ層相当砂層	2	8.28
地点不明　Ⅴ層	1	6.70
ⅠⅢ99 Ⅵ層	1	1.41
ＬⅣ21 Ⅵ層	1	11.62
生文課Ｔ46　埋め戻し土	1	35.18
合計	59	1,804.56

第12表　石器母岩別出土量

母岩名	産地等	色調等分類基準	出土点数	重量（g）		
				掲載	不掲載	計
頁岩１	奥羽山脈・新生代新第三紀	7.5YR3.5/1黒褐～褐灰色	4	47.95	0.00	47.95
頁岩２	奥羽山脈・新生代新第三紀	10YR4/3にぶい黄褐色　珪質分高い	23	104.64	167.01	271.65
頁岩３	奥羽山脈・新生代新第三紀	10YR4/5褐色	2	0.00	41.34	41.34
頁岩４	奥羽山脈・新生代新第三紀	N2/0黒色	7	36.97	7.00	43.97
頁岩５	奥羽山脈・新生代新第三紀	10YR4/4褐色　マーブル・不透明で２より珪質分低い	3	38.89	152.64	191.53
頁岩６	奥羽山脈・新生代新第三紀	2.5YR6/2灰赤色ベースに黒色縞　珪質分高い	2	0.00	9.08	9.08
頁岩７	奥羽山脈・新生代新第三紀	2.5Y7/3浅黄色	2	0.00	11.66	11.66
赤色頁岩	北上山地・中生代三畳紀～ジュラ紀		2	94.91	25.85	120.76
チャート１	北上山地・中生代三畳紀～ジュラ紀	10R3/3～4/4暗赤褐～暗赤色	3	0.00	28.95	28.95
チャート２	北上山地・中生代三畳紀～ジュラ紀	10R4/4赤褐色　珪質分低い	2	0.00	3.64	3.64
チャート３	北上山地・中生代三畳紀～ジュラ紀	N7/0灰白色	1	0.00	123.40	123.40
デイサイト	奥羽山脈・新生代新第三紀	2.5YR3～4/1暗赤灰～赤灰色	1	0.00	8.80	8.80
瑪瑙	奥羽山脈・新生代新第三紀	10YR7/1灰白色、風化部分は2.5Y8/6黄色　珪化木	2	2.41	63.95	66.36
安山岩	奥羽山脈・新生代新第三紀		3	472.23	247.49	719.72
閃緑岩	北上山地・中生代白亜紀		1	108.35	0.00	108.35
合計			58	906.35	890.81	1797.16

第13表　土師器地点別出土重量

出土地点　層位　その他	重量（g）	出土地点　層位　その他	重量（g）	出土地点　層位　その他	重量（g）
ＳＩ01 床面Ｐ３	3.60	ＳＩ02 QNE床面③	413.07	ＳＸ01 Ｐ５（13層）	11.18
ＳＩ01 床面Ｐ５	2.90	ＳＩ02 QNE床面④	13.06	ＳＸ01 Ｐ６（13層）	12.06
ＳＩ01 床面Ｐ12	34.79	ＳＩ02 カマド左袖上	177.94	ＳＸ01 Ｐ７（13層）	12.92
ＳＩ01 床面Ｐ15・16　Pit付近	436.85	ＳＩ02 カマド左袖床面レベル（６層）	115.14	ＳＸ01 Ｐ８（14層）	122.54
ＳＩ01 床面Ｐ18	222.00			ＳＸ01 Ｐ９（４層）	420.79
ＳＩ01 床面Ｐ20	17.59	ＳＩ02 カマド右袖６層	312.43	ＳＸ01 Ｐ10（14層）	109.63
ＳＩ01 床面Ｐ20，カマドＰ２	167.55	ＳＩ02 カマド燃焼部直上（２層）	68.24	ＳＸ01 Ｐ11（14層）	63.05
ＳＩ01 床面Ｐ21	112.72			ＳＸ01 Ｐ12（14層）	6.19
ＳＩ01 床面Ｐ22	58.07	ＳＩ02 カマド11層	133.40	ＳＸ01 Ｐ13（14層）	31.96
ＳＩ01 カマド左袖Ｐ１　床面Ｐ17	184.11	ＳＩ02 カマド煙道７層	53.62	ＳＸ01 Ｐ14（14層）	3.82
		ＳＩ02 カマド５層	57.65	ＳＸ01 Ｐ15（14層）	21.16
ＳＩ01 カマドＰ２	5.58	ＳＩ02 カマド右袖わき最下層	288.49	ＳＸ01 Ｐ16（14層）	7.07
ＳＩ01 床直Ｐ９	20.00	ＳＩ02 カマド右袖煙道内部（2・5層）	382.65	ＳＸ01 Ｐ18（14層）	25.33
ＳＩ01 床直Ｐ９・11・14　QNW西壁際埋土４層	408.76			ＳＸ01 Ｐ19（14層）	28.48
		ＳＩ02 カマド４層	41.78	ＳＸ01 Ｐ20（14層）	9.56
ＳＩ01 床直Ｐ10	27.33	ＳＩ02 カマド２層	65.46	ＳＸ01 14層	115.97
ＳＩ01 床直Ｐ12	6.48	ＳＩ02 カマド内埋土下位	336.89	ＳＸ01 ４層	68.82
ＳＩ01 床直Ｐ13	20.47	ＳＩ02 カマド上堆積土	76.97	ＳＸ07 北側	680.39
ＳＩ01 Ｅベルト東壁際1層（床直）	2.93	ＳＩ02 粘土塊上Ｐ15	87.00	ＳＸ07	17.88
		ＳＩ02 QNE５層	70.88	ⅢⅠ100 Ⅴ層	43.12
ＳＩ01 QSW５層上位	8.24	ＳＩ02 QNE東壁際床上５cm	67.28	ⅣⅠ91 攪乱（文化課Ｔ）	135.46
ＳＩ01 QNW西壁際埋土４層	7.82	ＳＩ02 QSE隅床上５cm	36.59	ⅣⅠ91 文化課試掘埋め戻し土	7.44
ＳＩ01 QSW埋土４層	98.63	ＳＩ02 QSE９層	34.00	ⅢⅠ９ Ⅳ層	568.47
ＳＩ01 QNW埋土４層	55.04	ＳＩ02 QNWカマド近く８層	7.40	ⅢⅠ10 Ⅲ層	13.90
ＳＩ01 Ｗベルト４層	97.05	ＳＩ02 QNW６層	111.26	ⅢⅠ26 Ｐ２埋土Ⅰ層下位	11.16
ＳＩ01 QNW埋土３層	372.70	ＳＩ02 QNW６層上位	23.02	ⅢⅠ30 Ⅲ層	50.56
ＳＩ01 QSW埋土３層	5.37	ＳＩ02 QNW５層	10.48	ⅢⅠ46 攪乱	594.72
ＳＩ01 Ｎベルト３層	46.61	ＳＩ02 QSE５層	21.38	ⅢⅠ47 Ⅲ層	198.92
ＳＩ01 Ｗベルト３層	89.84	ＳＩ02 QSW５層上位	9.05	ⅢⅠ47 Ⅰb層下位，ⅠＹ層直上	57.51
ＳＩ01 QSE２層	3.55	ＳＩ02 QNE壁溝埋土	8.33	ⅢⅠ47 Ⅰb層	36.62
ＳＩ01 Ｗベルト２層	19.28	ＳＩ02 QNW１層	62.79	ⅢⅠ48 Ⅱ層	11.56
ＳＩ01 QNW埋土１層	7.13	ＳＩ02 QSW１層	43.01	ⅢⅠ58 Ⅲ層	12.25
ＳＩ02 西ベルト貼床内	3.36	ＳＩ02 Ｎベルト１層	9.13	ⅢⅠ90 Ⅲ層（To－aより上）	103.50
ＳＩ02 床面Ｐ１	700.26	ＳＩ02 QNW北壁際壁溝上埋土中位	10.46	ⅣⅠ１ Ⅲ層	76.97
ＳＩ02 床面Ｐ２	204.20			ⅣⅠ２ Ⅲ層	35.91
ＳＩ02 床面Ｐ３	49.35	ＳＩ02 QNE埋土	62.76	ⅣⅠ31 Ⅲ層	40.86
ＳＩ02 床面Ｐ４	21.36	ＳＩ02 QSE埋土	4.40	ⅣⅠ41 Ⅲ層	20.34
ＳＩ02 床面Ｐ５	6.09	ＳＢ02　ⅢⅠ47Ｐ１埋土	15.40	ⅣⅠ41 Ⅲ層	4.95
ＳＩ02 床面Ｐ６	5.91	ＳＫ02 埋土	3.28	ⅣⅠ71 Ⅲ層（To－aより上）	60.71
ＳＩ02 床面Ｐ７	855.46	ＳＫ02 埋土	5.54	ⅣⅠ81 Ⅳ層	18.98
ＳＩ02 床面Ｐ８	22.63	１号耕作痕跡　埋土１層Ｐ１	6.65	ⅣⅠ81 Ⅳ層上面	24.48
ＳＩ02 床面Ｐ10	21.52	１号耕作痕跡　埋土１層Ｐ２	51.17	ⅣⅠ81 Ⅲ層	15.98
ＳＩ02 床面Ｐ11	14.92	１号耕作痕跡　埋土１層Ｐ３	5.72	ⅣⅠ81 Ⅲ層（To－aより上）	58.64
ＳＩ02 床面Ｐ11付近	34.53	ＳＤ01 埋土（ⅣⅠ81）	15.93	ⅣⅠ91 Ⅲ層	18.51
ＳＩ02 床面Ｐ12	20.67	ＳＤ01 埋土（ⅣⅠ91）	27.08	ⅣⅠ91 Ⅲ層（To－aより上）	17.38
ＳＩ02 床面Ｐ12付近	34.31	ＳＤ01 確認面～埋土	452.25	ⅣⅠ92 Ⅲ層	50.96
ＳＩ02 床面Ｐ13	37.44	ＳＤ02 底面Ｐ１	24.32	ⅣⅠ92 攪乱（文化課Ｔ）	90.70
ＳＩ02 床面Ｐ13付近	54.41	ＳＤ02 底直（ⅣⅠ08）	58.11	Ｔ28 盛土	9.55
ＳＩ02 床面Ｐ14	5.28	ＳＤ09 埋土	6.03	Ｔ46 埋め戻し土	30.86
ＳＩ02 床面Ｐ16	41.46	ＳＸ01 Ｐ１（14層）	29.60	Ｔ47	2.97
ＳＩ02 床面カマド左袖わき	16.79	ＳＸ01 Ｐ２（14層）	25.17	北区表採	15.63
ＳＩ02 QNE床面①	99.66	ＳＸ01 Ｐ３（３層）	5.31	南区表採	18.68
ＳＩ02 QNE床面②	372.24	ＳＸ01 Ｐ４（３層）	8.50	表採	43.32
				合計重量	13,391.28

第17表　鉄製品観察表

遺物No	図No	写図No	出土地点	器種	残存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
118	53	29	ＳＩ01 QSE床直	板状鉄製品	３辺欠損	(6.50)	(7.00)	(2.50)	44.82	原形不明　薄く湾曲している　鍋か？
119	53	29	ＳＩ02 西壁際カマド南側床面	刀子	基部欠損	(22.30)	1.70	0.35	55.73	３箇所折損するも接合
120	53	29	ＳＩ02 埋土	刀子	基部欠損	(7.80)	1.80	0.30	22.17	

第18表　銭貨観察表

遺物No	図No	写図No	出土地点	器種	残存状態	外径(mm)	内径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	金属の種類	備考
121	53	29	ＪⅣ41　Ⅲ層	紹聖元寶	完形	24.1	5.5	1.5	2.85	銅	色調10BG4/1暗青灰　半分に折損
122	53	29	町道穴久保線北側　表採	洪武通寶	完形	23.4	5.7	1.5	2.55	銅	色調10BG5/1青灰　半分に折損
123	53	29	出土地点不明	寛永通寶	完形	23.1	6.1	1.3	2.58	銅	
124	53	29	町道穴久保線北側　表採	寛永通寶	完形	23.2	6.4	1.1	1.69	銅	薄く、一部小穴貫通

第19表　木製品観察表

遺物No	図No	写図No	出土地点	器種	残存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
125	54	30	ＳＡ01 Ｐ３	柱材	一部のみ残存	(27.9)	(12.1)	(9.8)	下端一部残存　劣化激しい
126	55	30	ＫⅢ30 Ｐ２	柱材	上部欠損	(83.9)	19.1	15.7	鉄製品による加工痕顕著　上端欠
127	54	30	ＫⅢ60 杭	杭	上部欠損	(71.2)	8.1	8.2	下端は裂いた様な状態　樹皮残存　上端欠
128	54	30	ＫⅣ21	掘り棒状木製品	基部欠損	(111.8)	8.1	5.5	鉄製品による加工痕顕著　基部欠　墓標か？

第20表　磁器観察表

遺物No	図No	写図No	出土地点	器種	残存状態	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	重量(g)	備考
129	55	29	町道穴久保線北側　表採	青磁皿・底部	底部のみ残存	—	—	(5.3)	18.19	中国産　青磁劃花文稜花皿

第14表　縄文土器観察表

No 遺物	No 図	No 写図	出土地点	器種	部位	文様の特徴	地紋	法量（cm） 口径	法量（cm） 器高	法量（cm） 底径	重量（g）	備考	時期
1	42	21	ＳＩ01 床面Ｐ７	深鉢	口	口：無文	LR縦	—	—	—	36.44		後期前葉
2	42	21	ＳＩ02 QNE埋土	深鉢	胴		単軸絡５（Ｌ）縦	—	—	—	31.73		後期
3	42	21	ＳＫ02 埋土 ５層	深鉢	胴	羽状縄文（非結束）	結束１（LR・LR）縦,RL縦	—	—	—	357.17	内面ナデ横	後期
4	42	21	ＳＫ02 埋土	深鉢	口	口唇下無文	ＬＲ縦	—	—	—	28.76		後期
5	42	21	ＳＫ08 埋土上位	深鉢	胴		ＬＲ横	—	—	—	27.22		
6	42	21	ＳＤ08 埋土		口	Ｂ突起		—	—	—	10.18		晩期
7	42	21	ＳＤ08 埋土	壺	胴		ＬＲ横・斜	—	—	—	100.92		
8	42	21	ＬⅣ21 Ⅵ層	鉢	略完形	口唇：刻目（11単位）	LR横	13.00	12.55	5.55	271.96	上げ底	後期後葉
9	42	21	ＩⅢ95 Ⅵ層	深鉢	口	突き起こし刺突列,並行沈線		—	—	—	23.49		後期後葉
10	42	21	ＪⅢ78 Ⅵ層	深鉢	口	口唇下無文	LR縦	—	—	—	37.27		
11	42	21	ＪⅢ78 Ⅵ層	深鉢	頸	並行沈線	RL斜	—	—	—	11.05		後期後葉
12	42	21	ＬⅣ21 Ⅵ層	深鉢	頸	並行沈線	LR横	—	—	—	60.90		後期後葉
13	42	21	ＪⅢ19 Ⅴ層	鉢	口～胴	口：並行沈線	胴：RL斜	—	—	—	19.79	おこげ	晩期中葉
14	42	21	ＬⅢ40 Ⅴ層	鉢	底～台	並行沈線,羊歯状文	LR横	—	(6.67)	7.70	95.37	内部おこげ少量	晩期前葉
15	42	21	ＬⅣ50 Ⅴｄ層	鉢	口～胴			(9.00)	—	(7.30)	68.22	砂粒多量	
16	42	21	ＬⅣ50 Ⅴｄ層	深鉢	口	口唇下無文	LR横	—	—	—	14.63		
17	43	21	ＫⅣ89 Ⅲ層	深鉢	口～胴	口唇下結節回転	単軸絡１（Ｒ）斜	—	—	—	99.06	繊維多量	前期初頭
18	43	21	ＬⅤ12 Ⅲ層	深鉢	口	口唇下結節回転	RL+R横（0段3条の附加条）	—	—	—	20.79	繊維多量	前期初頭
19	43	21	ＬⅤ32 Ⅲ層	深鉢	口～胴		結束１（RL・LR）横	—	—	—	56.46	繊維多量	前期初頭
20	43	21	ＬⅤ53 Ⅲ層	深鉢	口～胴		結束１（LR・RL）横	—	—	—	91.86	繊維多量	前期初頭
21	43	21	ＬⅤ54 Ⅲ層	深鉢	口		結束１（LR・RL）横	—	—	—	78.54	口唇平坦　繊維多量	前期初頭
22	43	21	ＬⅤ54 Ⅲ層	深鉢	口		RL横	—	—	—	37.70	繊維多量	前期初頭
23	43	21	ＬⅤ54 Ⅲ層	深鉢	口		RL横	—	—	—	49.02	繊維多量	前期初頭
24	43	21	ＬⅤ33 Ⅲ層	深鉢	口		単軸絡１（L）斜	—	—	—	21.23	繊維	前期初頭
25	43	21	ＬⅤ54 Ⅲ層	深鉢	口		単軸絡１（L）斜	—	—	—	38.59	繊維多量	前期初頭
26	43	22	ＬⅤ32 Ⅲ層	深鉢	胴		RL横（０段多条）	—	—	—	179.14	繊維多量	前期初頭
27	43	22	ＬⅤ33 Ⅲ層	深鉢	胴		結束１（RL・LR）横	—	—	—	117.98	繊維多量	前期初頭
28	43	22	ＬⅤ33 Ⅲ層	深鉢	胴		組紐（1）	—	—	—	400.36	繊維多量	前期初頭
29	43	22	ＬⅤ22 Ⅱ層・Ⅲ層	深鉢	胴		LRL縦・横	—	—	—	44.51	繊維・砂粒多量	前期初頭
30	43	22	ＬⅤ33 Ⅲ層,ＬⅤ43 Ⅲ層	深鉢	胴～底		RL横？	—	—	—	149.13	尖底　繊維多量	前期初頭
31	43	22	ＬⅤ32 Ⅲ層,ＬⅤ33 Ⅲ層	深鉢	胴～底	底部網代痕	組紐	—	—	—	121.14	繊維・砂粒多量	前期初頭
32	44	22	ＬⅤ33 Ⅲ層	深鉢	口～胴	口唇：庇状,直下無文	RL結節横,LR横の非結束羽状	—	—	—	80.18	繊維多量	前期前葉
33	44	22	ＬⅤ54 Ⅲ層	深鉢	口	山形口縁,結節回転	RL横	—	—	—	24.69	砂粒多量,繊維	前期前葉
34	44	22	ＬⅤ33 Ⅲ層	深鉢	口～底	口唇：山形突起,縦位隆帯,刻目列　口以下：結節回転	RL横	(22.00)	30.30	(12.00)	567.84	砂粒多量,繊維	前期前葉
35	44	22	ＬⅤ32 Ⅲ層,ＬⅤ33 Ⅲ層	深鉢	口～胴	口唇：刻目列　口以下：結節回転	LR横	—	—	—	206.68	繊維・砂粒多量	前期前葉
36	44	22	ＬⅤ33 Ⅲ層	深鉢	口～胴	口唇：刻目列	LR横	—	—	—	35.34	繊維	前期前葉
37	44	22	ＬⅤ53 Ⅲ層	深鉢	口～胴	口唇：刻目列　口以下：結節回転	結束１（RL・ＲＬ）	—	—	—	48.74	繊維・砂粒多量	前期前葉
38	44	22	ＬⅤ43 Ⅲ層	深鉢	口		LR多	—	—	—	59.65	口唇面取り　砂粒多量,繊維	前期前葉
39	44	23	ＬⅤ32 Ⅲ層	深鉢	胴	結節回転（S字状連鎖沈文）		—	—	—	43.07	繊維	前期前葉
40	44	23	ＬⅤ33 Ⅲ層,ＬⅤ53 Ⅲ層	深鉢	底		LR横	—	(4.20)	(12.00)	79.68	繊維多量	前期前葉
41	44	23	ＬⅤ33 Ⅲ層	深鉢	底	底部網代痕	RL横	—	(6.60)	(11.00)	129.52	繊維・砂粒多量	前期前葉
42	44	23	ＫⅢ08 Ⅲ層	鉢	口	突起,並行沈線	LR横	—	—	—	15.40	口唇肥厚	後期前葉
43	44	23	ＪⅣ81 Ⅲ層（To-aより上）	鉢	口	突起,Ｓ字状沈線		—	—	—	6.17		後期前葉
44	44	23	ＬⅢ40 Ⅲ層	壺	胴	沈線（太・細）		—	—	—	34.07		後期前葉
45	45	23	ＬⅣ08 Ⅲ層	壺	肩	三叉文	LR充填	—	—	—	30.66		後期中葉
46	45	23	ＬⅤ42 Ⅲ層	浅鉢	口～胴	口：並行沈線（変形工字文）,粘土瘤	RL横	—	—	—	26.42	内面並行沈線,粘土瘤	晩期末～弥生初頭
47	45	23	ＬⅤ12 Ⅲ層	深鉢	口～底		LR横（単位小）	(33.40)	35.30	9.00	803.39		後期
48	45	23	ＬⅤ54 Ⅲ層	深鉢	口		LR横	—	—	—	50.31	黒雲母	
49	45	23	ＬⅤ52 Ⅲ層		底		LR横	—	(1.85)	4.60	47.56	上げ底	
50	45	23	ＬⅤ12 Ⅲ層		台			—	(5.90)	(12.80)	136.14	砂粒多量	
51	45	23	ＬⅤ22 Ⅲ層		底	底部ナデ		—	(1.60)	9.60	149.57	砂粒多量	
52	45	23	ＬⅤ32 Ⅲ層	深鉢	底	最下部無文	LR横	—	—	—	27.21	砂粒	

第15表　石器観察表

No 遺物	No 図	No 写図	出土地点	器種	残存状態	石質	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	特記事項
53	46	24	ＳＩ02　カマド左袖左側床面	台石	1/2以上欠	安山岩	(9.78)	(6.60)	(3.70)	198.86	
54	46	24	ＳＤ08　埋土	スクレイパー	完形	頁岩１	5.98	3.31	1.08	18.28	
55	46	24	ＳＤ08　埋土	石皿？	1/2以上欠	閃緑岩	(7.85)	(4.40)	(1.74)	108.35	
56	46	24	ＬⅣ21　Ⅵ層	使用痕ある剥片	完形	頁岩３	2.76	4.04	1.62	11.62	
57	46	24	ＬⅤ43　Ⅲ層	石鏃	先端部欠	頁岩４	(2.35)	1.91	0.39	1.46	
58	46	24	ＬⅤ33　Ⅲ層	石錐？	両端部欠	頁岩４	(3.74)	2.32	(0.89)	8.42	
59	46	24	ＬⅤ22　Ⅲ層	尖頭器	基部欠	赤色頁岩	(12.99)	4.23	1.61	94.91	
60	47	24	ＫⅣ88　Ⅲ層	石匙	完形	頁岩１	9.01	4.20	1.60	21.66	
61	47	24	ＬⅤ33　Ⅲ層	石匙	先端部欠	頁岩４	(4.81)	3.49	(1.05)	10.46	
62	47	24	ＬⅤ33　Ⅲ層	スクレイパー	1/2以上欠	頁岩１	(2.26)	(1.97)	(0.58)	1.49	
63	47	24	ＬⅤ33　Ⅲ層	スクレイパー	基部欠	頁岩２	(2.60)	2.16	(0.56)	2.60	
64	47	24	ＬⅤ33　Ⅲ層	二次加工ある剥片（石鏃？）	一端部欠	瑪瑙	(3.01)	(1.89)	(0.58)	2.41	
65	47	24	ＬⅤ33　Ⅲ層	二次加工ある剥片（rフレ）	両端部欠	頁岩１	(3.51)	(3.30)	(0.71)	6.52	7.5YR3.5/1黒褐～褐灰　頁岩
66	47	25	ＬⅤ33　Ⅲ層	使用痕ある剥片	両端部欠	頁岩４	(2.59)	2.40	(0.70)	3.11	
67	47	25	ＬⅤ33　Ⅲ層	使用痕ある剥片	先端部欠	頁岩４	(4.60)	4.58	1.46	13.52	
68	47	25	ＪⅢ20　Ⅲ層	石核	完形	頁岩２	1.82	4.13	2.15	14.60	
69	48	25	ＬⅤ22　Ⅲ層	石核	完形	頁岩２	3.69	4.78	3.18	43.19	70と接合
70	48	25	ＬⅤ32　Ⅲ層	石核	完形	頁岩２	4.52	5.41	2.91	40.03	69と接合
71	47	25	ＬⅤ33　Ⅲ層	石核	完形	頁岩５	3.19	3.93	3.02	38.89	
72	48	25	ＫⅢ20　Ⅲ層（To-aより上位）	磨製石斧	一部欠	安山岩	14.18	4.55	2.80	273.37	

第16表　土師器観察表

No			出土地点	種別	器種	部位	分類	調整		法量（cm）			重量	備考
遺物	図	写図						外面	内面	口径	器高	底径	（g）	
73	49	26	ＳＩ01 床直Ｐ９	土師器	坏	口～胴	Ｂ	口：ヨコナデ　胴：ヘラミガキ	口：ヨコナデ→ヘラミガキ　胴：ヘラミガキ	(15.0)	—	—	20.02	内面黒色処理
74	49	26	ＳＩ01 床直Ｐ13	土師器	坏	口	Ｆ	ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラミガキ	—	—	—	20.49	
75	49	26	ＳＩ01 床面Ｐ12	土師器	椀？	口		ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	—	17.62	内外黒色処理
76	49	26	ＳＩ01 床面Ｐ１・15～17・20,同 カマドＰ１・２	土師器	甕	口～底	ＡⅠａ	口：ヨコナデ　胴：ハケメ→ヘラミガキ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	(17.0)	8.0	29.5	604.40	
77	49	26	ＳＩ01 床面Ｐ18・19	土師器	甕	口～底	ＡⅡａ	口：ヨコナデ　胴：ハケメ・ヘラナデ	口：ヨコナデ　胴：ハケメ	(15.0)	15.7	6.8	222.00	
78	49	26	ＳＩ01 床面Ｐ９・11・14,同 QNW西壁際４層	土師器	甕	胴～底		ヘラミガキ	ヘラナデ	—	—	(9.0)	408.76	球胴か？
79	49	26	ＳＩ01 床面Ｐ21	土師器	甕	底		ヘラケズリ→ヘラミガキ　底：ヘラミガキ	ナデ	—	—	6.6	112.53	
80	49	26	ＳＩ01 QSW４層	土師器	甕	口～胴	ＢⅧｃ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	—	—	—	16.39	
81	49	26	ＳＩ01 西ベルト４層	土師器	甕	底		ヘラケズリ→ヘラミガキ	ナデ	—	—	(7.2)	37.35	底部内面球形
82	49	26	ＳＩ01 ３層	土師器	甕	口～胴	ＢⅥｃ	胴：ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	23.78	
83	49	26	ＳＩ01 QNW３層	土師器	甕	口～胴	ＢⅥｃ	口：ヨコナデ　胴：ヘラケズリ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	(19.4)	—	—	106.09	
84	50	26	ＳＩ01 QNW３層	土師器	甕	胴～底		ヘラケズリ	ヘラナデ	—	—	(6.6)	82.04	底部内面球形
85	50	26	ＳＩ02 床面Ｐ２	土師器	坏	略完形	Ｅ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	13.6	6.0	5.8	208.20	内外黒色処理
86	50	26	ＳＩ02 床面Ｐ４	土師器	坏	口	Ｄ	？（劣化）	ヨコナデ→ヘラミガキ	(14.4)	—	—	21.44	外面調整不明
87	50	26	ＳＩ02 床面Ｐ11・12	土師器	坏	口	Ａ	ヨコナデ→ヘラミガキ	ヨコナデ→ヘラミガキ	(15.2)	—	—	30.21	内外黒色処理
88	50	26	ＳＩ02 カマド左袖上	土師器	小型	完形		ヨコナデ	ヨコナデ	8.1	5.6	4.5	178.67	手づくね
89	50	27	ＳＩ02 床面Ｐ１,ＳＩ01 QNW３層	土師器	甕	口～胴	ＡⅡａ	口：ヨコナデ　胴：ヘラミガキ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	16.6	—	—	787.93	内外ススコゲ
90	50	27	ＳＩ02 QNE床面①～④,同 Pit４　２層	土師器	甕	口～胴	ＡⅡａ	口：ヨコナデ→ヘラミガキ　胴：ヘラミガキ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	(21.4)	—	—	906.02	
91	50	27	ＳＩ02 カマド右袖付け根煙道内部２～５層,同カマド内埋土下位	土師器	甕	口～胴	ＡⅠｂ	口：ヨコナデ→ヘラミガキ　胴：ヘラミガキ	口：ヨコナデ→ヘラナデ　胴：ヘラナデ				282.88	
92	50	27	ＳＩ02 カマド右脇最下層	土師器	甕	口		ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	23.91	
93	50	27	ＳＩ02 カマド右袖脇最下層	土師器	甕	口		ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	14.17	
94	51	27	ＳＩ02 床面Ｐ７	土師器	甕	口	ＡⅧａ	ヨコナデ	ヨコナデ	(22.4)	—	—	50.29	
95a	51	27	ＳＩ02 床面Ｐ７	土師器	甕	口～胴	ＡⅣｂ	口：ヨコナデ→ヘラミガキ　胴：ヘラケズリ→ヘラミガキ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ→ヘラミガキ	(17.0)	—	—	121.14	
95b	51	27	ＳＩ02 床面Ｐ７	土師器	甕	胴～底	ＡⅣｂ	ヘラナデ→ヘラミガキ	ヘラナデ→ヘラミガキ　底面：ヘラナデ	—	—	(7.6)	205.69	平面ヘラナデ調整
96	51	27	ＳＩ02 カマド左袖６層	土師器	甕	口～胴	ＡⅤａ	口：ヨコナデ　胴：ハケメ→ヘラケズリ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	(17.6)	—	—	78.94	焼成良
97	51	27	ＳＩ02 カマド右袖６層・同 カマド右袖脇最下層	土師器	甕	胴		ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	174.27	
98	51	27	ＳＩ02 床面Ｐ７	土師器	甕	胴		ハケメ	ハケメ	—	—	—	55.33	
99	51	27	ＳＩ02 床面Ｐ12・13	土師器	甕	底		ヘラケズリ	ヘラナデ	—	—	(9.8)	36.81	
100	51	28	ＳＩ02 カマド右袖脇最下層	土師器	甕	底		ヘラナデ→ヘラケズリ	ヘラナデ・ハケメ	—	—	—	37.13	
101	51	28	ＳＩ02 QNW６層	土師器	坏	口～胴	Ｅ	口：ヨコナデ　胴：ヘラミガキ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	—	—	—	15.68	
102	51	28	ＳＩ02 QNE東壁際床上５cm	土師器	甕	底		—	—	—	—	3.9	21.87	
103	51	28	ＳＸ01 Ｐ15（14層）	土師器	甕	口～胴	ＢⅨｃ	口：ヨコナデ　胴：ヘラケズリ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	—	—	—	21.12	
104	51	28	ＳＸ01 Ｐ11（14層）	土師器	甕	口～胴		口：ヨコナデ　胴：ハケメ	口：ヨコナデ　胴：ハケメ	—	—	—	63.01	
105	52	28	ＳＸ01付近　13層直上（Ⅲ層下位）	土師器	甕	胴		ヘラナデ→ヘラミガキ	ヘラナデ	—	—	—	57.65	
106	52	28	ＳＸ01 Ｐ９（４層）	土師器	甕	胴～底		ヘラケズリ	ヘラナデ	—	—	(11.4)	421.38	焼成良
107	52	28	ＳＸ01 Ｐ３（３層）	土師器	？	口		ヨコナデ→ヘラケズリ	ヨコナデ	—	—	—	5.30	砂礫多量
108	52	28	ＳＸ07 北側P1	土師器	甕	口～胴	ＡⅢａ	口：ヨコナデ　胴：ハケメ・ヘラナデ	口：ヨコナデ　胴：ハケメ・ヘラナデ	18.4	—	—	680.39	球胴甕　内面ススコゲ
109	52	28	ＳＸ07　北側P2	土師器	甕	口		ヨコナデ	ヨコナデ	—	—	—	10.32	
110	52	28	ＪⅢ26 Ｐ２（１層下位）	土師器	甕	胴		ヘラナデ	ヘラナデ	—	—	—	11.21	
111	52	28	ＩⅢ100 Ⅴ層	土師器	椀か鉢	口～胴		ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	—	43.13	内外黒色処理
112	52	28	ＪⅢ09 Ⅳ層	土師器	甕	口～胴	ＡⅦａ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	(19.6)	—	—	488.16	
113	52	28	ＪⅢ09 Ⅳ層	土師器	甕	底		ヘラミガキ	ヘラナデ	—	—	(8.6)	68.01	
114	52	28	ＪⅢ90 Ⅲ層（To-aより上）	土師器	坏	底	Ｇ	？	ヘラミガキ	—	—	(5.3)	7.82	摩滅
115	52	28	ＩⅣ91 攪乱（生文課Ｔ）	土師器	坏	口～底	Ａ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	(15.0)	—	(7.3)	112.63	内外黒色処理
116	52	28	ＩⅣ91 攪乱（生文課Ｔ）	土師器	坏	口	Ａ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	—	—	—	8.62	内外黒色処理
117	52	28	ＪⅢ46 攪乱	土師器	壺	完形	ＡⅥａ	口：ヨコナデ　胴：ハケメ・ヘラナデ	口：ヨコナデ　胴：ヘラナデ	13.3	14.0	6.0	594.72	

Ⅴ 野 中 遺 跡

1 検 出 遺 構（第56図）

今回の調査で確認・精査した遺構は、竪穴状遺構1棟、土坑38基、柱穴状土坑243基である。調査範囲はほぼ全域において何らかの削平・改変・攪乱を受けており、遺存状態は良好とはいえない。

遺構はⅤ層での検出に努めた。しかし、調査区内ではⅤ層を欠落する箇所も多く、一部斑状に残存している部分もⅥ層との識別が困難な状況であった。その結果、Ⅵ層検出となった遺構が大多数を占めた。なお、本遺跡における確認層位は、遺構構築時の整地・改変あるいは後世の削平状況に大きな影響を受けていると考えられる。よって、確認した層位の違いは遺構の時期差を示すものではない。

（1）竪 穴 状 遺 構

ＳＸ01竪穴状遺構

遺構（第57図、写真図版32）

［位置・検出状況］ＢＶ38・39・48・49グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［重複関係］北西壁がＢＶ48Ｐ１に切られている。

［規模・平面形］北東―南西（長軸）2.90m、北西―南東（短軸）2.48mの隅丸方形を呈する。

［埋土］６層に分層される。４層を除き礫が多く混入している。堆積過程の観察から、埋土は南側から流入したものが主であり、自然堆積により埋没したと考えられる。

［壁・底面］壁は約70°前後で立ち上がっている。最深部は北東壁で、確認面から74cmを測る。底面は、概ね平坦に作出されている。

遺物　埋土最下位（底面上10cmまで）の土壌に対しフローテーションを実施した。その結果、炭化種子２点が得られ、分析の結果、コムギ、ヒエの２種と同定された（Ⅵ章４節参照）。

時期　人為遺物を欠くため詳細は不明である。しかし、埋土の土質・堆積状況の比較では、周辺の土坑・柱穴状土坑との間に大きな差は見出せない。したがって、これらは時間的にも近接している可能性が高いと考え、本遺構も中世から近世の時間幅に収まるものとしたい。

（2）土　　坑

径が概ね60cm以上で、平面形が円形基調のものを土坑とした。柱痕を残すものは分類上除外したが、これ以外にも柱穴として機能したものを含む可能性がある。よってここでは各論に注力し、建物跡の存在を考慮した配置の検討に関しては柱穴状土坑と合わせて次項で行った。

遺物を伴うものは、ＳＫ01・06・13・18・20のみと少ないため時期決定の要素を欠くものが多いが、形状、規模、埋土等の諸属性に関しては、相互の共通性が高い。そのため、これらは時間的にも近接している可能性が高いと考えている。

ＳＫ01土坑

遺構（第58図、写真図版32）

［位置・検出状況］ＢＶ40グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。上部は削平を受けている。

［規模・平面形］北東―南西（長軸）102cm、北西―南東（短軸）90cmの不整円形を呈する。

［埋土］黒褐色シルトによる単層である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。
［壁・底面］底面は丸く、壁もこれに連続して立ち上がる。底面東側は、さらに10cmほど窪む落ち込みがあり、こちらの底面も丸底である。
遺物（第71図、写真図版43）
［銭貨］無文銭（８）が１枚出土している。
時期　出土遺物から、中世から近世に属すると考えられる。

ＳＫ02土坑

遺構（第58図、写真図版33）
［位置・検出状況］ＢＶ39グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
［規模・平面形］北東―南西（長軸）85cm、北西―南東（短軸）73cmの楕円形を呈する。
［埋土］２層に分層した。２層は礫が多く混入し、径が20cm前後の大形のものもみられる。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。
［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。壁は、60°前後の一定角度を保ち、立ち上がる。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ03土坑

遺構（第58図、写真図版33）
［位置・検出状況］ＡⅥ92グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。西端を攪乱がかすめている。
［規模・平面形］北東―南西（長軸）112cm、北西―南東（短軸）97cmの不整円形を呈する。
［埋土］４層に分層した。２・３層は砂が混入するため粘性が弱い。自然堆積と考えられる。
［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。壁は急角度で立ち上がり、断面形は均整の取れた円筒形を呈している。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ04土坑

遺構（第58図、写真図版33）
［位置・検出状況］ＡⅥ92グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。ＳＫ05・06と近接して存在する。
［規模・平面形］北西―南東（長軸）76cm、北東―南西（短軸）71cmの楕円形を呈する。
［埋土］２層に分層した。黒褐色シルト主体で、２層は大形の礫を含む。自然堆積と考えられる。
［壁・底面］底面は、丸底で平坦面は作出されない。壁も底面から連続して、曲線のまま立ち上がる。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ05土坑

遺構（第58図、写真図版33）
［位置・検出状況］ＡⅥ92グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。ＳＫ04・06と近接して存在する。
［規模・平面形］北西―南東100cm、北東―南西92cmの円形を呈する。

［埋土］３層に分層した。黒褐色シルト主体でいずれも礫を含むが、特に底面に近い部分に多く混入している。堆積土には壁からの崩落土が混入しており、自然堆積と考えられる。
［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。壁は急角度で立ち上がる。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ06土坑

遺構（第58図、写真図版33）
［位置・検出状況］ＡⅥ92グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。ＳＫ04・05と近接して存在する。
［規模・平面形］北西―南東（長軸）133cm、北東―南西（短軸）118cmの楕円形を呈する。
［埋土］３層に分層した。黒褐色シルト主体で礫を多く含む。２・３層では、壁からの崩落土が多量に混入していると考えられることから、自然堆積の可能性が高い。
［壁・底面］壁は、底面に近づくほど径が小さくなる不整な掘り方で作出されており、傾斜角も一定しない。底面は概ね平坦だが、開口部に比べ著しく小さい。
遺物（第71図、写真図版43）
［銭貨］埋土中から、寛永通寶（９）が１枚出土している。
時期　出土遺物から、近世に属すると考えられる。

ＳＫ07土坑

遺構（第59図、写真図版34）
［位置・検出状況］ＢＶ40グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
［規模・平面形］北西―南東（長軸）72cm、北東―南西（短軸）62cmの楕円形を呈する。
［埋土］黒褐色シルトの単層で、炭化物粒を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。
［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。壁は急角度で立ち上がる。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ08土坑

遺構（第59図、写真図版34）
［位置・検出状況］ＢＶ30グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
［規模・平面形］北西―南東（長軸）90cm、北東―南西（短軸）70cmの楕円形を呈する。
［埋土］黒褐色シルトの単層である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。
［壁・底面］底面は、若干丸みを帯びるが、概ね平坦に作出されている。西壁の傾斜が他所に比べ若干なだらかである。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ09土坑

遺構（第59図、写真図版34）
［位置・検出状況］ＢＶ30に位置する。Ⅵ層で確認した。

［重複関係］南西壁でＢＶ30Ｐ21を切っていて、中央ではＰ20に切られている。Ｐ18・19については、埋土が似通っていたため分層出来ず、前後関係を捉えられなかった。
［規模・平面形］北東―南西82㎝、北西―南東78㎝の円形を呈する。
［埋土］黒褐色シルトの単層で、灰ブロックを含む。灰ブロックは全体に混入するが、特に底面近くに多い。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。
［壁・底面］底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ10土坑

遺構（第59図、写真図版34）
［位置・検出状況］ＢＶ30に位置する。Ⅵ層で確認した。
［重複関係］北西壁で、ＢＶ30Ｐ25を切っている。
［規模・平面形］北東―南西48㎝の円形を呈する。
［埋土］５層に分層した。黒褐色シルト主体で、礫、炭化物粒で分層できる。自然堆積と考えられる。
［壁・底面］底面は、若干丸みを帯びるが、概ね平坦に作出されている。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ11土坑

遺構（第59図、写真図版34）
［位置・検出状況］ＢＶ30に位置する。Ⅵ層で確認した。
［重複関係］北西壁でＢＶ30Ｐ14と重複するが、本遺構完掘後にＰ14を確認したために、前後関係の把握は出来なかった。
［規模・平面形］北西―南東（長軸）84㎝、北東―南西（短軸）78㎝の不整円形を呈する。
［埋土］３層に分層した。黒褐色シルト主体で、いずれの層にも礫を含む。自然堆積と考えられる。
［壁・底面］底面は概ね平坦に作出される。壁は北東壁が急角度に立ち上がるのに対し、南西壁は屈曲し、なだらかに立ち上がっている。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ12土坑

遺構（第60図、写真図版35）
［位置・検出状況］ＢⅥ21グリッドに位置する。Ⅵ層で検出した。
［規模・平面形］北西―南東（長軸）63㎝、北東―南西（短軸）57㎝の楕円形を呈する。
［埋土］３層に分層した。黒色シルト主体で、いずれの層にも礫を含む。自然堆積と考えられる。
［壁・底面］底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ13土坑

遺構（第60図、写真図版35）

［位置・検出状況］ＢⅥ73グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北東―南西60cm、北西―南東55cmの円形を呈する。

［埋土］黒色シルトに灰黄褐色シルトのブロックを混入する単層である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物（第71図、写真図版43）

［銭貨］埋土から、寛永通寶（10）が１枚出土している。

時期　出土遺物から、近世に属すると考えられる。

ＳＫ14土坑

遺構（第60図、写真図版35）

［位置・検出状況］ＢⅥ73グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北西―南東（長軸）79cm、北東―南西（短軸）76cmの楕円形を呈する。

［埋土］黒褐色シルトを主体に、黒色シルト、灰黄褐色シルトのブロックを混入する単層である。他の遺構と比較し、埋土のしまりが弱い。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は、平坦に作出される。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ15土坑

遺構（第60図、写真図版35）

［位置・検出状況］ＢⅥ73グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北西―南東（長軸）59cm、北東―南西（短軸）52cmの楕円形を呈する。

［埋土］黒色シルトの単層である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ16土坑

遺構（第60図）

［位置・検出状況］ＢⅥ73グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［重複関係］南壁でＢⅥ73Ｐ2と重複するが、埋土が似通っていたため分層出来ず、前後関係を捉えられなかった。

［規模・平面形］北西―南東（長軸）71cm、北東―南西（短軸）63cmの楕円形を呈する。

［埋土］２層に分層した。２層は灰黄褐色シルトブロックが混入ししまりも強く、人為的な埋め戻し土の可能性が高い。

［壁・底面］底面は丸底で、壁もこれに連続してなだらかに立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ17土坑

遺構（第61図）

［位置・検出状況］ＢⅥ73・83グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。ＳＫ18と近接して存在する。

［規模・平面形］北―南（長軸）73cm、東―西（短軸）56cmの楕円形を呈する。

［埋土］黒色～黒褐色シルトの単層で、礫を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は、若干丸みを帯びるが、概ね平坦に作出されている。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ18土坑

遺構（第61図、写真図版36）

［位置・検出状況］ＢⅥ73・83グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。ＳＫ17と近接して存在する。

［規模・平面形］北―南（長軸）69cm、東―西（短軸）59cmの楕円形を呈する。

［埋土］２層に分層した。２層はⅥ層に近似した暗褐色シルトを多く含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。壁は、80°前後の急角度で立ち上がる。

遺物（第70図、写真図版42）

［縄文土器］埋土中から１点出土している（１）。

時期　縄文土器が出土しているが、これ以外に他の土坑と異なる属性は見出せない。したがって、本遺構も周囲と同様、中世から近世に属する可能性が高いと考える。

ＳＫ19土坑

遺構（第61図、写真図版36）

［位置・検出状況］ＢⅥ83グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北東―南西（長軸）72cm、北西―南東（短軸）48cmの楕円形を呈する。

［埋土］２層に分層した。１層は灰黄褐色シルトブロックを含み、しまりも強い。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ20土坑

遺構（第61図）

［位置・検出状況］ＢⅥ83グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北西―南東60cm、北東―南西58cmの円形を呈する。

［埋土］２層に分層した。黒色シルト主体で、２層は灰黄褐色砂礫ブロックが混入し、しまりも強い。人為的な埋め戻しの可能性がある。

［壁・底面］底面は丸底で、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物（第70図、写真図版42）

［縄文土器］１層中から１点出土している（２）。

時期　縄文土器が出土しているが、これ以外に他の土坑と異なる属性は見出せない。したがって、本遺構も周囲と同様、中世から近世に属する可能性が高いと考える。

ＳＫ21土坑

遺構（第61図、写真図版36）

［位置・検出状況］ＢⅥ93グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北西―南東（長軸）67cm、北東―南西（短軸）58cmの楕円形を呈する。

［埋土］３層に分層した。黒色シルトと灰黄褐色シルトにより構成され、いずれの層もしまりが強い。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は、若干丸みを帯びるが、概ね平坦に作出されている。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ22土坑

遺構（第62図、写真図版36）

［位置・検出状況］ＢⅥ82グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北西―南東69cm、北東―南西65cmの円形を呈する。

［埋土］２層に分層した。黒色シルト主体である。２層は、灰黄褐色砂礫ブロックが混入し、１層に比べしまりが強い。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は東側へ若干傾斜している。東壁は屈曲しており、階段状に立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ23土坑

遺構（第62図、写真図版37）

［位置・検出状況］ＢⅥ93グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［重複関係］　西壁で、ＢⅥ93Ｐ1を切っている。

［規模・平面形］北東―南西74cm、北西―南東69cmの円形を呈する。

［埋土］３層に分層した。それぞれ黒褐色シルト主体で、灰黄褐色砂質シルトが混入している。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は丸底で、壁もこれに連続して70°前後の角度で立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ24土坑

遺構（第62図、写真図版37）

［位置・検出状況］ＢＶ39グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。ＳＫ25と近接して存在する。上部は削平されている可能性が高い。

［重複関係］北西壁がＢＶ39Ｐ7と重複するが、本遺構完掘後に確認したために、前後関係の把握はできなかった。
［規模・平面形］北西―南東（長軸）74cm、北東―南西（短軸）58cmの楕円形を呈する。
［埋土］黒褐色シルトの単層で、破砕礫を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。
［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ25土坑

遺構（第62図、写真図版37）
［位置・検出状況］ＢＶ39グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。ＳＫ24と近接して存在する。上部は削平されている可能性が高い。
［規模・平面形］北―南（長軸）75cm、東―西（短軸）62cmの楕円形を呈する。壁の崩落等の要因により、現況は不整円形を呈する。
［埋土］２層に分層した。黒褐色シルト主体で、いずれの層にも礫を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。
［壁・底面］底面は、傾斜をもって作出され、北側が低い。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ26土坑

遺構（第62図、写真図版37）
［位置・検出状況］ＢＶ39・49グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
［規模・平面形］北西―南東62cm、北東―南西60cmの円形を呈する
［埋土］５層に分層した。礫の混入が多く、径が15cmを超える大形のものもみられる。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。
［壁・底面］底面は、若干丸みを帯びるが、概ね平坦に作出されている。壁は急角度で立ち上がる。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ27土坑

遺構（第62図、写真図版38）
［位置・検出状況］ＢⅥ82グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
［規模・平面形］北西―南東59cm、北東―南西58cmの円形を呈する。
［埋土］３層に分層した。黒～黒褐色シルト主体で、にぶい黄褐色シルトと破砕礫が混入している。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。
［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。壁は、70°前後の角度で直線状に立ち上がる。
遺物　出土していない。
時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ28土坑

遺構（第63図、写真図版38）

［位置・検出状況］ＢⅥ83グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北西―南東54cm、北東―南西50cmの円形を呈する。

［埋土］３層に分層した。２・３層は、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入し、１層は炭化物粒が少量混入している。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。壁は、80°前後の急角度で直線状に立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ29土坑

遺構（第63図）

［位置・検出状況］ＢⅥ82グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］南―北52cm、東―西49cmの円形を呈する。

［埋土］黒色シルト主体の単層で、灰黄褐色シルトブロック、礫・破砕礫を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は丸底で、壁はなだらかに立ち上がる。全体的に不整に作出されている。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ30土坑

遺構（第63図、写真図版38）

［位置・検出状況］］ＢⅥ72・82グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北東―南西（長軸）81cm、北西―南東（短軸）58cmの不整円形を呈する。

［埋土］２層に分層した。黒褐色シルト主体で、底面北側ではにぶい黄褐色シルトと混土を形成している。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は、平坦に作出される。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ31土坑

遺構（第63図、写真図版38）

［位置・検出状況］ＢⅤ66・76グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北東―南西（長軸）140cm、北西―南東（短軸）110cmの楕円形を呈する。

［埋土］４層に分層した。２・３・４層は自然堆積と考えられるが、１層はにぶい黄褐色シルトブロックを多量に含み、人為堆積の可能性がある。

［壁・底面］底面は丸底で、壁もこれに連続して40°前後の角度を保ち、なだらかに立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ32土坑

遺構（第63図）

［位置・検出状況］ＢⅥ72グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北東―南西0.52m、北西―南東0.50mの円形を呈する。

［埋土］２層に分層した。黒色シルト主体で、２層は灰黄褐色シルトとの混土である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ33土坑

遺構（第63図、写真図版39）

［位置・検出状況］ＢⅥ61グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。攪乱により西側の大部分を欠く。

［規模・平面形］残存部は、北―南（長軸）95cm、東―西（短軸）71cmの楕円形を呈する。

［埋土］黒色シルト主体の単層である。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は西側へ傾斜している。東壁も底面から連続してなだらかに立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ34土坑

遺構（第64図、写真図版39）

［位置・検出状況］ＢＶ47グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［規模・平面形］北―南60cm、東―西57cmの円形を呈する。

［埋土］６層に分層した。黒褐色シルト主体で、１・３・４・６層は礫を含む。東西方向から交互に土が流れ込んだ様子が看取され、自然堆積と考えられる。

［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。壁は、75°前後の急角度で直線状に立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ35土坑

遺構（第64図）

［位置・検出状況］ＢＶ66グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［重複関係］ＢＶ66Ｐ3を切っている。

［規模・平面形］北東―南西56cm、北西―南東50cmの円形を呈する。

［埋土］２層に分層した。黒褐色シルト主体で、Ⅵ層に近似したにぶい黄褐色シルトを多量に含む。人為的に埋め戻された可能性がある。

［壁・底面］底面は、平坦に作出されている。壁は、80°前後の急角度で直線状に立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ36土坑

遺構（第64図、写真図版39）

［位置・検出状況］ＢＶ20・ＢⅥ11グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［重複関係］北東壁がＳＫ37と重複する。検出段階で本遺構の正円形プランを明瞭に捉えたことから、本遺構がＳＫ37を切る可能性が高い。

［規模・平面形］北西―南東（長軸）99cm、北東―南西（短軸）91cmの楕円形を呈する。

［埋土］３層に分層した。黒褐色シルト主体で、10cmを超える大形のものを含む多くの礫が混入している。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は丸い。南東壁はこの底面から連続してなだらかに立ち上がるが、階段状に屈曲してから再度立ち上がる。北西壁は、底面から急角度で立ち上がっている。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ37土坑

遺構（第64図、写真図版39）

［位置・検出状況］ＢＶ20・ＢⅥ11グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［重複関係］ＳＫ36土坑の項を参照。

［規模・平面形］北西―南東（長軸）82cm、北東―南西（短軸）50cmの不整円形を呈する。

［埋土］２層に分層した。黒褐色シルト主体で、２層は灰黄褐色砂質シルトとの混土である。いずれの層にも礫を含む。人為堆積か自然堆積かの別は不明である。

［壁・底面］底面は丸く、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

ＳＫ38土坑

遺構（第64図、写真図版39）

［位置・検出状況］ＢＶ40グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

［重複関係］北西壁がＢＶ40Ｐ９と重複するが、前後関係は不明である。

［規模・平面形］北西―南東（長軸）102cm、北東―南西（短軸）84cmの楕円形を呈する。

［埋土］３層に分層した。いずれの層も、しまりが弱い。自然堆積と考えられる。

［壁・底面］底面は丸く、壁もこれに連続して立ち上がる。

遺物　出土していない。

時期　不明であるが、中世から近世に属する可能性が高い。

（３）柱穴状土坑群（第56図、第21表）

土坑としたものより規模が小さく、柱穴として機能した可能性が高いものを柱穴状土坑とした。柱の痕跡を残すものは、全てここに含めた。分布は、調査区北半から西端に集中し、沢跡を挟んだ西側にも分布する。沢跡付近は分布密度が薄いことから、ここを避けて選地したとも考えられる。

なお、以下の事実記載は、柱穴状土坑の集合である「群」ごとに行う。「群」は、縮尺１／100での掲載を念頭に、柱穴状土坑の大まかな分布域を捉えられるように任意の範囲で設定した（第56図）。

その上で、土坑も柱穴に見立て、改めて建物を想定した配置を検討した。

第１群

遺構（第58・59・62・64・65・68図、写真図版40）

［概要］ＳＸ01を西端にして、南北24ｍ、東西16ｍの範囲とした。北西側は調査区境界に接する。東側は宅地造成のため大幅に削平されており、遺構は存在しない。ＢＶ20・30・40グリッドに集中域があり、ここを境に北東側は約20㎝の比高差を有して高位面となる。

［検出状況］前述の高位面は残存状態も比較的良好であったが、それでも表土除去段階でⅥ層の上面が露出した。これに対して南西側の低位面は、すでにⅥ層中まで削平がおよんでいた。そのため、高位面と低位面の遺構分布密度の差は、後世の削平深度に起因する可能性が高い。遺構検出面はⅥ層である。ここで確認したⅥ層は、遺跡の立地する自然堤防上でもより河川に近い地点のため、他地点よりも多くの礫が混入する。柱穴状土坑は124個検出した。範囲内には竪穴状遺構１基、土坑14基が含まれる。遺構の分布域は、調査区外の北西方向、現況の宅地方向へと拡がると考えられる。

［配置］ＳＫ36を北端に、ＳＫ36－ＳＫ11－ＳＫ08－ＳＫ38－ＳＫ01と５つの土坑が250㎝間隔で均等に並ぶ。この軸線に直交して、南端のＳＫ01から西方向へＳＫ01－(500㎝)－ＳＫ25－(250㎝)－ＳＫ02が並ぶ。この配置による建物の存在が推定される。

［埋土］黒色、または黒褐色シルトが主体となって堆積するものが多い。ＢＶ30を中心に灰黄褐色砂質シルトブロックが混入するものが目立つ。

遺物（第71図、写真図版43）

［鉄製品］ＢⅥ01Ｐ５埋土中から、釘が１点出土している（７）。

［銭貨］ＢＶ20Ｐ６埋土中から、淳熙元寶、洪武通寶、無文銭５枚の計7枚が一括して出土した（15～20）。銭貨は、ＳＫ01の無文銭1枚、遺構外の寛永通寶2枚を合わせると、範囲内から計10枚が出土している。

時期　ＢＶ20Ｐ６出土遺物の流通年代から中世から近世までの広い時間幅が想定される。遺物を出土しない遺構も、形態、規模、堆積土の色調・土質等、相互の共通性が強い。加えて範囲内から寛永通寶が出土することを考慮し、こちらも同様に中世から近世に属するものと考えたい。

第２群

遺構（第64・66・68・69図、写真図版40）

［概要］ＢＶ38を北東端、ＢＶ75を南西端、ＢＶ78を南東端とする、南北24ｍ、東西16ｍの範囲とした。攪乱が多く、ＢＶ38グリッド周辺とＢＶ67の遺構空白域は、これにより生じたと考えられる。柱穴状土坑は、径が30㎝前後と他の群のものに比べ規模が小さいものが多い。

［検出状況］遺構確認面は、調査区西端付近のＢＶ65・75グリッドとＢＶ66グリッドの一部ではⅤ層、これ以外では、Ⅵ層で確認した。ここで確認したⅥ層は、自然堤防から後背湿地へと漸移する部分と考えられ、南西側ほど礫の混入量が少ない。柱穴状土坑は85個検出した。範囲内には土坑３基が含まれる。遺構の分布域は、調査区外の北西方向、現況の宅地方向へと拡がるものと考えられる。

［配置］規則的な配置は、看取できなかった。

［埋土］黒色、または黒褐色シルト主体で、色調や土質は第１群と差が見出せない。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物がなく不明である。しかし、検出レベルや埋土の土質・状態等に第１群との共通性

を見出せることから、本群も同様に中世から近世の時間幅に収まるものと考えたい。

第3群

遺構（第62・67・69図、写真図版41）

［概要］沢跡の西側に位置し、ＢⅥ71Ｐ１を西端、ＢⅥ64を北東端、ＢⅥ94を南東端とする、南北16ｍ、東西16ｍの範囲とした。現行の国道４号に隣接する。本群の位置する沢跡西側は攪乱が非常に多く、相当数の消失が推定される。本群中では、土坑と柱穴状土坑の間の形態、規模の差が小さい。したがって、土坑としたものについても、柱穴として機能したものが多く含まれると考えられる。

［検出状況］遺構検出面は、全域にてⅥ層である。同面は全体に堅緻であった。柱穴状土坑は24個検出した。範囲内には土坑16基が含まれる。

［配置］柱間寸法220㎝を核とする２つのまとまりを指摘できる。若干の角度の差はあるものの、お互い南北方向に主軸線を置く建物跡と考えられる。

［埋土］黒色、または黒褐色シルトが主体となって堆積するものが多い。

遺物　柱穴状土坑からは出土していないが、ＳＫ13から寛永通寶が１枚出土している。また、ＳＫ18・20からは縄文土器が各１点出土している。

時期　土坑の出土遺物以外に時期を明示する遺物は無いが、検出レベルや埋土の土質・状態等が１、２群との共通性を有することから、本群も同様に中世から近世の時間幅に収まるものと考えたい。

第4群

遺構（第67・69図、写真図版40）

［概要］ＢⅥ71グリッドの周囲、南北5.5ｍ、東西４ｍの範囲とした。第１群の南側に位置し、一部を重複させて設定した。

［検出状況］遺構検出面はⅥ層である。地形的特徴は第１群に準じる。柱穴状土坑を５個検出した。

［配置］沢跡の落ち際に沿うように、柱穴状土坑が並ぶ。杭列、もしくは柵列の可能性がある。

［埋土］黒色シルト主体で、灰黄褐色砂質シルトブロックが混入するものが多い。

遺物　範囲内から遺物は出土していない。

時期　不明であるが、周辺の土坑、柱穴状土坑と同時期、中世から近世に属するものと考えたい。

第5群

遺構（第67・69図、写真図版40）

［概要］ＢＶ69・79グリッドを中心とする南北11ｍ、東西６ｍの範囲とした。第２群の南東側に位置し、一部を重複させて設定した。

［検出状況］遺構検出面はⅥ層である。地形的特徴は第２群に準じる。柱穴状土坑を５個検出した。

［配置］規則的な配置は看取できなかった。

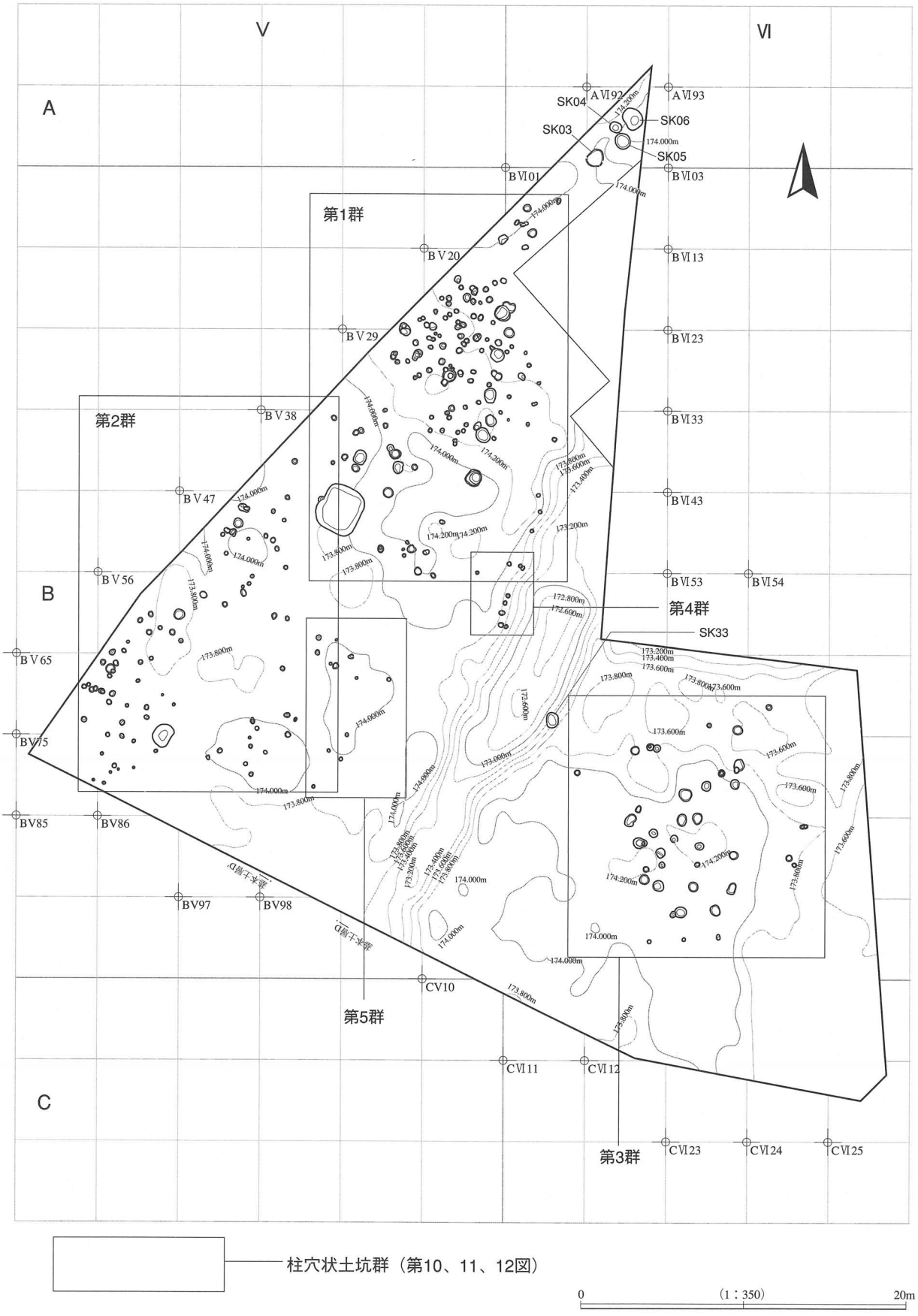
［埋土］黒色シルトが主体に堆積している。

遺物（第70図、写真図版42）

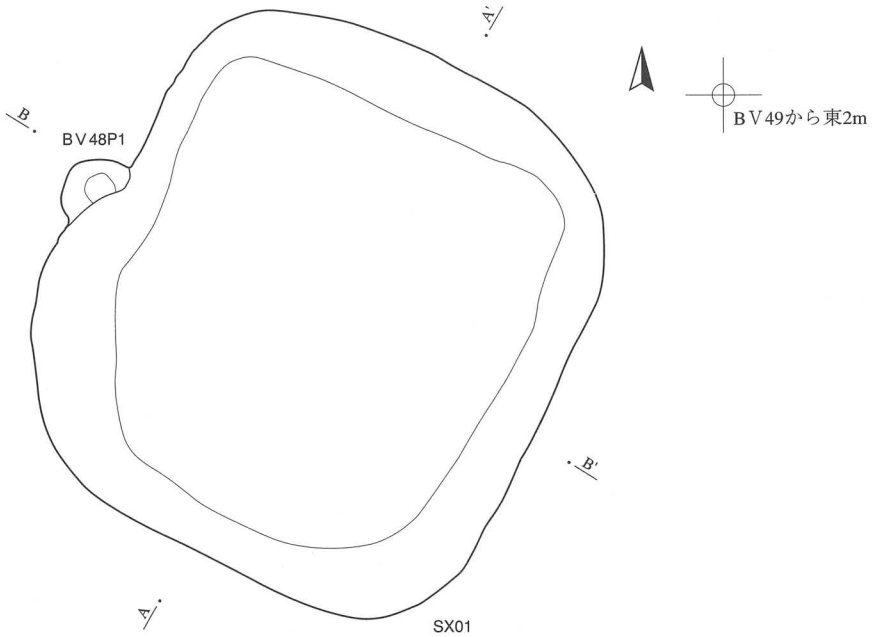
［縄文土器］ＢＶ69Ｐ２埋土中から１点出土した（３）。

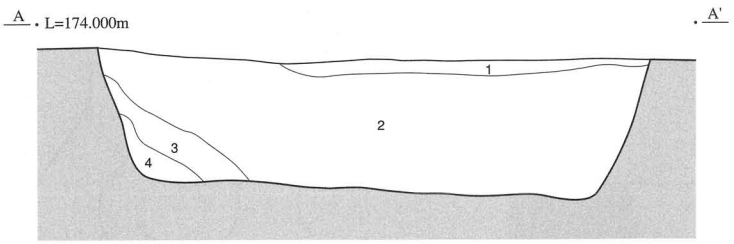
時期　不明であるが、周辺の土坑、柱穴状土坑と同時期、中世から近世に属するものと考えたい。

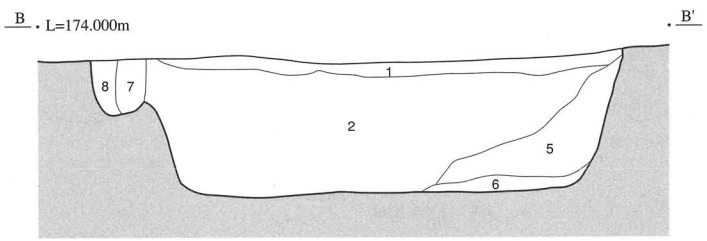
（荒谷）



第56図　野中遺跡遺構配置とⅥ層面の標高



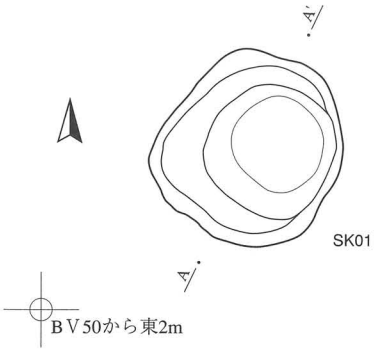




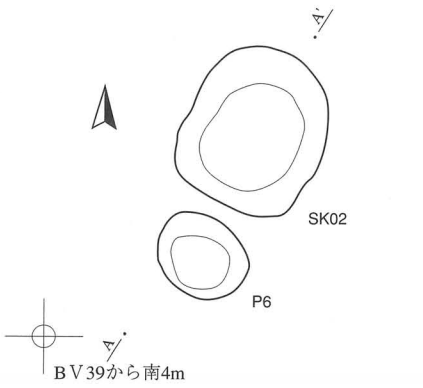
SX01
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5cm）5%、礫（～5cm）1%。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　堆積過程で数度10YR4/6褐色シルトの間層（層厚1～2cm）が入る。大形礫多量。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）3%。
4　10YR4/3　にぶい黄褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　砂混。
5　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～10cm）10%、礫（～3cm）5%。
6　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）1%。
BV48 P1
7　10YR3/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）1%。柱痕。
8　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）5%。

0　(1：40)　2m

第57図　ＳＸ01

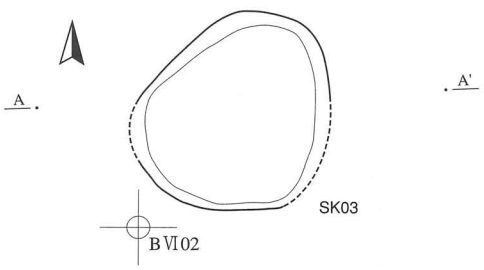


SK01
1　10YR2/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）3%、
礫（～5cm）1%以下。

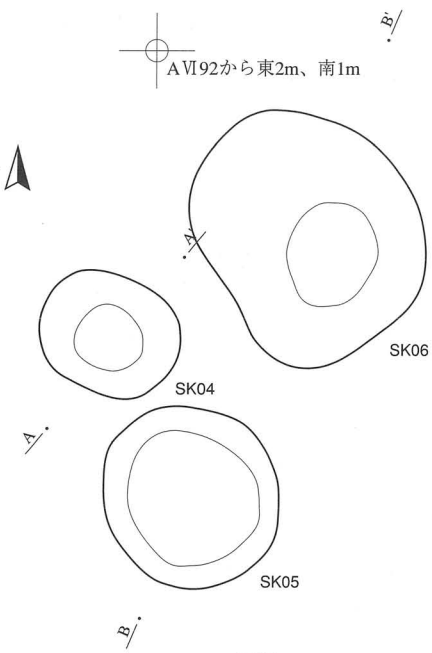


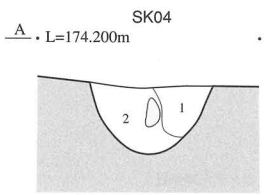
SK02
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）1%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）1%。
大形の礫（10cm～）も混入。

BV39 P6
1　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性やや弱・しまり中　礫（～5cm）1%。
炭化物粒（～5㎜）わずかに含む。若干、砂混。



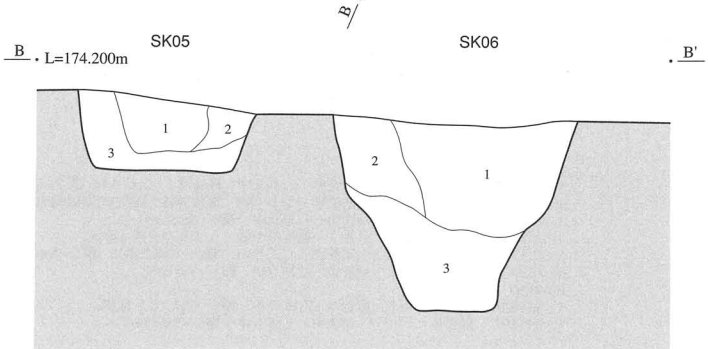
SK03
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～2cm）3%下方に集中。
2　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまり中　礫（～5cm）3%。
若干、砂が混じる。
3　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　礫（～5㎜）3%。
若干、砂が混じる。
4　10YR2/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）1%。





SK04
1　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）1%以下。
2　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）3%。

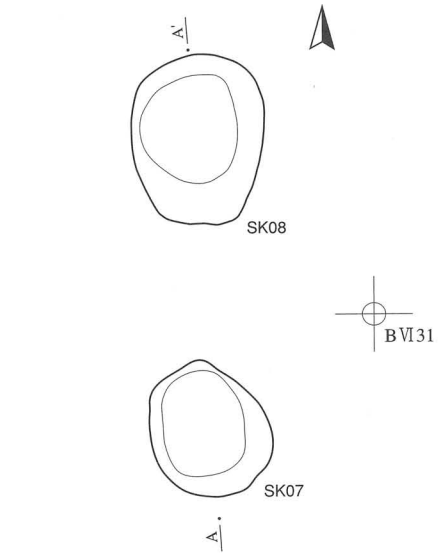
SK05
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）3%。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）10%。
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）10%下方に集中。

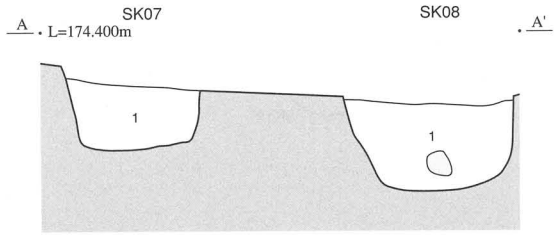


SK06
1　10YR3/1　黒褐色シルトと10YR2/1黒色シルトの互層　粘性中・しまり中　礫（～5cm）20%。
2　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性やや弱・しまり中　礫（～3cm）5%。若干、砂が混じる。
3　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性弱・しまりやや弱　礫（～5cm）10%、礫（～15cm）5%。
砂が混じる。

0　（1：40）　2m

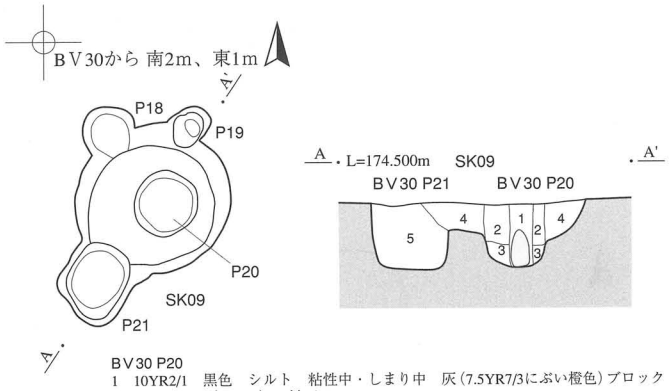
第58図　ＳＫ01～06





SK07
1　10YR2/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）3%、炭化物粒（～5cm）1%。

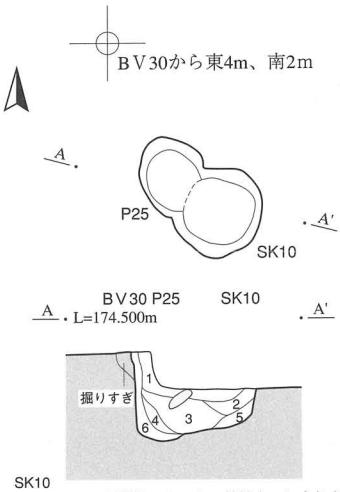
SK08
1　10YR2/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。大形礫（15cm）も混入。

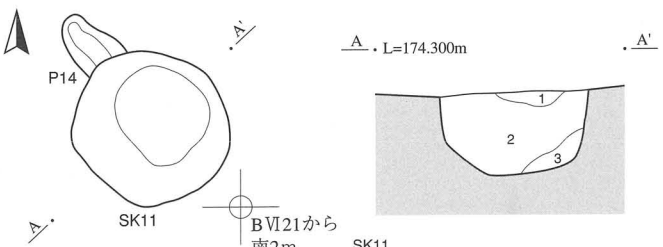


BⅤ30 P20
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　灰（7.5YR7/3にぶい橙色）ブロック（～3cm）1%以下。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）1%、灰（7.5YR7/3にぶい橙色）ブロック（～2cm）1%。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～2㎜）1%以下。

SK09
4　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）3%、灰（7.5YR7/3にぶい橙色）ブロック（～5cm）1%。

BⅤ30 P21
5　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5cm）1%以下。



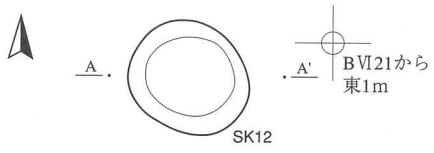


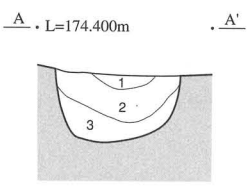
SK11
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）3%、礫（～5㎜）1%。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）5%。
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。

SK10
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）1%、炭化物粒（～5㎜）1%。
2　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）30%。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）5%。
4　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
5　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
BⅤ30 P25
6　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）5%。

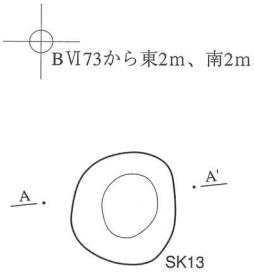
0　(1：40)　2m

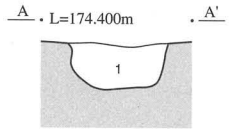
第59図　ＳＫ07～11



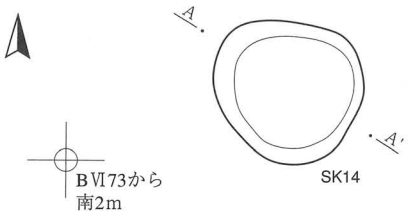


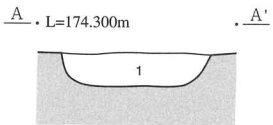
SK12
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3㎜）1%以下。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。
3　7.5YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）1%以下。



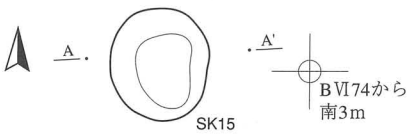


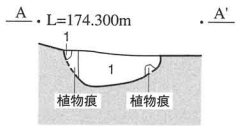
SK13
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック5%、
礫・破砕礫（～1cm）3%。



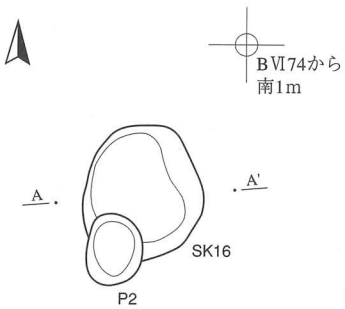


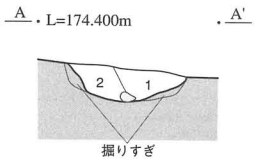
SK14
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　10YR2/1黒色シルトブロック7%、
10YR4/2灰黄褐色シルトブロック7%、礫・破砕礫（～1㎜）3%。



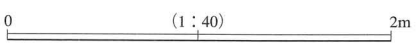


SK15
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。

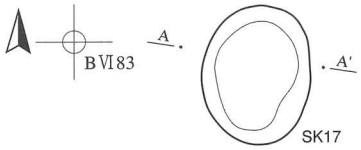


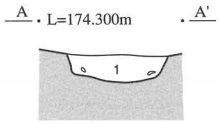


SK16
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
2　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色シルトの混土（5：5）粘性中・しまり強　礫（～1cm）1%。

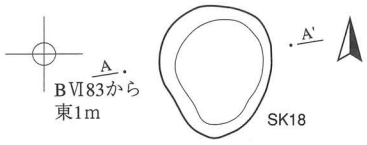


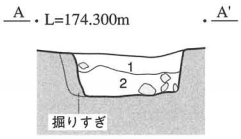
第60図　ＳＫ12～16



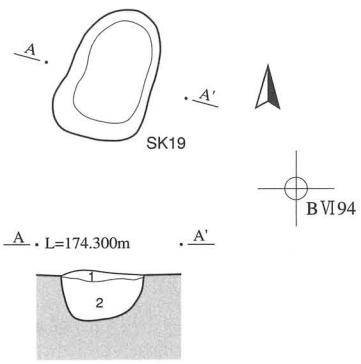


SK17
1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）1%。

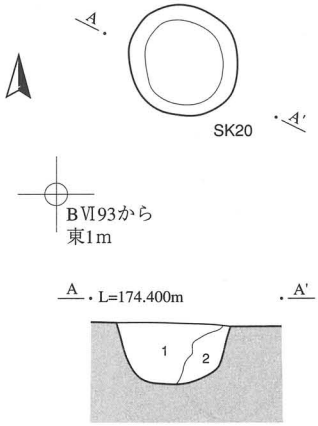




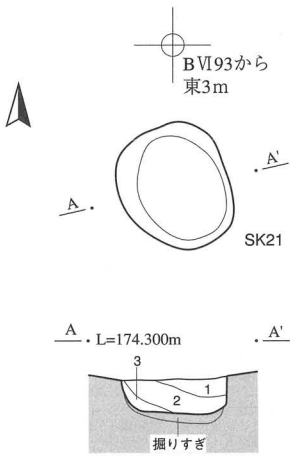
SK18
1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）1%以下。
2　10YR2/1黒色シルトと10YR3/3暗褐色シルトの混土（5：5）粘性中・
　　しまり中　礫（～5cm）5%。



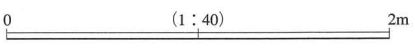
SK19
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック5%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）2%。



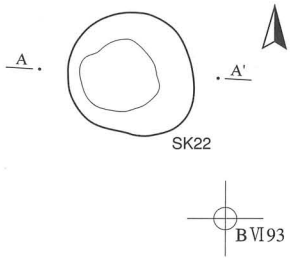
SK20
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）2%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色砂礫ブロック10%。



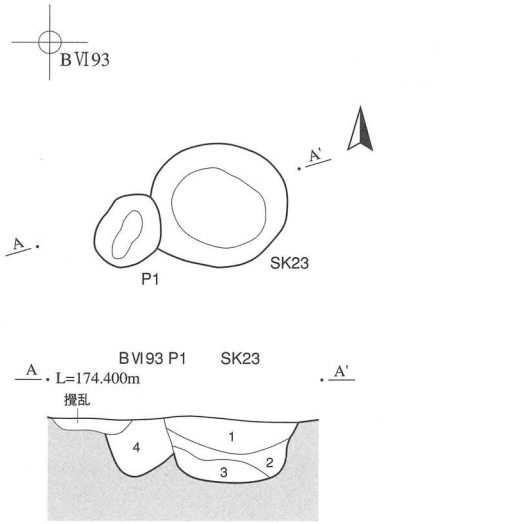
SK21
1　10YR2/1黒色シルトと10YR4/2灰黄褐色シルトの混土（7：3）粘性中・しまり強　破砕礫（～2cm）10%。
2　10YR4/2　灰黄褐色　シルト　粘性中・しまり強　10YR2/1黒色シルトブロック3%、礫・破砕礫（～2cm）10%。
3　10YR2/1黒色シルトと10YR4/2灰黄褐色シルトの混土（7：3）粘性中・しまり強　礫・破砕礫（～2cm）10%。



第61図　ＳＫ17～21

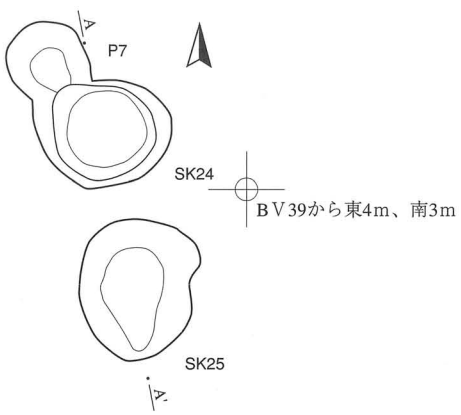


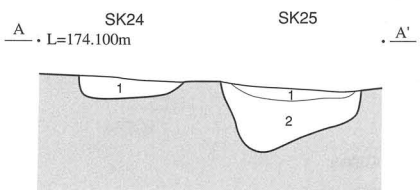
SK22
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）2%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色砂礫ブロック10%。



SK23
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック3%、
　　礫・破砕礫（～2cm）3%。
2　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混土（5：5）粘性中・しまり中
　　礫・破砕礫（～1cm）3%。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。

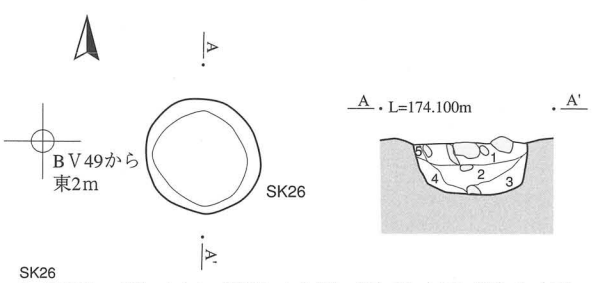
BⅥ93 P1
4　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫・破砕礫（～2cm）3%。



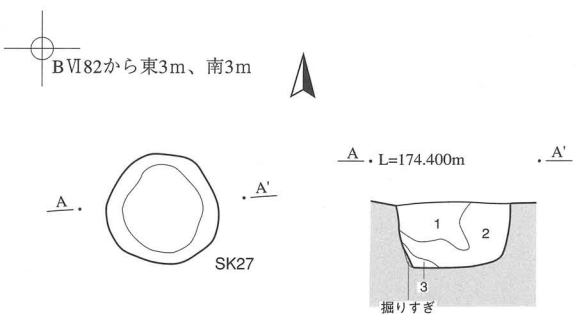


SK24
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。

SK25
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）10%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）5%。



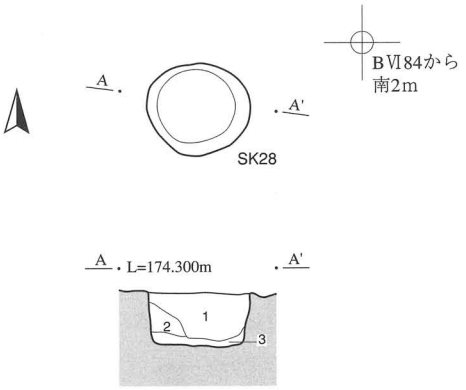
SK26
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～15cm）10%、礫（～3cm）1%。
2　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）5%。
3　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
4　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
5　10YR3/3　暗褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）10%。壁崩落土。



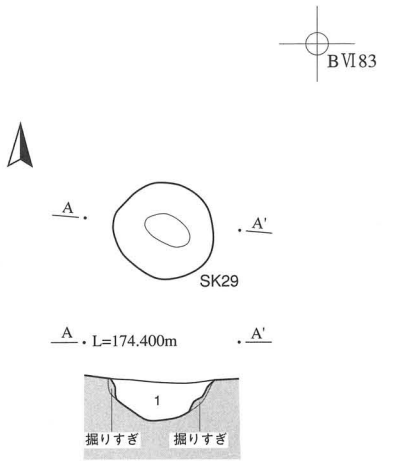
SK27
1　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　　10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック5%、破砕礫（～1cm）1%。
2　10YR2.5/1黒～黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土（5：5）
　　粘性中・しまり中　破砕礫（～1cm）3%。
3　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　　10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック5%、破砕礫（～1cm）1%。

0　(1：40)　2m

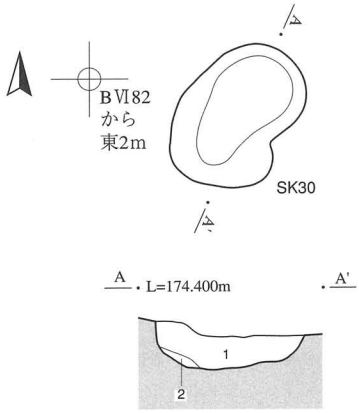
第62図　ＳＫ22～27



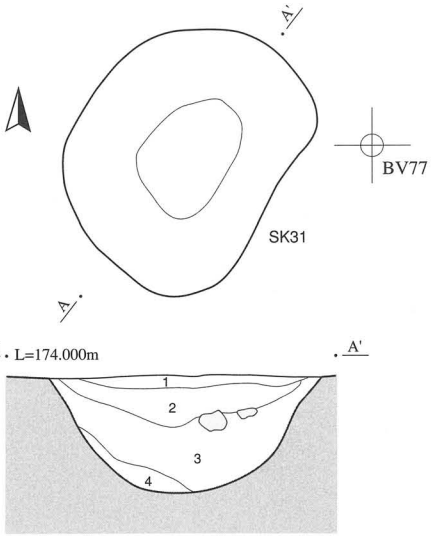
SK28
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒1%以下。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック5%。
3　10YR2/1黒色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土(6：4)粘性中・しまり中
　礫・破砕礫(～3cm)3%。



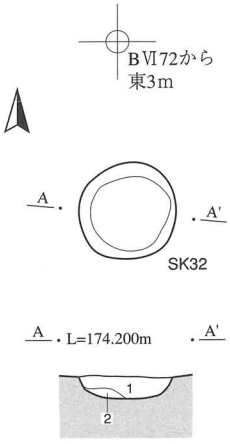
SK29
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルト
　ブロック5%、礫・破砕礫(～1cm)1%。



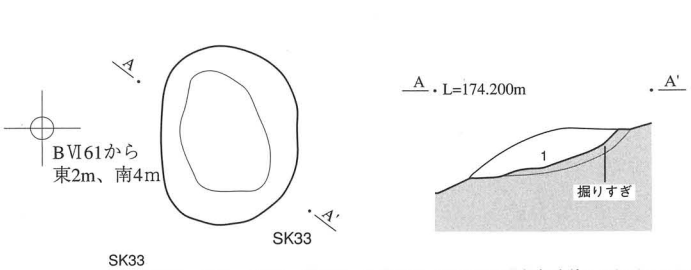
SK30
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シ
　ルトブロック5%。
2　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土(6：4)
　粘性中・しまり中。



SK31
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色シルトブロック
　(～3cm)15%。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫(～5㎜)1%以下。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫(～15cm)1%以下。
4　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/3暗褐色シルトブロック
　(～5㎜)3%。



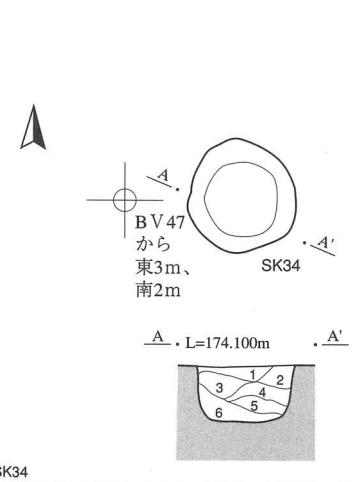
SK32
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中　・しまり中。
2　10YR2/1黒色シルトと10YR4/2灰黄褐色シルトの混土(5：5)
　粘性中・しまり中。



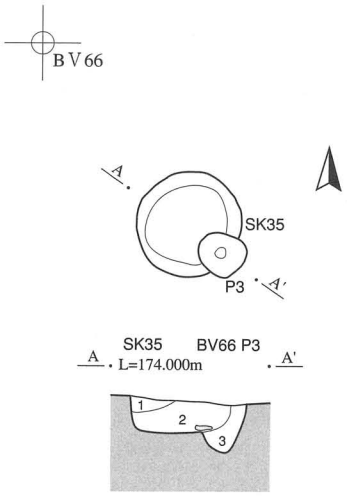
SK33
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。

0　(1：40)　2m

第63図　ＳＫ28～33

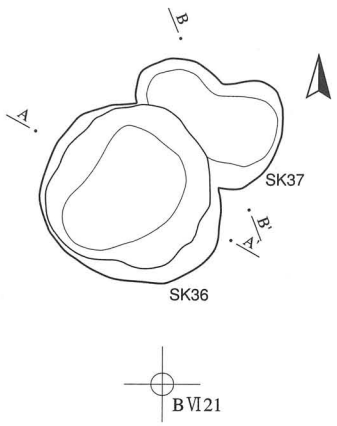


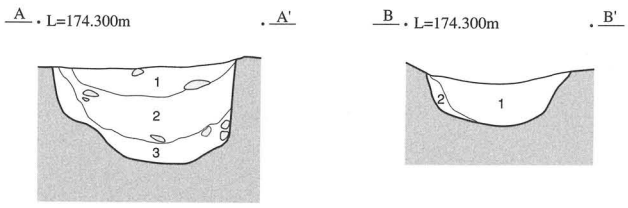
SK34
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）1%以下。
2　10YR3/3　灰暗褐色　シルト　粘性中・しまり中。
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）1%以下。
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～2㎜）1%。
5　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
6　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）3%。



SK35
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトブロック3%。
2　10YR3/2黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性中・しまり中。

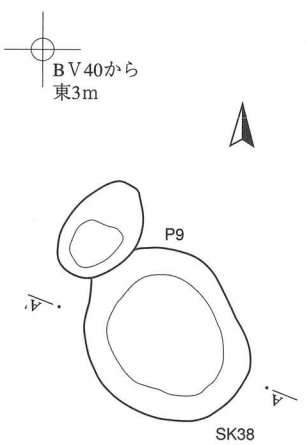
BV66 P3
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱。

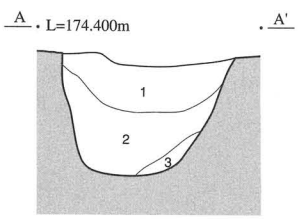




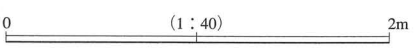
SK36
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）5%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　礫（～2cm）5%。
3　10YR2/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色シルトの混土　粘性中・しまり弱　礫（～2cm）5%。礫（5～10cm）全体的に散在。

SK37
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。
2　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性弱・しまり中　礫（～1cm）5%。

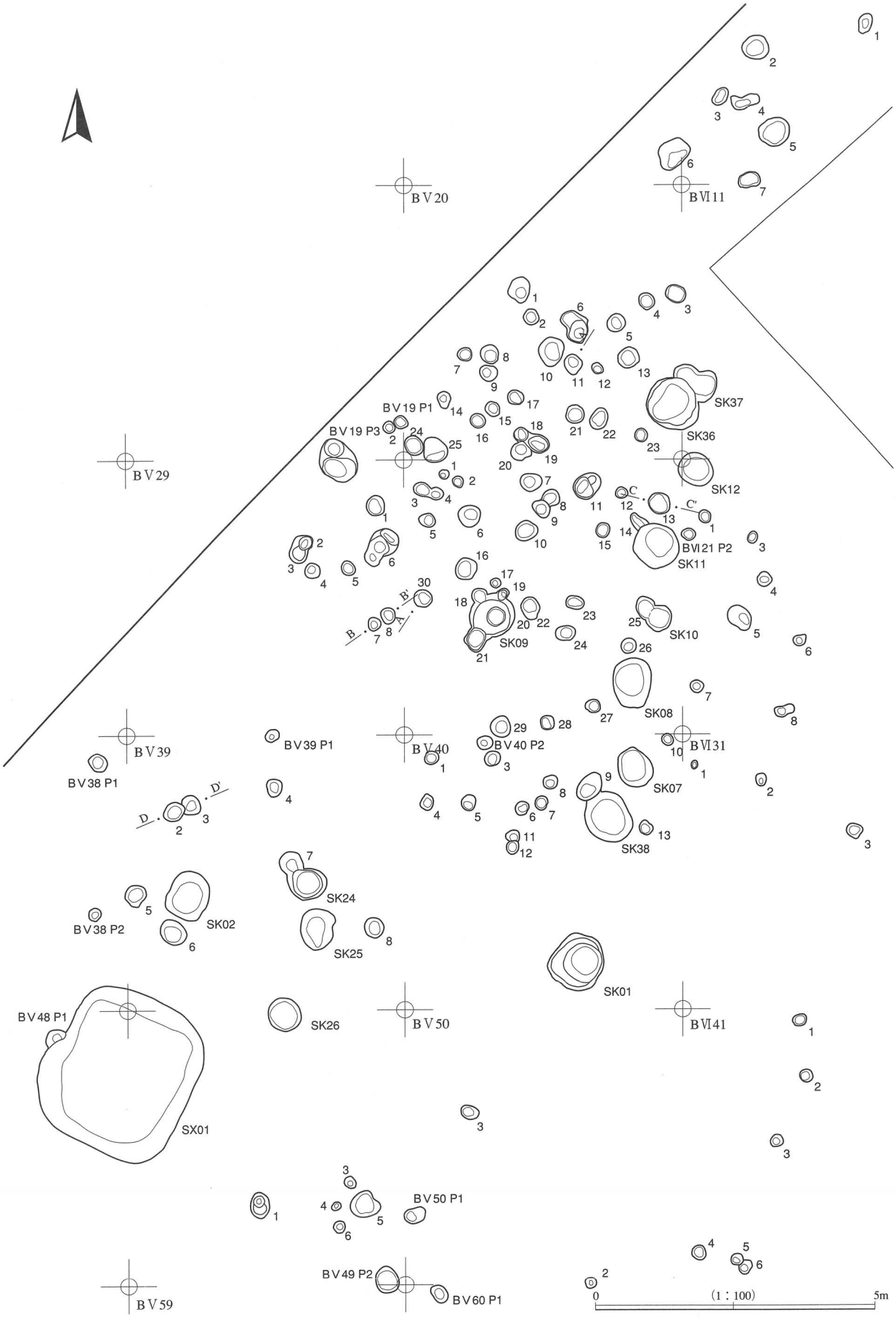




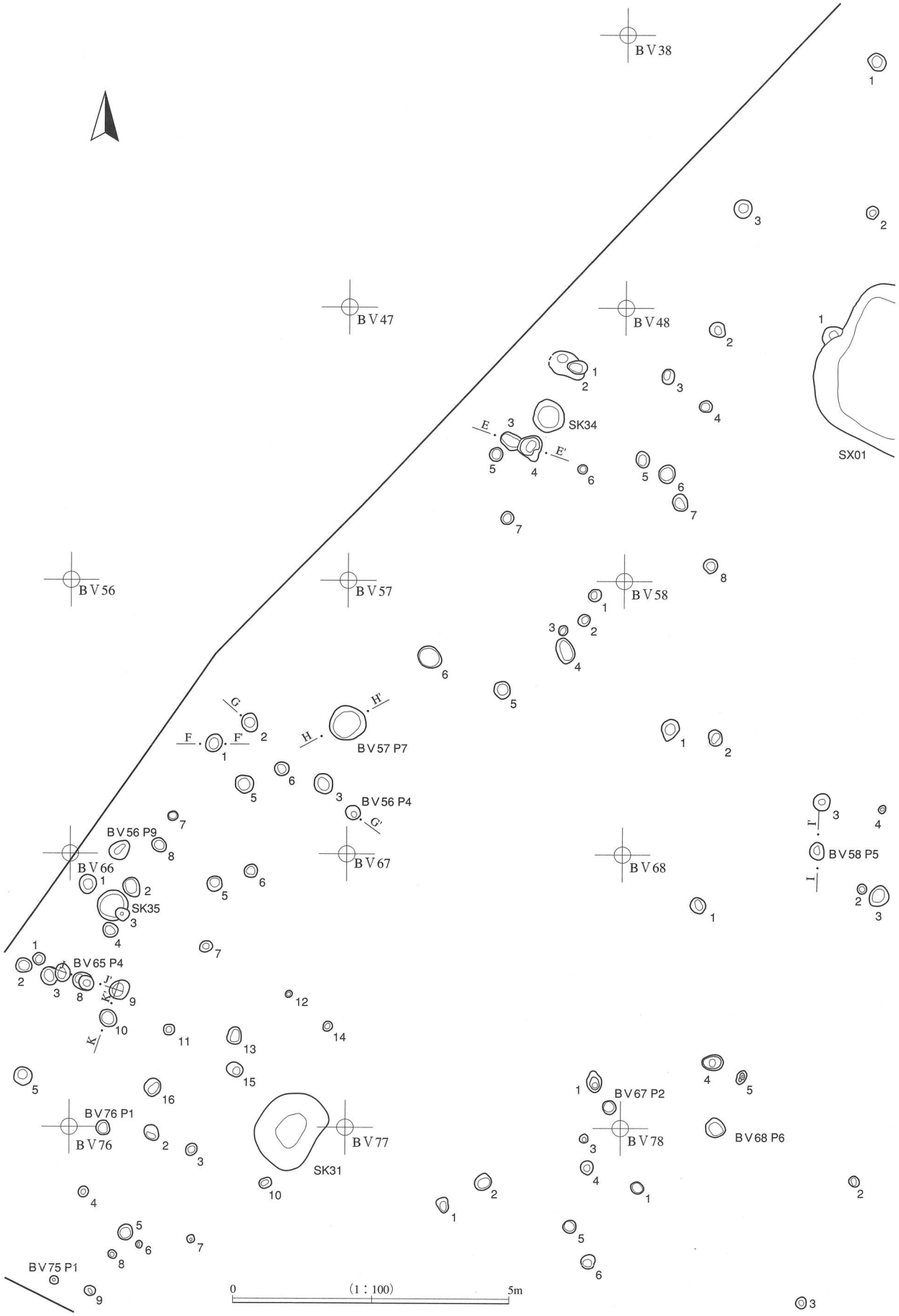
SK38
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　礫（～2cm）5%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　礫（～2cm）3%。
3　10YR2/1黒色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂の混土（7：3）粘性弱・しまり弱。



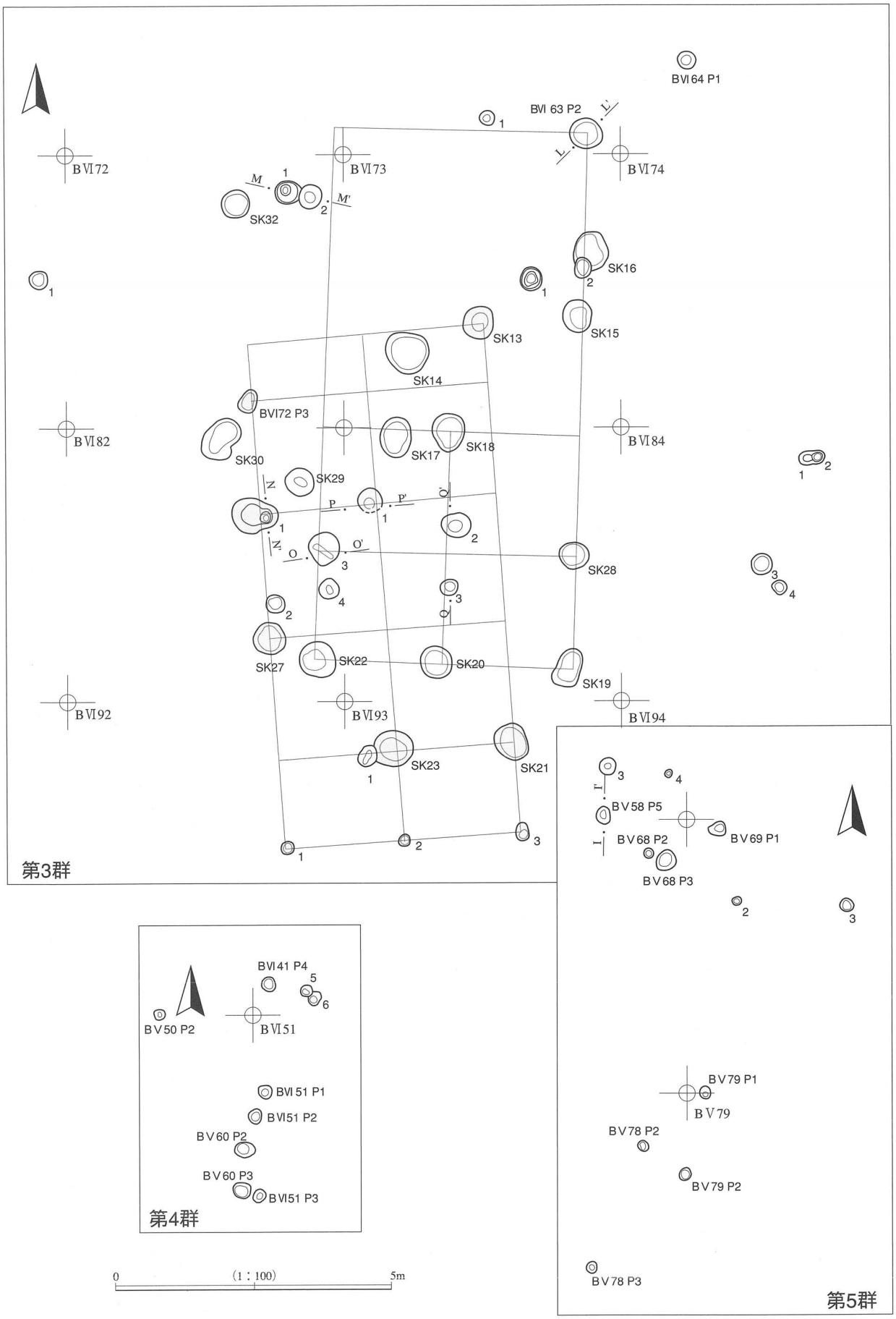
第64図　ＳＫ34～38



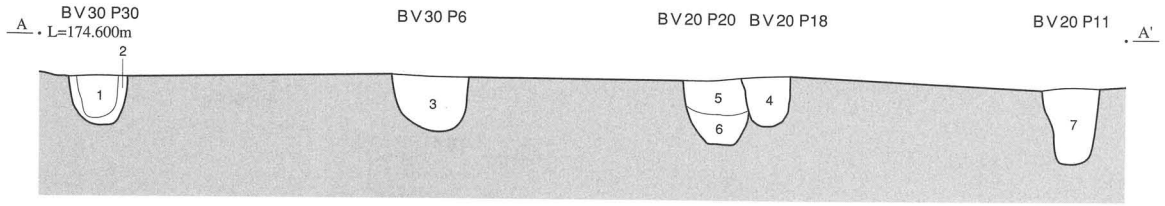
第65図　柱穴状土杭 第1群



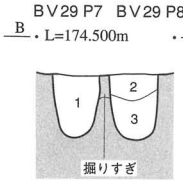
第66図　柱穴状土杭 第2群



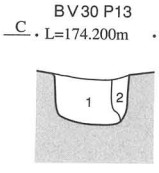
第67図　柱穴状土杭 第３～５群



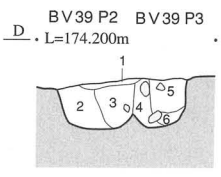
BV30 P30
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック10%、礫（～1cm）3%。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）1%以下。
BV30 P6
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%、10cm大数個。
BV20 P18
4　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。
BV20 P20
5　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～3cm）3%。
6　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～3cm）5%。
BV20 P11
7　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　埋土上位10cmに礫（～10cm）3%、埋土下位に礫（～3cm）5%。



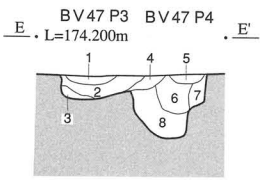
BV29 P7
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）1%。
BV29 P8
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック3%。
3　10YR2/1黒色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの混土（7：3）粘性中・しまり中　礫（～1cm)3%。



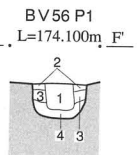
BV30 P13
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。
2　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/4褐色砂質シルトの混土（5：5）粘性中・しまり中　礫（～1cm）5%。



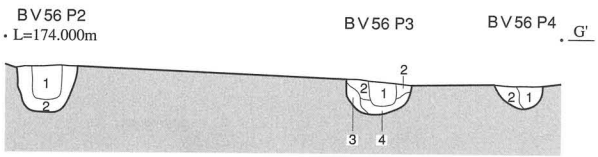
BV39 P2
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）1%以下。
2　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）1%。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）1%以下。柱痕の可能性あり。
BV39 P3
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック5%。
5　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）1%以下。柱痕の可能性あり。
6　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。



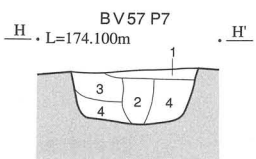
BV47 P3
1　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物粒（～5㎜）1%以下。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック（～1cm）3%。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
4　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
BV47 P4
5　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
6　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）1%以下。柱痕の可能性あり。
7　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5㎜）1%以下。
8　10YR2/3　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）3%。



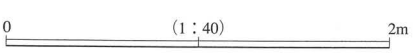
BV56 P1
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色粘土ブロック（～5mm）10%が埋土上方に濃集。柱痕の可能性あり。
2　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～3㎜）1%以下。
4　10YR2/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。



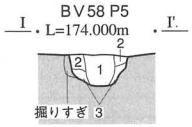
BV56 P2
1　10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色粘土ブロック（～1㎜）3%。柱痕の可能性あり。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～2cm）1%。
BV56 P3
1　10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色粘土ブロック（～1cm）5%。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
3　10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
4　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
BV56 P4
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）1%以下。
2　10YR2/2　黒色　シルト　粘性中・しまり中。



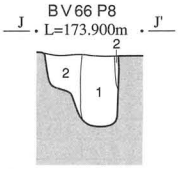
BV57 P7
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
3　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土（8：2）粘性中・しまり中。
4　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土（5：5）粘性中・しまり中　礫（～5cm）10%。



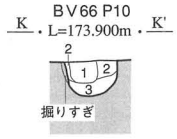
第68図　柱穴状土杭群 断面（1）



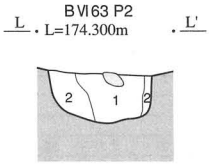
BV58 P5
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　柱痕。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック5%。
3　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中
　　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック10%。



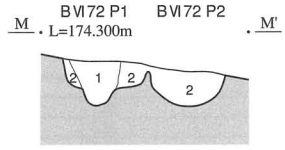
BV66 P8
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中
　　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック3%。
2　10YR2/1黒色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトの混土（6：4）
　　粘性中・しまり中　礫（～2cm）1%。



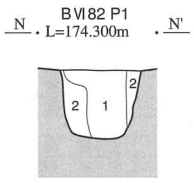
BV66 P10
1　10YR3/1黒褐色シルトと10YR6/6明黄褐色粘土の混土（6：4）粘性中・しまり中。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
3　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。



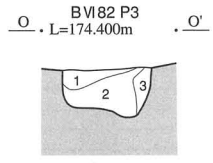
BVI63 P2
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
2　10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色シルトの混土（6：4）
　　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）1%。



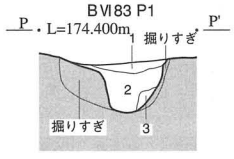
BVI72 P1・P2
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
2　10YR2/1黒色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混土（6：4）粘性中・しまり中
　　礫・破砕礫（～5mm）2%。



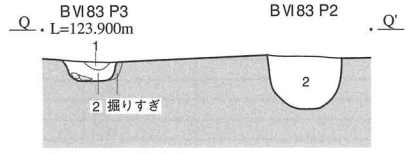
BVI82 P1
1　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　柱痕。
2　10YR2/1黒色シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土（5：5）粘性中・しまり中。



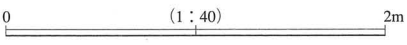
BVI82 P3
1　10YR3/1黒褐色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混土（5：5）粘性中・しまり中。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。
3　10YR2/1　黒色　シルトと10YR4/3にぶい黄褐色シルトの混土　粘性中・しまり中。



BVI83 P1
1　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/1黒褐色シルトブロック3%。
3　10YR2/1黒色シルトと10YR4/2灰黄褐色シルトの混土（5：5）粘性中・しまり強。



BVI83 P2・3
1　2.5YR6/2　灰黄色　砂質シルト　粘性弱・しまり中。
2　10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）1%。



第69図　柱穴状土杭群 断面（2）

第21表　柱穴状土坑計測値と土層註記

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
第1群	ＢＶ19Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～2cm）3%。	16.6	174.066
	ＢＶ19Ｐ2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～2cm）3%。	7.3	174.159
	ＢＶ19Ｐ3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。	35.0	173.873
	ＢＶ20Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　2.5Y3/4黄褐色ブロック1%。	17.2	173.948
	ＢＶ20Ｐ2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　2.5Y3/4黄褐色ブロック1%。	12.4	174.001
	ＢＶ20Ｐ3	10YR3/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	19.0	173.895
	ＢＶ20Ｐ4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	24.0	173.871
	ＢＶ20Ｐ5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	22.6	173.900
	ＢＶ20Ｐ6	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）5%。	27.8	173.835
	ＢＶ20Ｐ7	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	15.2	174.020
	ＢＶ20Ｐ8	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	10.6	174.066
	ＢＶ20Ｐ9	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	29.3	173.879
	ＢＶ20Ｐ10	10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）3%。	31.9	173.821
	ＢＶ20Ｐ11	実測図参照	13.3	173.994
	ＢＶ20Ｐ12	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	9.0	174.030
	ＢＶ20Ｐ13	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	28.9	173.877
	ＢＶ20Ｐ14	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～2cm）3%。	20.0	174.010
	ＢＶ20Ｐ15	10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	28.8	173.932
	ＢＶ20Ｐ16	10YR1.7/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	20.3	174.022
	ＢＶ20Ｐ17	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	14.1	174.052
	ＢＶ20Ｐ18	実測図参照	25.9	173.958
	ＢＶ20Ｐ19	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	12.4	174.088
	ＢＶ20Ｐ20	実測図参照	36.4	173.853
	ＢＶ20Ｐ21	10YR2/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）1%。	23.5	173.951
	ＢＶ20Ｐ22	10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）5%。	14.1	174.045
	ＢＶ20Ｐ23	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	13.7	174.023
	ＢＶ20Ｐ24	10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）3%。	5.2	174.153
	ＢＶ20Ｐ25	10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）3%。	24.8	173.957
	ＢＶ29Ｐ1	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	13.4	174.076
	ＢＶ29Ｐ2	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	20.5	174.052
	ＢＶ29Ｐ3	10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	16.9	174.088
	ＢＶ29Ｐ4	10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	5.4	174.207
	ＢＶ29Ｐ5	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	4.4	174.223
	ＢＶ29Ｐ6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。	14.7	174.119
	ＢＶ29Ｐ7	実測図参照	14.1	174.165
	ＢＶ29Ｐ8	実測図参照	15.2	174.134
	ＢＶ30Ｐ1	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。	9.0	174.085
	ＢＶ30Ｐ2	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	13.5	174.040
	ＢＶ30Ｐ3	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　礫（～1cm）3%。	34.1	173.893
	ＢＶ30Ｐ4	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。	19.6	174.038
	ＢＶ30Ｐ5	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　礫（～3cm）5%。	36.1	173.906
	ＢＶ30Ｐ6	実測図参照	35.5	173.873
	ＢＶ30Ｐ7	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　礫（～1cm）3%。	28.7	173.898
	ＢＶ30Ｐ8	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	24.6	173.917
	ＢＶ30Ｐ9	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　礫（～1cm）3%。	24.3	173.901
	ＢＶ30Ｐ10	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	25.1	173.998
	ＢＶ30Ｐ11	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～3cm）5%。	92.7	173.185
	ＢＶ30Ｐ12	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　礫（～1cm）3%。	17.9	173.901
	ＢＶ30Ｐ13	実測図参照	26.7	173.688
	ＢＶ30Ｐ14	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	16.9	173.968
	ＢＶ30Ｐ15	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	18.8	174.059
	ＢＶ30Ｐ16	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～3cm ）5%。	36.1	173.920
	ＢＶ30Ｐ17	10YR2/1黒色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの混土(6：4)　粘性中・しまり中。	7.9	174.211
	ＢＶ30Ｐ18	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	23.5	174.118
	ＢＶ30Ｐ19	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　礫（～1cm）3%。	13.7	174.150
	ＢＶ30Ｐ20	実測図参照	45.5	173.898
	ＢＶ30Ｐ21	実測図参照	27.1	174.082
	ＢＶ30Ｐ22	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	36.0	173.953
	ＢＶ30Ｐ23	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり弱　礫（～1cm）3%。	20.4	174.052
	ＢＶ30Ｐ24	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	17.0	174.135
	ＢＶ30Ｐ25	実測図参照	47.0	173.830
	ＢＶ30Ｐ26	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～3cm）5%。	10.0	174.147
	ＢＶ30Ｐ27	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	17.0	174.208
	ＢＶ30Ｐ28	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり強　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	16.2	174.313
	ＢＶ30Ｐ29	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	35.0	174.132
	ＢＶ30Ｐ30	実測図参照	20.6	174.143
	ＢＶ38Ｐ1	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	11.8	173.752
	ＢＶ38Ｐ2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）5%。	12.5	173.691
	ＢＶ39Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	2.9	174.063
	ＢＶ39Ｐ2	実測図参照	26.1	173.724
	ＢＶ39Ｐ3	実測図参照	31.5	173.670
	ＢＶ39Ｐ4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	21.1	173.829
	ＢＶ39Ｐ5	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）5%。	9.1	173.816
	ＢＶ39Ｐ6	実測図参照	30.7	173.624
	ＢＶ39Ｐ7	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）3%。	8.9	173.830
	ＢＶ39Ｐ8	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　破砕礫（～5mm）3%。	13.8	173.642
	ＢＶ40Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	12.5	174.083
	ＢＶ40Ｐ2	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）1%。	20.1	173.952
	ＢＶ40Ｐ3	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）1%。	5.2	174.123
	ＢＶ40Ｐ4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	11.5	174.060
	ＢＶ40Ｐ5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	0.6	174.155
	ＢＶ40Ｐ6	10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの混土(6：4)　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。	9.6	174.138
	ＢＶ40Ｐ7	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	9.2	174.142
	ＢＶ40Ｐ8	土層記録無し。	16.5	174.024
	ＢＶ40Ｐ9	10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの混土(6：4)　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。	19.2	173.997
	ＢＶ40Ｐ10	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%、礫（～1cm）3%。	13.9	174.146

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
第1群	BV40P11	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	11.2	174.173
	BV40P12	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	13.9	174.138
	BV40P13	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	21.9	174.009
	BV48P1	実測図参照	28.4	173.563
	BV49P1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）5%、礫（～10cm）5%。	42.4	173.678
	BV49P2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫3%混入。	45.0	173.582
	BV49P3	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5mm）3%。	11.2	173.919
	BV49P4	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5mm）3%。	8.6	173.961
	BV49P5	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5mm）3%。	25.3	173.794
	BV49P6	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5mm）3%。	12.3	173.924
	BV50P1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5mm）2%。	15.6	173.893
	BV50P2	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	8.7	173.971
	BV50P3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルトブロック10%。	19.8	173.697
	BV60P1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック3%、下位ほど多い。	14.9	173.850
	BVI01P1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック3%、礫（～5cm）1%。	18.5	173.893
	BVI01P2	10Y3/1　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり弱　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック5%。	48.0	173.486
	BVI01P3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック3%、礫（～5cm）1%。	12.7	173.852
	BVI01P4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック3%。	20.5	173.806
	BVI01P5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック3%、礫（～5cm）1%。	11.7	173.924
	BVI01P6	10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂の混土(6：4)　粘性弱・しまり中　礫（～1cm）5%。	12.2	173.684
	BVI01P7	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり弱　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック5%。	35.3	173.785
	BVI21P1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	16.5	174.001
	BVI21P2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	11.0	174.042
	BVI21P3	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	7.3	174.136
	BVI21P4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	12.1	174.053
	BVI21P5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	20.9	173.989
	BVI21P6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	8.5	174.133
	BVI21P7	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	7.0	174.188
	BVI21P8	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	19.9	174.010
	BVI31P1	10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）1%以下。	10.9	174.139
	BVI31P2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/4にぶい黄褐色ブロック（～5mm）1%。	12.6	174.096
	BVI31P3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～3cm）3%、礫（～10cm）以下。	16.6	173.839
	BVI41P1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック5%。	15.6	173.860
	BVI41P2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック5%。	1.8	173.986
	BVI41P3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5cm）1%以下。	22.0	173.771
	BVI41P4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。	19.9	173.833
	BVI41P5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。	15.5	173.863
	BVI41P6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。	20.2	173.816

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
第2群	BV38P3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック10%、礫（～2cm）5%。	1.9	173.901
	BV47P1	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～2cm）5%。	35.6	173.588
	BV47P2	10YR2/1黒色シルトと10YR3/1黒褐色シルトの混土(6：4)　粘性中・しまり中　礫（～7cm）5%。	28.7	173.657
	BV47P3	実測図参照	36.1	173.613
	BV47P4	実測図参照	19.6	173.798
	BV47P5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%。	9.9	173.892
	BV47P6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	6.2	173.965
	BV47P7	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	16.6	173.838
	BV48P2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%、礫（～5mm）5%。	9.7	173.811
	BV48P3	10YR2/1黒色シルトと10YR3/2黒褐色シルトブロックの混土(5：5)　粘性中・しまり中　礫（～2cm）10%。	7.8	173.868
	BV48P4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%、礫（～5mm）5%。	6.4	173.877
	BV48P5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%、礫（～5mm）5%。中央に大形礫混入。	6.4	173.885
	BV48P6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%、礫（～5mm）5%。	7.7	173.872
	BV48P7	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%、礫（～5mm）5%。中央で扁平礫が2点重なる。	13.0	173.940
	BV48P8	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%。	8.3	173.876
	BV56P1	実測図参照	17.4	173.714
	BV56P2	実測図参照	5.8	173.760
	BV56P3	実測図参照	13.6	173.494
	BV56P4	実測図参照	13.1	173.489
	BV56P5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5mm）5%。	8.5	173.708
	BV56P6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5mm）5%。	11.1	173.648
	BV56P7	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまりやや弱。	13.1	173.793
	BV56P8	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック5%。	12.5	173.798
	BV56P9	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	13.1	173.733
	BV57P1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%。	4.3	173.848
	BV57P2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%。	12.4	173.778
	BV57P3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%。	5.4	173.852
	BV57P4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%。	7.1	173.802
	BV57P5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%、礫（～5mm）5%。	13.4	173.809
	BV57P6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）1%。	10.2	173.841
	BV57P7	実測図参照	27.8	173.611
	BV58P1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）3%。	11.9	173.776
	BV58P2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR3/2黒褐色シルトブロック10%。	9.9	173.805
	BV58P3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	13.3	173.751
	BV58P4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック5%。	4.2	173.800
	BV58P5	実測図参照	5.5	173.821
	BV65P1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	3.2	173.780
	BV65P2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり強。	10.8	173.713
	BV65P3	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック5%。	31.2	173.503
	BV65P4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	7.3	173.711
	BV65P5	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック5%。	22.6	173.576
	BV66P1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック5%。	26.3	173.598
	BV66P2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック5%。	15.3	173.699
	BV66P3	実測図参照	39.5	173.416
	BV66P4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり弱　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック5%。	20.8	173.581
	BV66P5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	1.1	173.696
	BV66P6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	11.7	173.749
	BV66P7	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	7.0	173.709

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
第2群	ＢＶ66Ｐ8	実測図参照	17.5	173.604
	ＢＶ66Ｐ9	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	18.5	173.576
	ＢＶ66Ｐ10	実測図参照	22.0	173.542
	ＢＶ66Ｐ11	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	6.2	173.711
	ＢＶ66Ｐ12	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	4.0	173.858
	ＢＶ66Ｐ13	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック10%。	15.9	173.679
	ＢＶ66Ｐ14	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック10%。	4.0	173.842
	ＢＶ66Ｐ15	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR5/8黄褐色シルトブロック3%。	17.3	173.683
	ＢＶ66Ｐ16	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	8.1	173.711
	ＢＶ67Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック5%。	7.0	173.934
	ＢＶ67Ｐ2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック5%。	2.6	174.019
	ＢＶ68Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック3%。	1.4	173.896
	ＢＶ68Ｐ2	10YR2/1黒色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混土(5：5)　粘性中・しまり中。	7.0	173.893
	ＢＶ68Ｐ3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック3%。	20.3	173.785
	ＢＶ68Ｐ4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	8.9	173.856
	ＢＶ68Ｐ5	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）1%。	9.2	173.886
	ＢＶ68Ｐ6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック3%。	21.3	173.814
	ＢＶ75Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	5.9	173.666
	ＢＶ76Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	10.8	173.661
	ＢＶ76Ｐ2	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	9.0	173.792
	ＢＶ76Ｐ3	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	11.9	173.695
	ＢＶ76Ｐ4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	11.5	173.713
	ＢＶ76Ｐ5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	5.5	173.720
	ＢＶ76Ｐ6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	4.1	173.764
	ＢＶ76Ｐ7	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	6.1	173.767
	ＢＶ76Ｐ8	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	2.0	173.830
	ＢＶ76Ｐ9	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	6.7	173.760
	ＢＶ76Ｐ10	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	6.0	173.670
	ＢＶ77Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	16.8	173.823
	ＢＶ77Ｐ2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック3%。	14.7	173.828
	ＢＶ77Ｐ3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	5.3	173.942
	ＢＶ77Ｐ4	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色シルトブロック3%。	6.3	173.932
	ＢＶ77Ｐ5	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	8.8	173.898
	ＢＶ77Ｐ6	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	9.6	173.915
	ＢＶ78Ｐ1	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック1%。	19.2	173.920
	ＢＶ78Ｐ2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック5%。	5.2	173.966
	ＢＶ78Ｐ3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック5%。	5.7	173.963

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
第3群	ＢⅥ63Ｐ1	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）3%。	14.6	173.888
	ＢⅥ63Ｐ2	実測図参照	22.8	173.811
	ＢⅥ64Ｐ1	10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）3%。	27.3	173.837
	ＢⅥ71Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～5㎜）1%。	30.9	173.887
	ＢⅥ72Ｐ1	実測図参照	29.6	173.863
	ＢⅥ72Ｐ2	実測図参照	23.9	173.904
	ＢⅥ72Ｐ3	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	20.7	174.028
	ＢⅥ73Ｐ1	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	26.0	173.935
	ＢⅥ73Ｐ2	10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色シルトの混土　粘性中・しまり中。	21.1	173.937
	ＢⅥ82Ｐ1	実測図参照	39.1	173.805
	ＢⅥ82Ｐ2	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	10.6	174.077
	ＢⅥ82Ｐ3	実測図参照	28.6	173.904
	ＢⅥ82Ｐ4	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック3%。	12.7	174.050
	ＢⅥ83Ｐ1	実測図参照	26.0	173.993
	ＢⅥ83Ｐ2	実測図参照	23.7	174.031
	ＢⅥ83Ｐ3	実測図参照	13.0	174.144
	ＢⅥ84Ｐ1	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり強　礫（～1cm）10%。	7.9	173.827
	ＢⅥ84Ｐ2	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり強　礫（～1cm）10%。	13.7	173.769
	ＢⅥ84Ｐ3	10YR3/1黒褐色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂の混土(5：5)　粘性弱　しまり強　礫（～2cm）10%。	22.2	173.620
	ＢⅥ84Ｐ4	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　礫（～1cm）5%。	6.7	173.748
	ＢⅥ92Ｐ1	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり強。	17.1	173.956
	ＢⅥ93Ｐ1	実測図参照	29.8	173.895
	ＢⅥ93Ｐ2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	8.5	174.053
	ＢⅥ93Ｐ3	10YR2/1黒色シルトと10YR4/2灰黄褐色砂質シルトの混土(6：4)　下位ほど10YR4/2砂質シルト含有量多い。礫（～5㎜）1%。	17.0	173.925

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
第4群	ＢⅥ51Ｐ1	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂ブロック5%。	－	－
	ＢⅥ51Ｐ2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック3%、下位ほど多い。	10.7	173.831
	ＢⅥ51Ｐ3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック3%、下位ほど多い。	5.6	173.844
	ＢＶ60Ｐ2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック3%、下位ほど多い。	13.8	173.801
	ＢＶ60Ｐ3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトブロック3%、下位ほど多い。	15.2	173.748

	遺構名	土層註記	深さ（cm）	底面標高（m）
第5群	ＢＶ69Ｐ1	10YR2/1黒色シルトと10YR3/2黒褐色シルトの混土(5：5)　粘性中・しまり中　礫（～2cm）10%、10YR4/2灰黄褐色シルトブロック5%。	13.8	173.799
	ＢＶ69Ｐ2	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中。	10.8	173.865
	ＢＶ69Ｐ3	10YR2/1　黒色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/4褐色シルトブロック1%。	7.3	173.853
	ＢＶ79Ｐ1	10YR2/2　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　10YR4/2灰黄褐色ブロック（～5㎜）1%。	12.9	173.945
	ＢＶ79Ｐ2	10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中。	18.0	173.893

2　出　土　遺　物

（1）縄文土器（第70図、第22表、写真図版42）

遺構内から３点（１～３）、遺構外から１点（４）が出土し、調査区内から１点（５）を採集した。いずれも小片で型式を明確にする要素を欠くが、類推しえるものについては大まかな時期比定を行った。

１、２は地文のみの胴部片である。３は網目状撚糸文が施されている。4は沢跡出土で磨滅が著しいが、横位の平行沈線による区画内に縄文が見える。これと大きく外傾する器形を考え合わせ、後期中葉に置いた。５は口縁部に結節回転文が施されているが、施文が不整で原体は不明である。時期は、結節回転文が盛行する前期前葉と考える。

（2）石　　器（第70図、第23表、写真図版42）

石核を調査区内から1点（６）採集した。石材は、野里上で分類した内の頁岩２にあたる。

（3）鉄製品・銭貨（第71図、第24・25表、写真図版43）

鉄製品は、ＢⅥ01Ｐ５から釘が1点（７）出土した。頭側の約２㎝を折り曲げた角釘である。

銭貨は、遺構内から10点（８～11、15～20）、遺構外から２点（12、13）が出土し、調査区内から１点（14）を採集した。いずれも薄い、軽い等の観点から模鋳銭と考えられる。

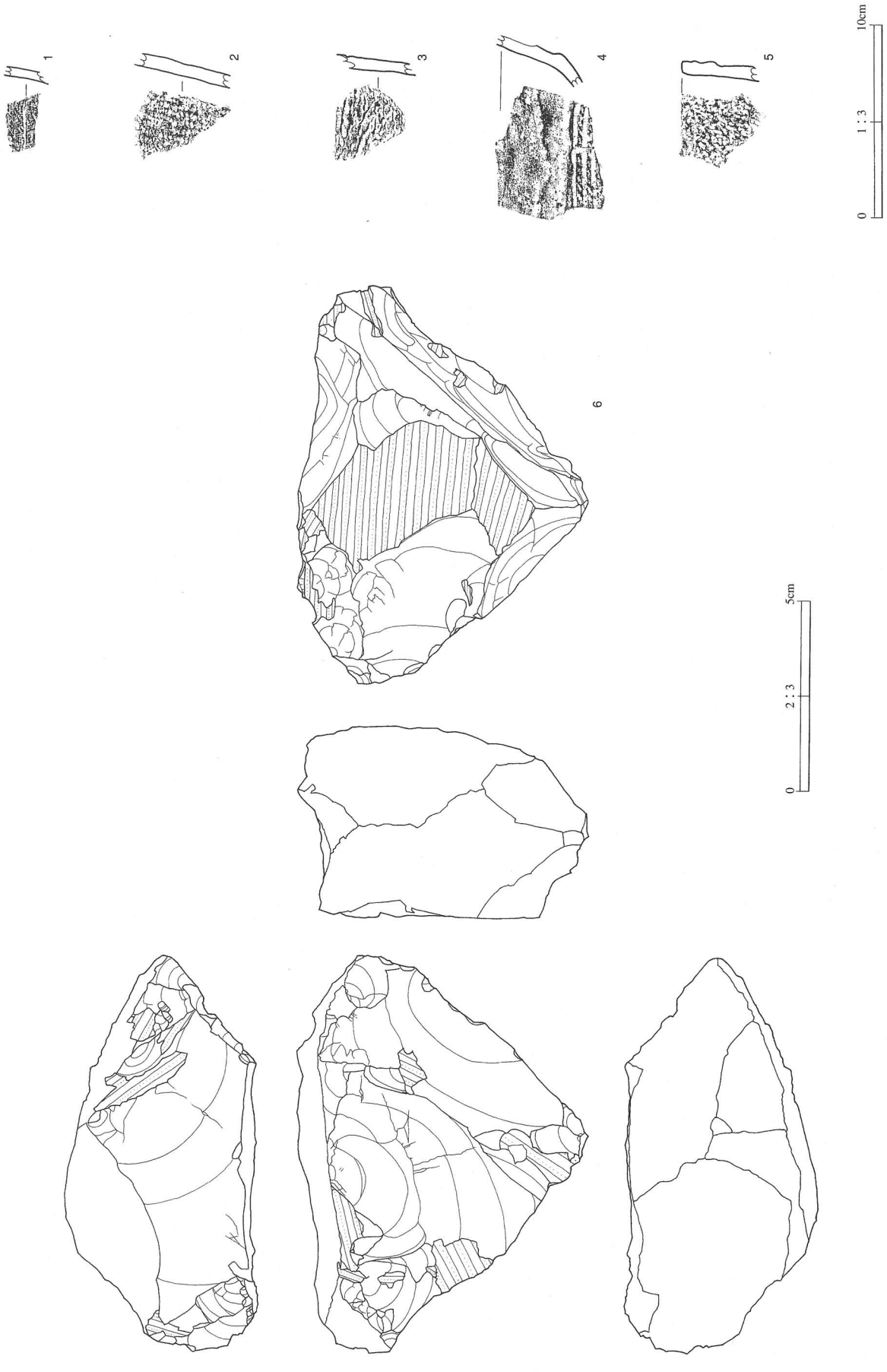
ＢⅤ20Ｐ６から、11を含む７枚が一括して出土した。７枚は、ほぼ重なった状態で出土したが固着が弱く、すぐに分離してしまった。そのため、出土状態の詳細な記録は出来なかった。なお、遺存状態も不良のため、図示は11のみとし、他の６点（15～20）については写真のみの報告とした。図示した11は、初鋳年1174年の淳熈元寳である。15～19は、本澤愼輔氏の指摘する模鋳銭の特徴を有している（本澤 1998）。15は洪武通寳（初鋳年1368年）の「鋳写しビタ(鐚)銭（同)」で、銭銘部以外に抜けがあるのは、「鋳型の中に溶銅が行き渡らない（同)」ために生じるという。16～19は、いわゆる無文銭である。形状、重量は「鋳写しの行程（同)」の段階により異なるという。

９、10、12～14は寛永通寳である。９、12を古寛永、13、14を新寛永と識別した。10は、鉄銭と考えられ、表面は赤褐色を呈している。錆の進行により拓影では銭種の識別が出来なかったが、Ｘ線撮影により寛永通寳と確認した。

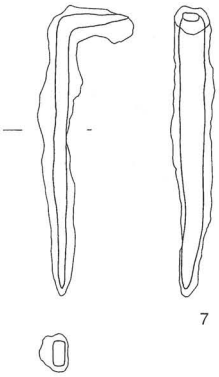
（4）自然遺物

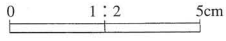
ＳＸ01竪穴状遺構の埋土最下位から、コムギ、ヒエの炭化種子が１点ずつ出土した。いずれも土壌サンプルのフローテーションにより検出したものである（Ⅵ章４節参照)。

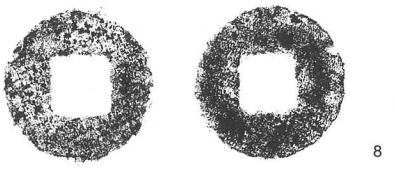
（荒谷）

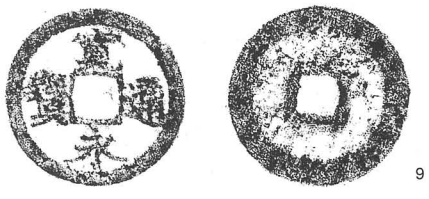


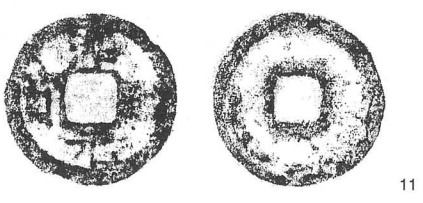
第70図　縄文土器、石器

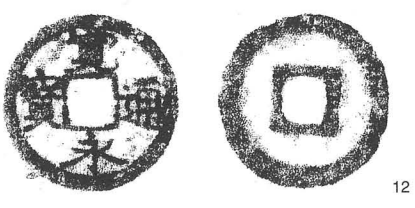


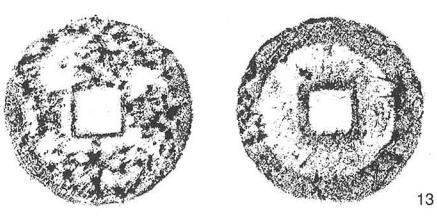


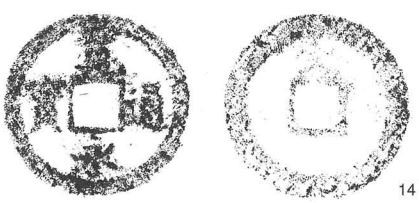


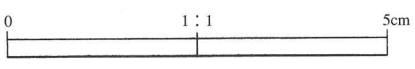












第71図　鉄製品、銭貨

第22表　縄文土器観察表

No			出土地点	器種	部位	文様の特徴	地紋	重量	備考	時期
遺物	図	写図								
1	70	42	ＳＫ18 埋土	不明	胴		ＬＲ横	4.64	内外面赤い　顔料か？	
2	70	42	ＳＫ20 埋土１層	不明	胴		ＬＲ横	13.07		
3	70	42	ＢＶ69 P2　埋土	不明	胴	網目状撚糸文	単軸絡５・Ｒ横	11.80		
4	70	42	沢跡　調査区南端	深鉢	胴	平行沈線文	ＬＲ横	32.90	磨滅著しい	後期中葉
5	70	42	表採	不明	口	結節回転文	ＬＲ横	17.82	繊維多量に混入	前期前葉

第23表　石器観察表

No			出土地点	器種	残存状態	石質	長さ	幅	厚さ	重量	特記事項
遺物	図	写図					(cm)			(g)	
6	70	42	表採	石核	完形	頁岩２	7.60	10.50	5.10	367.20	

第24表　鉄製品観察表

No			出土地点	器種	残存状態	長さ	幅	厚さ	重量	備考
遺物	図	写図				(cm)			(g)	
7	71	43	ＢⅥ01 P5　埋土	釘	完形	7.3	0.3	0.7	11.43	頭折の角釘

第25表　銭貨観察表

No			出土地点	器種	残存状態	外径	内径	厚さ	重量	金属の種類	備考
遺物	図	写図				(cm)			(g)		
8	71	43	SK01　埋土	無文銭	完形	20.7	7.2	1.2	1.50	銅	模鋳銭
9	71	43	SK06　埋土	寛永通寶	完形	24.1	5.4	1.3	3.42	銅	古寛永
10	71	43	SK13　1層	寛永通寶	完形	23.4	6.1	1.8	2.82	鉄	X線撮影にて銭種確認
11	71	43	ＢＶ20 P6　埋土	淳熙元寶	完形	23.2	5.9	1.2	2.06	銅	模鋳銭か
12	71	43	ＢＶ29　表土中	寛永通寶	完形	23.9	5.9	1.4	3.38	銅	古寛永
13	71	43	ＢＶ40　Ⅵ層	寛永通寶	完形	25.3	5.5	1.3	3.06	銅	新寛永
14	71	43	表採	寛永通寶	完形	25.2	5.8	1.3	3.67	銅	新寛永　背文字有りか
15	—	43	ＢＶ20 P6　埋土	洪武通寶	一部欠損	—	—	1.4	1.77	銅	模鋳銭か
16	—	43	ＢＶ20 P6　埋土	無文銭	完形	21.8	7.4	0.6	1.08	銅	輪銭　模鋳銭
17	—	43	ＢＶ20 P6　埋土	無文銭	一部欠損	—	(6.6)	0.6	0.61	銅	輪銭　模鋳銭
18	—	43	ＢＶ20 P6　埋土	無文銭	完形	16.8	9.9	0.6	0.35	銅	輪銭　模鋳銭
19	—	43	ＢＶ20 P6　埋土	無文銭	完形	17.3	11.5	0.6	0.38	銅	輪銭　模鋳銭
20	—	43	ＢＶ20 P6　埋土	判読不能	一部欠損	—	—	0.6	0.46	銅	15と同一個体か

Ⅵ　自然科学的分析

1　野里上遺跡放射性炭素年代測定

株式会社　加速器分析研究所

【処理法】

1．メス、ピンセットを用いて適量を採取した。この際、付着していた土をできるだけ除去した。炭化物については、内部より採取した。
2．1Nの塩酸を用いて、80℃で数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈した。
3．0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液を用いて数時間処理した。その後、超純水で中性になるまで希釈した。
4．1Nの塩酸を用いて、80℃で数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈した。なお、酸・アルカリ処理後の希釈の際には遠心分離法を用いた。
5．試料を80℃で乾燥させた。
6．試料を1ｇの酸化銅と共に、外径9㎜、長さ30cmの石英管に入れ、真空下で封じ切った。
7．6を500℃30分、850℃2時間で加熱し、試料中の炭素を二酸化炭素にした。
8．真空ライン中で冷媒を用いて、二酸化炭素を精製した。
9．精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトにした。
10．得られたグラファイトを内径1㎜のアルミニウム製容器にハンドプレス機で詰め、ターゲットとした。

【測定】

測定機器は、134試料装填可能なイオン源が設置された、3MV小型タンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC　Pelletron　9SDH-2）を使用する。

AMS測定時には、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行なう。また、測定では加速器により測定中同時に^{13}C/^{12}Cの測定も行うため、この値を用いてδ^{13}Cを算出する。

【放射性炭素年代算出法】

1．加速器を用いて微量炭素の同位体比分析を行なう。
2．定量は^{14}C測定の標準試料である米国国立標準局（ＮＩＳＴ）から提供されるシュウ酸(HOxII)を用いている。
3．放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代（ＢＰ）であり、誤差は、複数回の測定値についてχ^2検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には統計誤差を用いている。
4．暦年較正はOxCal Ver3.10を用いている。

IAA Code No.	試　料		BP年代および炭素の同位体比			
IAAA-51724	試料採取場所　：	野里上遺跡　1号耕作痕跡	Libby Age（yrBP）	：	2,430±	40
			δ^{13}C（‰）、（加速器）	＝	-22.69±	0.98
	試料形態　：	木炭	Δ^{14}C（‰）	＝	-261.2±	3.4
	試料名(番号)　：	1	pMC（%）	＝	73.88±	0.34
	（参考）	δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C（‰）	＝	-257.7±	3.1
			pMC（%）	＝	74.23±	0.31
#1112-1			Age　（yrBP）	：	2,390±	30
IAAA-51725	試料採取場所　：	野里上遺跡　2号耕作痕跡	Libby Age（yrBP）	：	1,190±	40
			δ^{13}C（‰）、（加速器）	＝	-23.21±	0.80
	試料形態　：	木炭	Δ^{14}C（‰）	＝	-138.0±	3.8
	試料名(番号)　：	2	pMC（%）	＝	86.20±	0.38
	（参考）	δ^{13}C の補正無し	δ^{14}C（‰）	＝	-134.9±	3.6
			pMC（%）	＝	86.51±	0.36
#1112-2			Age　（yrBP）	：	1,160±	30

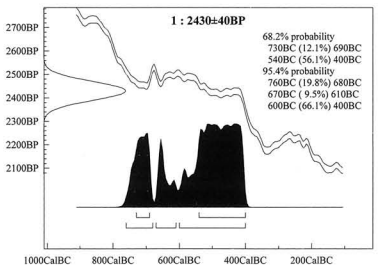
IAA Code No.	試料		BP年代および炭素の同位体比			
IAAA-51726	試料採取場所 ：	野里上遺跡　7号耕作痕跡	Libby Age (yrBP)	：	990±	30
			$\delta^{13}C$ (‰)、(加速器)	=	-24.24±	0.93
	試料形態 ：	木炭	$\Delta^{14}C$ (‰)	=	-115.9±	3.6
	試料名(番号) ：	3	pMC (%)	=	88.41±	0.36
	(参考)	$\delta^{13}C$ の補正無し	$\delta^{14}C$ (‰)	=	-114.5±	3.2
			pMC (%)	=	88.55±	0.32
#1112-3			Age (yrBP)	：	980±	30
IAAA-51727	試料採取場所 ：	野里上遺構　SX05	Libby Age (yrBP)	：	430±	40
			$\delta^{13}C$ (‰)、(加速器)	=	-23.93±	0.91
	試料形態 ：	木炭	$\Delta^{14}C$ (‰)	=	-52.3±	4.2
	試料名(番号) ：	4	pMC (%)	=	94.77±	0.42
	(参考)	$\delta^{13}C$ の補正無し	$\delta^{14}C$ (‰)	=	-50.3±	3.8
			pMC (%)	=	94.97±	0.38
#1112-4			Age (yrBP)	：	410±	30
IAAA-51728	試料採取場所 ：	野里上遺跡　SX12	Libby Age (yrBP)	：	390±	30
			$\delta^{13}C$ (‰)、(加速器)	=	-21.94±	0.85
	試料形態 ：	木炭	$\Delta^{14}C$ (‰)	=	-47.5±	4.0
	試料名(番号) ：	5	pMC (%)	=	95.25±	0.40
	(参考)	$\delta^{13}C$ の補正無し	$\delta^{14}C$ (‰)	=	-41.5±	3.6
			pMC (%)	=	95.85±	0.36
#1112-5			Age (yrBP)	：	340±	30
IAAA-52552	試料採取場所 ：	野里上遺跡　KⅣ21	Libby Age (yrBP)	：	130±	40
			$\delta^{13}C$ (‰)、(加速器)	=	-26.47±	0.91
	試料形態 ：	木片	$\Delta^{14}C$ (‰)	=	-15.8±	4.4
	試料名(番号) ：	6	pMC (%)	=	98.42±	0.44
	(参考)	$\delta^{13}C$ の補正無し	$\delta^{14}C$ (‰)	=	-18.7±	4.0
			pMC (%)	=	98.13±	0.40
#1215			Age (yrBP)	：	150±	30
IAAA-52820	試料採取場所 ：	野里上遺跡　SA01 P3	Libby Age (yrBP)	：	940±	40
			$\delta^{13}C$ (‰)、(加速器)	=	-29.40±	0.87
	試料形態 ：	木片	$\Delta^{14}C$ (‰)	=	-110.1±	4.2
	試料名(番号) ：	7	pMC (%)	=	88.99±	0.42
	(参考)	$\delta^{13}C$ の補正無し	$\delta^{14}C$ (‰)	=	-118.1±	3.8
			pMC (%)	=	88.19±	0.38
#1248			Age (yrBP)	：	1,010±	40

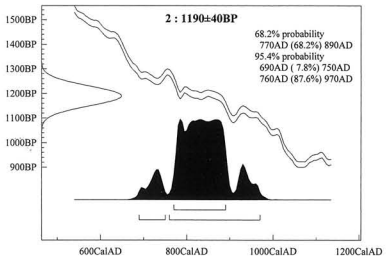
【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】

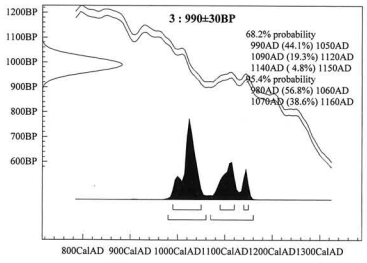
縦軸：Radiocarbon determination

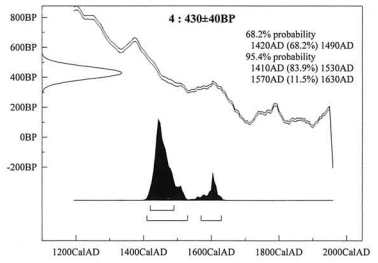
横軸：Calibrated date

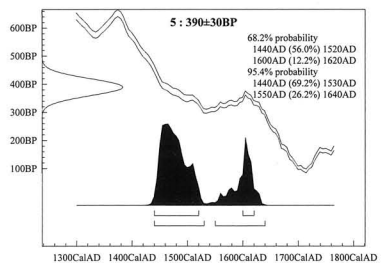
Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005);cub r:5 sd:12 prob usp[chron]

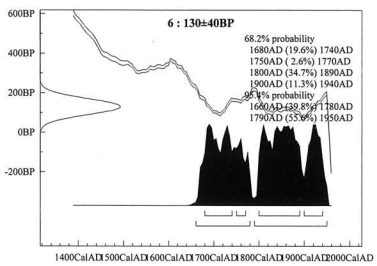


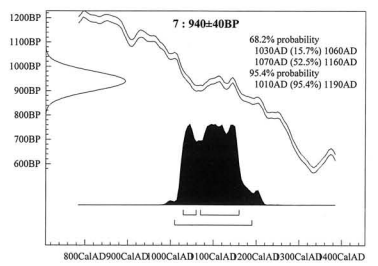












2　野里上遺跡の耕作痕跡の花粉化石群と植物珪酸体化石群

吉川昌伸（古代の森研究舎）

（1）は　じ　め　に

野里上遺跡は二戸郡一戸町小鳥谷にあり、平糠川左岸側の丘陵裾部に位置する。本遺跡では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、耕作痕跡などが検出され、奈良時代および平安時代に居住域とされていたことが明らかになっている。このうち耕作痕跡は、十和田aテフラを掘り込む小溝が並列し畦間のような状態を呈する。ここでは耕作痕跡の用途を解明するための資料を得ることを目的に、花粉化石群と植物珪酸体化石群の調査を行った。

（2）分　析　方　法

耕作痕跡はTo-aテフラを含むⅣ層から検出された。下位のⅤ層は暗褐色～褐色土、上位のⅢ層は黒色土からなる。試料は、2号耕作痕跡の小溝内と畝状の部分、4号耕作痕跡の小溝内の2地点3層準から発掘調査担当者により採取された。なお、試料採取地点と堆積物の詳細な記載は関係する項を参照されたい。

a）花粉分析

花粉化石群の調査は3層準で行った。花粉化石の抽出は、試料約3ｇを秤量し体積を測定後、10％ＫＯＨ（湯煎約15分）処理後に、傾斜法により粗粒な砂を取り除き、48％ＨＦ（約15分）、重液分離（比重2.15の臭化亜鉛）、アセトリシス処理（濃硫酸　1：無水酢酸　9　の混液で湯煎5分）の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチミキサーで十分撹拌後、マイクロピペットで取りグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、花粉分析層準において有機物量、泥分（シルト以下の細粒成分）、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750℃で3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのNIH Imageで微粒炭の水平投影面の積算面積を測定した。

イネ科花粉は、彫紋の位相差像のパターンに基づきイネ属型とそれ以外（野生型）に識別した。イネ属型彫紋には、イネ、およびマコモとカモジクサなどの一部の花粉粒が含まれるため、イネ属以外の花粉が混じっている可能性はある。

b）植物珪酸体分析

分析は花粉と同じ試料を用いた。植物珪酸体の抽出は、試料約2ｇをトールビーカー（300ml）にとり、過酸化水素水、6Ｎ塩酸、超音波処理の順に処理し、沈底法により10μｍ以下の粒子を除去した。傾斜法により粗粒な粒子を除いた残渣を遠心管に移し、十分攪拌後マイクロピペットで取りカバーガラスに展開して乾燥させ、マウントメディアで封入してプレパラートを作製した。

光学顕微鏡下400倍でプレパラート全面を走査し、主にイネ科機動細胞起源とイネ科短細胞起源珪酸体の同定・計数を行った。植物珪酸体の分類は近藤・佐瀬（1986）に基づき、タケ亜科植物機動細胞珪酸体は杉山・藤原（1986）、タケ亜科植物短細胞珪酸体は近藤・大滝（1992）による。

（3）結　　果

a）花粉分析

耕作痕跡の3層準の堆積物の特性は、砂分が43～48％、泥分が42～43％、有機物量が10～13％と類

似し、いずれも砂を比較的多く含む無機物に富む堆積物からなる（表１）。また、微粒炭量は250～430mm^2/cm^{3}と低い値ではあるが、砂分が多いことからすると量的には多いほうかもしれない。

表１　耕作痕跡の花粉分析試料の堆積物特性

No.	遺構	堆積物の特徴	堆積物の特性（重量%） 砂	泥	強熱減量（有機物量）
1	2号耕作痕跡（小溝内）	黒褐色粗～中粒砂質シルト	43.4	43.4	13.2
2	2号耕作痕跡（畝）	黒褐色粗～中粒砂質シルト	48.1	41.6	10.3
3	4号耕作痕跡（小溝内）	黒褐色細～中粒砂質シルト	45.2	42.3	12.5

出現した分類群のリストとその個数を表２に示す。表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。図1に示したAFR.MY番号は単体標本の番号を示し、これら標本は古代の森研究舎に保管してある。

花粉化石は３試料とも極めて少なく、さらに花粉外膜の保存状態も悪い。出現した分類群は、樹木ではマツ属、スギ、クマシデ属－アサダ属、ハンノキ属、コナラ亜属、トチノキ属のみである（表２）。このうちスギやマツ属はNo２で幾分多いが、相対的に花粉の保存が良いこと、他の２試料で検出されていないことは、後世からの混入花粉の可能性が高い。草本類ではイネ科、キンポウゲ科、セリ科、ヨモギ属、他のキク亜科、およびシダ植物胞子が出現した。ヨモギ属やシダ植物胞子が多いのは、こうした分類群が分解に対し相対的に強いためとみられる。栽培植物に関係する分類群としては、No２からイネ属型花粉が僅かに検出される。

表２　２・４号耕作痕跡の花粉分析結果一覧表

和　名	学　名	2号（小溝内） No.1	2号（畝） No.2	4号（小溝内） No.3
樹　木				
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	-	3	-
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	-	3	-
スギ	*Cryptomeria japonica* (L.fil.)D.Don	-	11	-
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus* - *Ostrya*	-	1	-
ハンノキ属	*Alnus*	1	-	-
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	-	3	-
トチノキ属	*Aesculus*	1	-	-
草　本		-	-	-
イネ科（イネ属型）	Gramineae (Oryza type)	-	1	-
イネ科（野生型）	Gramineae (Wild type)	1	4	2
キンポウゲ科	Ranunculaceae	-	1	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	1
ヨモギ属	*Artemisia*	2	4	10
他のキク亜科	other Tubuliflorae	-	-	1
シダ植物				
ヒカゲノカズラ属	*Lycopodium*	-	1	-
他のシダ植物胞子	other Pteridophyta	9	2	2
樹木花粉数	Arboreal pollen	2	21	0
草本花粉数	Nonarboreal pollen	3	10	14
シダ植物胞子数	Fern spores	9	3	2
花粉・胞子数	Pollen and Spores	14	34	16
不明花粉	Unknown pollen	1	2	2
樹木花粉量（粒数/cm^3）		25	73	0
微粒炭量（mm^2/cm^3）		430	454	250

b）植物珪酸体分析

耕作痕跡から産出した分類群のリストとその個数を表３に、植物珪酸体分布図を図２に示す。植物珪酸体の組成は２号耕作痕跡と４号耕作痕跡で異なる。すなわち、２号耕作痕跡では機動細胞起源のクマザサ属が45590ないし12420個/gと多く検出され、短細胞起源のキビ型が1740ないし4520個/g検出されるのに対し、４号耕作痕跡ではクマザサ属が9370個/gと少なくなり短細胞起源のヨシ属が6330個/g検出され、キビ型も6840個/gと相対的

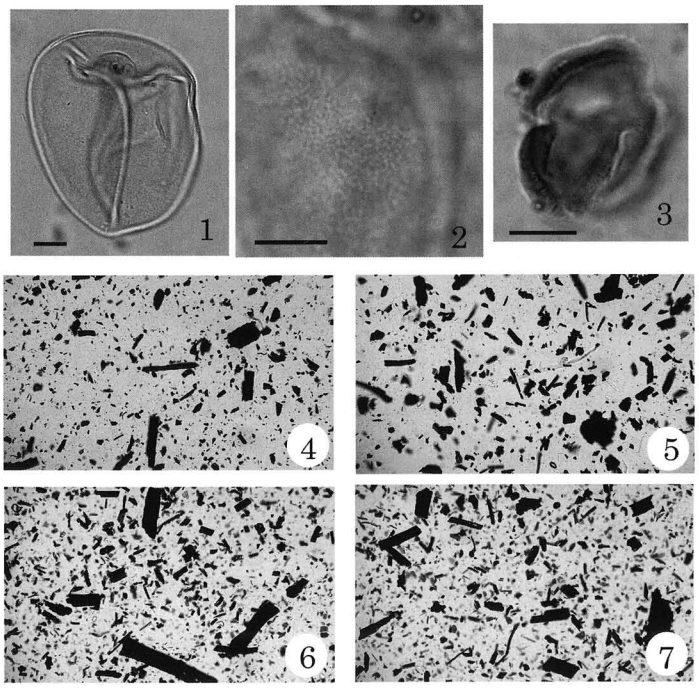


図１　耕作痕跡から産出した花粉化石とプレパラートの状況
1-2.イネ属型，No2，AFR. MY1601. 3.ヨモギ属，No3，AFR. MY 1601. 4-7. 花粉プレパラートの状況4. No1，5. No.2，6-7. No3）スケール＝10μm（状況＝100μm）

に多い。また、4号耕作痕跡からは機動細胞起源のイネ属とヨシ属が検出される。一方で、4号耕作痕跡№3からは淡水性珪藻の*Cymbella*、*Diploneis*、*Eunotia*、*Pinnularia*の破片や陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*の完形が検出される。

表3　2・4号耕作痕跡より産出した植物珪酸体分析結果一覧表
（単位は1,000個／g）

分類群	2号（小溝内）No.1	2号（畝）No.2	4号（小溝内）No.3
イネ科機動細胞珪酸体			
イネ属	-	-	0.25
ヨシ属	-	-	0.25
キビ族	0.29	-	-
ウシクサ族	-	-	1.77
タケ亜科クマザサ属	45.59	11.86	9.37
他のタケ亜科	0.58	0.56	0.25
不明	0.29	0.56	1.27
イネ科短細胞珪酸体			
ヨシ属	0.58	-	6.33
ウシクサ族ススキ属型	-	1.13	2.03
イチゴツナギ亜科（ウシノケグサ型）	0.58	-	1.77
キビ型	1.74	4.52	6.84
ヒゲシバ型	0.58	-	1.77
タケ亜科ササ類型	1.45	1.13	1.27
タケ亜科タケ類型	0.87	0.56	0.76

（4）考　　察

栽培植物としては、イネ属の機動細胞珪酸体が№3で250個/g検出され、イネ属型花粉が№2で僅かに出現している。イネの機動細胞珪酸体が5000個/g以上の密度で検出された場合にはそこで稲作が行われていた可能性が高く、密度が3000個/g程度でも水田跡が検出される場合がある（杉山 2000）。ここでは250個/gと少なく4号耕作痕跡のみであるため異地性の珪酸体である可能性が高い。また、ヒエやアワが属する形態のキビ型短細胞珪酸体が検出されているが、属ないし種を特定できないことから栽培植物に由来するかどうかは不明であり、さらに機動細胞珪酸体のキビ族もヒエ属やキビ属の典型的形態（杉山ほか 1988）ではない。こうしたことから、耕作痕跡の栽培植物を特定するには至らない。

2号と4号耕作痕跡では堆積環境は異なり、4号耕作痕跡は堆積後に湿った環境にあったが2号耕作痕跡は比較的乾いた環境にあったと推定される。つまり、4号耕作痕跡からはヨシ属の機動細胞起源と短細胞起源の珪酸体が検出されるが2号耕作痕跡では稀である。また、いずれの試料においても樹木花粉は少なく花粉の保存状態も悪い。花粉の外膜は水域や湿地などの酸素の少ない還元環境では残りやすいが、風化土壌のような酸化条件では分解されるため、堆積後に乾陸化したと考えられる。また、4号耕作痕跡からは陸生珪藻の完形が検出されることから、4号耕作痕跡は堆積後に湿った環境にあり周辺にはヨシ属が生育していたと推定される。一方で、2号耕作痕跡ではタケ亜科機動細胞珪酸体が多く検出されているが、タケ亜科短細胞珪酸体の量は著しく少ない。タケ亜科植物の植物珪酸体の形態別組成は、機動細胞起源のファン型と短細胞起源のタケ型が最も多く（近藤・大滝 1992）、耕作痕跡の組成とは著しく異なる。堆積物には粗～中粒砂を含み無機物に富むため、クマザサ属機動細胞珪酸体は堆積物を構成する他の粒子と伴に挙動して再堆積したことが示唆され、クマザサ属は後背地に生育していた可能性が高い。

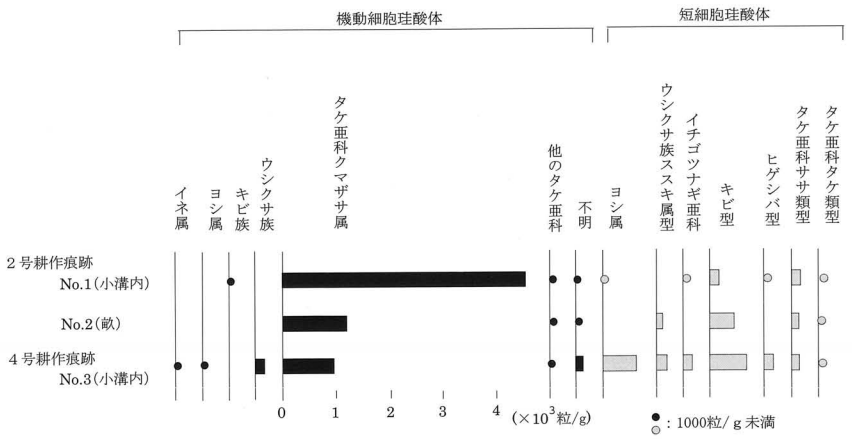


図2　耕作痕跡の植物珪酸体分布図

引用文献

近藤錬三・大滝美代子　1992　「タケ亜科植物葉身の短細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第36号　23-43.
近藤錬三・佐瀬　隆　1986　「植物珪酸体　その特性と応用」『第四紀研究』25　31-63.
杉山真二　2000　「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』（辻誠一郎編）189-213　同成社.
杉山真二・松田隆二・藤原宏志　1988　「機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用 - 古代農耕追究のための基礎資料として－」『考古学と自然科学』20　81-92.
杉山真二・藤原宏志　1986　「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定 - 古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19　69-84.

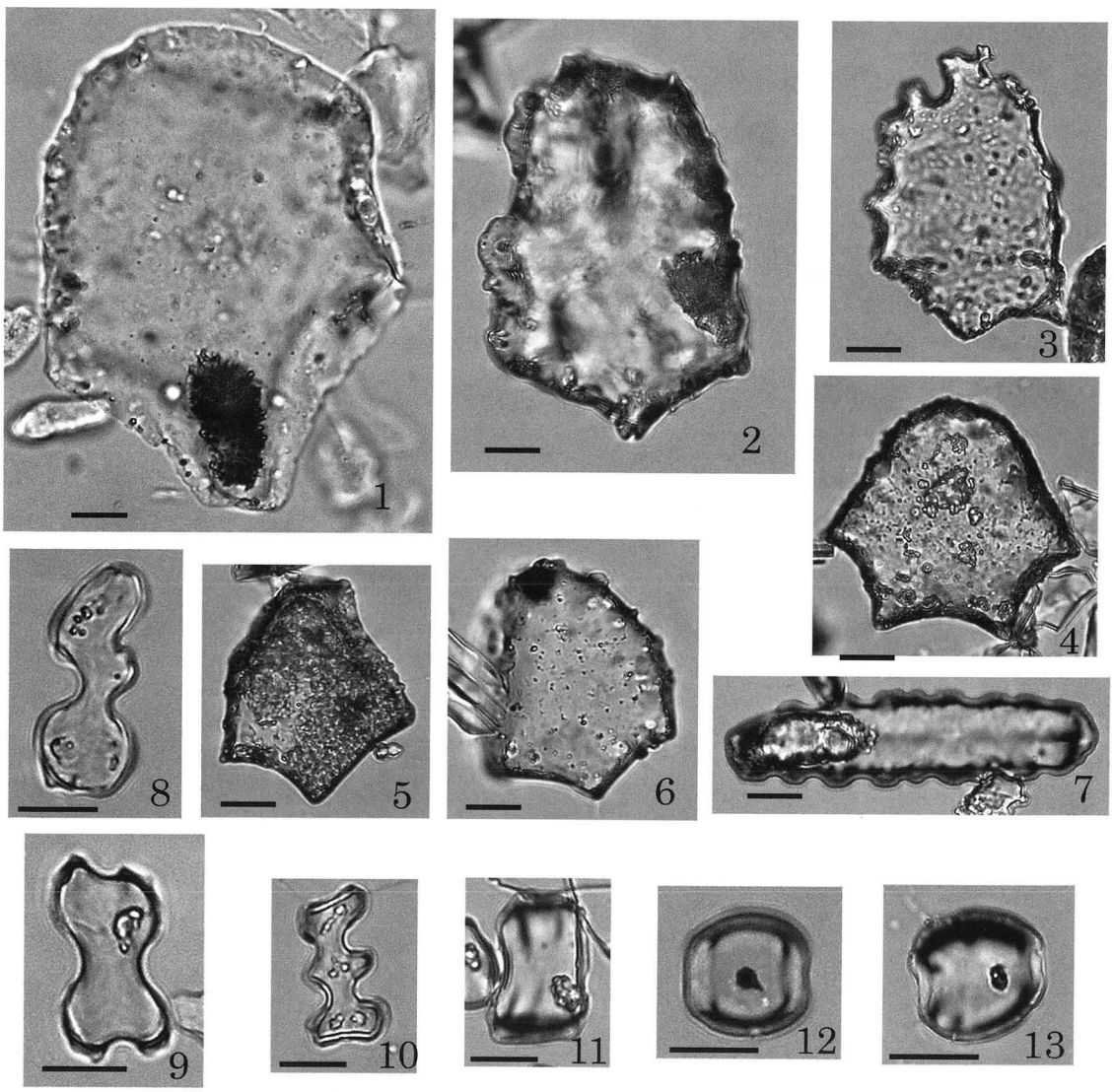


図３　野里上遺跡の耕作痕跡から産出した植物珪酸体

1.ヨシ属機動細胞，NO.3.　2.クマザサ属機動細胞，No.1.　3.クマザサ属機動細胞，No.1.　4.タケ亜科機動細胞，No.1.
5.クマザサ属機動細胞，No.3.　6.クマザサ属機動細胞，No.1.　7.イチゴツナギ亜科短細胞（ウシノケグサ型），No.1.
8.キビ型短細胞，No.3.　9.キビ型短細胞，No.3.　10.ススキ属型短細胞，No.2.　11.タケ亜科類型短細胞，No.1.
12.ヨシ属短細胞，No.3.　13.ヨシ属短細胞，No.3.　スケール＝10μm

3　野里上遺跡低湿地試掘トレンチ粘土層の植物珪酸体分析

佐瀬　隆（北方ファイトリス研究室）

（1）は　じ　め　に

本植物珪酸体分析は野里上遺跡のトレンチ壁でTo-aテフラに覆われて検出された畦状高まりが水田遺構に関わるか否かを検討する目的で実施したものである。併せてTo-aテフラ期前後の植物相などの環境についても得られた植物珪酸体群集から考察した。

（2）試　　料

低湿地試掘トレンチⅡの南壁二箇所に試料採取断面を設定した。一箇所は畦状高まりが検出されたトレンチ中央部（トレンチⅡ地点と呼ぶ）、もう一箇所はトレンチの東端部（トレンチⅡ東端地点と呼ぶ）である。いずれの地点においても地表から100cmを超える厚さで粘土層が発達し、当粘土層の下底から約20cmに灰白色テフラ（To-aテフラ）が約5cmの層厚で認められる。粘土層の下位には層厚30cm超の砂層が発達する。試料としてTo-aテフラを基準として当テフラ上下の粘土層を約5cm間隔で採取した。なお、トレンチⅡ東端地点では砂層上部に粘土層（厚さ5cm超）が挟まるのが認められたのでこの粘土層についても採取した。採取した試料のうちトレンチⅡ地点については現表土（no.21）、粘土層中位層（no.9）、To-aテフラ直上粘土層（no.5）、To-aテフラ直下粘土層（no.4、no.3）、トレンチⅡ東端地点についてはTo-aテフラ直上粘土層（no.8）、To-a直下粘土層（no.6、no.5）、砂層上部介在粘土層（no.1）をそれぞれ分析対象試料とした（図１、2）。

（3）方　　法

植物珪酸体分析の方法は近藤（2000）、佐瀬（2003）をもとに以下の手順で実施した。(1) 各試料を乾土当たり1～2gを秤量。(2) 過酸化水素法で有機物の分解。(3) 超音波処理による土塊の破砕。(4) ジチオナイト法による脱鉄処理。(5) 篩と沈底法により粒径10-100μm画分の分離。(6) 分離した試料を50mlメスフラスコに移しメスアップ後音波処理後冷却。(7) 十分懸濁させ、直ちにマイクロピペットで10μl採取してスライドガラスに展開、乾燥。(8) グローブ油で封入し鏡下の全珪酸体を同定する。植物珪酸体密度（粒数/乾土g）は、(7) (8) の操作を３回繰り返し行い得られた同定個数の平均から次式により算出。植物珪酸体密度＝珪酸体の同定個数×5000÷分析した乾土重量。(9) 同定処理後の試料は乾燥後秤量保管。なお、乾燥後の試料の一部をカナダバルサムで封じプレパラートを作製、全視野精査してイネ属タイプ珪酸体の有無を点検した。

（4）結　　果

1）検出された植物珪酸体

本分析で検出された主要な植物珪酸体を以下に記す。

a. イネ科機動細胞起源（ファン型）

(1) Ⅰa 型（タケ亜科起源ササ属タイプ：図3の5・6）…側面長は端面高より明らかに短い。端面観では直線的あるいは上辺に従い湾曲する明瞭な底辺を有し肉厚チューブの横断面の一部を切り取った特徴的形状を示す群。

(2) Ⅱ型（非タケ亜科起源）

・ススキ属タイプ（図3の2）…端面観の底辺部は膨らみ上辺の一部は軽微に落ち込んで側辺は緩く内

側へ湾曲する形状を示す群。
・ヨシ属タイプ（図3の1）…端面観の上辺はU字形にアーチを描きヘルメット状の形状を示す群。
・イネ属タイプ（図3の3・4）…端面観の上辺はなめらかな弧を描き端部で鍔状に突出、上面の亀甲紋が特徴的である。
b. イネ科短細胞起源
（1）タケ型（タケ亜科起源）…タケ亜科を特徴づける鞍状珪酸体。
・Ⅰ（ササ属タイプ：図3の11・12）…端部が著しく突出して内側へ傾斜し端部に収束する上面の皺で特徴づけられる鞍状珪酸体内の一群。
・Ⅱ（メダケ属タイプ：図3の13）…端部は突出するが内側へ傾斜しない。上面端部の皺は認められる。
(2)ヒゲシバ型（図3の14・15）…ズズメガヤ亜科、ダンチチク亜科のヨシ属を特徴づける鞍状珪酸体。タケ亜科にも見られる上面端部の皺のない鞍状珪酸体の一群。本分析で検出されたものは大部分がヨシ属タイプ。
（3）キビ（亜科）型…キビ亜科を特徴づける亜鈴状珪酸体。
・フリル付き（図3の16・17）…亜鈴状本体を取り囲むフリルを有する。ヒエ属などに特徴的に見られる。
・その他（図3の18）…「フリル付き」以外の亜鈴状珪酸体を包括。
(4）ウシノケグサ・イチゴツナギ（亜科）型…ウシノケグサ亜科を特徴づけるボート状珪酸体。一般に上面（より広い面）側縁に波状縁有する。
・ダブルライン（図3の20）…上面下面の何れも波状の側縁を有するボート状珪酸体の一群。
・その他（図3の19・21）…「ダブルライン」以外のボート状珪酸体群。
c. イネ科トゲ細胞起源（ポイント型）
（1）長形・典型（図3の7）…石鏃状を呈する一群
（2）短形
・オカリナ状（図3の8・9）…タケ亜科を特徴づけるオカリナ状を呈する一群。
・その他（図3の10）…石鏃状、オカリナ状以外を包括。
d. 棒状型
（1）平滑…直線的側縁を有する群。
（2）鋸歯…鋸歯状縁を有する群。
・ムギ類穎タイプ（図3の23）…鋸歯は鋭く尖り鋸歯間は弧状に落ち込む。
・導管細胞起源（棒ヤスリ状：図3の22）…導管細胞に由来する棒ヤスリ状を呈する珪酸体群。
f. 葉肉起源（図3の25）…イネ科葉肉細胞（組織）に由来する椎骨状、ブローブ状、くし状、海藻状などを呈する群。
g. スゲ種皮起源…スゲ類種皮細胞に由来するホック状の珪酸体。
h. シダ起源…刃こぼれ状の側縁、気泡状空隙を有する群。
i. 広葉樹起源（図3の27）…ブレイド状、多面体状の珪酸体。
j. 顆粒状表面の多角形板状（図3の28）…スゲ類起源の可能性が考えられる。
i. シルクハット状（図3の24）…起源不明。ある種の突起細胞に由来する可能性がある。

2）各試料の珪酸体群集

各試料の珪酸体群集組成を表1に示した。また、主な珪酸体については組成図（図4）にまとめた。なお、表1に示した推定密度上限値は3回の密度測定で珪酸体が1個検出された時に推定される値で

ある。したがって、密度測定プレパラートで検出されない珪酸体が精査プレパラートで認められる場合、その密度は推定密度上限値未満と判断される。

a. トレンチⅡ

・no.21試料（現表土）：OP密度は4.2E+5粒数/g（以下単位省略）である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが1.5E+4、イネ属タイプが7.7E+3、非タケ亜科起源不定が9.4E+3検出される。短細胞起源ではタケ型Ⅰ（ササ属タイプ）が3.7E+3、同Ⅱ（メダケ属タイプ）が2.8E+3、ヒゲシバ型、キビ（亜科）型その他がともに2.0E+3、ウシノケグサ（亜科）型ダブルラインが8.5E+2、同その他が1.1E+4検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が1.2E+4、短形オカリナ状が2.0E+3、同その他が5.7E+3、棒状型では平滑縁が2.8E+4、鋸歯縁ムギ穎タイプが2.8E+3、同その他が2.8E+4、導管起源が2.0E+3検出される。葉肉細胞起源、スゲ種皮細胞起源、シダ起源、シルクハット状、多角形板状（顆粒状表面）がいずれも8.5E+2検出される。

・no.9試料：OP密度は6.9E+5である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが2.8E+4、非タケ亜科起源不定が1.9E+4検出される。短細胞起源ではタケ型Ⅰ（ササ属タイプ）が8.0E+3、同Ⅱ（メダケ属タイプ）が3.3E+3、ヒゲシバ型が6.1E+3、キビ（亜科）型フリル付きが1.4E+3、同その他が6.1E+3、ウシノケグサ（亜科）型ダブルラインが6.1E+3、同その他が1.1E+4検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が1.7E+4、短形オカリナ状が1.4E+3、同その他が8.0E+3、棒状型では平滑縁が4.1E+4、鋸歯縁その他が5.2E+4、導管起源が4.7E+3検出される。葉肉細胞起源が8.0E+3、スゲ種皮細胞起源が3.3E+3、シルクハット状が4.7E+5検出される。精査プレパラートでは機動細胞イネ属タイプが検出されるが、その密度は1.4E+3未満と推定される。

・no.5試料（To-aテフラ直上）：OP密度は1.2E+6である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが3.1E+4、イネ属タイプが2.4E+3、ススキ属タイプが2.4E+3、ヨシ属タイプが1.0E+3、非タケ亜科起源不定が2.4E+4検出される。短細胞起源ではタケ型Ⅰ（ササ属タイプ）が5.9E+3、同Ⅱ（メダケ属タイプ）が3.5E+3、同不定4.5E+3、ヒゲシバ型が4.6E+4、キビ（亜科）型フリル付きが8.0E+3、同その他が2.0E+4、ウシノケグサ（亜科）型その他が5.0E+4検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が4.3E+4、短形オカリナ状が1.0E+3、同その他が1.2E+4、棒状型では平滑縁が6.7E+4、鋸歯縁その他が7.0E+4、同ムギ穎タイプが3.5E+3、導管起源が1.2E+4検出される。葉肉細胞起源が1.3E+4、スゲ種皮細胞起源、シダ起源がともに1.0E+3、シルクハット状が4.5E+5検出される。なお、精査プレパラートではイネ属に特徴的な葉部表皮組織片（図3の26）が認められた。

・no.4試料（To-aテフラ直下）：OP密度は7.8E+5である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが9.7E+4、ヨシ属タイプが9.7E+2、非タケ亜科起源不定が1.5E+4検出される。短細胞起源ではタケ型Ⅰ（ササ属タイプ）が1.2E+4、同Ⅱ（メダケ属タイプ）が3.2E+3、同不定が8.8E+3、ヒゲシバ型が1.7E+4、キビ（亜科）型その他が5.5E+3、ウシノケグサ（亜科）型その他が8.8E+3検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が6.5E+3、短形オカリナ状が1.3E+4、同その他が6.5E+3、棒状型では平滑縁が3.7E+4、鋸歯縁その他が3.5E+4、導管起源が9.7E+2検出される。葉肉細胞起源が2.3E+3、シダ起源が9.7E+2、ブレイド状が7.5E+3、シルクハット状が9.7E+4、多角形板状（顆粒状表面）が3.2E+3検出される。イネ属タイプ珪酸体は精査プレパラートでは検出されたが、その密度は9.7E+2未満と推定される。

・no.3試料：OP密度は7.0E+5である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが9.8E+4、非タケ亜科起源不定が1.4E+4検出される。短細胞起源ではタケ型Ⅰ（ササ属タイプ）が2.3E+4、同Ⅱ（メダケ属タイプ）が9.6E+3、同不定が3.4E+3、ヒゲシバ型が3.4E+3、キビ（亜科）型その他が1.4E+3、ウ

シノケグサ（亜科）型その他が8.2E+3検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が1.1E+4、短形オカリナ状が8.2E+3、同その他が4.8E+3、棒状型では平滑縁が3.7E+4、鋸歯縁その他が2.1E+4、導管起源が3.4E+3検出される。葉肉細胞起源、シダ起源、多角形板状（顆粒状表面）がともに1.4E+3、ブレイド状が6.2E+3検出される。機動細胞起源イネ属タイプ珪酸体が精査プレパラートで検出されたが、その密度は1.4E+3未満と推定される。

b. トレンチⅡ東端

・no.8試料（To-aテフラ直上）：OP密度は7.7E+5である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが3.8E+4、非タケ亜科起源不定が3.6E+4検出される。短細胞起源ではタケ型Ⅰ（ササ属タイプ）が1.4E+4、同Ⅱ（メダケ属タイプ）が2.9E+3、同不定が1.3E+3、ヒゲシバ型が1.1E+4、キビ（亜科）型フリル付きが4.2E+3、同その他が9.6E+3、ウシノケグサ（亜科）型ダブルラインが2.9E+3、同その他が1.7E+4検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が3.2E+4、短形オカリナ状が8.4E+3、同その他が2.1E+4、棒状型では平滑縁が6.7E+4、鋸歯縁その他が5.0E+4、導管起源が1.3E+3検出される。機動細胞イネ属タイプ珪酸体が精査プレパラートでは検出されたが、その密度は1.3E+3未満と推定される。

・no.6試料（To-aテフラ直下）：OP密度は9.4E+5である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが1.1E+5、非タケ亜科起源不定が1.1E+4検出される。短細胞起源ではタケ型Ⅰ（ササ属タイプ）が3.7E+4、同Ⅱ（メダケ属タイプ）が8.2E+3、同不定が7.0E+3、ヒゲシバ型が3.0E+3、キビ（亜科）型その他が共に9.1E+2、ウシノケグサ（亜科）型その他が8.2E+3検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が7.0E+3、短形オカリナ状が1.6E+4、同その他が1.0E+4、棒状型では平滑縁が2.3E+4、鋸歯縁その他が3.4E+4検出される。他に、葉肉細胞起源が2.1E+3、ブレイド状が9.1E+2、多角形板状（顆粒状表面）がいずれも3.0E+3検出される。機動細胞イネ属タイプ珪酸体が精査プレパラートでは検出されたが、その密度は9.1E+2未満と推定される。

・no.5試料：OP密度は6.7E+5である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが9.3E+4、非タケ亜科起源不定が8.1E+3検出される。短細胞起源ではタケ型Ⅰ（ササ属タイプ）が3.1E+4、同Ⅱ（メダケ属タイプ）が2.5E+3、同不定が3.5E+3、ヒゲシバ型、キビ（亜科）型その他がともに2.5E+3、ウシノケグサ（亜科）型その他が1.1E+3検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が2.5E+3、短形オカリナ状が9.6E+3、同その他が2.5E+3、棒状型では平滑縁が2.4E+4、鋸歯縁その他が7.1E+3検出される。他に、シダ起源とブレイド状がともに1.1E+3検出される。イネ属タイプ珪酸体が精査プレパラートで検出されたが、その密度は1.1E+3未満と推定される。

・no.1試料（最下部粘土層）：OP密度は9.4E+5である。機動細胞起源（ファン型）ではササ属タイプが2.8E+5、メダケ属タイプが1.3E+3、非タケ亜科起源不定が8.9E+3検出される。短細胞起源ではタケ型Ⅰ（ササ属タイプ）が1.8E+4、同Ⅱ（メダケ属タイプ）が1.3E+3、同不定が3.1E+3、ヒゲシバ型が3.1E+3、キビ（亜科）型その他、ウシノケグサ（亜科）型その他がともに1.3E+3検出される。トゲ細胞起源（ポイント型）では長形（典型）が5.8E+3、短形オカリナ状が2.4E+4、同その他が1.3E+3、棒状型では平滑縁が2.5E+4、鋸歯縁その他が1.6E+4、導管起源が3.1E+3検出される。他に、葉肉細胞起源が1.3E+3、ブレイド状が1.5E+4、多角形板状（顆粒状表面）が1.9E+4検出される。機動細胞イネ属タイプ珪酸体は精査プレパラートでも検出されない。

（5）考　　察

a. 水田遺構土層の可能性

水田遺構土層の可能性が期待されたTo-aテフラ直下土層のトレンチⅡno.4、トレンチⅡ東端no.6試料のほか、To-aテフラ直上土層トレンチⅡno.5、同トレンチⅡ東端no.8からも機動細胞イネ属タイプ珪酸体が検出された。その密度はTo-aテフラ直上土層トレンチⅡno.5で乾土1g当たり2.7E+3個であり、他の土層では1.4E+3個を超えないと推定される。この値は水田耕作土の一般的な判定基準の5.0E+3個/g（杉山、2000）を満たさないが、3.0E+3個/g程度で耕作土が検出される場合もある（杉山、2000）ので、トレンチⅡno.5土層が水田耕作と関わる可能性も考えられる。水田遺構土層でないとしても、複数の土層から機動細胞イネ属タイプ珪酸体が検出されること、またトレンチⅡno.5土層からはイネ属に特有な葉部表皮組織片も検出されることから、To-aテフラ期前後に周辺域でイネ栽培が営まれた可能性は否定できないといえようか。なお、現表土試料（トレンチⅡno.21）からは基準値を上まわる乾土1g当たり7.7E+3個の機動細胞イネ属タイプ珪酸体が検出されたが、これは現表土が水田耕作土であることに対応している。

b．イネ以外の作物栽培の可能性

キビ（亜科）型フリル付き珪酸体がトレンチⅡno.9試料、同no.5試料、トレンチⅡ東端no.8で検出された。また、ウシノケグサ（亜科）型ダブルライン珪酸体がトレンチⅡno.21試料、同no.9、トレンチⅡ東端no.8で、さらに、棒状型ムギ穎タイプ珪酸体がトレンチⅡno.21とno.5で検出された。キビ（亜科）型フリル付き珪酸体はヒエ属などに特徴的に認められること、また、ウシノケグサ（亜科）型ダブルライン珪酸体はコムギ属などに比較的多く認められ、棒状型ムギ穎タイプ珪酸体はコムギ属などを特徴づける珪酸体であることから、これらの珪酸体はヒエ栽培、ムギ類栽培に由来する可能性が考えられる。供試土層に耕作土遺構等は検出されていないのでこれらの珪酸体は栽培種ヒエ属やムギ類起源としても異地性の珪酸体として考えるべきであろうか。当遺跡本体域では耕作痕跡が検出されているのでそこで営まれた可能性もあるヒエやムギ類の栽培との対応を検討する必要性もあるかもしれない。

c．粘土層の年代、性格

本分析に用いた試料を採取した粘土層の下位には砂層が認められ、さらにその下位には礫層の存在が推定される。礫層から砂層、そして粘土層への層相変化から遺跡域の離水史が読み取れる。礫層、砂層は平糠川水系の氾濫原期の堆積物、粘土層は離水後の氾濫粘土堆積物（フラッドローム）であろう。粘土層の下部にはTo-aテフラが5㎝超の厚さで挟まる。当テフラの年代は平安時代AD915年とされることから、離水期はおおよそ1000年前を遡る頃と推定される。

分析に供した粘土層試料の珪酸体密度は4.2E+5～1.2E+6個/gの範囲にある。このうち現表土試料（トレンチⅡno.21試料）の密度が最も低いことから、残りの粘土層試料は応分の地表履歴を有しているものと考えて良いであろう。このことから、100㎝を超える厚さの粘土層は、植被の存在の下で、離水後現在までの約1000年間に繰り返し生じた洪水に伴う氾濫粘土が累積した生成履歴を有しているものと推定される。なお、粘土層試料からは例外なくヒゲシバ型珪酸体（大部分がヨシ属タイプと推定される）が検出される一方で、比較的乾性環境を好むタケ亜科に起源する珪酸体（ササ属タイプ珪酸体を主とする）も主要な植物珪酸体群として認められる。したがって、離水後、地下水位の高い状態で推移し、また洪水により一時的に冠水することはあっても地表面に滞水する環境が卓越することはなかったことを示している。

d．植物珪酸体群集の時系列変動

To-aテフラ下位の粘土層はタケ亜科起源ササ属タイプが優勢な珪酸体群集で特徴づけられる。このことは、離水直後からササ類を主要構成要素とする植生が成立したことが推定される。このような珪

酸体群集はTo-aテフラ期を境に明瞭に変化する。すなわち、To-aテフラ期以前において極めて優勢な機動細胞珪酸体（ファン型）タケ亜科起源ササ属タイプは、当テフラ期以降になるとは急激に減少し、また短細胞珪酸体タケ型においても明らかな減少が見られる。これに対して非タケ亜科起源珪酸体においては機動細胞の変化は不明瞭であるが、機動細胞珪酸体に占める非タケ亜科起源の割合はTo-aテフラ期以降明らかに増加しているといえよう。また、短細胞珪酸体非タケ亜科起源についてもTo-aテフラ期以降増加する傾向が認められ、特に同テフラ直後の明瞭な極大は興味深い。To-aテフラ期の変動はトゲ細胞珪酸体（ポイント型）でも見いだされる。すなわち、To-aテフラ期直後の長形・典型の急激な増加と当テフラ期以降のタケ亜科起源オカリナ状の明瞭な減少であり、これは機動細胞珪酸体、短細胞珪酸体における変動に対応しているものと考えてよいであろう。

このようなTo-aテフラ期におけるタケ亜科起源珪酸体の減少は植生におけるササ類の衰退を示しているといえよう。それでは、このササ類の衰退はいかなる要因によってもたらされたのだろう。ササ類の生育に適さない極めて過湿な環境に変化したのであろうか。離水後徐々に地下水位が低下する方向に進んだものと考えることが自然の道理であるが、To-aテフラ直上のトレンチⅡno.5試料におけるヒゲシバ型ヨシ属タイプの明瞭な増加は過湿環境の出現を示しているのかもしれない。no.5試料は暗色で有機質粘土の様相を呈していることは過湿環境と調和しているとも考えられる。なお、このヒゲシバ型ヨシ属タイプの極大はTo-aテフラから約20cm上位のno.9試料では認められないことから想定される過湿環境は一時的なものと推定されるので、タケ亜科の衰退を過湿環境のみで説明することに無理があり、別の要因の関わりも考えなければならない。一般的にササ類は繰り返される刈り取り踏みつけなどの被圧に弱いので、そのような被圧に深く関わる人為の増大に伴いササ類優勢な植生からササ類に乏しい植生へ変化することが推定される。To-aテフラ直上粘土層期で水田耕作の可能性も否定できないこと、また、遺跡本体域でTo-aテフラを切る耕作痕跡が検出されていることから、To-aテフラ期以降の人為の高まりが伺える。作物栽培を伴った人の営みがササ類の衰退に関わっているとしても無理はないであろう。なお、To-aテフラ期以前の粘土層でくまなく検出される広葉樹起源のブレイド状珪酸体が同テフラ以降の粘土層から検出されないことも人為の増大を示している可能性も考えられ興味深い。

（6）ま　と　め

野里上遺跡低湿地試掘トレンチⅡ壁に粘土層中に見いだされたTo-aテフラに被覆された畝状高まりが水田耕作に関わるものか否かを検討することを主目的に植物珪酸体分析を実施し次の結果を得た。

（1）To-aテフラ直下の粘土層や同テフラ直上の粘土層からも機動細胞イネ属タイプ珪酸体が検出された。その検出密度は最大でも乾土1g当たり2.7E+3個で一般的な水田作土判定基準値を満たさないが、少なくとも周辺域での稲栽培の可能性が推定されることを指摘した。

（2）To-aテフラ上位の粘土層からはヒエ属等に見いだされるイネ科短細胞起源キビ（亜科）型フリル付き珪酸体、また、ムギ類穎タイプの棒状型鋸歯縁珪酸体、コムギ属等に多く見いだされるイネ科短細胞起源ウシノケグサ（亜科）型ダブルライン珪酸体が検出された。遺跡本体域で検出されている耕作痕跡と関係している可能性を指摘した。

（3）粘土層試料の植物珪酸体密度はいずれも現表土を上まわることから応分の地表履歴を有していることを指摘した。粘土層の下部にTo-aテフラ（年代ＡＤ915年）が介在することから、粘土層の生成はTo-aテフラの堆積に先立つおおよそ1000年前から始まり、植被の存在の下で、離水後現在に至るまでに繰り返された洪水粘土の累積により100cmを超えるまで堆積したものと推定した。

（4）To-aテフラより下位の粘土層はササ類珪酸体が優勢な植物珪酸体群集で特徴づけられるが、当テフラ期以降、ササ類珪酸体は明瞭に減少する。To-aテフラ直上の粘土層においてはヒゲシバ型ヨシ属タイプ珪酸体をはじめとする非タケ亜科起源イネ科短細胞珪酸体の顕著な増加が認められることから、ササ類の生育に適さない過湿な環境の出現がササ類衰退の要因である可能性を指摘した。しかし、ヒゲシバ型ヨシ属タイプ珪酸体の極大はTo-aテフラ期以降継続しているわけではないので、作物栽培を伴う人為作用の増大の関わりも関係している可能性を指摘した。

引用文献

近藤錬三　2000　「植物ケイ酸体」『化石の研究法』化石研究会（編）59-63.共立出版
佐瀬　隆　2003　「植物ケイ酸体」『地球環境調査計測事典』陸域編（第１巻）974-981.フジテクノシステム
杉山真二　2000　「植物珪酸体（プラントオパール）」『考古学と植物学』189-213.同成社

［付］調査者によるコメント

植物珪酸体分析実施に至るまでの経緯

当初、調査区はＫⅢ29・30グリッド以北の「北区」とＫⅣ74～80グリッド以南の「南区」のみであって、その間は湧水が激しく、岩手県教委試掘の結果調査範囲外に設定されていた区域である。しかし、北区南端および南区北端に排水用の溝を掘削した際にTo-a直下から自然遺物が大量に見つかり、さらに北区南端精査時に掘り棒状木製品（128）が出土したことから同範囲外域（以降「拡張区」と呼称）に遺物分布が広がっている可能性が生じた。この確認を目的として面積比10％のトレンチ調査を実施することとなり、13本のトレンチを設定、調査した（第８図）。結果、トレンチⅡの南壁２箇所でTo-a直下が盛り上がる畦畔状の高まりが確認され、周囲を拡張し平面での検出を行なった。しかし、平面的には遺構として把握できず、水田跡としての可能性を検証するため植物珪酸体分析を実施することとなったものである。なお、この他には遺構・遺物ともに検出されていない。

地形的観点から見た耕作の可能性

本遺跡付近は西側に南北に伸びる小丘陵の裾野に位置しており、野中から仁昌寺までの区間は同様な地形を呈する。この区間には小規模な扇状地が複数形成されており、拡張区付近もその１つで、扇端部分にあたる。この扇状地地帯は同丘陵から発生する流水の影響を非常に受けやすく、拡張区付近の土壌は各層とも程度の違いはあれ水の影響を受けていることが確認されている。また、調査期間を通して湧水が途絶えることは皆無であった。換言すれば、調整さえかなえば水の供給には事欠かない場所といえる。水田耕作実施を考えたばあい、立地的な面から見れば適地の一つに挙げられよう。

トレンチⅡのTo-aテフラ直上no.５で検出された機動細胞イネ属タイプ珪酸体の密度（乾土1g当たり2.7E+3個）は、その収穫法が根刈りであったと仮定したばあいの3、000個/ｇという密度（杉山2000）に迫る量である。逆説的には、これだけの量が「火のない所」から出たとするのには無理があろう。本層の年代はテフラ直上であることからその降下からさほど遠くないはずであり、よって平安時代に納まると考えるのが最も自然である。佐瀬氏の指摘どおり、この分析結果からは周辺域での稲栽培の可能性が推定され、地形的特徴もそれを後押しするものとなっている。平安時代、To-aテフラ降下後のある期間、遺跡周辺で稲作が行われていた可能性が十分にあることを裏付ける結果となったといえよう。ただ、今回の調査が「煙」の状態で終わってしまったことが非常に残念でならない。

（丸山）

表1　野里上遺跡低湿地トレンチ粘土層の植物珪酸体密度（粒数/乾土ｇ）

	試料		全　体	イネ科機動細胞（ファン型）							イネ科短細胞起源									
				ファンⅠ（タケ亜科起源）		ファンⅡ（非タケ亜科起源）				不定	タケ型			ヒゲシバ型	キビ型		ウシノケグサ型		キビ型/ウシノケグサ型不定	その他
				ササ属タイプ	メダケ属タイプ	イネ属タイプ	ススキ属タイプ	ヨシ属タイプ	不定		Ⅰ型（ササ属タイプ）	Ⅱ型（メダケ属タイプ）	不定		フリル付き	その他	ダブルライン	その他		
トレンチⅡ	no.21	表土	4.2E+05	1.5E+04	0.0E+00	7.7E+03	0.0E+00	0.0E+00	9.4E+03	2.8E+03	3.7E+03	2.8E+03	0.0E+00	2.0E+03	0.0E+00	2.0E+03	8.5E+02	1.1E+04	0.0E+00	8.5E+02
	no.9		6.9E+05	2.8E+04	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	1.9E+04	1.7E+04	8.0E+03	3.3E+03	0.0E+00	6.1E+03	1.4E+03	6.1E+03	6.1E+03	1.1E+04	0.0E+00	1.4E+03
	no.5	To-a直上	1.2E+06	3.1E+04	0.0E+00	2.4E+03	2.4E+03	1.0E+03	2.4E+04	4.5E+03	5.9E+03	3.5E+03	4.5E+03	4.6E+04	8.0E+03	2.0E+04	0.0E+00	5.0E+04	3.5E+03	1.5E+04
	no.4	To-a直下	7.8E+05	9.7E+04	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	9.7E+02	1.5E+04	9.7E+03	1.2E+04	3.2E+03	8.8E+03	1.7E+04	0.0E+00	5.5E+03	0.0E+00	8.8E+03	5.5E+03	2.2E+04
	no.3		7.0E+05	9.8E+04	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	1.4E+04	2.1E+04	2.3E+04	9.6E+03	3.4E+03	3.4E+03	0.0E+00	1.4E+03	0.0E+00	8.2E+03	1.4E+03	4.8E+03
東端トレンチⅡ	no.8	To-a直上	7.7E+05	3.8E+04	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	3.6E+04	9.6E+03	1.4E+04	2.9E+03	1.3E+03	1.1E+04	4.2E+03	9.6E+03	2.9E+03	1.7E+04	1.3E+03	4.2E+03
	no.6	To-a直下	9.4E+05	1.1E+05	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	1.1E+04	1.1E+04	3.7E+04	8.2E+03	7.0E+03	3.0E+03	0.0E+00	9.1E+02	0.0E+00	8.2E+03	9.1E+02	8.2E+03
	no.5		6.7E+05	9.3E+04	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	8.1E+03	1.1E+04	3.1E+04	2.5E+03	3.5E+03	2.5E+03	0.0E+00	2.5E+03	0.0E+00	1.1E+03	0.0E+00	1.1E+03
	no.1		9.4E+05	2.8E+05	1.3E+03	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	8.9E+03	2.1E+04	1.8E+04	1.3E+03	3.1E+03	3.1E+03	0.0E+00	1.3E+03	0.0E+00	1.3E+03	0.0E+00	0.0E+00

	試料	イネ科トゲ細胞（ポイント型）			棒状型						カヤツリグサ科スゲ種皮起源	シダ	プレイド状	シルクハット状	多角形板状（顆粒状表面）
		長形	短形		平滑縁	鋸歯縁			導管起源	葉肉細胞起源					
		典型	オカリナ状	その他		タケ亜科タイプ	ムギ類タイプ	その他							
トレンチⅡ	no.21	1.2E+04	2.0E+03	5.7E+03	2.8E+04	0.0E+00	2.8E+03	2.8E+04	2.0E+03	8.5E+02	8.5E+02	8.5E+02	0.0E+00	8.5E+02	8.5E+02
	no.9	1.7E+04	1.4E+03	8.0E+03	4.1E+04	0.0E+00	0.0E+00	5.2E+04	4.7E+03	8.0E+03	3.3E+03	0.0E+00	0.0E+00	4.7E+05	0.0E+00
	no.5	4.3E+04	1.0E+03	1.2E+04	6.7E+04	0.0E+00	3.5E+03	7.0E+04	1.2E+04	1.3E+04	1.0E+03	1.0E+03	0.0E+00	4.5E+05	0.0E+00
	no.4	6.5E+03	1.3E+04	6.5E+03	3.7E+04	0.0E+00	0.0E+00	3.5E+04	9.7E+02	2.3E+03	0.0E+00	9.7E+02	7.5E+03	9.7E+04	3.2E+03
	no.3	1.1E+04	8.2E+03	4.8E+03	3.7E+04	0.0E+00	0.0E+00	2.1E+04	3.4E+03	1.4E+03	0.0E+00	1.4E+03	6.2E+03	0.0E+00	1.4E+03
東端トレンチⅡ	no.8	3.2E+04	8.4E+03	2.1E+04	6.7E+04	0.0E+00	0.0E+00	5.0E+04	1.3E+03	1.3E+03	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00
	no.6	7.0E+03	1.6E+04	1.0E+04	2.3E+04	0.0E+00	0.0E+00	3.4E+04	0.0E+00	2.1E+03	0.0E+00	0.0E+00	9.1E+02	0.0E+00	3.0E+03
	no.5	2.5E+03	9.6E+03	2.5E+03	2.4E+04	0.0E+00	0.0E+00	7.1E+03	0.0E+00	0.0E+00	0.0E+00	1.1E+03	1.1E+03	0.0E+00	0.0E+00
	no.1	5.8E+03	2.4E+04	1.3E+03	2.5E+04	0.0E+00	0.0E+00	1.6E+04	3.1E+03	1.3E+03	0.0E+00	0.0E+00	1.5E+04	0.0E+00	1.9E+04

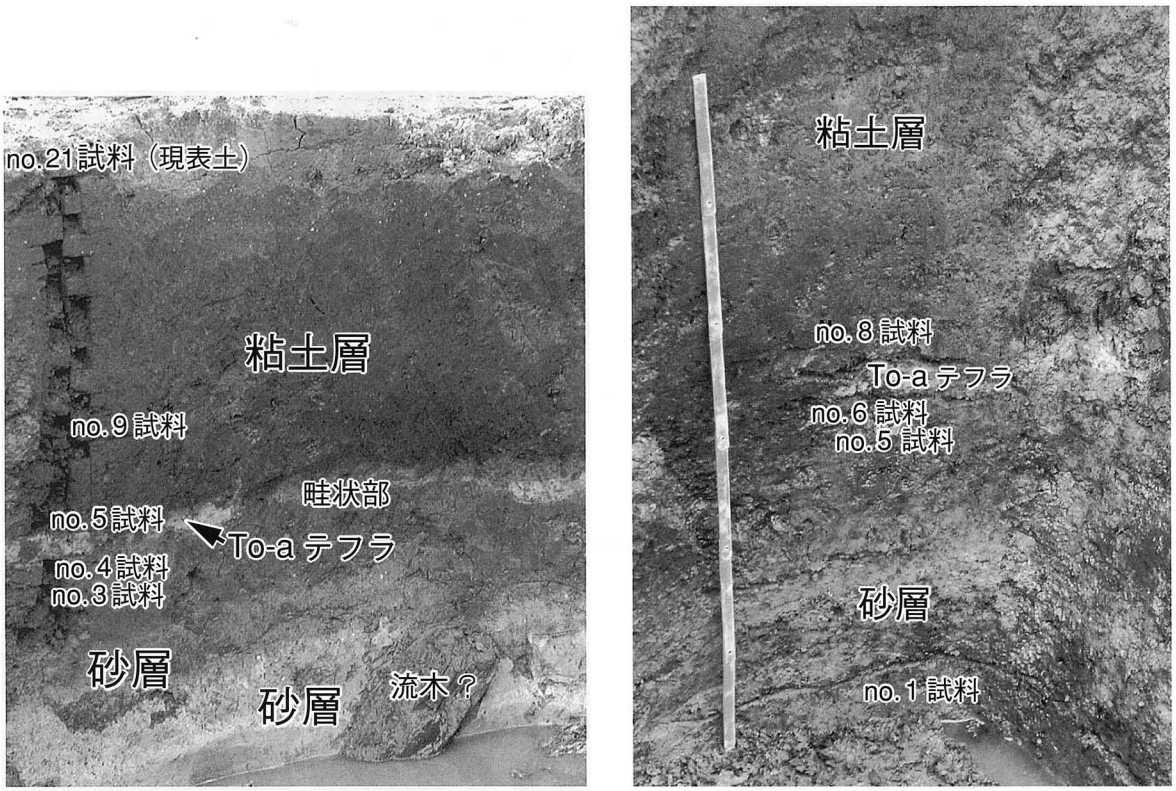
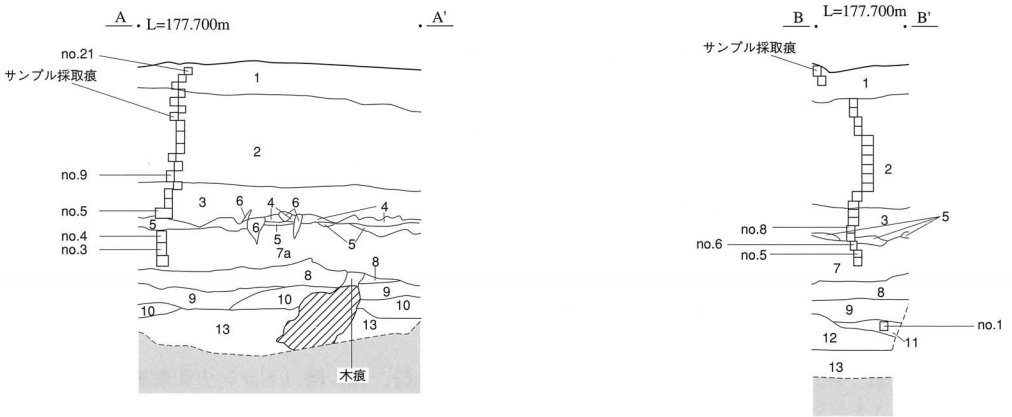


図１　植物珪酸体分析試料サンプル採取断面写真



植物遺体層試掘トレンチⅡ土壌サンプル採取断面
1　現代水田作土層。基本層序Ⅰ層。
2　10YR3/1　黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　基本層序Ⅱ層。
3　10YR2.5/1　黒～黒褐色　シルト　粘性中・しまり中　基本層序Ⅲ層。
4　2.5Y5/2　暗灰黄色　テフラ　粘性ほとんどなし・しまり中　5層テフラに土壌が混入したもの。
5　2.5Y7/2　灰黄色　テフラ　粘性なし・しまり強　To-a。最下位粒土粗く（1～2㎜）一次堆積（初期）と思われる。基本層序Ⅳ層。
6　3層と5層の混土　粘性中・しまり中　当時の攪乱。
7a　10YR4/1.5　褐灰～灰黄褐色　粘土　粘性強　しまり強　炭化物粒（～1㎝）1%、酸化鉄スジ状に10%。基本層序Ⅴ層。
7b　N3/0　暗灰色　粘土　粘性強・しまり強　酸化鉄スジ状に10%。
8　10YR4/1　褐灰色　砂　粘性なし・しまり中　水平方向のラミナ。水成堆積。酸化鉄スジ状に7%。
9　10YR5/2　灰黄褐色　砂　粘性なし・しまり中　水平方向のラミナ。水成堆積。酸化鉄スジ状に7%。
10　2.5Y5/2　暗灰黄　砂　粘性なし・しまり中　水平方向のラミナ。水成堆積。酸化鉄スジ状に7%。
11　10YR4/1　褐灰色　粘土　粘性強・しまり強　酸化鉄斑状（～2㎝）に7%。
12　10YR4/1　褐灰色　砂　粘性なし・しまり中　水平方向のラミナ。水成堆積。酸化鉄斑状（～2㎝）に3%。
13　2.5Y5/2　暗灰黄色　粘土　粘性強・しまり強。

0　(1：40)　2m

図２　植物珪酸体分析試料サンプル採取断面図

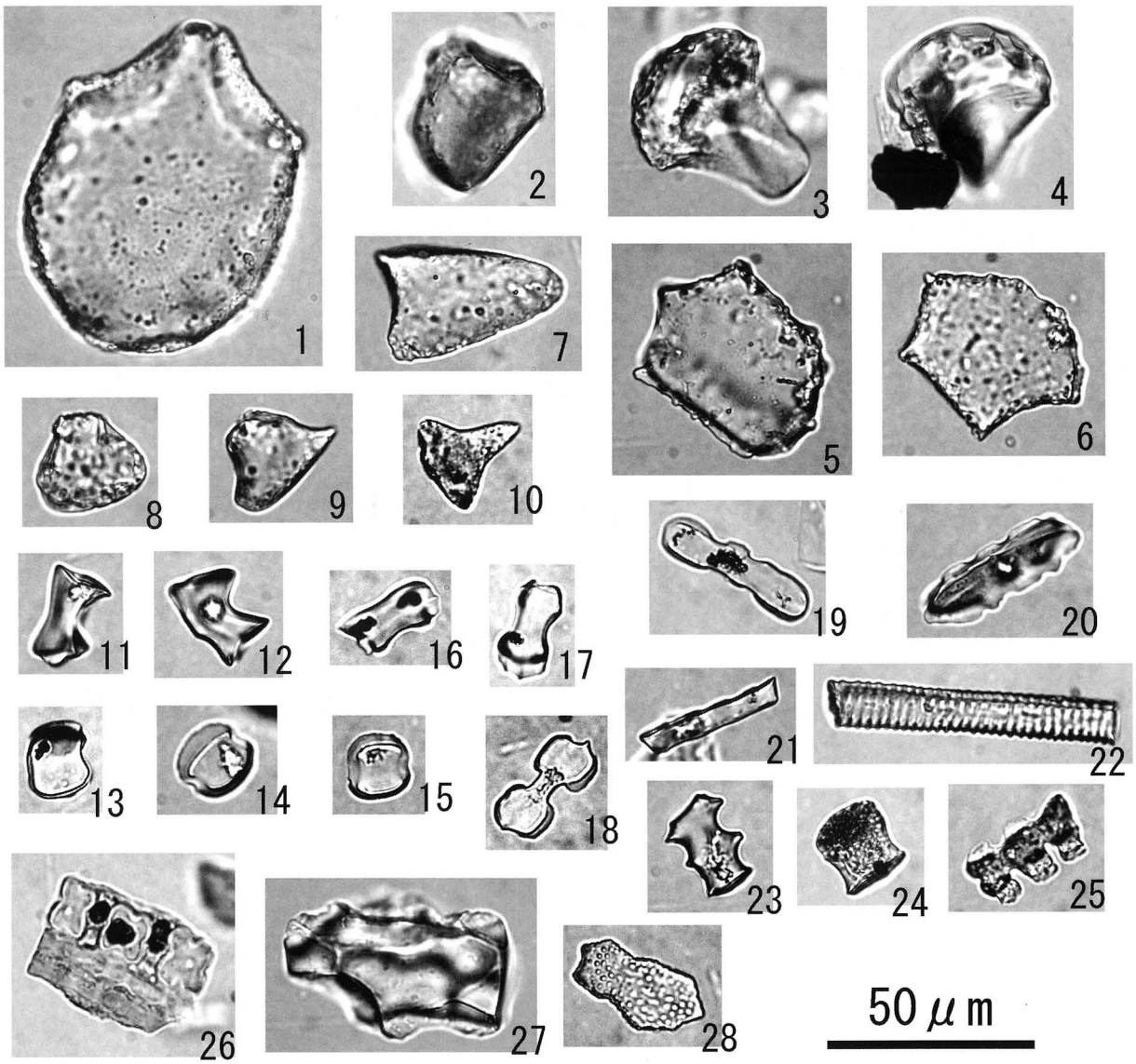


図3　野里上遺跡トレンチII粘土層から検出された主な植物珪酸体

1-6：イネ科機動細胞珪酸体（ファン型）：1.ヨシ属タイプ（トレンチⅡno.4），2.ススキタイプ（トレンチⅡno.5），3.イネ属タイプ（トレンチⅡno.21），4.イネ属タイプ（トレンチⅡno.5），5.ササ属タイプ（トレンチⅡ東端no.1），6.ササ属タイプ（トレンチⅡ東端no.6）

7-10：トゲ細胞起源（ポイント型）：7.長形・典型（トレンチⅡno.5），8・9. 短形・オカリナ状（トレンチⅡ東端no.1），10. 短形・その他（トレンチⅡno.5）

11-21：イネ科短細胞起源：11. タケ型Ⅰ・ササ属タイプ（トレンチⅡ東端no.6），12. 同（トレンチⅡ東端no.1），13. タケ型Ⅱ・メダケ属タイプ（トレンチⅡno.4），14・15. ヒゲシバ型・ヨシ属タイプ（トレンチⅡno.5），16. キビ亜科型フリル付き（トレンチⅡno.5），17. 同（トレンチⅡ東端no.8），18. キビ亜科型その他（トレンチⅡno.5），19. ウシノケグサ亜科型その他（トレンチⅡ東端no.8），20. 同ダブルライン（トレンチⅡno.21），21. ウシノケグサ亜科型その他（トレンチⅡno.5）

22. 棒状型導管起源（トレンチⅡno.5），23. 同ムギ類穎タイプ（トレンチⅡno.21），24. シルクハット状（トレンチⅡno.9），25. 葉肉細胞椎骨状（トレンチⅡno.9），26. 珪化組織片・イネ属タイプ（トレンチⅡno.5），27：広葉樹起源・ブレイド状（トレンチⅡ東端no.1），28：多角形板状（トレンチⅡ東端no.1）

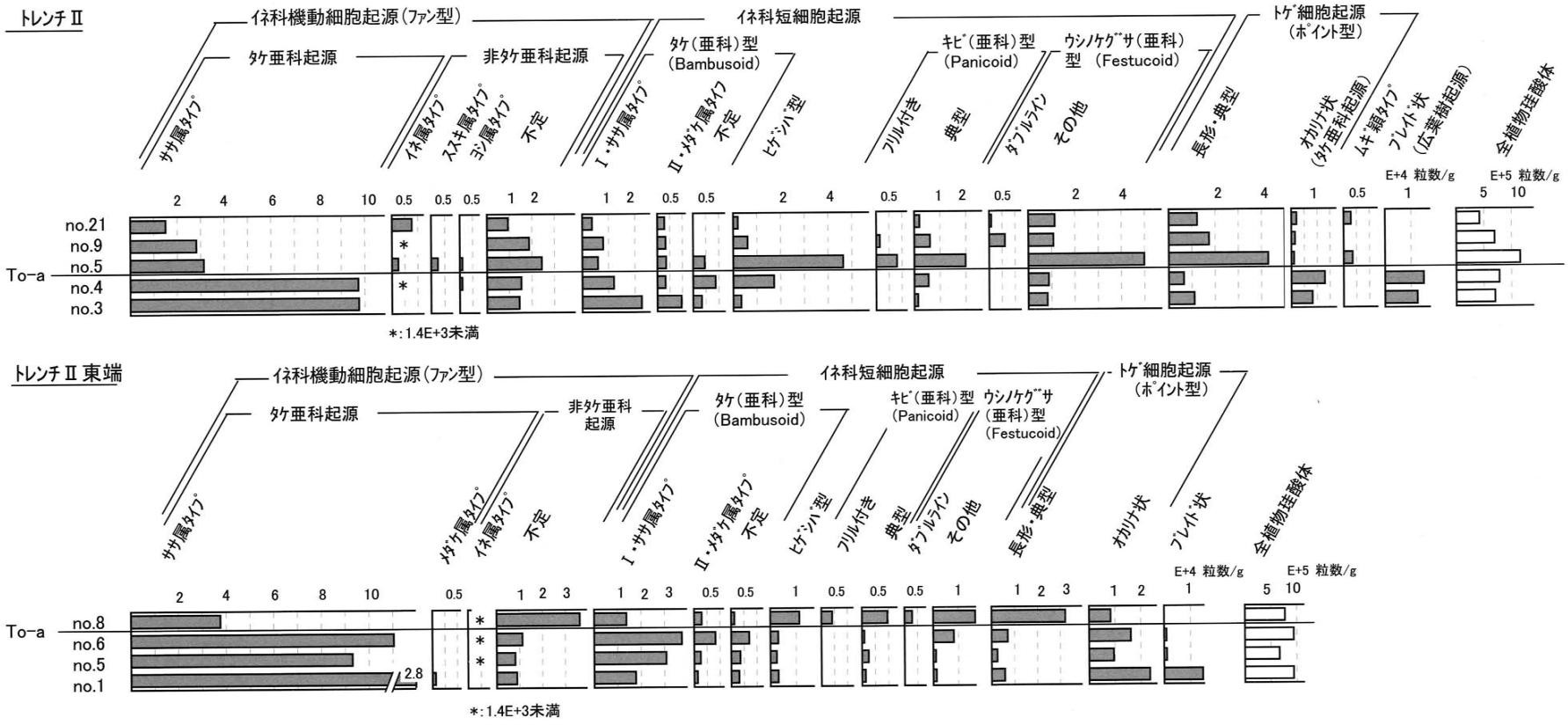


図4　野里上遺跡低湿地トレンチ粘土層の植物珪酸体組成図

4　野里上遺跡・野中遺跡より出土した炭化種実

吉川純子（古代の森研究舎）

（1）は　じ　め　に

野里上遺跡は一戸町小鳥谷にある古代の住居跡を中心とした遺構群である。遺跡の西は丘陵、東には平糠川が流れる、東向きの緩斜面に立地している。遺跡は竪穴住居、堀立柱建物、溝、耕作痕跡などで形成され、柱、杭などのほか土師器が出土している。試料は奈良時代前半に構築されたと考えられる竪穴住居跡、中世の15～16世紀前半に廃棄されたとみられる炭化物集中、To-a降灰以降に作られたと推定される耕作痕跡、および隣接する野中遺跡の竪穴状遺構である。

（2）同　定　結　果

同定結果を表1に示す。耕作痕跡からはわずかにエノキグサと菌核を出土した。竪穴住居のカマド跡からはオニグルミ小破片、キビを数個ずつ出土し、菌核および穀類とみられる不明炭化物を出土した。中世の15～16世紀前半頃の炭化物廃棄層ＳＸ05からはオニグルミ、トチノキの小破片と、イネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビとソバといった穀類を出土し、ほかには穀類とみられる不明炭化物を出土した。隣接する野中遺跡の竪穴状遺構からはコムギとヒエを1粒ずつ出土した。

表1　野里上遺跡・野中遺跡より出土した炭化種実

			野里上遺跡						野中遺跡
		番号	No.1	No.2	No.3	No.5	No.4	No.6	No.7
		時期	To-a降灰以降の耕作痕跡			奈良時代前半	15～16世紀前半		中～近世？
		遺構	1号	2号	7号	SI02	SX05	SX05	SX01
分類群		出土部位/層				カマド燃焼部	1層	1層	埋土最下位
オニグルミ	*Juglans mandsurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura	内果皮破片				4		1	
トチノキ	*Aesculus turbinata* Blume	種皮破片						3	
イネ	*Oryza sativa* L.	胚乳					1	1	
オオムギ	*Hordeum vulgare* L.	種子						1	
コムギ	*Triticum aestivum* L.	種子							1
アワ	*Setaria italica* Beauv.	種子					1		
ヒエ	*Echinochloa utilis* Ohwi et Yabuno	種子					1	1	1
キビ	*Panicum miliaceum* L.	種子				3		2	
シロザ近似種	*Chenopodium* cf. *album* Linn.	種子					1	1	
ソバ	*Fagopyrum esculentum* Moench.	種子					1		
エノキグサ	*Acalypha austalis* Linn.	種子			1				
核菌綱	Pyrenomycetes	菌核	2	2		1			
不明	Unknown					5		17	

以下に同定された炭化種実の形態記載を行う。

オニグルミ：出土した内果皮破片は緻密で不規則な曲面としばしば壁に空隙がある。

トチノキ：種子の表面は炭化しても光沢が残る場合が多く、表面には流紋状ないし指紋状の微少模様があり、不規則な形に割れることが多い。なお、トチノキは本遺跡でかなり細かい破片でしか出土しなかった。

イネ：穎がとれた胚乳(いわゆるコメの部分)を出土した。胚乳は楕円形で不明瞭ながら2本の浅い溝があり、基部には胚がとれた跡がへこんでいる。

オオムギ：種子は完形であれば紡錘形で頂部は丸みを帯び、基部は尖る。本遺跡では頂部付近の破片のみ出土した。

コムギ：種子は基部と頂部が丸い円筒形で背面の中央には溝が、腹面の基部に穴があり、厚さが幅とほぼ同サイズである。

アワ：種子は径1㎜前後のほぼ球形で基部には長三角形の胚があり、焼けると背腹方向に膨らむ。

キビ：種子は径2㎜前後の球形で基部には短三角形の胚がある。

ヒエ：種子は径1.8㎜前後の丸い菱形で焼け膨れると頂部が突出した感じになる。基部には楕円形の胚がある。

シロザ近似種：種子は円形で扁平、一端にへこんだへそがあり、そこから中心に向かって浅い溝がある。本遺跡で出土した種子は中の子葉が焼け膨れて割れている。

ソバ：種子は三角形で基部のやや上が突出し、基部中央はややへこむ。肥料分の少ない土地でも育つため、しばしば救荒植物として栽培される。

エノキグサ：種子は長さ1㎜前後の長卵形で頂部がやや尖る。

核菌綱: 菌核を出土した。内部は発泡状で無構造、枯死した材や樹皮に付着して生活する。元々黒くて堅いので炭化しているかどうか不明である。

（3）考　　察

本遺跡では奈良時代前半にはイネ以外の雑穀を出土していることから、雑穀への依存度が比較的高かったと考えられる。中世の炭化物廃棄層は人骨とともに堆積しているため、特殊な目的で生成された炭化物層と見なすことができるが、内陸という立地条件をある程度反映している可能性がある。

奈良時代のカマド跡からは食用植物としてわずかにオニグルミとキビを出土した。カマドはその構造上、燃焼残渣を頻繁に掻き出して燃焼効率を良く保っていたと考えられ、この清掃行為が一般的に炭化種実等の出土量が少なくなっている要因ではないかと考えられる。イネなどの主要穀類をほとんど利用していなかったと断定はできないが、キビの利用頻度が高いために炭化種子として残存したといえる。

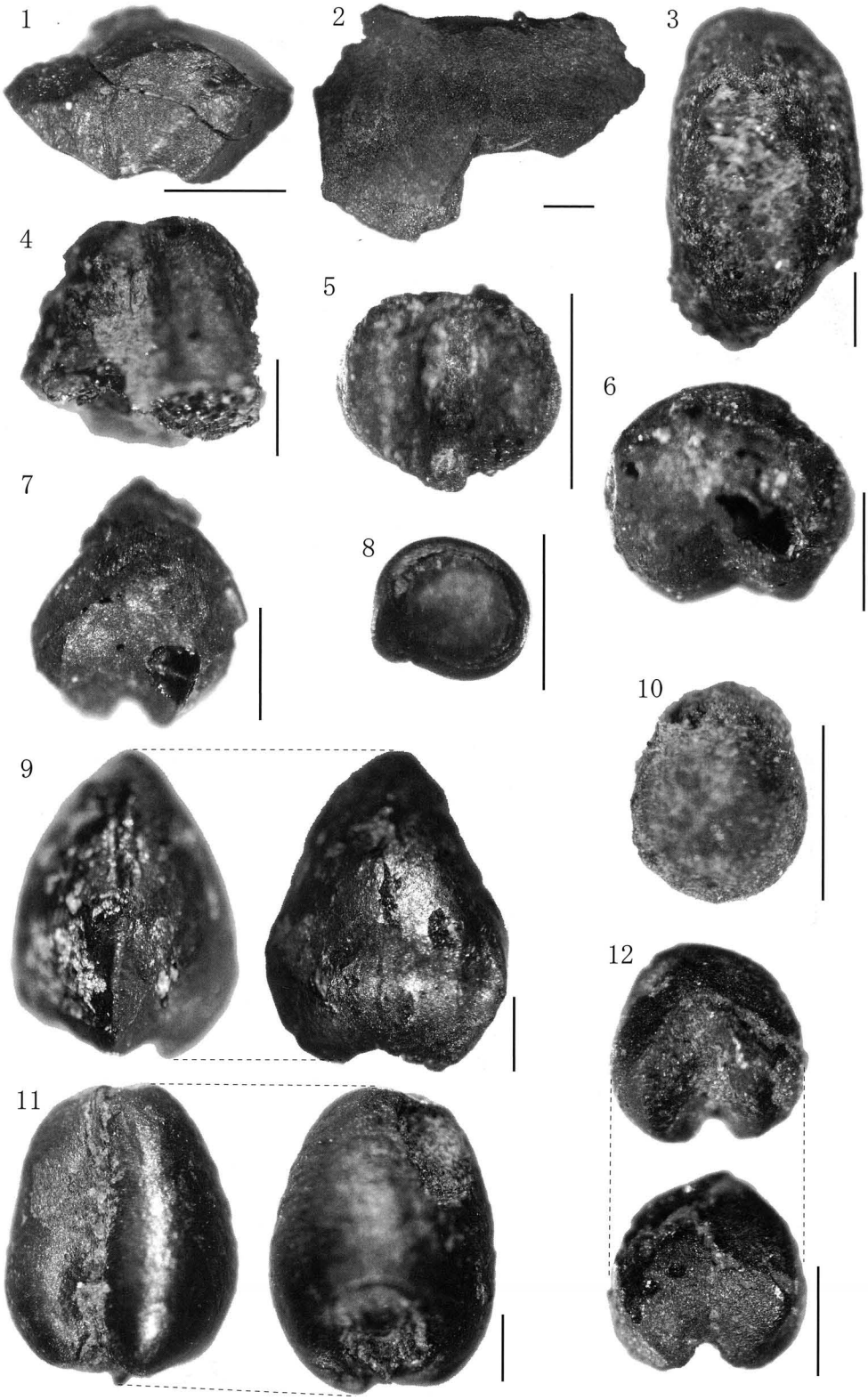
中世の炭化物廃棄層からはイネのほかにオオムギ、アワ、ヒエ、キビといった雑穀とソバ、オニグルミ、トチノキと多様な食用植物を出土した。残渣はほとんどが炭化材の細かい破片で構成され、人骨の小破片を含むことから火葬墓の可能性が指摘されている。ただし、ＳＸ05遺構に人骨一体分が揃っているのではなく、頭蓋骨などの大きい骨は確認されていない。また、人骨の燃焼温度はかなり高いとされているが、穀類の残りは良く、比較的低い温度で炭化していると推測される。本体は別の場所に埋葬され、細かい残渣がこの遺構に埋葬あるいは廃棄されたと思われる。これら残渣に含まれている炭化種実は本遺跡周辺での一般的な主食と推測され、穀類などを少量ずつ揃えて儀式に用いたと考えられる。本地域では当時、イネや雑穀とともに補助食品としてトチノキなども普通に利用していたと考えられる。

東北地方における中世の炭化種子分析例では、青森県の十三湊遺跡の複数住居跡から多量のイネと少量のコムギ、ヒエが確認され、十三湊遺跡の集落におけるイネへの依存度が高かったと推測されている（吉川 2005、パリノ・サーヴェイ株式会社 2005）。野里上遺跡の場合には火葬という特殊条件下での出土であり、当時の利用比率をそのまま反映するものではないが、儀礼においてイネのほかに雑穀やトチなどを出土しているのは、内陸部という立地条件の食料利用状況に由来する可能性も考えられる。

引用文献

パリノ・サーヴェイ株式会社　2005　「第４節４　十三湊遺跡出土種実遺体の種類」『十三湊遺跡』第Ⅴ分冊　青森県埋蔵文化財調査報告書第398集　青森県教育委員会　222-226.

吉川純子　2005　「第３節　十三湊遺跡より出土した炭化種実について」『十三湊遺跡』第Ⅴ分冊　青森県埋蔵文化財調査報告書第398集　青森県教育委員会　206-208.



図版1　野里上遺跡・野中遺跡より出土した炭化種実

1.オニグルミ、内果皮破片（SI02カマド燃焼部東端凹み）2.トチノキ、種皮破片（SX05-1層）3.イネ、胚乳（SX05-1層）4.オオムギ、種子破片（SX05-1層）5.アワ、種子（SX05-1層）6.キビ、種子（SI02カマド燃焼部東端凹み）7.ヒエ、種子（SX05-1層）8.シロザ近似種、種子（SX05-1層）9.ソバ、種子（SX05-1層）10.エノキグサ、種子（1号耕作痕跡サンプルNo1）　野中遺跡SX01埋土最下位　11.コムギ、種子　12.ヒエ、種子　　スケール＝1㎜

5　野里上遺跡より出土した木製品および加工材の樹種

吉川純子（古代の森研究舎）

（1）は　じ　め　に

野里上遺跡は一戸町小鳥谷にある奈良時代の住居跡と平安時代中～後期の耕作痕跡を中心とした遺跡である。遺跡の西は丘陵、東には平糠川が流れる、東向きの緩斜面に立地している。試料は掘り棒状木製品、柱材２点、杭である。掘り棒状木製品は先端を平らに加工してある。№２の柱材は柱穴に入っていた残りで、柱もしくは礎盤とみられる。試料からは剃刀で横断面、接線断面、放射断面の３方向の切片を切り取り、ガムクロラールで封入しプレパラートを作製した。

（2）同定結果と考察

同定結果を表１に示す。掘り棒状木製品と柱材２点はクリ、杭はムシカリであった。以下に同定された樹種の木材解剖学的記載を行う。

クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）：年輪の最初に大きな道管が２、３列配列し、その後急に径を減じて小さな道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔板は単一で、道管内にはチロースが発達する。放射組織は単列で同性である。ムシカリ（*Viburnum furcatum* Blume）：小さな道管が単独で年輪内に均一に散在する散孔材。晩材部で道管がやや小さくなる傾向がある。放射組織は２、３細胞幅で異性、長く翼状になる単列部を介していくつか連結する特徴がある。道管の穿孔板は段数の少ない階段状。ガマズミ属の他の種に比べて、本種は年輪はじめに道管が若干並ぶように見える。

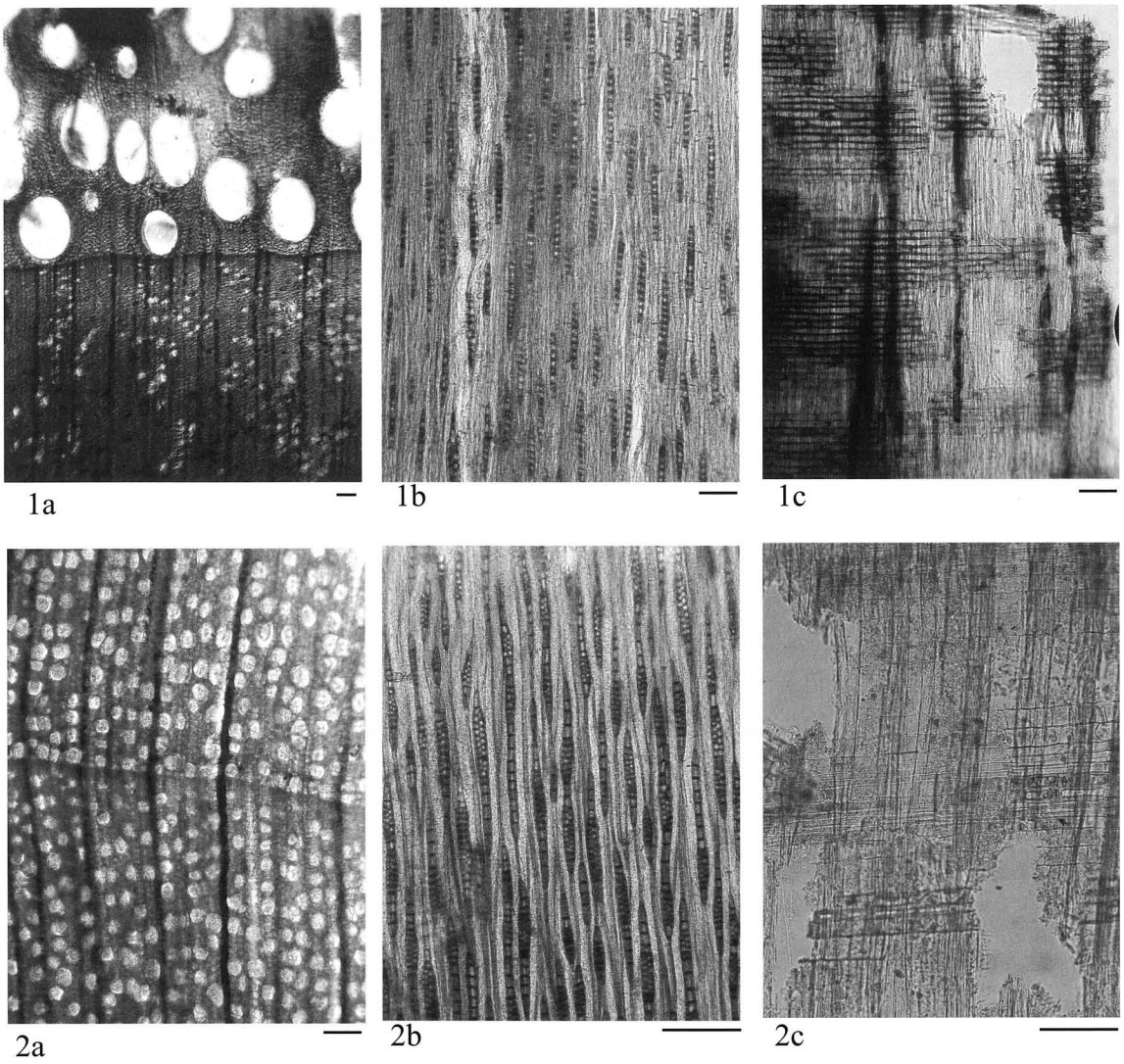
表１　野里上遺跡より出土した加工材の樹種

番号	種類	樹種	地点
1	掘り棒(オール?)	クリ	ＫⅣ21
2	柱材	クリ	ＳＡ01 Ｐ3
3	柱材	クリ	ＫⅢ30 Ｐ２
4	杭	ムシカリ	ＫⅢ60

同定試料４点のうち３点がクリであり、岩手北部の本遺跡ではクリがよく使われていたと考えられる。山田(1993)によると、８～11世紀の東北地方ではクリが建築材や杭、燃料材、挽き物など様々な用途に頻繁に使われている。杭はガマズミ属のムシカリという、東北の山地に多い種類である。杭は比較的周辺に生育していた樹種を用いると考えられ、特に樹種を限定せずに様々な種類が使われていることが多い。本遺跡では周辺の植生に応じて目的にあった樹種を用いていたと考えられる。

引用文献

山田昌久　1993　「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第１号植生史研究会　1-244.



図版１　野里上遺跡・野中遺跡より出土した木製品と加工材の顕微鏡写真

１．クリ（No1 掘り棒状木製品）２．ムシカリ（No4 杭）
ａ：横断面　ｂ：接線断面　ｃ：放射断面　　スケール＝0.1㎜

6　野里上遺跡出土骨同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

（1）は　じ　め　に

野里上遺跡（岩手県二戸郡一戸町小鳥谷字穴久保に所在）は、西側から延びる丘陵地の裾部、平糠川左岸の緩斜面上に位置し、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柱列、土坑、耕作痕跡、溝跡、柱穴状土坑、杭、焼土遺構・炭化物集中、火葬関連遺構が認められている。

今回、発掘調査段階において出土した骨について、その動物種を明らかにし、当時の動物利用や遺構の用途等について検討を行う。

（2）試　　料

試料は、ＳＩ02およびＳＸ05から採取された骨である。ＳＩ02は、出土遺物から奈良時代前半頃と推定される1辺8mを超える大型の竪穴住居跡である。カマド燃焼部手前の焚き口付近、焼成面直上から焼骨が出土した。一方、ＳＸ05は、To-a（ＡＤ915年と推定）の直上に構築されており、覆土内に焼骨が認められた。ＳＩ02およびＳＸ05とも、土壌ごと採取され、ウォーターフローテーション・セパレーションによって抽出された焼骨を同定試料とした（No.1、2）。

（3）分　析　方　法

一部の試料については、一般工作用接着剤で接合する。試料を肉眼あるいはルーペで観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。なお、同定・解析には、金子浩昌先生に協力をお願いし、著名原稿として頂いた。

（4）結　　果

野里上遺跡出土骨

金子　浩昌

結果を表1に示す。奈良時代前半頃の大型竪穴住居跡（ＳＩ02）のカマド燃焼部手前焚き口付近から出土した骨は、サケ・マス類の椎骨椎体片、魚類の鰭棘等、鳥類/小中型獣類の破片、ニホンジカの基節骨、獣類の破片等である。これらは食用に利用されたものの残渣であったと考えられる。検出された標本が少ないので、利用状況を知るに不十分であるが、指骨まであったことを考えると最終的な利用として指骨の髄とか、周辺の肉皮も利用されたのであろう。この他、加工品も1点も認められる。生活廃棄物などもカマド内に投棄されたのであろう。

To-aの直上に構築されているＳＸ05から出土した骨は、ヒトの肋骨/四肢骨などの焼骨破片である。形質から部位を確認できないが、大きさからみて上肢骨や指骨などの破片が含まれていると思われる。

表1　骨類同定結果

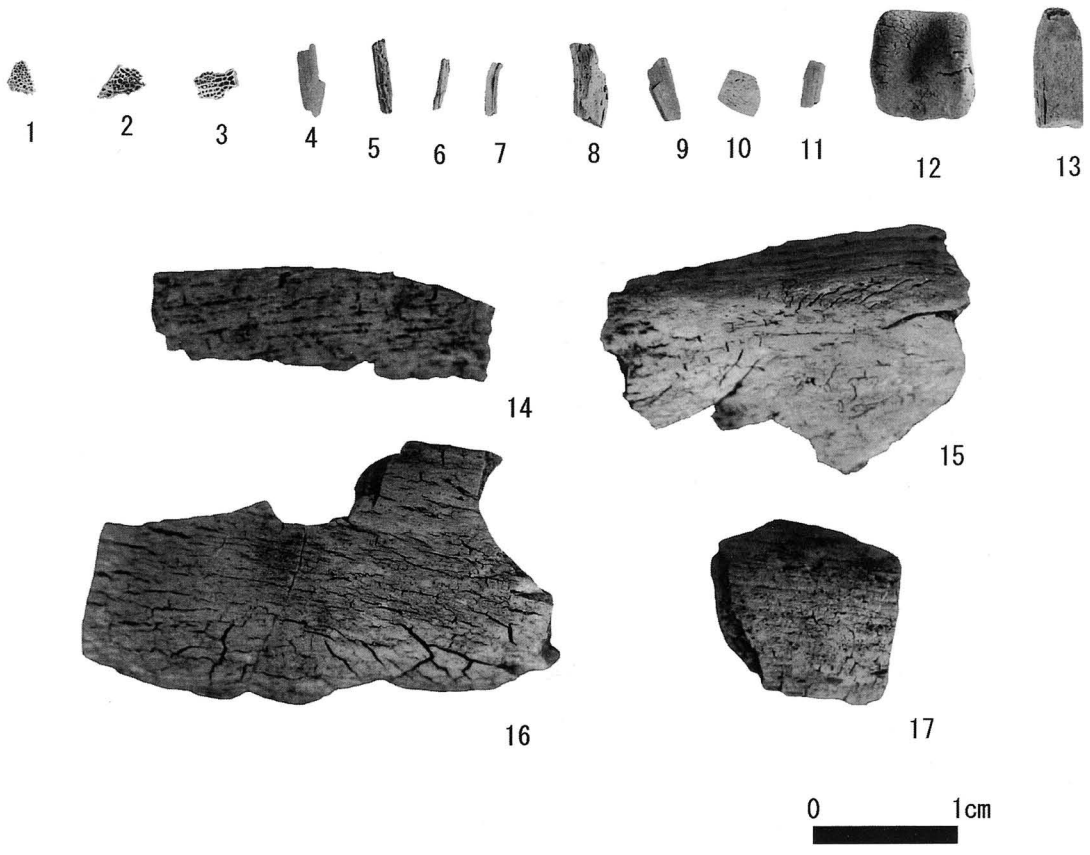
遺構	地点	層位	試料	試料重量	分類群	部位	部分	数量	備考
SI02	カマド燃焼部東端凹み	5層	No.1	2.33g	サケ・マス類	椎骨	椎体片	8	
					魚類	鰭棘等	破片	28	
					鳥類/小中型獣類	不明	破片	4	
					ニホンジカ	基節骨	遠位端	4	
					獣類	不明	破片	31	
							針状加工品	1	
					不明	不明	破片	多	1.1g
SX05		1層	No.2	38.92g	ヒト	肋骨/四肢骨等	破片	47	
						不明	破片	多	21.4g
					その他	不明	破片	8	

性別不明であるが、成人個体とみられる。他の場所で火葬された後に遺構内に埋葬されたのであろう。なお、馬場ほか（1986）を参考にすると、人骨を焼いた際、600℃以下ではほとんど変化がなく、800℃付近では灰白色になり、収縮・硬化が見られ、歯のエナメル質が崩壊し歯冠が失われる等、最も激しく変化するとされている。これにしたがうと、本人骨は800℃以上で火葬されたとおもわれる。

引用文献

馬場悠男・茂原信生・阿部修二・江藤盛治　1986　『根古屋遺跡出土の人骨・動物骨.霊山根古屋遺跡の研究　－福島県霊山町根古屋における再葬墓群－』福島県霊山町教育委員会　93-113.

図版１　出土骨



1．サケ・マス類椎体（ＳＩ02）
2．サケ・マス類椎体（ＳＩ02）
3．サケ・マス類椎体（ＳＩ02）
4．魚類鰭棘等（ＳＩ02）
5．魚類鰭棘等（ＳＩ02）
6．魚類鰭棘等（ＳＩ02）
7．魚類鰭棘等（ＳＩ02）
8．鳥類／小中型獣類破片（ＳＩ02）
9．鳥類／小中型獣類破片（ＳＩ02）
10．鳥類／小中型獣類破片（ＳＩ02）
11．鳥類／小中型獣類破片（ＳＩ02）
12．ニホンジカ基節骨（ＳＩ02）
13．獣類針状加工品（ＳＩ02）
14．ヒト肋骨／四肢骨（ＳＸ05）
15．ヒト肋骨／四肢骨（ＳＸ05）
16．ヒト肋骨／四肢骨（ＳＸ05）
17．ヒト肋骨／四肢骨（ＳＸ05）

Ⅶ 総　　括

1 ま と め

（1）立　　地

平糠川・馬淵川合流地点付近の西岸、平糠川により形成された砂礫段丘上に立地する。西側には南北に連なる小丘陵が存在し、野里上遺跡はそこから続く東向き緩斜面とその東に広がる平坦面上に位置する。この小丘陵からは断続的に流水があり、扇状地地形を成している。また遺跡東端から国道４号付近にかけては平糠川の自然堤防が形成され、よって本遺跡平坦面部分は後背湿地を呈する。野中遺跡はこの自然堤防上に位置している。

（2）遺　　構

ここでは、多様な遺構が検出された野里上遺跡のみ取り扱う。検出遺構は、縄文時代の土坑１基、奈良時代（７世紀後葉～８世紀前半）の竪穴住居跡２棟、平安時代の掘立柱建物跡２棟、柱列１列、溝跡２条、耕作痕跡７区画、中世後半（15～16世紀）の火葬関連遺構10基、近世の土坑墓１基、詳細時期不明の土坑９基、溝跡18条、柱穴状土坑26個、杭１本、焼土遺構・炭化物集中６基である。

ａ）竪 穴 住 居 跡

２棟は調査区西側の比較的高位な場所に近接して位置する。規模はＳＩ01が４ｍ強、ＳＩ02が８ｍ弱で、後者はいわゆる大形住居の部類に入る。

カマド構築方位はともに斜面上方の西側である。カマドの構築は板状の凝灰岩を芯材としてこれに黄褐色粘土を貼り付けるという手法で共通している。煙道についてはＳＩ01が削平のため判然としないが、ＳＩ02は掘り込み式である。煙道壁面にも板状の凝灰岩を配置している。

貼り床はＳＩ02にのみ認められた。カマド芯材の設置はこれと連動して実施されていたようである。

柱穴は両者とも４本である。ＳＩ01にはこれ以外の内部施設が認められなかった。いっぽう大形住居であるＳＩ02では、壁溝、カマド側柱穴２個（Ｐ１・３）から壁溝へ延びる間仕切り溝、Ｐ３西側に構築された小ピット（Ｐ５）が存在する。

構築時期はともに遺物から７世紀後葉～８世紀前半頃と推定される。

ｂ）掘立柱建物跡

ＳＢ01はＳＩ01の南側、調査区西側の比較的高位な場所に、ＳＢ02は低位部にあたる中央南寄りの平坦面に位置する。

前者は総柱式で、９個の柱穴から構成されると考える。規模は２間×２間で桁行き4.66ｍ、梁間4.2ｍである。柱間寸法は210㎝、256㎝が用いられている。桁行きの方向はほぼ北を向く。

後者は１間×３間の８本柱で、東側中央に小穴２個が並行存在する。これとの柱間寸法は100㎝である。桁行きの方向は北西を向く。また、本遺構北側に軸線を同じくしてＳＡ01とＳＤ15が存在しており、本遺構と一連の遺構である可能性が高い。同様の溝を伴う事例は秋田県の中田面遺跡、薬師遺跡などにおいても知られており、この遺構のばあいは13世紀中葉、12世紀後半～13世紀中葉の建物と推定されている（秋田県教委1980、秋田県埋蔵文化財センター2005）。

ＳＢ01は検出層位から平安時代の構築と推定される。ＳＢ02はTo-a面で検出されたことからその降下年代とされる西暦915年以後の構築と言え、ＳＡ01Ｐ３に残存していた柱材のＡＭＳ法による放射

性炭素年代測定結果を援用すれば、11～12世紀の所産といえる。

c）土　　坑

調査区全域に散在する。規模・形態ともに不定で、規則性は見出せない。縄文時代の構築と推定されるＳＫ02は、開口部径約1.3mでほぼ円形を呈し、断面はビーカー状を成す。

d）耕　作　痕　跡

比較的高位部にあたる調査区中央西際斜面に２号が位置するほかは、すべて低位部にあたる中央以東の平坦面に立地している。

２号は、現地表面以下の一連の堆積を観察できる良好な断面が得られたことにより、作土層および畝・畝間が検出され畠跡と認識されるに至った。作土層にはTo-aが偏りなく細かく混入しており、人為的な攪拌作業の存在を強く感じさせる。他の６区画については作土層の検出がかなわず、「畠作に関連する掘削痕跡」という認識に止まる。

なお、７区画のいずれもTo-aを切って掘削されており、その降下・堆積以降の所産であることが明白である。１号および７号の溝内堆積土中、２号の作土層畝間頂部付近から採取した土壌サンプルからフローテーション法により抽出した炭化物粒に対して実施したＡＭＳ法による放射性炭素年代測定の結果は、１号については層位学的年代とまったく相容れないものであったものの、２号は^{14}Ｃ年代が1190±40yrBP、較正暦年代が7.8％の信頼度で690ＡＤ～750ＡＤおよび87.6％の信頼度で760ＡＤ～970ＡＤ、７号は^{14}Ｃ年代が990±30yrBP、較正暦年代が56.8％の信頼度で980ＡＤ～1060ＡＤ、38.6％の信頼度で1070ＡＤ～1160ＡＤというものである。層位学的見解にこれを加味すれば、To-a降下年代を西暦915年としたばあい、２号はそれ以降～970年という10世紀初頭～後半の年代が導き出される。７号はともに調和的であり、10世紀末～11世紀中頃あるいは11世紀後半～12世紀中頃の可能性がある。

e）溝　　跡

調査区中央から東端にかけての低位部・平坦面に位置するものが多く、ＳＤ03・04のみが斜面部にあたり標高の高い南西部に立地している。この２条はさまざまな点で他と異なる。

平面形態は、ＳＤ15が「コ」の字形を呈する以外はすべて直線である。ＳＤ15は単独遺構である可能性も考慮して本遺構群に分類しているが、ＳＢ02・ＳＡ01と一連の遺構である可能性が高い。軸線は等高線に沿うように北―南を向くものが多く、これと異なるものでは前述のＳＤ03・04が等高線に直交するように西―東に、ＳＤ05・14が斜行するように北東―南西、北西―南東に延びる。

規模はまちまちである。いずれの遺構も実際の構築面で検出できたとはいえず、全体が確認されたものはなくいずれも途中で消失しているため単純には比較できない。その中で、ＳＤ03・04は開口部の幅が比して広く、04は1.75mを測る。横断面形も漏斗状や不整な逆台形状を呈し、深い。

構築年代は、ＳＤ15も含め低位部・平坦面に位置するものについてはＳＤ01を除きTo-aテフラ降下以後といえる。ＳＤ01は降下直前である。ＳＤ03・04に関しては同テフラが介在せず、遺物も時期特定可能な出土状態ではないため不明といわざるを得ない。

f）火葬関連遺構

異地性の焼土・炭化物・骨片などが充填された浅い土坑と現地性の焼土遺構とが近接して確認されたもので、Ⅲ層下位からⅣ層To-a面にかけて検出された。調査区中央の平坦面付近に集中して位置している。

土坑の形態は平面が楕円形、断面が浅い皿状を呈するものがほとんどで、平面規模は約１m以下である。焼土は平面規模約1.2m以下であるが、後世の攪乱のため平面形態の不明なものが多い。

土坑内堆積土中の遺物については、現地調査時に確認していた多量の炭化物と骨片のほか、堆積土

全量に対して実施したフローテーション・セパレーション法によりＳＸ05分から炭化種子が数種検出されている。これらのうち、ＳＸ05・12出土の炭化物に対しＡＭＳ法による放射性炭素年代測定を、またＳＸ05出土骨片と炭化種子に対し分析・同定を実施した。^{14}Ｃ年代・較正暦年代は、ＳＸ05が430±40yrBP・83.9％の信頼度で1410ＡＤ～1530ＡＤ、ＳＸ12が390±30yrBP・69.2％の信頼度で1440ＡＤ～1530ＡＤで、２試料とも中世後半の15世紀～16世紀前半の可能性が高い。骨片は約800℃以上で焼かれた人骨（肋骨や四肢骨含む）、炭化種子はイネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、オニグルミ、トチノキと判明した。よって本遺構群は15～16世紀前半の火葬関連遺構と推定される。なお、本報告であえて「火葬墓」と断定的に呼称することを避け「火葬関連遺構」とした理由は、出土する人骨量が全部ではなく一部であり、主体は別の場所に埋葬された可能性が高いことに起因する。あくまでも主体的・本来的な「墓」とは一線を画す、火葬行為に関わる付随遺構の１つと捉えたからである。

ｇ）柱穴状土坑群・杭

ＳＢあるいはＳＡとならなかった柱穴状土坑は調査区全体で26個検出された。また、単独で杭が１本見つかっている。そのほとんどがⅣ層To-aテフラより上位で構築されたものである。

柱穴状土坑中で特筆すべきはＫⅢ30Ｐ２で、柱材（126）が残存していた。樹種はクリである。また杭もモノ自体が残存していたことから検出できたもので（127）、樹種はムシカリである。いずれも当初は湧水量の多さから調査範囲外となっていた調査区中央部付近に位置するものであり、ぎゃくにその湿地的環境の産物といえる。

２　考　　察

（１）竪穴住居跡出土土師器の検討

ａ）分類と時期推定

本遺跡出土の土師器については、Ⅳ章２節において形態的属性からの分類を試みた。まずはこれをまとめてみる。

坏…全体の形態が判断できる程度まで復元された個体がほとんどなく、各部位の属性を用いた分類は不可能であった。このため、部位別で最も形態的特徴が看取される口縁部を分類対象として用いることとした。結果、口縁部の残存する個体すべての共通属性として、体部から口縁部へかけて内湾する器形であること、体部外面に段あるいは沈線を有することが挙げられた。段・沈線の状態や条数は多様で、これにより細分を行っている。内面には段が付かない。また、底部については残存資料が少なく共通属性として前者と同列には捉えられないものの、体部と底部の境目の稜線が明瞭でない平底（いわゆる「平底風丸底」）と平底の２種のみが存在する。

甕…坏と同様に全体形の判断できる個体が少なく、各部位の属性を用いての分類は不可能であった。このため、形態的特徴が豊富な口縁部から胴部上半までを分類対象とした。器形は長胴型、球胴型、小型が存在するが、この形態分類ではすべて一括し取り扱っている。なお、全体形が復元された個体の特徴として、長胴型・小型に関しては体部最大径の位置が上半にあること、底径が大きく、体部最大径との比が小さめであることが言える。分類属性は、口縁部の長さ、口縁上部から口唇部にかけての形態、頸部の状態である。これらの属性のうち、口縁部の長さについては出土層位に違いが看取された。すなわち、ＳＩ01において床面出土分はすべて長いタイプ、埋土分はすべて短いタイプであった。後者は平安期に属するとされるタイプであり、この出土状況と矛盾しない。また、分類属性の後

2者については沈線あるいは段を有する個体が卓越し、そのバリエーションも豊富である。ただし、沈線・段の施文部位は口縁上部から口唇部に限定されるという特徴を有する。

この手の土師器は「東北北部型土師器」（三浦1991、宇部2002）もしくは「沈線文土師器」と呼称されるものであるが、特に甕は「横走沈線文土器」「多条沈線文土器」（高橋1997）と呼ばれ、北東北の在地的な土器と理解されている。岩手県域および馬淵川流域における「沈線文土師器」の存在時期について、宇部則保氏は概ね7世紀前半から8世紀後半の間とし、甕のばあいは横走沈線文が7世紀中頃に見られるようになり、7世紀後葉から8世紀前半には口縁上部に限定され口縁上端が屈折して外傾したりほぼ直立気味になるものが目立ってくるとしている（宇部2000）。

ここからは、分類結果を基に他遺跡出土資料と対比することにより、本遺跡竪穴住居跡床面等出土遺物に対して若干の時間的・空間的検討を加えていく。この年代推定に当たっては、馬淵川流域の遺物を中心に論を展開されている宇部氏、大野亨氏の一連の論考（宇部1989・1997・2000・2002、大野2001・2002）を軸とした。

まず、坏であるが、段・沈線の位置および底部形態から宇部氏の三段階（宇部2002）にあたると考えられるが、明瞭な丸底を呈するものが確認されず、これより若干後出の可能性がある。よって7世紀後葉から8世紀前半と捉えておく。ただし出土点数が少なく、詳述する材料は持ち合わせていない。

次に甕である。遺構使用年代に関わる分類Aについて少し細かく見ていく。AⅠのように口唇部を斜めに面取りする形態は短期間に限定されるものではなく、少なくとも7～8世紀を通して見られるもので、これ以降にも存在する。地域的に見れば、「甕Aの口唇部が角状あるいは沈線状にくぼむことの多いのに比べて、甕B（筆者注…甕Aは胴部上半が膨らむ甕、甕Bは胴部下半が膨らむ甕）にはそのような特徴があまり認められない点からみても甕Bが東北南部の系統であることが裏付けられている」（宇部2000）という指摘からも東北北部に顕著な形態といえるものである。また、AⅡは口唇がAⅠに比して先細りとなり受け口状を呈するものであるが、先端以外の形態はAⅠと類似し、いずれにも外面の面取り部分が凹んで沈線状を呈するものがある等、調整動作的な差異はほとんどないに等しい。AⅡと同様の形態を呈するものは、前述のように7世紀後葉から8世紀前半に認められるという（宇部前掲）。ただし、AⅡの形態変化範囲は「受け口状」とされるものの中でも狭い部類に入る。

また、この口唇・口縁上端受け口状となるものには、八戸市丹後平遺跡2号墳出土分のように口唇が先細りにならず一定の厚さで推移するものも見られる。この点はAⅣおよびAⅤの属性と一致するものである。AⅡとAⅣおよびAⅤを構成する各属性は、本遺跡では同時存在しながらも交わらず別々の個体に用いられているが、他方ではそれぞれの属性がさまざまな組み合わせで用いられていることがわかる。例えば二戸市中曽根Ⅱ遺跡の住居跡床面出土土器のばあい、50号址ではAⅡとAⅣがあり本遺跡SⅠ02と符合する坏形態も同様である。いっぽう、64号址のばあいはAⅠ、AⅡがあるのに加え、頸部の段が長く、口縁上端が大きく内湾し口唇が先細るタイプが見られる。

b）管見における当該土器出土住居の空間的広がりと内容

本竪穴住居跡群と同時期に存在した遺構の空間的広がりを明らかにすること、加えてそれぞれの遺物セット関係の相違点から今後の検討課題を炙り出すことを目的として、第6図で作成した本遺跡から半径10km圏内で検出された竪穴住居跡のうち、本遺跡住居跡床面・カマド出土土師器と同種のものが床面あるいはカマドで確認されているものを抽出した。

管見で確認された遺跡は、田中遺跡、北舘B遺跡、上野遺跡（B・D・G地点）、小井田Ⅴ遺跡の5遺跡で、遺構数は12を数える。坏・甕ともに類似するのは上野遺跡BH83住居跡とAH42住居跡、小井田Ⅴ遺跡SⅠ-02住居跡の3棟で、他はほとんどが坏のみ類似する。甕の出土状況を見てみると、

上野遺跡ＢＨ83住居跡で受け口状の長胴甕２点とＡⅧ１点、同ＣＢ80住居跡で受け口状の長胴甕１点と口唇部形態がＡⅡで頸部に長い段を持つ長胴甕１点、同ＡＨ42住居跡でＡⅡの長胴甕と球胴甕各１点、小井田Ⅴ遺跡ＳＩ-02住居跡でＡＩ２点が出土している。この他は無く、各遺構における甕出土量中に占める当該遺物の割合も小井田Ⅴ遺跡ＳＩ-02住居跡を除き半数以下と低い。いっぽう、本遺跡における確認量は、ＳＩ01・02両住居跡とも７割を超えており、あくまでも「東北北部型土師器」が主体であったことを示している。同状況は、当該時期の大集落である中曽根Ⅱ遺跡の一部住居跡にもみられる。このようなあり方が何を原因とするものなのか、この追求が今後の課題となる。

（２）動・植物利用…特に農耕に関わる事象

ａ）検出された動・植物利用痕跡

今回の調査で確認された動・植物利用痕跡（遺構・遺物とも）をまとめると以下のようになる。

① 野里上遺跡ＳＩ02竪穴住居跡カマド燃焼部手前焚き口堆積土から、炭化種子・実としてキビ、オニグルミ、動物遺体としてサケ・マス類の椎骨椎体片、魚類の鰭棘等、鳥類/小中型獣類の破片、ニホンジカの基節骨。遺構所属推定年代から７世紀後葉～８世紀前半の所産。

② 野里上遺跡ＫⅢ～ＫⅣグリッド低湿地における植物珪酸体分析により、基本層序Ⅳ層（To-aテフラ）直下から機動細胞イネ属タイプ珪酸体、同層直上からヒエ属等に見いだされるイネ科短細胞起源キビ（亜科）型フリル付き珪酸体、ムギ類穎タイプの棒状型鋸歯縁珪酸体、コムギ属等に多く見いだされるイネ科短細胞起源ウシノケグサ（亜科）型ダブルライン珪酸体。所属推定年代は、それぞれTo-aテフラ降下年代（西暦915年と推定）の直前・後。

③ 野里上遺跡２号耕作痕跡畝部作土層における花粉分析により、イネ属型花粉が少量と、植物珪酸体分析により、キビ型の短細胞珪酸体、同小溝内からキビ族の機動細胞珪酸体（290個/gと少量）、キビ型の短細胞珪酸体、４号耕作痕跡小溝内からキビ型の短細胞珪酸体、イネ属の機動細胞珪酸体（250個/gと少量）。遺構所属推定年代から10世紀初頭～後半の所産。

④ 野里上遺跡ＳＸ05・06埋土から、炭化種子・実としてイネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、オニグルミ、トチノキなど。遺構所属推定年代から15世紀～16世紀前半の所産。

⑤ 野中遺跡ＳＸ01竪穴状遺構埋土最下位から、炭化種子としてコムギ、ヒエ。遺構所属推定年代から中世～近世の可能性あるが詳細不明。

ＳＩ02検出例により、奈良時代の当該地域における鳥獣類、魚類など動物性資源利用の一端が垣間見られる。検出場所から見て、利用目的の第一義は食用と捉えてよいだろう。サケに関しては、平糠川に遡上していたことが知られている（青森県立郷土館1997）。秋、産卵のため故郷の川に戻ってきたサケを捕獲したものと思われる。

植物性資源に関しては、奈良時代から中世（近世？）までの利用種の一端が確認された。いずれも食用種である。ただし、検出遺構・場所の性格によりその持つ意味が異なる。①～③は、居住場所・遺構外・耕地という性格上、素直に食用目的の作物と考えて違和感なく、それを示す資料に加えてよかろう。今回、奈良時代の耕地は検出されていないものの、周辺域における該期農耕の存在が示唆される。④は火葬関連遺構であるため事情が異なる。種子は多種類確認されているが、これらも食用が第一義で生産・採取されたものだろうから、当該地域における当時の作物と食糧を考える重要な資料になろう。加えてもう１つ、葬送に関わる儀礼的意味を有している可能性が極めて高い。儀礼に雑穀が用いられる例はさまざま知られている。本例も当該地域の中世における火葬儀礼の一構成要素と推定され、貴重な資料といえる。本件については次項で詳述する。

b）当該地域における農耕痕跡

第6図の範囲で確認されている農耕痕跡を以下にまとめた（内容・年代は各報文による）。

① 田中3遺跡ＣＧ62竪穴状遺構の堆積土5層、床上、付属している溝、ピット中からイネの炭化種子が多量に出土。籾殻付きのものが多く、穂付きのものもある。平安時代（10世紀前半）とされ、炭化種子の^{14}Ｃ年代測定結果（Libby Age）は未補正で940±80yrBP。遺構内埋土にTo-aテフラが成層しており、これより下位での検出。（一戸町教委1981）

② 田中4遺跡ＢＩ56竪穴状遺構の堆積土5・6層、床上からイネの炭化種子が大量に出土。籾殻付きのものが多く、穂付き、茎付きのものもある。平安時代（9世紀後半）とされ、炭化種子の^{14}Ｃ年代測定結果（Libby Age）は未補正で1030±70yrBP、1170±70yrBP。遺構内埋土にTo-aテフラが成層しており、これより下位での検出。（前掲）

③ 上野遺跡の3遺構から炭化種子が出土。9世紀後半～10世紀初頭とされるⅡＤ－2竪穴住居跡のＰ4埋土最下部より多量のアワ、コムギ、少量のヒエ、オオムギ、キビ。平安時代？とされるⅡＤ8ｆ土坑の底面直上から多量のイネと少量のヒエ、アワ、コムギ。15世紀末～16世紀代とされるⅢＤ－1竪穴住居跡床面からイネ、オオムギ、マメ。（岩文埋2001）

④ 姉帯城跡の4遺構から炭化種子が出土。ＳＫ－05土坑より人骨片等とともにアワ、ソバ、小豆。ＳＫ－06・07・16土坑よりアワ。遺構は天正19年の落城後間もなく造られた墓壙の可能性があるとしている。（一戸町教委1999）

この中でやはり特筆されるのは田中3・4遺跡竪穴状遺構出土の大量のイネであろう。いずれもTo-aテフラの下位から出土しており、これより古いことははっきりしている。穂・茎が確認されていることからは、他地域からの搬入品ではなく在地産の可能性が指摘できよう。野里上遺跡におけるTo-aテフラ上・下位の植物珪酸体分析結果からも、10世紀初頭前後に当地域で稲作が行なわれていたといってよい。なお、④の例は本遺跡事例④と類似しており、次項で詳述する。

c）管見における畠作関連遺構検出事例と構築時期に関する特徴

本遺跡において検出された7区画の耕作痕跡は、一戸町内における近世以前の耕作跡としては初見となるものである。これまでに本県で確認された当該遺構の帰属時期は、遺構自体の認知および検出が可能な特殊な条件下…テフラ等短期間に発達した被覆層が存在する状態でなければ非常に困難であるため、広範囲に多量の堆積を見たTo-aテフラに絡んで検出されたものが大半を占め、結果、平安時代に集中している。本遺跡付近も広く厚く同テフラに覆われており、検出には非常に好条件であった。

また、他遺跡における検出事例の大半は、同テフラに被覆されその後の改変を受けていない、つまり降下以前の痕跡であり、テフラ降下後の耕作痕跡と認知されたものは少ない（二戸市大向上平遺跡や同大向Ⅱ遺跡など）。これらはテフラ降下後間もなく実施された復旧痕跡と理解されており（能登ほか2000・2001）、また同時に復旧前の、つまりテフラ降下前の「耕作痕跡」も確認されている（岩文理2000・2002）。テフラ堆積状態の有する意味は非常に重要で、テフラ降下前に放棄されたものか、テフラ降下により放棄されたものか、あるいはテフラ降下後にそれを除去・中和し耕作を継続したものかなど、構築時期の推定だけではなく、火山噴火とテフラ降下という災害イベント時における人的動向をも示唆させ得るものである。本遺跡例はテフラ降下後に開始された畠作痕跡であるが、この「テフラ降下後のみ」、換言すれば「テフラ降下前には無く、降下後に同地が選地され開始された」と理解できることの持つ意味が非常に重要と思われる。この意味について、次目で立地と堆積土壌の観点から述べていく。

d）立地および堆積土壌から見た本遺構群の特徴とその意味

本遺構群は、南北に伸びる小丘陵の裾野、同丘陵からの河川堆積により形成された扇状地地形上の東向き緩斜面（２号耕作痕跡）とその東側にあたる低位部平坦面（その他すべて）に立地している。後者は、さらに東側に北流する平糠川により形成された南北に延びる自然堤防に挟まれ、後背湿地を呈する。前者は、その形成過程で堆積した複数の砂礫層の存在や、何より斜面地であることから排水性がよい。奈良時代、当地に住んだ人々はこの緩斜面地を居住域として選んだ。低位部にその痕跡は無い。ただし、耕地(水田と仮定している)として利用した可能性があるのは前述したとおりである。

いっぽうで、平安時代中～後期の人々は、中心域がどこかは不明とはいえ、低位部に掘立柱建物を構築し、また畠作耕地として用いた。この選地の相違は何に起因するものであろうか。当然、複数の要因が作用しているであろうが、うち１つはTo-aテフラの降下と堆積にあったと見たい。

大規模なテフラ降下による影響として、光合成不良による枯死や水分を含んだテフラ自身の重みによる倒木などにより引き起こされる森林の破壊と、それに伴う保水力低下による土砂崩れ等斜面地の地形崩壊が発生することが知られる。10世紀初頭の十和田火山噴火は、日本国内で過去2,000年間に起きた噴火の中で最大級と考えられており、小鳥谷地域に降下したテフラ量も現存量をはるかに超える相当なものだったであろう。今回、佐瀬氏の植物珪酸体分析により低位部のTo-aテフラ直上層におけるタケ亜科起源珪酸体の減少とヒゲシバ型ヨシ属タイプの増加…一時的な過湿な環境出現の可能性が指摘されたが、この現象は同テフラ降下により発生した遺跡西側丘陵の森林破壊と保水力低下による低位部への流水量の増加が要因ではなかったか。また、降下テフラには流動性が高いという特徴があり、To-aも主として流水により丘陵部から河川流域へと運ばれ、後背湿地の調査区東部低位面に多く流入・堆積したことは土層堆積状態の観察から明らかである。堆積に際して同地は、一時的に前述のような過湿環境に見舞われたものの、基本的にテフラは保水性が低いため徐々に低湿状態となり、ぎゃくに常時排水性は増して降下前より乾燥した環境を呈するようになったと考えられる。環境の変化した低位面の状態を認知し、畠作耕地として利用を開始したのではないだろうか。緩斜面地にある２号耕作痕跡と低位部平坦面にある７号耕作痕跡の^{14}Ｃ年代測定結果に現れた差は、この変遷を示した可能性がある。

ｅ)「畠跡」と「耕作痕跡」…遺構自体の構造的特徴

今回、２号については畠跡と認定することができた。これは垂直方向に連続した土層断面で畝と畝間が確認されたためで、畝立てを実施するばあいの畠の認識には当然不可欠な点である。畠はその性格上、他の遺構に比して強度が弱く、風化による畝・畝間の平坦化が進行しやすい。また、常畠のばあい連続耕作されることから前耕作痕跡は破壊されるのが常である。さらに、作土と地山（旧地表面）は基本的に同一土壌であるからその差異の判別が極めて難しい。よって、遺構として認知されるには明瞭な被覆層や掘削層が無ければ困難な訳だが、２号のばあいは遺構下位にTo-aテフラ層が、また上位には土石流堆積物が存在したことから畠跡と認定でき、作土層や遺構下位の状態まで推定することができる。この耕起から埋没までを想定すると次のようになる。

①To-a降下（14層）、その後土壌堆積→②15層までの耕起と③土壌攪拌（11～13層）および畝立て（11層）→④放置（放棄？）→⑤畝間埋没（10層）→⑥土石流の堆積（８層）

耕起に関して、大半は14層（To-a）を掘り抜くが15層中で止まっており、さほど深くまではおよんでいない。14層下約10cm以内であろうか。耕起時、14層上位に土壌の堆積がどの程度あったのか不明であるが、仮に推定してみると次のようになる（注：土圧は考慮していない)。本遺構付近の削平の少ない地点における現地表面からⅣ層上面までの層厚は約125cmであることから、土壌の堆積スピードは125cm÷1100年＝１年平均で0.11cmとなる。To-aテフラ降下年代を西暦915年として、本遺構の

^{14}C年代測定結果を援用すれば①～②間の時間幅は長くとも970－915＝55年と算出され、0.11cm×55年＝6.1cmとなる。この程度の堆積であれば、耕起は20cmにおよばないこととなる。

作土（11・12層）中のテフラは土壌とよく混合し攪拌が進んでいることから、単回ではなく複数回の土壌移動が想定される。また、平面で検出された溝状プランと畠の畝間の位置が合わないことから、耕起と畝立てが必ずしも連動したものではないこと、溝状プランの条間隔が畝間に比して狭い箇所があることから、複数回の耕起があったことなどがいえよう。以上のことから本遺構の所作として、荒起こしもしくは天地返し的耕起が成されたことと、その（前）後の耕作行為ではおもに上位土の移動、つまり畝立てや土寄せのみが複数回繰り返されたことが読み取れる。天地返し的耕起がどの程度の頻度で行なわれたかは不明だが単回ではないことから、多年度に亘る耕作の継続が示唆される。ただし、To-a未掘部分が広く残存することから、数年耕作した後放棄したものとの推定が可能である。

以上の推定を他遺構に当てはめると、その痕跡（筋状掘削痕）は平面における溝状プランと近似し、同種と捉えられることから、荒起こしもしくは天地返し的耕起痕が主であるといえる。これより上位にある作土層、畝・畝間については、その把握が難しく、認知できなかったものと考えられる。

次に、２号畠跡の畠形態（畝立て間隔）復元と、これ以外の各遺構における掘削間隔からの作業形態・頻度の推定および２号の畝立て間隔との比較による性格検証を目的として、畝間・溝間の心心距離計測を実施し第26表を作成した。なお、以下で行なう検証については、耕起を伴う畠作がある程度規則的な間隔感を持った上で行なわれていることを前提としている。

２号畠跡は畝間底部中央で計測している。これによると、２号畠跡では51～70cmにピークが認められ、これが１畝分のスパンとなる。これより間隔の広いものは、中間で１畝分検出できなかったものと考えられる。いっぽう、下部掘削痕は51～80cmがピークで、若干ばらつくがこれに似る。

他の耕作痕跡のうち、１号は51～60cm、５号は61～70cmと121～140cm、６号は61～70cm、７号は31～70cmにピークが認められる。４号はまったくバラバラである。

ここで注目したいのが、５号の数値である。検出できた条数は６条と少ないがその間隔はきれいに２つのピークに分かれ、なおかつその数値は２倍・２分の１という規則的な関係を呈する。このどちらかを「単回の掘削間隔・１スパン」と見なしてよいだろう。その痕跡残存過程として２つ想定される。単回が61～70cm程度の間隔だったが一部の掘削が浅く121～140cmを呈したか、あるいは121～140cmの間隔で掘削し、次回作業をその中間で行なって一部が61～70cmを呈したか（２回目以降の耕起や畝立てに関しては、前回耕作時の畝頂部に鋤を入れて畝と畝間を逆転させる方法がある）。いずれかは不明である。ただ、１号および６号の数値も非常に似通っており、７号にしても31～50cmも多いものの70cmまでに１つのピークを持つ傾向は同様である。さらに、上記のとおり２号畠跡も51～70cmと同規模であることから、51～70cmもしくは61～70cm程度で一つのスパンという意識は持っていたといえよう。

いっぽうで、４号および７号は広・狭が入り乱れており一様ではない。うち、狭いものの存在は、その原因が複数回の耕起にあると見てよい。広いものについてはさまざまな原因が想起されるが、他遺構の状況から元々２ｍを超える間隔だったとは考えにくい。２号で実施したTo-a上位層厚の推

第26表　耕作痕跡における溝跡の心心間距離

遺構名 / 間隔（cm）	１号	２号掘削痕	２号畝間	３号	４号	５号	６号	７号
21～30	1				2			1
31～40	3	1			1		1	5
41～50	2	1	2		1		1	6
51～60	8	2	3		1			6
61～70	1	2	3		2	2	2	5
71～80		2	1	1	1		1	1
81～90		1	1					
91～100			1		1			
101～110								1
111～120					1			2
121～130		1				2		1
131～140					1	1		1
161～170					1		1	
181～190								1
211～220					1			
291～300								1

定を本遺構付近に当てはめると、現地表面からⅣ層上面までの層厚は約90cmで、土壌の堆積スピードは90cm÷1100年＝１年平均で0.08cm、本遺構の^{14}Ｃ年代測定結果は較正暦年代が56.8％の信頼度で980ＡＤ～1060ＡＤ、38.6％の信頼度で1070ＡＤ～1160ＡＤと出ており、それぞれTo-a降下後約145年または250年までとなることから、0.08cm×145・250年＝11.6・20.0cmと算出される。２号の結果と比較すると２～３倍程度深かった可能性があり、部分的に掘削が及ばなかった可能性は十分にある。

最後に、耕作時期および期間の差について少し述べておく。前述のように年代測定結果の差から、２号と７号には時間的・地点的変遷の可能性がある。低位部に関しては、溝の間隔から６号付近は極めて単回に近く、４・７号付近は複数回耕起したといえ、耕作範囲の変化が看取される。

（丸山）

（４）火葬関連遺構、中世貨幣から…中世の小鳥谷・穴久保・野中

ａ）中世の小鳥谷

野里上遺跡・野中遺跡の位置する一戸町小鳥谷地区では、これまでにも発掘調査を含む調査研究が行われている。以下、本調査以前に行われた中世に関する調査成果をまとめておきたい。

野里上遺跡の南、約1.1kmに位置する仁昌寺Ⅱ遺跡（岩文埋2002）では、堀立柱建物、竪穴建物が検出され、15世紀代の白磁皿、線描き蓮弁文の青磁碗が出土しており、本遺物と同時代の遺跡が存在することが確かめられている。また、小鳥谷地区の南、平糠川左岸に位置する「五月館」は中世城館と推測される遺跡である。平成13年に小鳥谷バイパス関連遺跡として発掘調査（岩文埋2004）が行われているが、城館の主体部と推測される部分から離れた調査範囲であり、明確な中世城館を構成する遺構、遺物は検出されていない。しかし調査区外には明確な堀切や平場が確認され（調査担当者による）、具体的な内容は不明であるものの、中世城館であることは疑いない。内史畧2巻（岩手県立図書館編1973）には、九戸の乱の際に姉帯城に篭城した者の中に「小冶屋攝津」なる人名が記されている。岩手県中世城館分布報告書（岩手県教委1986）では「（五月館は）中世では九戸の乱で姉帯城に篭城した小鳥谷摂津の居館で、別名小鳥谷館ともいわれている」と記される。これらの記述から、五月館が「小鳥谷摂津」の居館であるか否かはともかく、小鳥谷集落における中核的な中世後半の城館である可能性を推定できる。

また、小鳥谷地区には中世の石造物が所在した可能性が指摘されている。一戸町史（一戸町史編纂委員会1982）には、宝篋印塔として「小姓堂神社前畑中墓地」に完全な組み合わせのものが1基と、「小鳥谷小学校側の観音堂境内、紛失、多人数の証言」と記されている。また板碑は、駒木八幡宮入口に種子を有する板碑が所在すると記されているが、「一戸町の石造文化財－その2－」（一戸町教委1985）では「種子の存在を確認し得なかったため参考として掲げるにとどめた」とされている。以上のようにいずれもはっきりしない事例であるため、小鳥谷地域に限定したばあい、現状での評価は困難であるが、同地域の北に隣接する小姓堂神社における宝篋印塔の存在は、少なくとも中世の当該地域に石塔を造立できる階層の者が存在したことを示す。

ｂ）火葬関連遺構について

野里上遺跡において確認された、人間の焼骨片が出土した遺構（ＳＸ05・06・12）およびその近辺に点在する焼土遺構と焼土・炭化物集中（ＳＸ02・03・04・10・11・13・16）については、前述のように15～16世紀前半の火葬関連遺構と推定されるに至った。以下、本項では県内を中心とした類例との比較を行い、改めて本遺構が中世火葬墓の一形態として認識し得るかについて検討し、加えて今後の課題も抽出してみたい。なお、以下では「火葬墓」という名称を焼骨を出土する遺構の総称として

便宜的に用いていることをお断りしておく。

上記の10遺構は、調査区中央部にあたる標高178m前後の東側へ傾斜する緩斜面上に集中している。検出層位はⅣ層上面で、十和田aテフラ堆積層の上位で検出されていることから、放射性炭素年代測定で得られた年代との間にも矛盾は生じない。また、周辺では複数の焼土遺構が検出されている。

県内の中世火葬墓とされている遺構を概観すると、A：焼骨と共に焼土、炭化物が伴い、火葬を主体に行ったと考えられる遺構と、B：焼骨を収拾して埋葬した遺構の２つに大別が可能である（ただし明確な差別化は図れない）。②は、県内例を概観すると「墳墓」を構成する一つの遺構として報告される例が多い。墳墓自体が火葬遺構と埋葬遺構の複合体であると考えられる例（墳館遺跡・岩手県教委 1980など）もあるが、今回は「異なる地点」にて火葬された骨を埋葬した遺構として認識した。本遺跡例は、遺構形態と規模、および炭化物・骨片の出土状態の比較から、Aに該当すると考える。

Aは、盛岡市台太郎遺跡（岩文埋2003）、平泉町本町Ⅱ遺跡（岩文埋2003）、県北部では、八幡平市(旧・安代町)水神遺跡（岩文埋1985）等に報告例がある。これらの特徴として、Ⅰ：大半が不整な掘り方を呈し、平面規模・深さ共に同時期とされる土坑墓より小さい、Ⅱ：埋土中に炭化物が多く混入し、炭化した植物種子、被熱した銭貨が出土する例も多い、Ⅲ：出土する骨はいずれも細片で、頭蓋骨等の主要部を欠く、の３点を挙げることができる。Ⅰに関しては、周囲に存在した適当な窪地を意図的に利用したと考えられる例もある。台太郎遺跡では溝跡の堆積土上部、秋田県大仙市払田柵跡では竪穴住居跡の堆積土上部で検出されている。Ⅰ～Ⅲについて本遺跡例と比較すると、ⅠについてはＳＸ05・06・12いずれも平面形が１m以下の楕円形で深さが20cm以下と浅い点、Ⅱについては埋土に多量の炭化物が混入し、ＳＸ05・06の土壌中からイネ、オオムギ、アワ、ヒエ、キビ、ソバ、オニグルミ、トチノキなどの炭化種子が得られている点、Ⅲについてはすべて細片で特定された部位は肋骨と四肢骨のみである点、というようにそれぞれの項目で類似点が存在する。以上、現時点においては比較対象となる類例遺構自体の少なさは否めないものの、これら事例と多くの類似性を有することから、同一の性格を持つ遺構である可能性が高いといえよう。

今回得られた課題として、焼土・炭化物・骨片廃棄遺構に隣接する焼土遺構との関連性の追求がある。共に火の使用を示す遺構であり、この２つが複合して機能することで一連の葬送空間を形成していた可能性が指摘されよう。管見に触れた範囲の事例であるが、秋田県大仙市払田柵跡では中世とされる火葬墓および焼土遺構群と墳墓が半径10m内の近接した範囲に近接しており、相互の関連性が指摘されている（秋田県教育庁2001）。遺物については、焼骨、銭貨ばかりでなく、共伴した炭化種子も火葬に伴う副葬品と考えられた。炭化種子に関しては本遺跡例も同様の状態を呈していたわけだが、これは本来的な副葬品であるのか、当時の葬送儀礼復元のためには重要な問題であり、複数の事例との詳細な比較、検討が必要である。そのため今後は、野外調査段階で識別可能な遺物・骨片の採取は当然のこと、土壌サンプルの採取と微細遺物の回収と分析にも留意したい。また、遺構規模と出土骨の量と大きさから、これらが主体的な埋葬施設と考えるには疑問が残る。ＳＸ05・06・12は、被葬者にとって終の安息の地であったのだろうか。この問題は、すでに墳館遺跡の報文中でも指摘されてきたところである（岩手県教委1980）。焼土と、焼成された人骨の一部が堆積する浅い土坑とがそれぞれ複数集合している区域。素直に見れば、「荼毘所」と言えまいか。今回はその可能性を指摘し、後は今後の資料増加と分析を待ちたい。

本遺跡の東方約1.6kmに位置する姉帯城では、本遺跡例に類似した墓坑が検出されている（一戸町教委1999）。報文によると、人骨、炭化種子、被熱を受けた銭貨が出土している。ただし、人骨に被熱の痕跡は認められないという。同遺構の年代について、報告者は「九戸の戦い」による城の落城・

廃絶と前後とした16世紀後半とし、その被葬者をその際の戦死者と推定している。成因の特殊性に加え、その構築年代から本遺跡例との関連性についても注目されるものである。

ｃ）中世の銭貨について

中世に流通していたと考えられる銭貨（すべて摸鋳銭）として、野里上遺跡から紹聖元寶（北宋銭・初鋳1094年　以下カッコ内記載方法同様）と洪武通寶（明・1368年）が、野中遺跡から淳熙元寶（南宋・1174年）、洪武通寶に加え、無文銭（輪銭）が出土した。以下、野中遺跡の柱穴と考えられるＢＶ20Ｐ６から、淳熙元寶１枚、洪武通寶１枚、模鋳銭とされる無文銭（輪銭）５枚の計７枚が一括出土した事例に着目し、これを足掛かりに遺跡の年代観・性格等の諸相について考えてみたい。なお、淳熙元寶の出土事例は県南部に多く、埋蔵銭中で多く確認されている。県北部では二戸市金田一での報告例があり、これも埋蔵銭中（81枚中２枚）から確認されたものである（井上1999）。県北部の中世遺跡から多く出土する洪武通寶、永楽通寶に比べると絶対的な流通量の少ない銭である。

柱穴から模鋳銭を含む銭貨が複数枚出土する事例は、県内では軽米町上尾田の館跡（岩文埋1999）、隣県の青森県では青森市浪岡城跡（工藤2001、浪岡町教委2001・2003）で知られる。

16世紀後半代～末期に機能した城館とされる上尾田の館跡では、隣り合う５号竪穴建物跡のＰ１と２号掘立柱建物跡のＰ１の２遺構で銭貨が一括出土した。ここでの出土銭の構成は、前者では祥符元寶（北宋・1008年）１枚、洪武通寶６枚、無文銭３枚の計10枚、後者では天聖元寶（北宋・1023年）１枚、元豊通寶（北宋・1078年）２枚、開元通寶（唐・621年）１枚を含む計５枚であり、共に柱穴掘り方部分からの出土である。前者において洪武通寶が主体に構成される点は、出土銭貨168枚中62点と突出した出土割合を示す調査結果に即しており、洪武通寶と無文銭が共に出土する点は本遺跡例との共通点として挙げられる。当該遺跡の位置する岩手県北地方における洪武通寶と無文銭を含む模鋳銭との関連性の強さについてはすでに先学の指摘があり、その鋳造・流通年代については「16世紀から17世紀前半期」（本澤1998）、「中世後期で16世紀」（阿部2001）とされている。ここでは短絡的な援用は控えるが、銭貨以外に時期決定に足る出土遺物を欠く野中遺跡の年代観に対し、大きな示唆を与えるものであろう。

さて、この「柱穴から銭貨が複数枚出土する」という事象の解釈については、上尾田の館跡、浪岡城跡ともに、地鎮祭祀と関連付けて「埋納」された可能性が指摘されている。ここでは、その目的とともに、選ばれた銭種にも着目したい。野中遺跡では７枚中５枚、上尾田の館跡５号竪穴建物跡Ｐ１では10枚中３枚、模鋳銭の中でも悪銭とされる銭名が読み取れない輪銭が混入している点が注目される。加えて、浪岡城跡では２例中２例とも模鋳銭とされる輪銭のみがそれぞれ11枚（前掲2001）、８枚（前掲2003）の出土である。類例が少なく推論の域を出ないが、銭貨を柱穴に埋める「埋納」という行為と輪銭を含む模鋳銭の間には何らかの関連性があるように思える。粗悪な模鋳銭である輪銭が貨幣経済を担う銭貨として流通していたかについては議論する必要も指摘されている（永井2001）。

以上、岩手県北地方における洪武通寶と模鋳銭の様相から本事象について検討したが、上尾田の館跡２号掘立柱建物跡は、５号竪穴建物跡と「連結することは確実」（前掲）とされるほど近接し、関連の強さが指摘されているものの、こちらは洪武通寶や確実な模鋳銭を含んでいない。このように、様相が一様で無いことも事実である。以上の点に留意しつつ、さらなる類例の増加を待って再度異なる視座から検討が加えられる必要があろう。

（荒谷）

引用・参考文献

阿部勝則　2001　「岩手県北の模鋳銭」『中世の出土模鋳銭』東北中世考古学叢書１　東北中世考古学会

井上雅孝　1999　「岩手県の出土貨幣」『東北地方の中世出土貨幣－東北中世考古学会第５回研究集会資料集－』　東北中世考古学会

宇部則保　1989　「青森県における７・８世紀の土師器―馬淵川下流域を中心として―」北海道考古学第25輯

宇部則保　1997　「７・８世紀の沈線文土師器」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会1997年度秋田大会

宇部則保　2000　「古代東北地方北部の沈線文のある土師器」『考古学ジャーナル』462

宇部則保　2002　「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古希を祝う会

大野亨　2001　「Ｖ．考察」『酒美平遺跡Ⅱ発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第88集

大野亨　2002　「Ｖ．考察」『盲堤沢(３)遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第92集

工藤清泰　2001　「青森県浪岡城跡の模鋳銭」『中世の出土模鋳銭』東北中世考古学叢書１　東北中世考古学会

高橋與右衛門　1997　「岩手県内の北海道系土師器」『蝦夷・律令国家・日本海』日本考古学協会1997年度秋田大会

永井久美男　2001　「模鋳銭の全国的様相」『中世の出土模鋳銭』東北中世考古学叢書１　東北中世考古学会

日本考古学協会　2000　『はたけの考古学』日本考古学協会2000年度鹿児島大会実行委員会編

能登健・中村直美・菊池貴広　2000　「十和田ａ火山灰による災害と復旧」『紀要』ＸⅨ（財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

能登健・中村直美・菊池貴広　2001　「十和田ａ火山灰による災害と復旧(２)」『紀要』ＸＸ（財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

本澤慎輔　1998　「東北地方に分布する鋳写しビタ銭について」『紀要』ⅩⅧ（財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

三浦圭介　1991　「本州の擦文文化」『考古学ジャーナル』341

秋田県教育委員会　1980　『鵜沼城跡・片符沢遺跡Ⅱ・中田面遺跡発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第69集

秋田県教育委員会　2005　『薬師遺跡』秋田県文化財調査報告書第388集

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所　2001　『払田柵跡　第117・118次調査概要』秋田県文化財調査報告書第323集

青森県立郷土館　1997　『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第40集 考古-11

一戸町教育委員会　1981　『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』一戸町文化財調査報告書第１集

一戸町教育委員会　1982　『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』一戸町文化財調査報告書第２集

一戸町教育委員会　1984　『上野遺跡―昭和58年度発掘調査報告書―』一戸町文化財調査報告書第７集

一戸町教育委員会　1985　『一戸町の石造文化財－その２－』一戸町文化財調査報告書第10集

一戸町教育委員会　1987　『上野遺跡・一戸城跡―昭和61年度一戸遺跡群発掘調査報告書』一戸町文化財調査報告書第18集

一戸町教育委員会　1999　『小井田Ｖ遺跡』一戸町文化財調査報告書第40集

一戸町教育委員会　1999　『姉帯城跡』一戸町文化財調査報告書第41集

一戸町史編纂委員会　1982　『一戸町史』上巻

岩手県教育委員会　1980　『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』第52集

岩手県教育委員会　1986　『岩手県中世城館跡分布調査報告書』

岩手県立博物館編　1973　『内史畧（１）』岩手史叢第１巻　77頁

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1985　『水神遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書（以下、「岩文埋調報」と略称）第96集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1999　『上尾田の館跡発掘調査報告書』岩文埋調報第300集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2000　『大向上平遺跡発掘調査報告書』岩文埋調報第335集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2001　『上野遺跡発掘調査報告書』岩文埋調報第359集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002　『大向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩文埋調報第387集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2002　『仁昌寺Ⅱ遺跡・仁昌寺遺跡発掘調査報告書』岩文埋調報第400集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2003　『本町Ⅱ遺跡　第二次発掘調査報告書』岩文埋調報第410集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2003　『台太郎遺跡　第23次発掘調査報告書』岩文埋調報第415集

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2004　『五月館跡・仁昌寺Ⅲ遺跡発掘調査報告書』岩文埋調報第424集

仙台市教育委員会　1995　『下ノ内浦遺跡　第５次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第202集

仙台市教育委員会　2000　『沼向遺跡　第１～３次調査』仙台市文化財調査報告書第241集

浪岡町教育委員会　2001　『平成12年度　浪岡町文化財紀要』Ⅰ

浪岡町教育委員会　2003　『平成14年度　浪岡町文化財紀要』Ⅲ

写　真　図　版

写真図版凡例

1．野外調査写真は縮尺不定である。
2．遺物写真については縮尺を揃えるよう努めたが、厳密ではなくあくまでも概数である。各遺物種別ごとの縮尺概数は下記のとおりである。

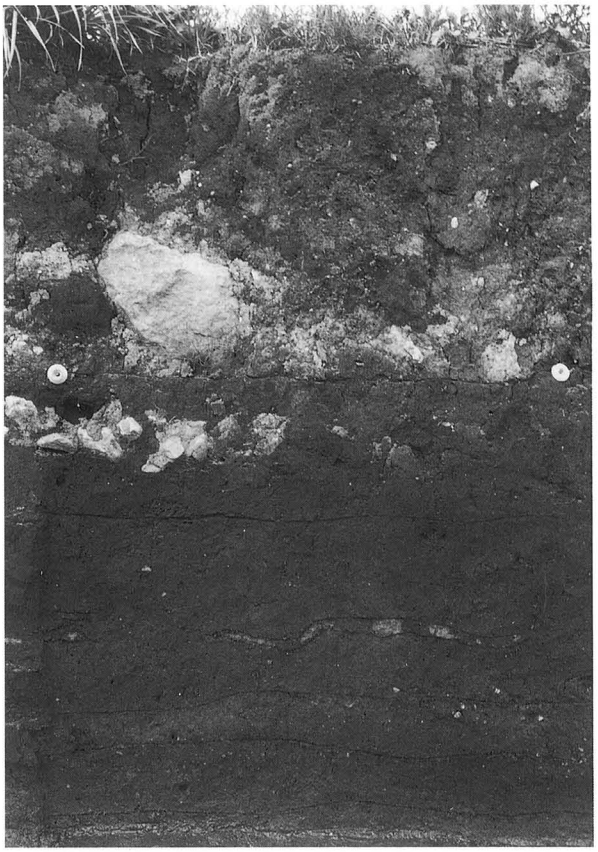
縄文土器・・・・・・・・・・1/3
剥片石器および石核・・・・・2/3
土師器・・・・・・・・・・・1/3
鉄製品・・・・・・・・・・・1/2
木製品・・・・・・・・・・・1/6
銭貨・・・・・・・・・・・・1/1

調査前風景（南西から）

基本土層Ｂ（南から）

基本土層Ｃ（南から）

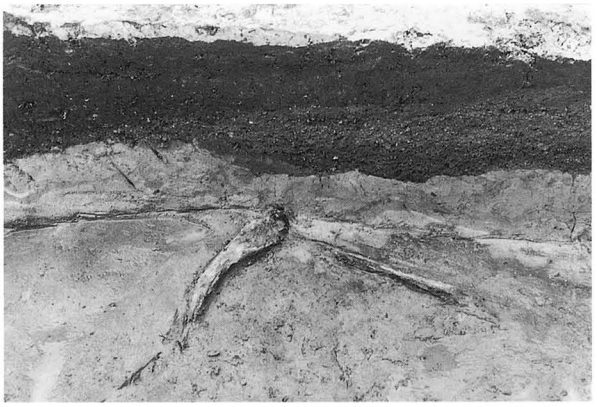
写真図版１　調査前風景、基本土層（１）



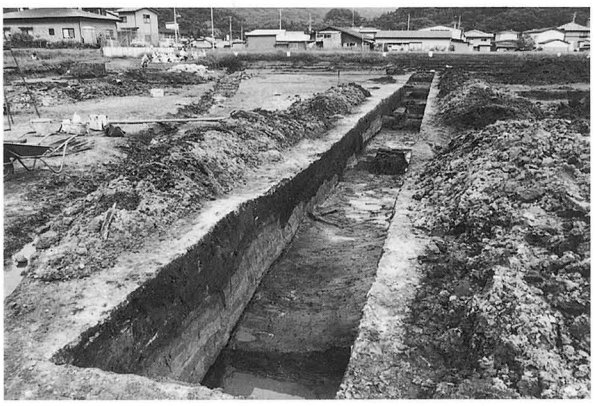
基本土層Ａ（南から）

植物珪酸体分析試料採取土層Ａ（北から）

基本土層Ｄ（南から）

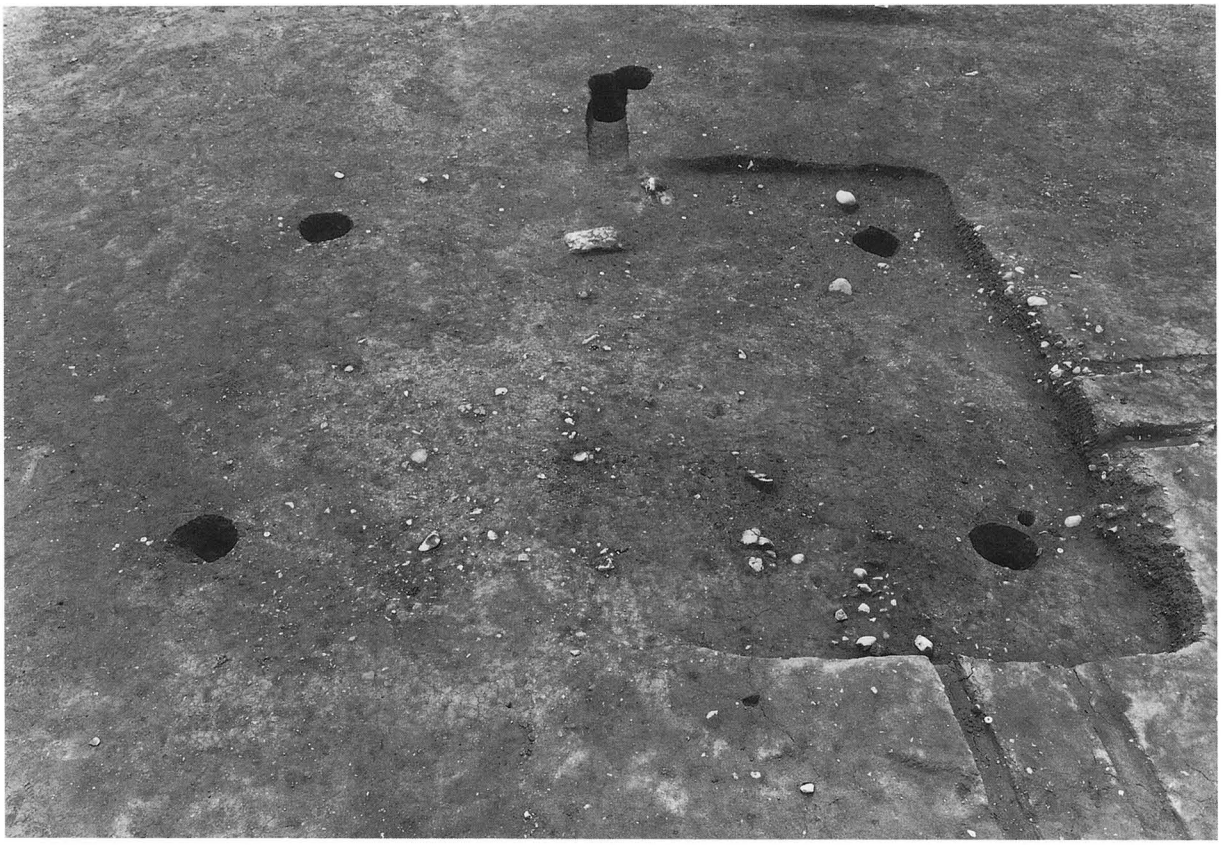


低湿地試掘トレンチＸⅢ　植物遺体出土状況（南から）

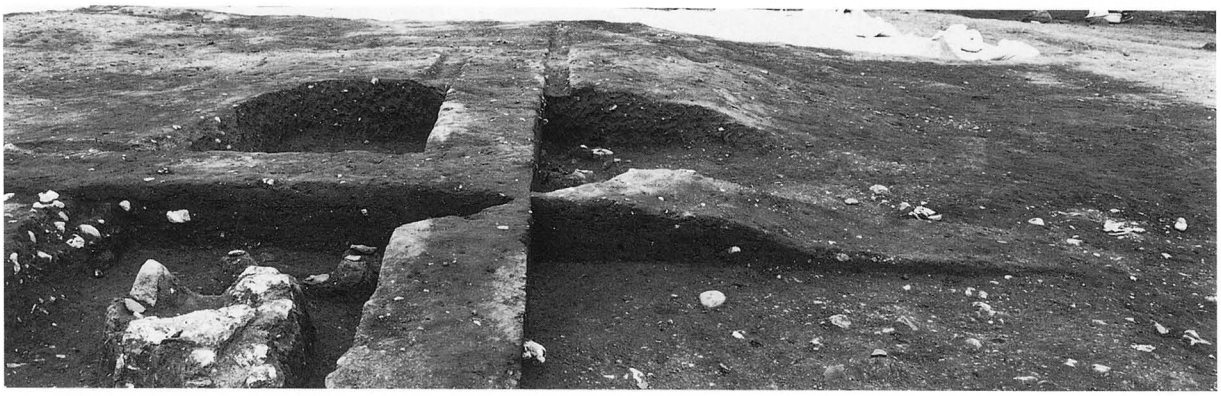


低湿地試掘トレンチＸⅢ　全景（西から）

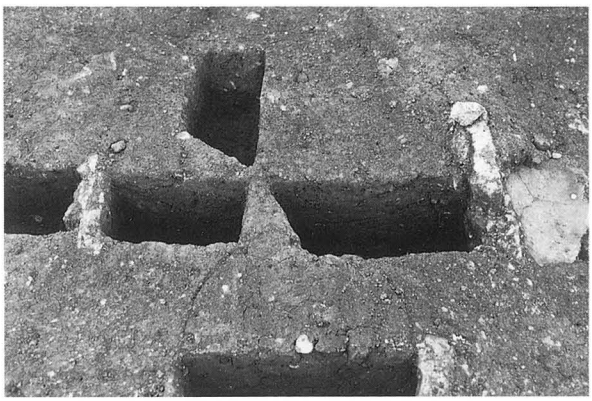
写真図版２　基本土層（２）



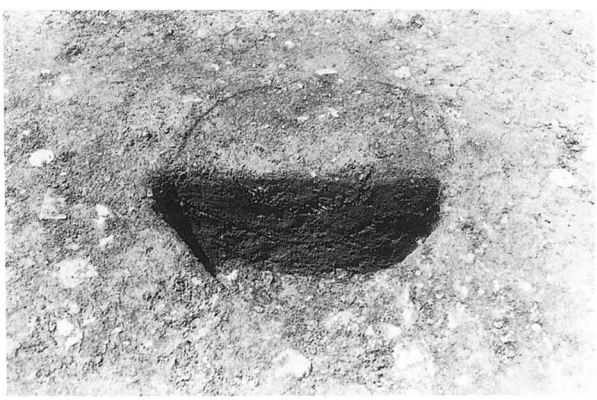
平面（東から）



断面Ａ－Ａ’（西から）

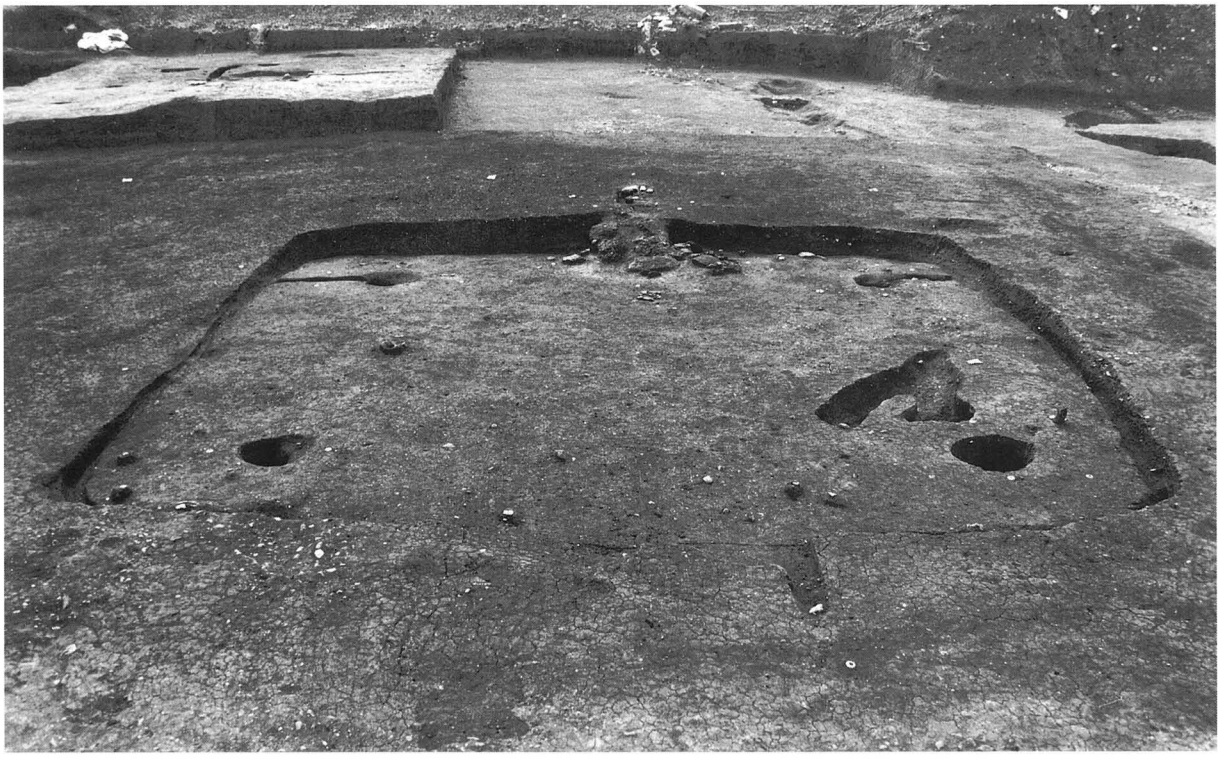


カマド断面ｆ－ｆ’（東から）

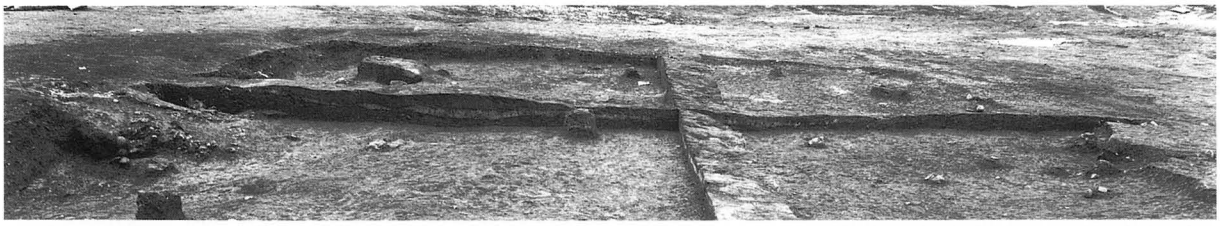


ｐｉｔ１断面（東から）

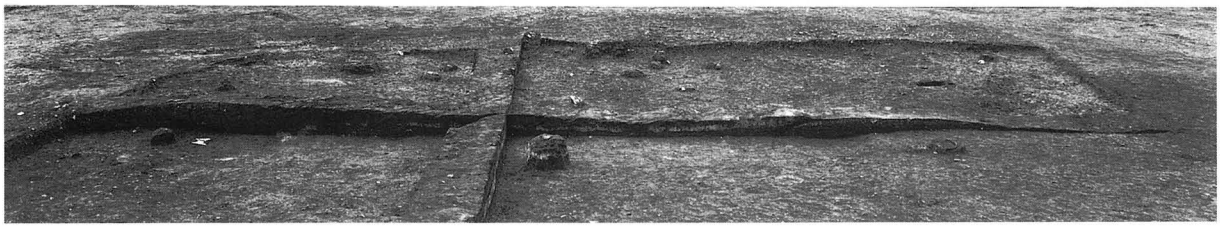
写真図版３　ＳＩ01



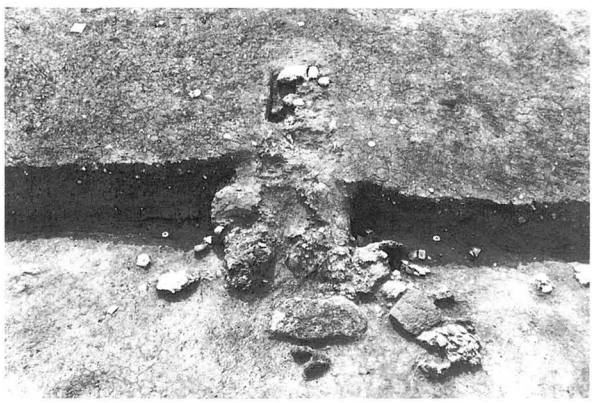
平面（東から）



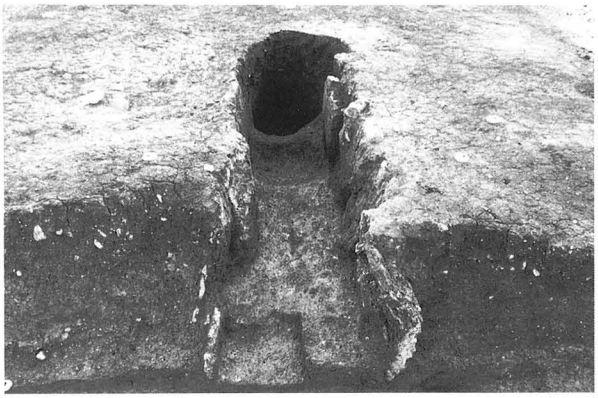
断面Ａ－Ａ’（南から）



断面Ｂ－Ｂ’（西から）

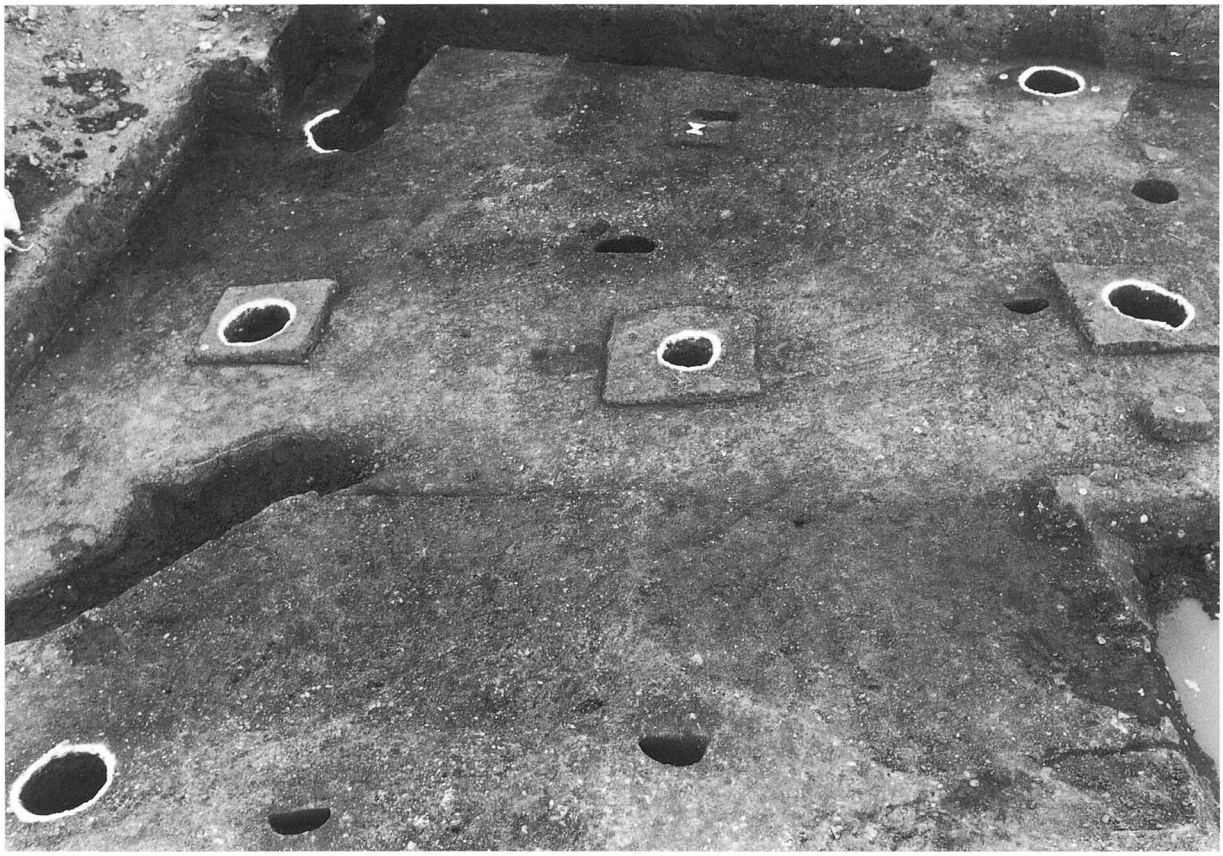


カマド平面（東から）

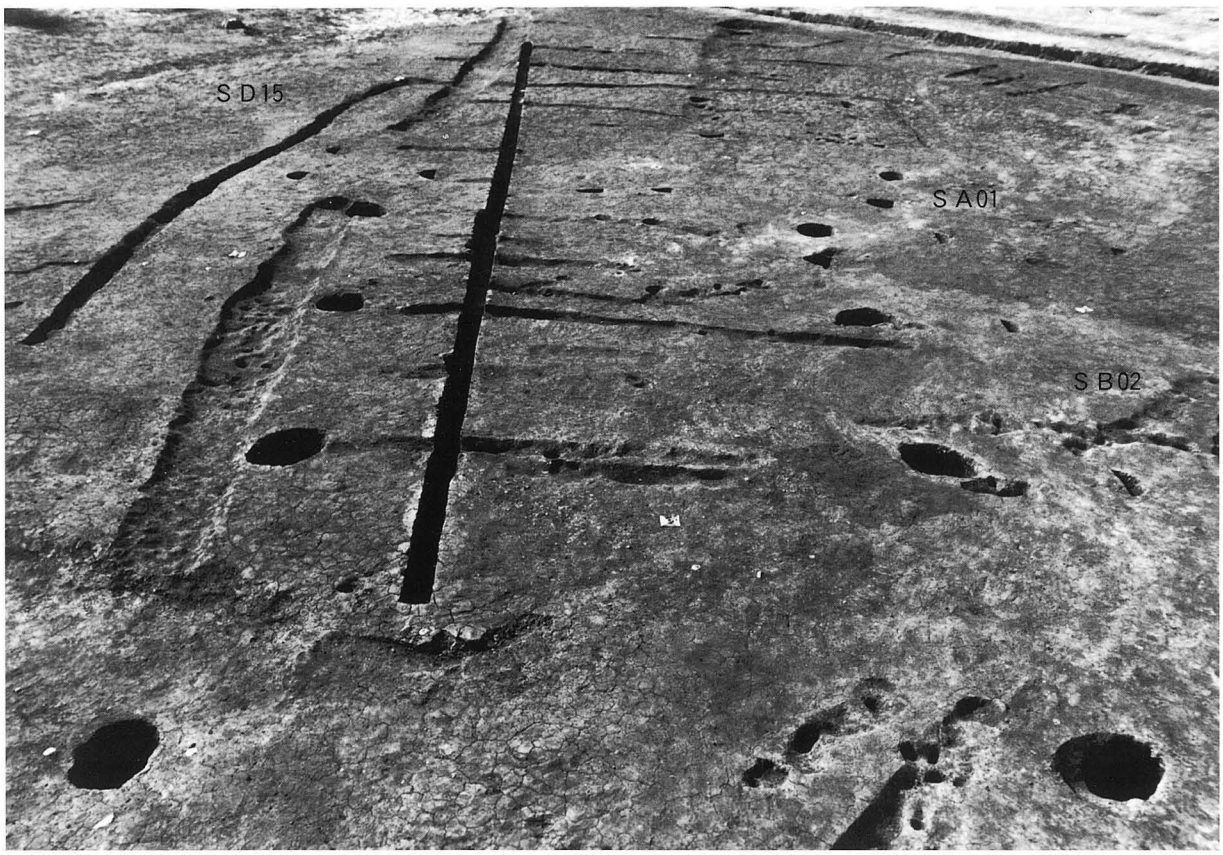


煙道構築礫設置状況（東から）

写真図版４　ＳＩ02

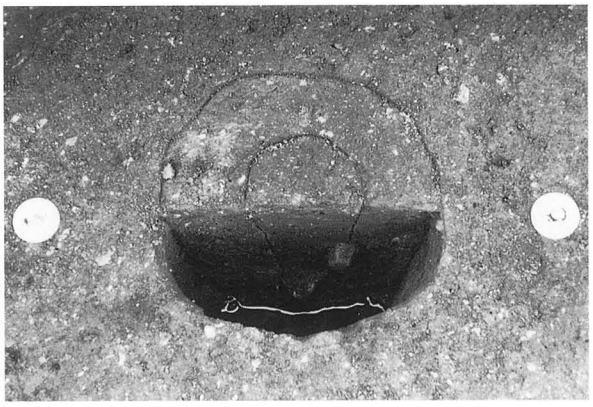


ＳＢ01　平面（北から）

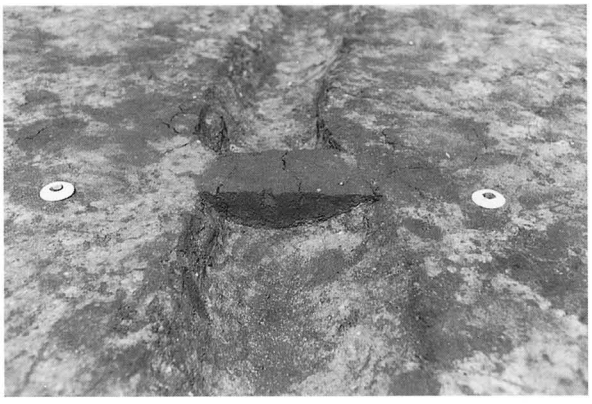


ＳＢ02、ＳＡ01、ＳＤ15　平面（南東から）

写真図版５　ＳＢ01・02、ＳＡ01、ＳＤ15



ＳＢ01Ｐ２断面（北から）

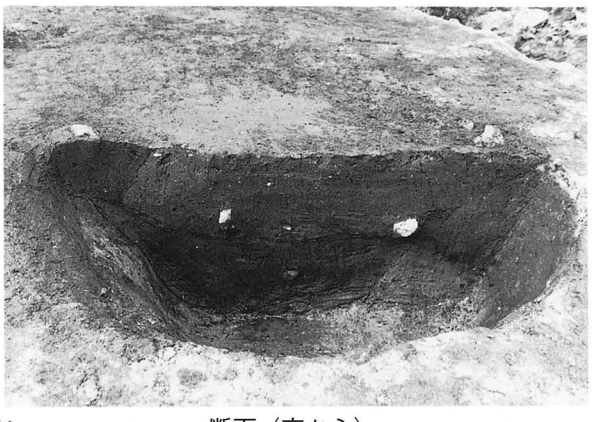


ＳＤ15断面（南東から）

ＳＢ02Ｐ６断面（北東から）

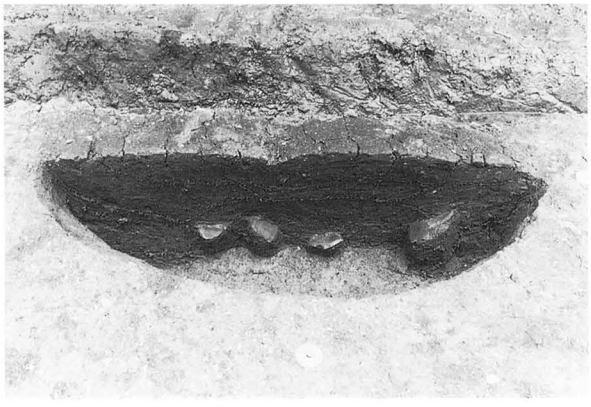
ＳＢ02Ｐ８断面（北東から）

平面（南から）



ＳＫ01　断面（南から）

平面（南から）



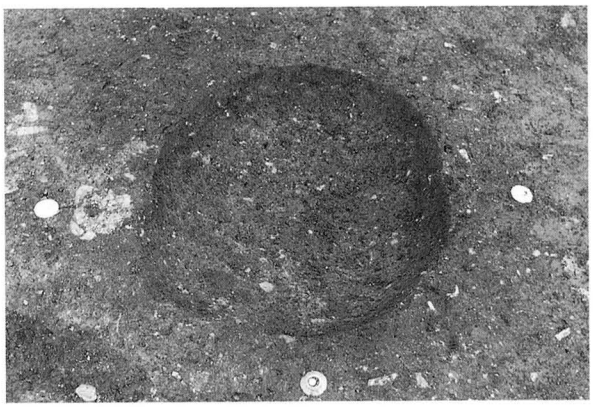
ＳＫ02　断面（南から）

写真図版６　ＳＢ01・02、ＳＤ15、ＳＫ01・02

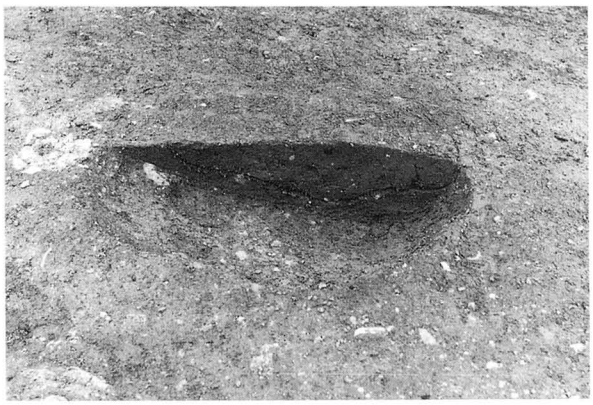
平面（西から）

断面（東から）

ＳＫ03



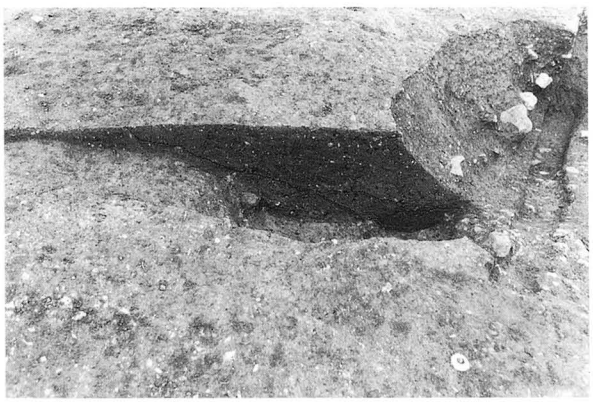
平面（東から）



断面（東から）

ＳＫ04

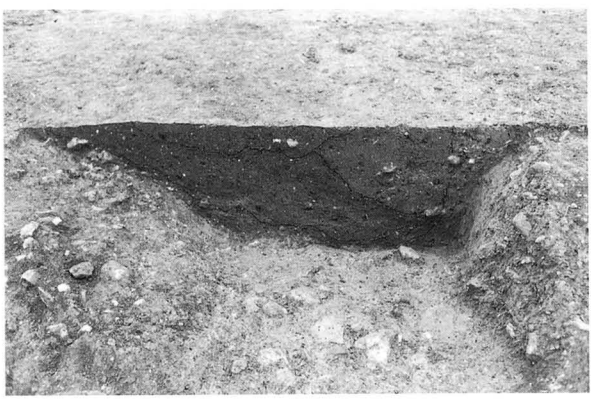
平面（南東から）



断面（南東から）

ＳＫ05

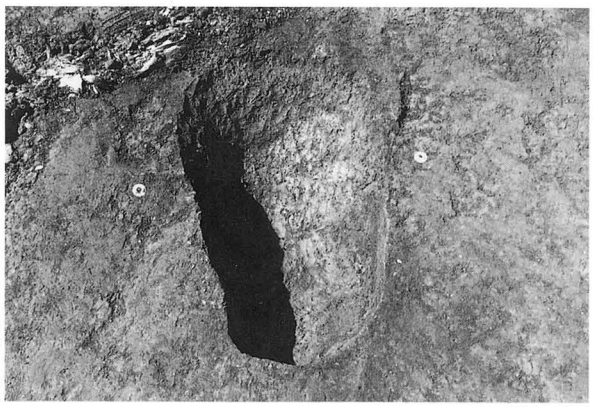
平面（北東から）



断面（北東から）

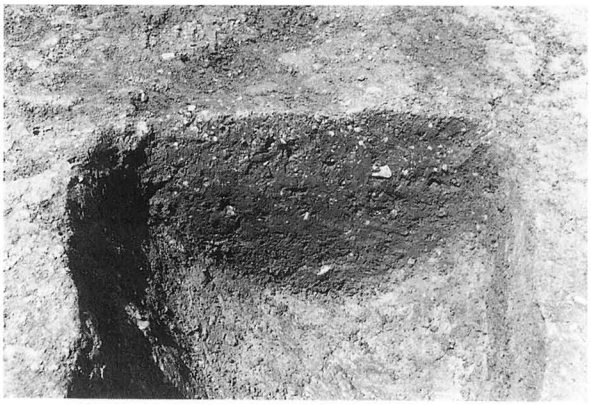
ＳＫ06

写真図版７　ＳＫ03～06



平面（南東から）

ＳＫ07



断面（南東から）

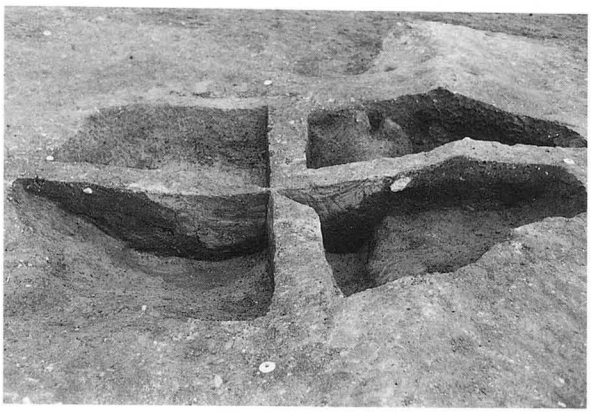
平面（北東から）

ＳＫ08

断面（南から）

平面（南東から）

ＳＫ09



断面Ａ－Ａ’（南東から）

平面（南から）

ＳＫ10

木製品等出土状況（西から）

写真図版８　ＳＫ07～10

完掘（東から）

検出（東から）

断面Ａ－Ａ’部分（東から）

Ｔｏ－ａ検出状況（南端・南から）

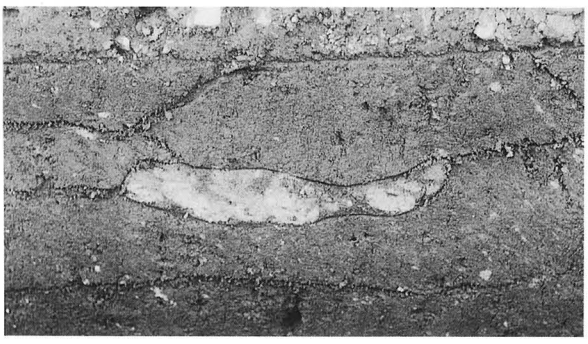
写真図版９　１号耕作痕跡

完掘（東から）

検出（東から）

断面Ａ－Ａ’（東から）

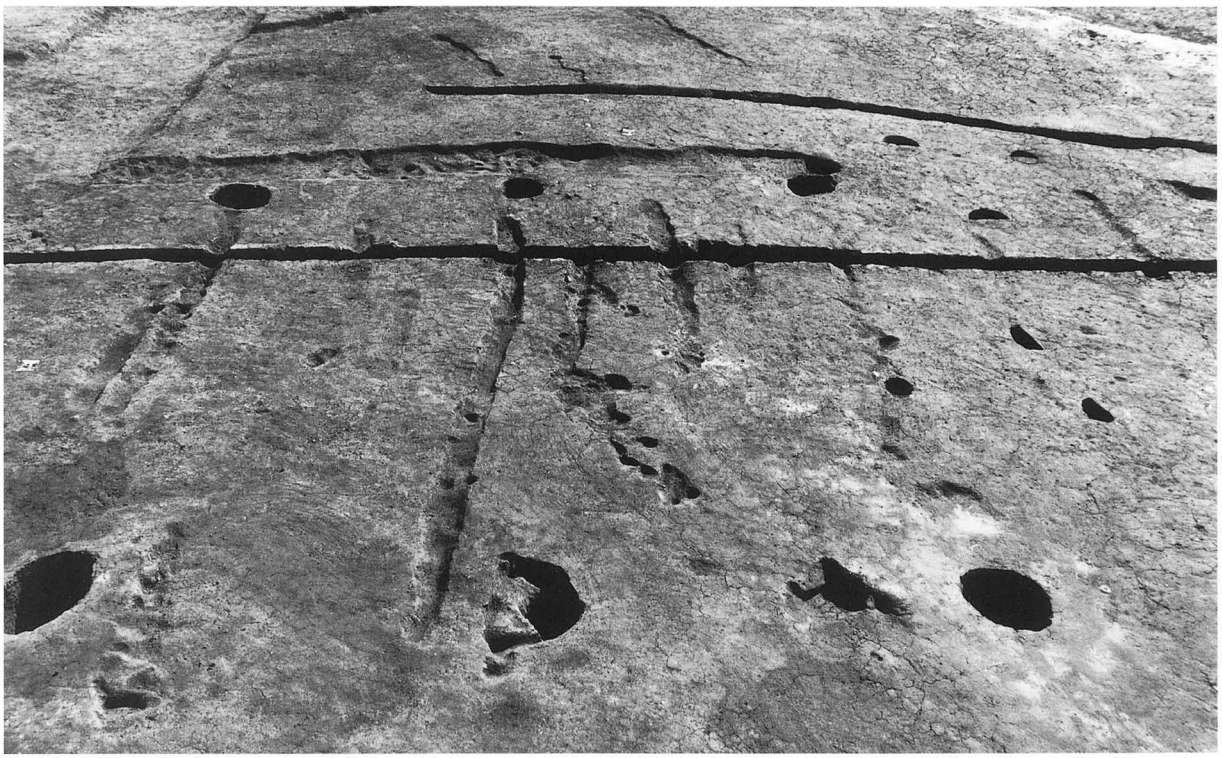
断面Ａ－Ａ’中央部分（東から）



14層Ｔｏ－ａ近写（東から）

写真図版10　２号耕作痕跡

3号耕作痕跡　断面（南から）



4号耕作痕跡　完掘（北東から）

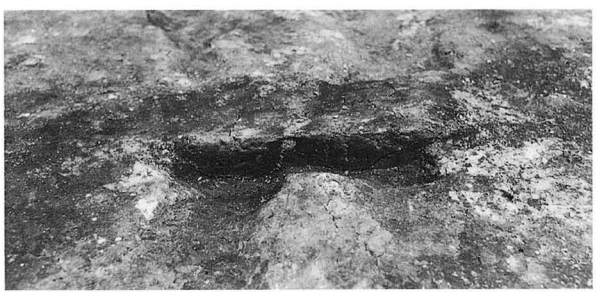
4号耕作痕跡　断面中央部分（南西から）

写真図版11　3号・4号耕作痕跡

5号耕作痕跡　完掘（南から）

5号耕作痕跡　断面（南から）

7号耕作痕跡　完掘（北から）



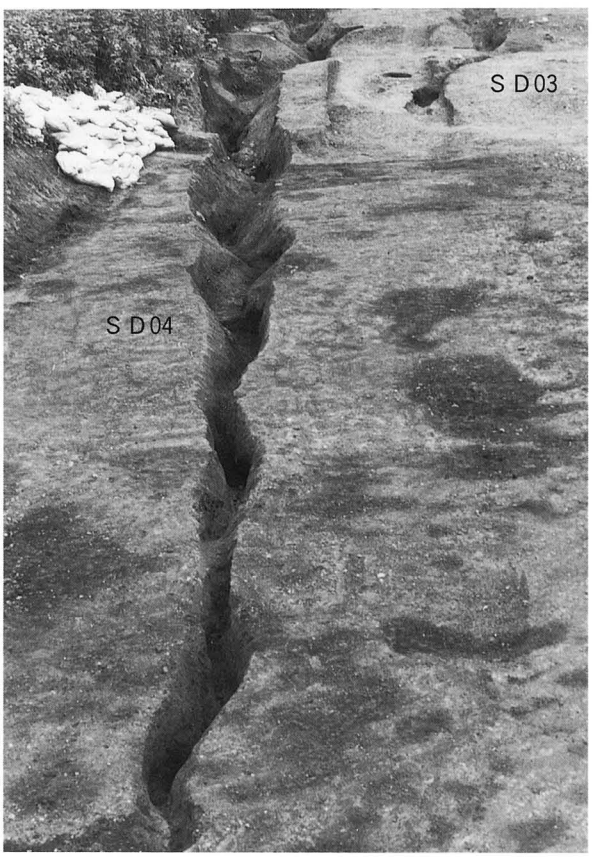
7号耕作痕跡　断面（南から）

写真図版12　5号・7号耕作痕跡

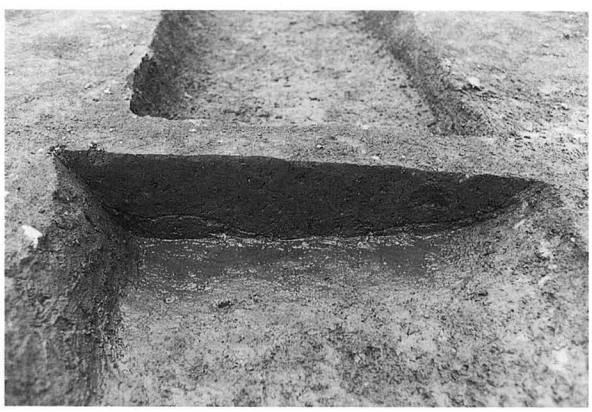
ＳＤ01・02　平面（南から）

ＳＤ02　拡張分平面（南から）

ＳＤ01　断面Ａ－Ａ’（南から）



ＳＤ03・04　平面（東から）



ＳＤ02　断面Ａ－Ａ’（南から）

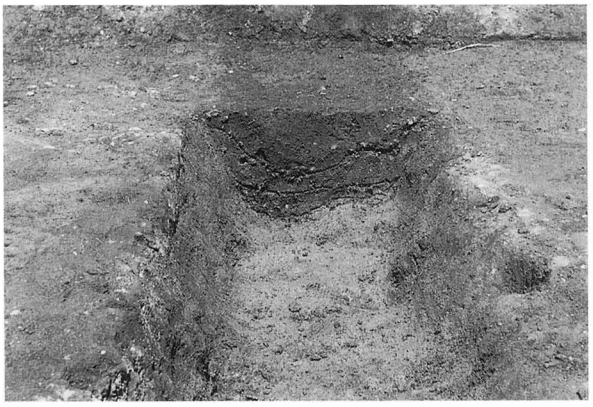
ＳＤ03　断面（東から）

写真図版13　ＳＤ01～04

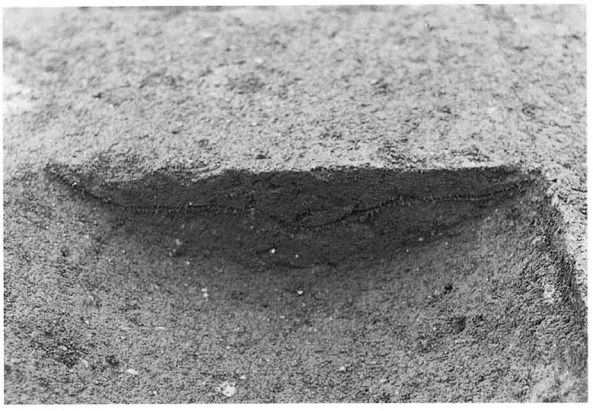
ＳＤ04　断面（東から）

ＳＤ07～09　平面（南から）

ＳＤ05・06　平面（南西から）



ＳＤ07　断面Ａ－Ａ’（南から）



ＳＤ05　断面（北から）

ＳＤ08・09　断面（南から）

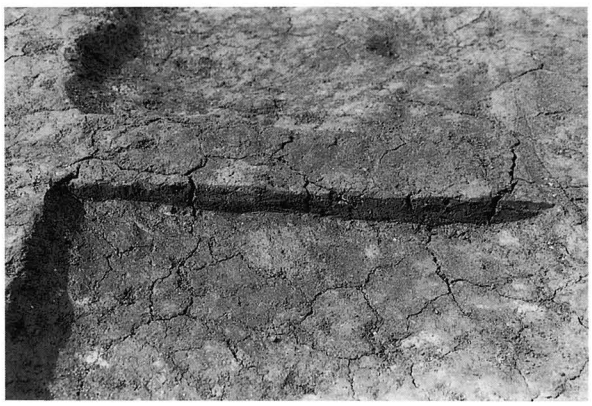
ＳＤ06　断面（南東から）

ＳＤ07　工具痕検出状況（南から）

写真図版14　ＳＤ04～09

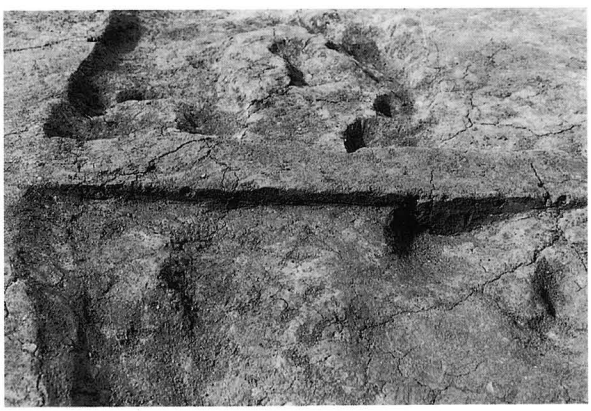
ＳＤ10・11　平面（南から）

ＳＤ12・13　平面（南東から）

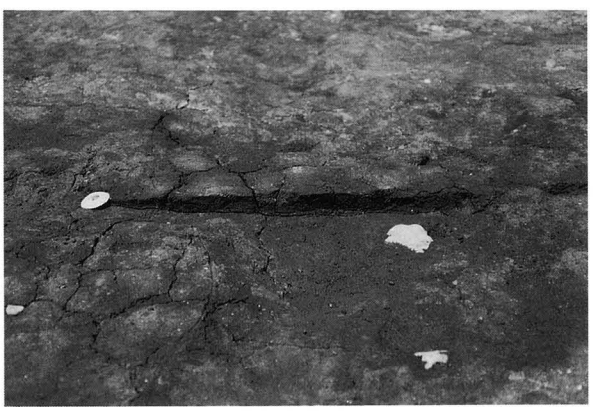


ＳＤ10　断面Ａ－Ａ’（南から）

ＳＤ12　断面Ｃ－Ｃ’（南東から）



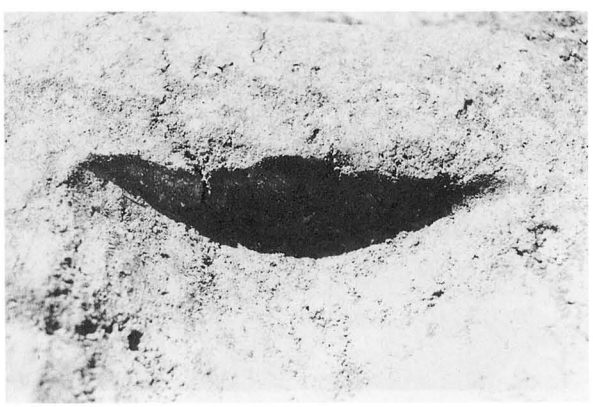
ＳＤ11　断面Ａ－Ａ’（南から）



ＳＤ13　断面（南東から）

平面（東から）

ＳＤ14

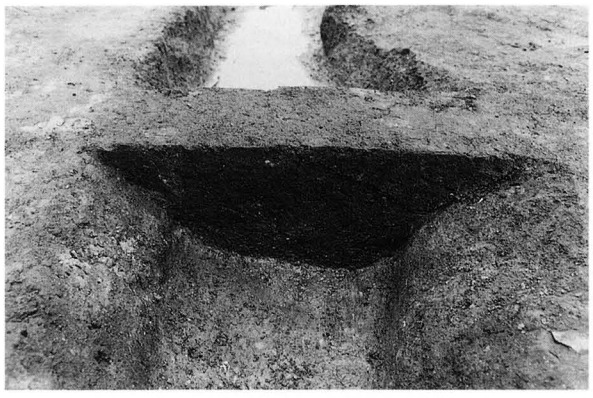


断面（東から）

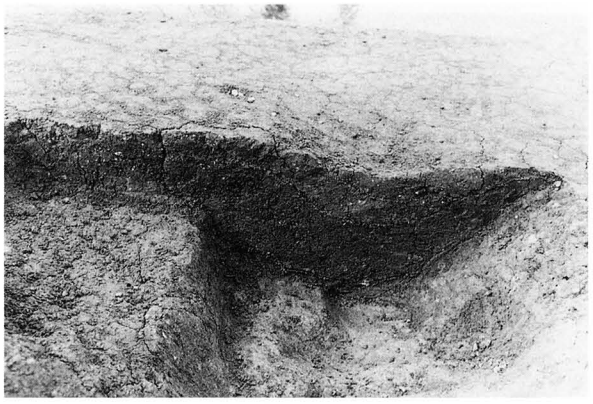
写真図版15　ＳＤ10～14

ＳＤ16　平面（南から）

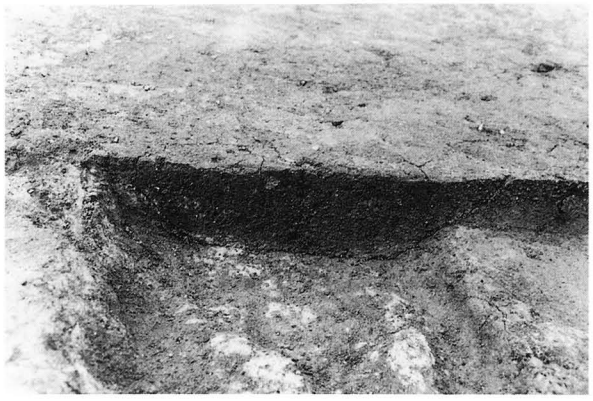
ＳＤ17　平面（南から）



ＳＤ16　断面（南から）

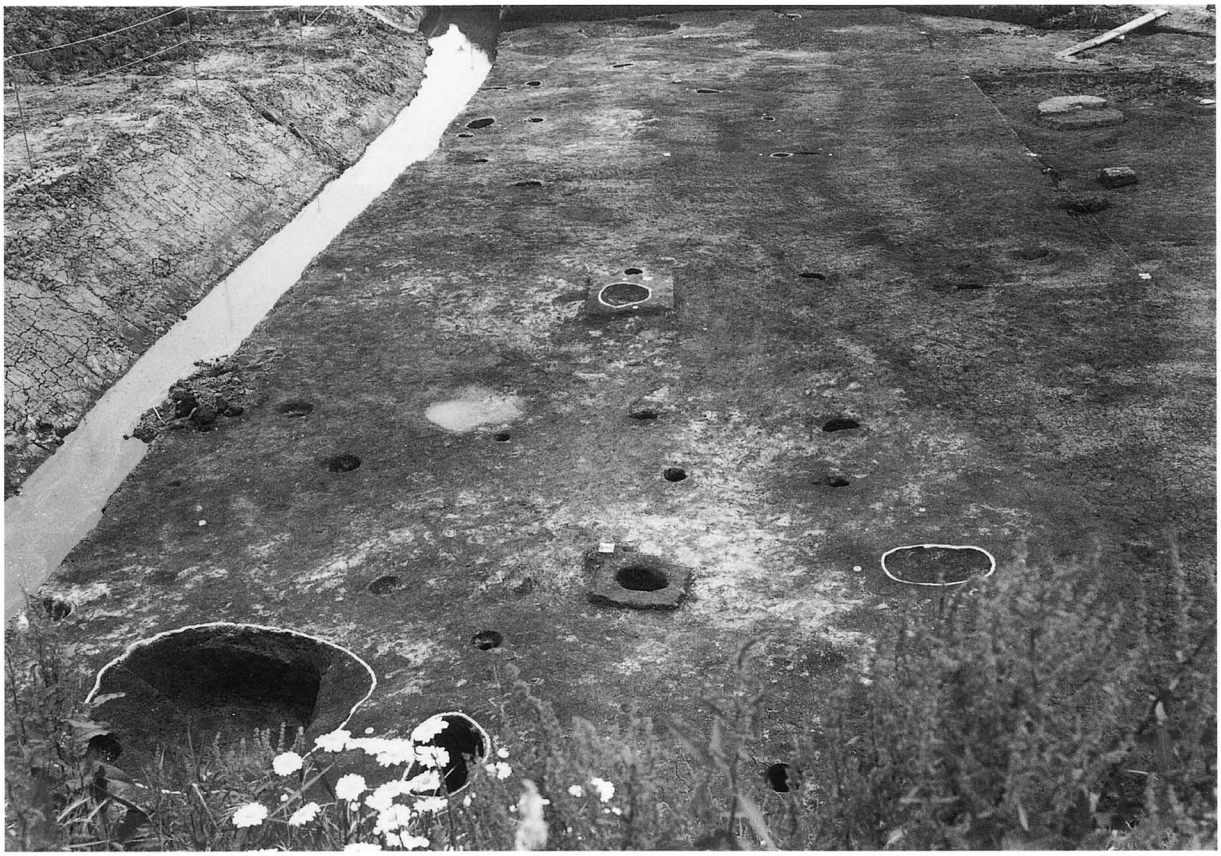


ＳＤ17　断面Ｂ－Ｂ’（南から）

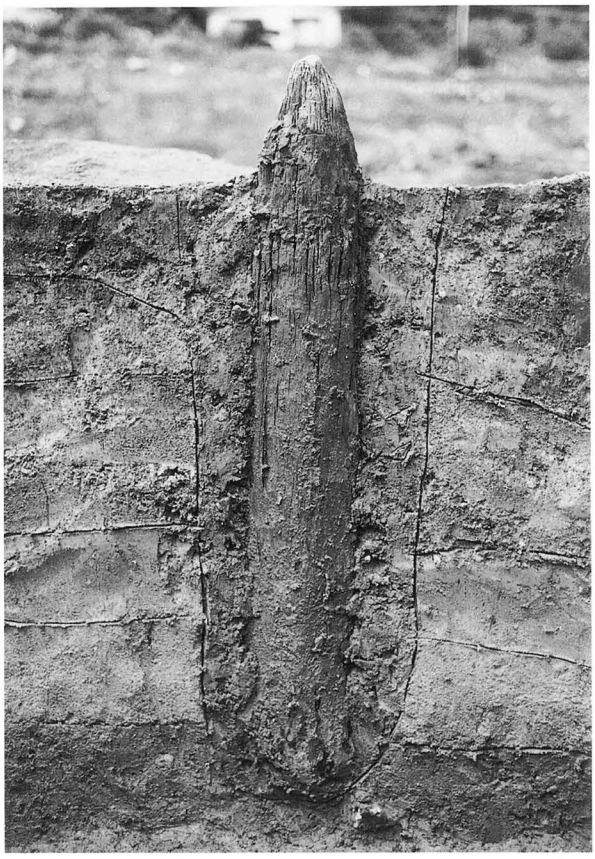


ＳＤ18　断面（南東から）

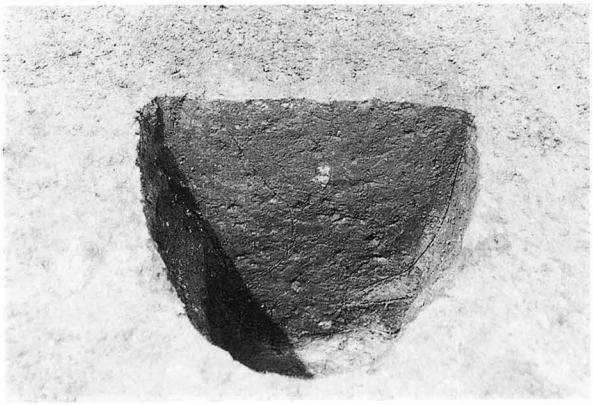
写真図版16　ＳＤ16～18



柱穴状土杭第２群　平面（北から）



K Ⅲ30Ｐ２　断面（東から）



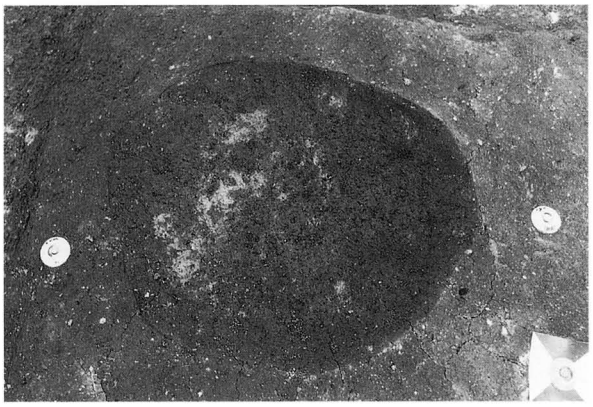
K Ⅳ01Ｐ２　断面（南から）

K Ⅲ60杭　断面（北から）

写真図版17　柱穴状土杭群

周辺断面　A－A’（北から）

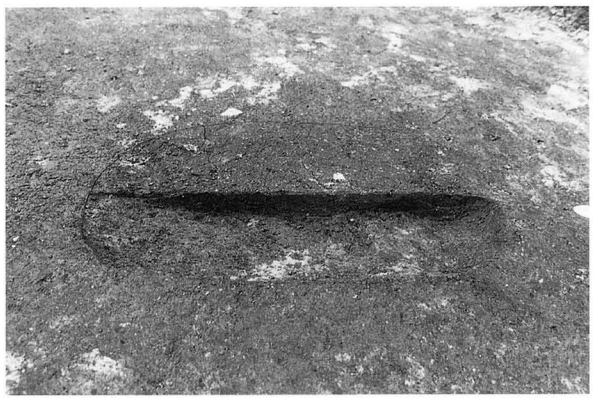
ＳＸ01　平面・断面（北から）



平面（西から）

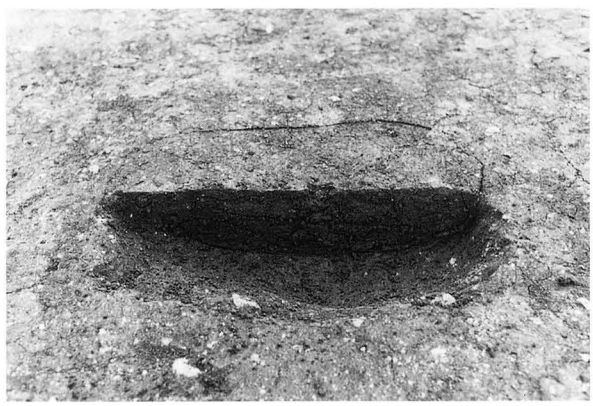
ＳＸ05　断面（西から）

平面（南から）



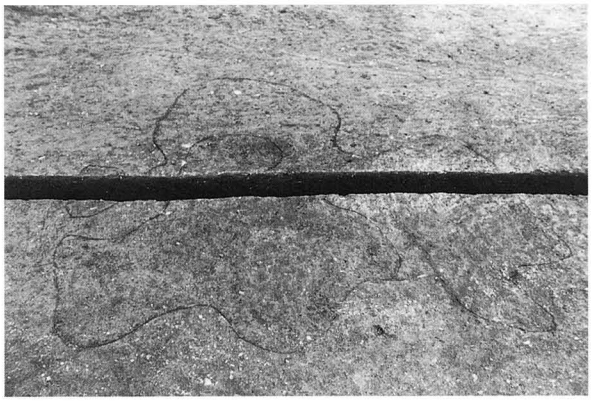
ＳＸ06　断面（南から）

ＳＸ05　検出（南から）

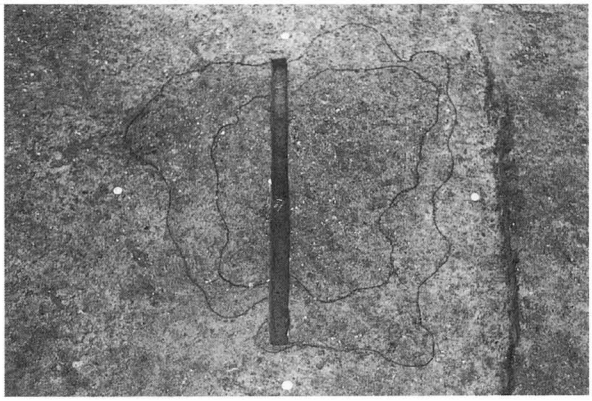


ＳＸ07　断面（東から）

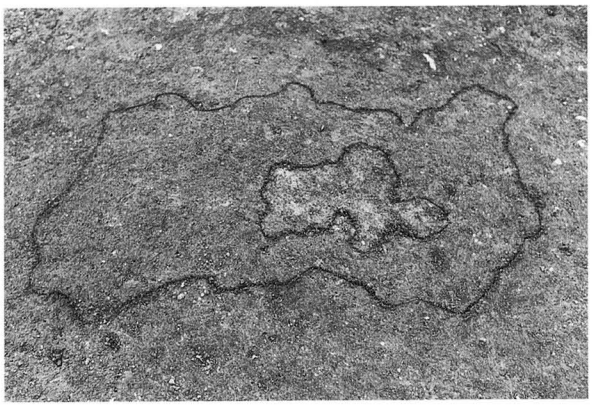
写真図版18　ＳＸ01～07



ＳＸ08　平面（東から）

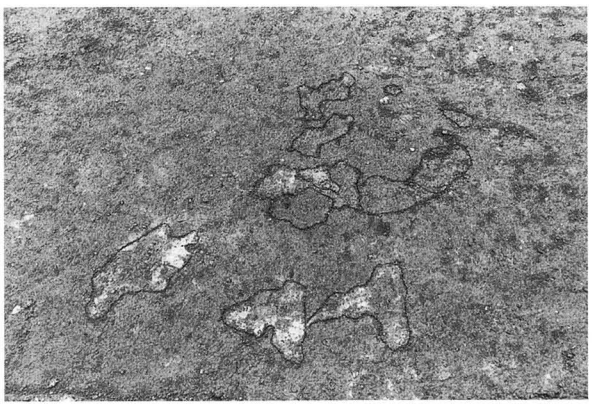


ＳＸ09　平面（北東から）

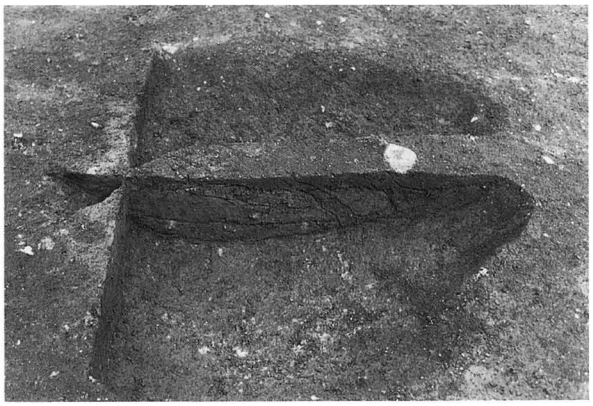


検出（北西から）

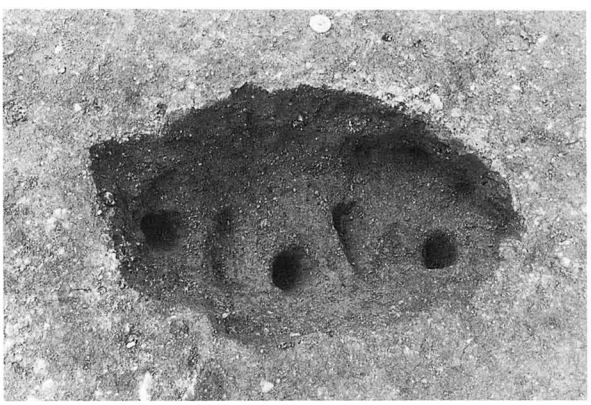
ＳＸ10　断面Ｂ－Ｂ’（南西から）



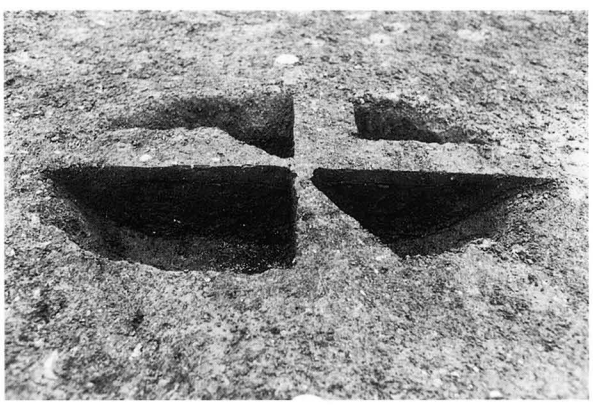
検出（北から）



ＳＸ11　断面Ａ－Ａ’（北西から）



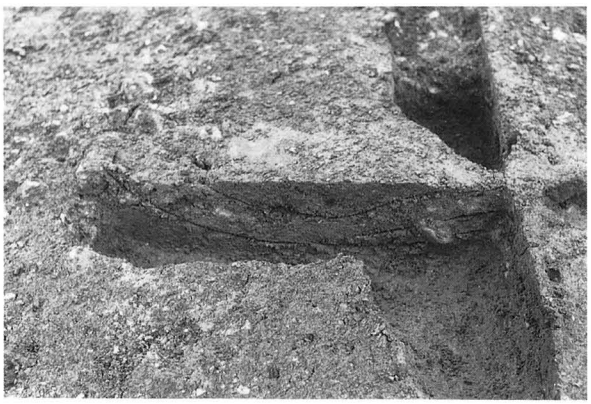
完掘（南西から）



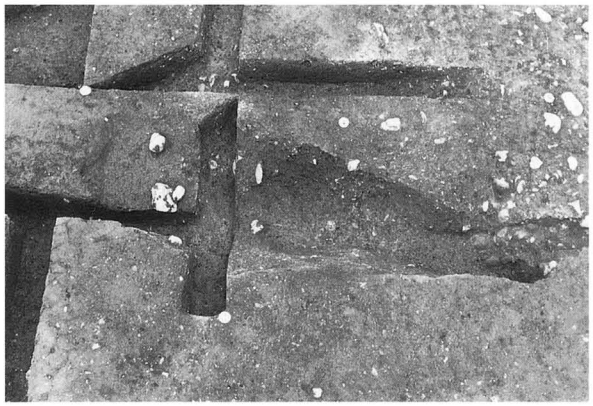
ＳＸ12　断面Ａ－Ａ’（南東から）

写真図版19　ＳＸ08～12

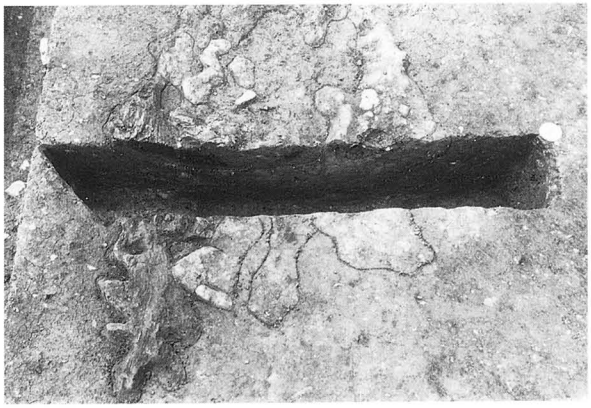
検出（南東から）



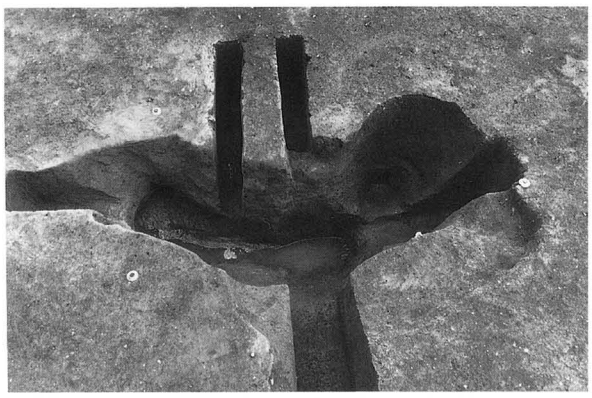
ＳＸ13　断面Ａ－Ａ’（北東から）



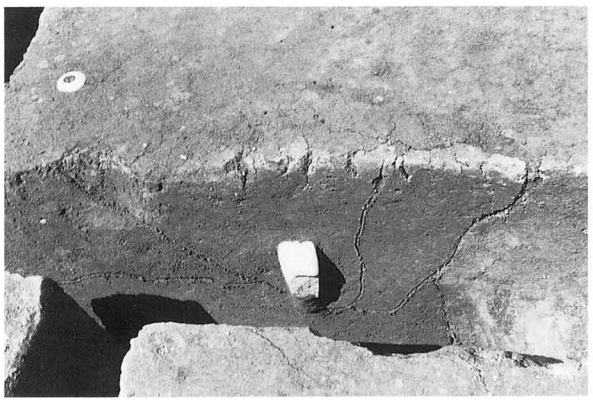
平面（北から）



ＳＸ14　断面Ａ－Ａ’（東から）

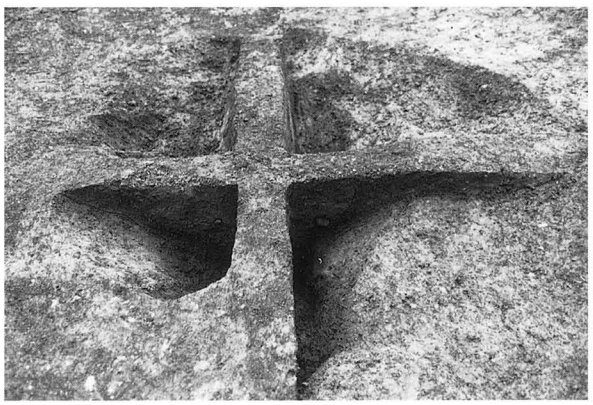


平面（北から）



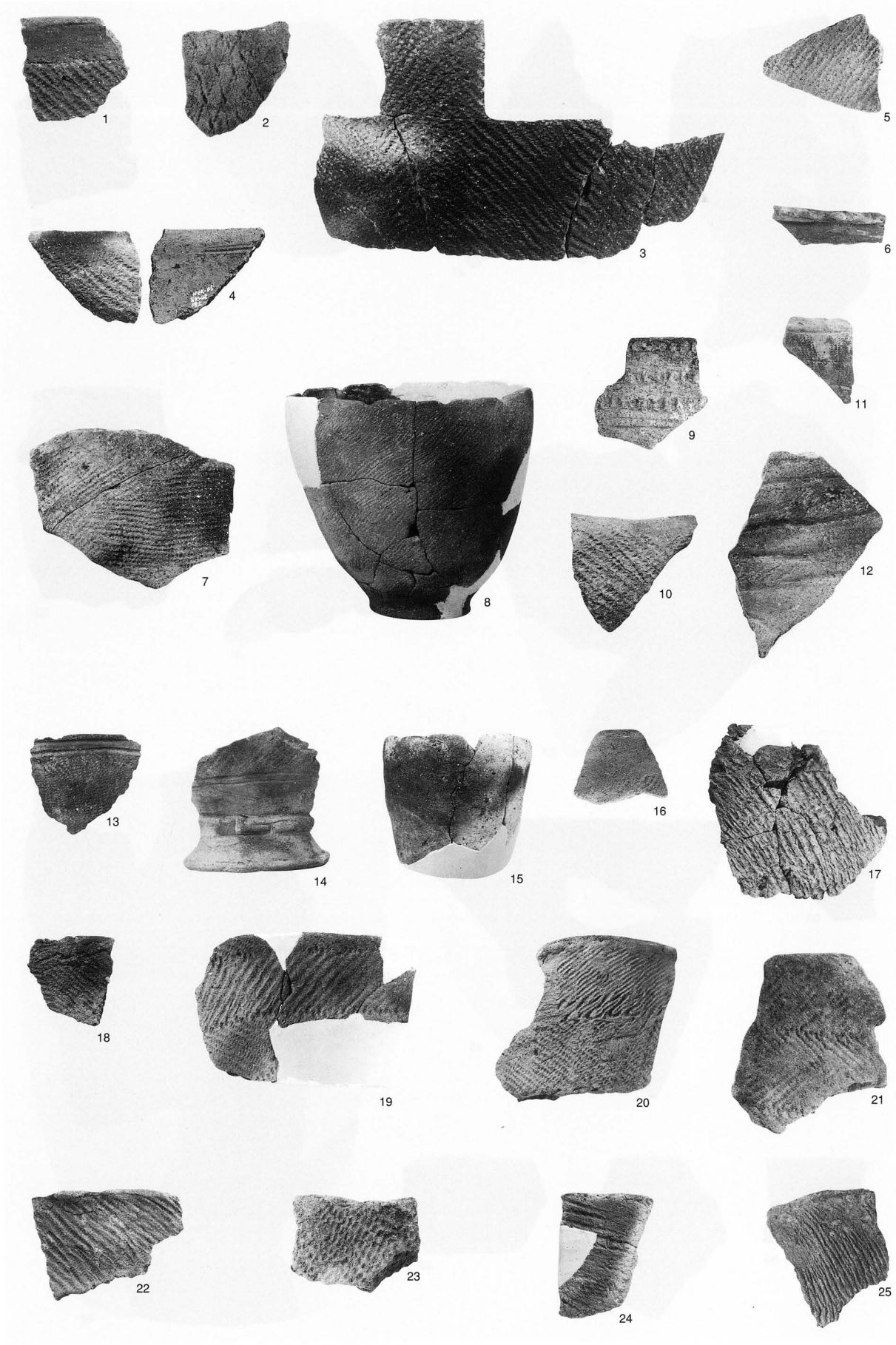
ＳＸ15　断面（南から）

平面（南西から）

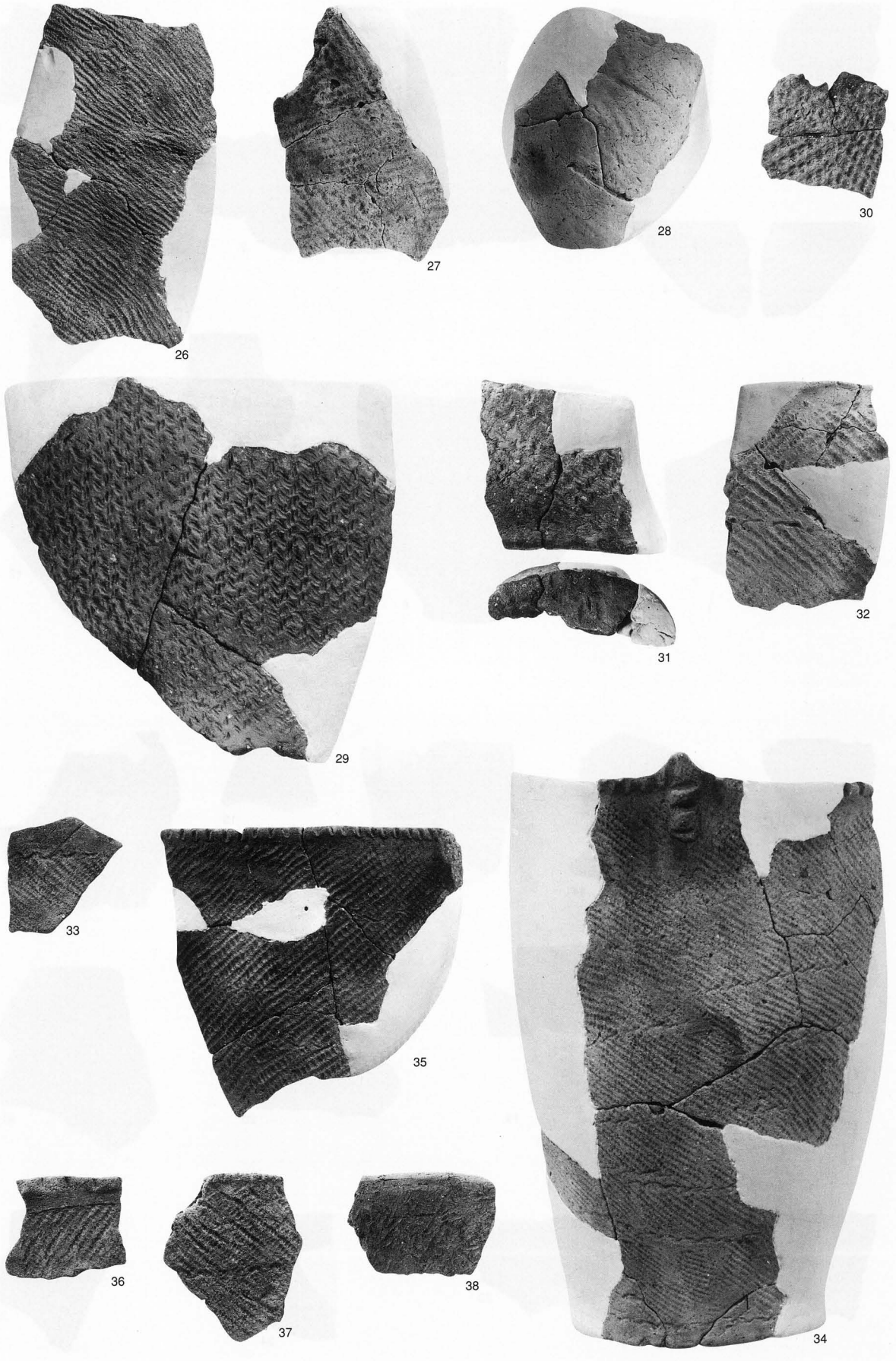


ＳＸ16　断面（南西から）

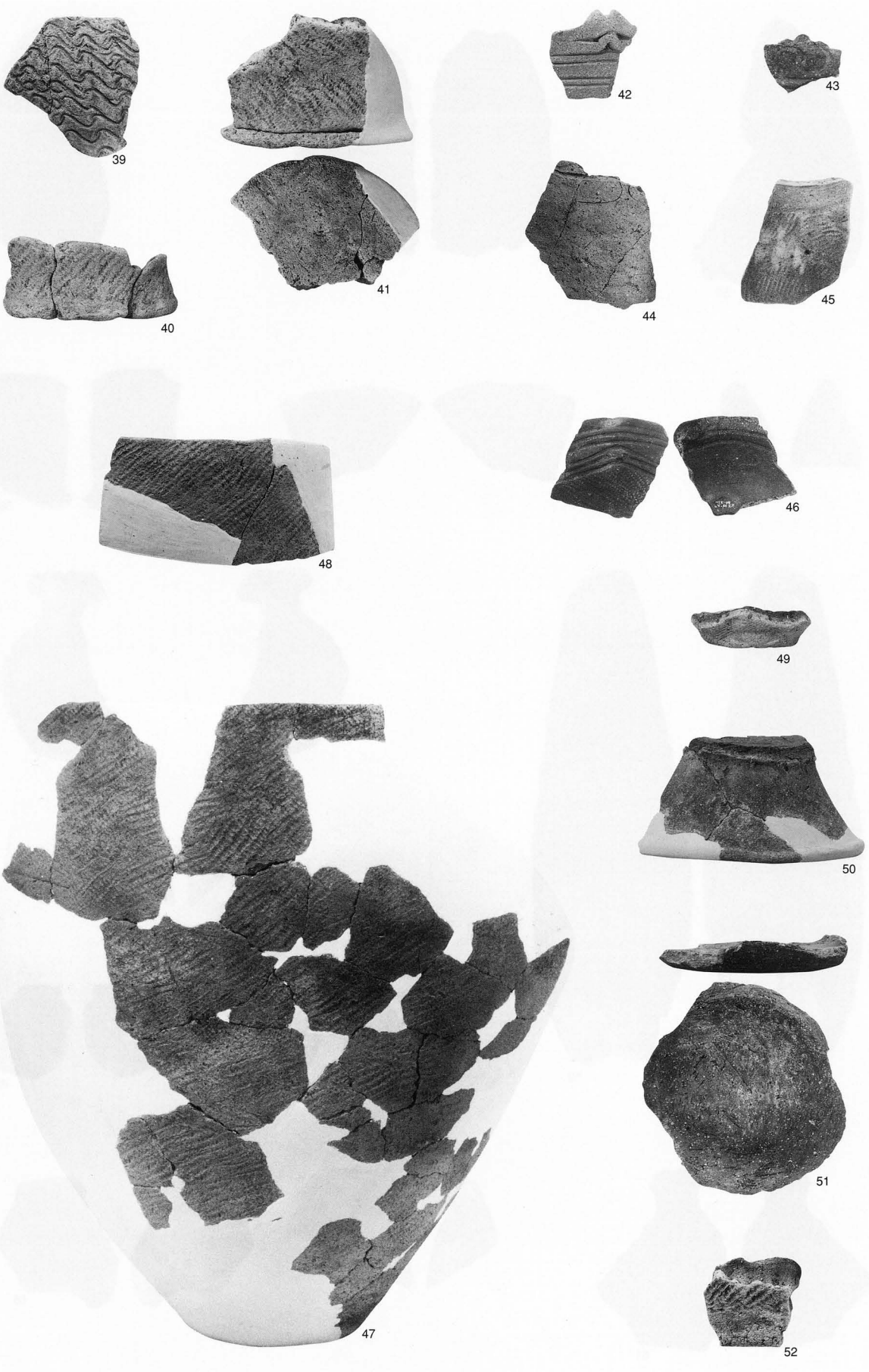
写真図版20　ＳＸ13～16



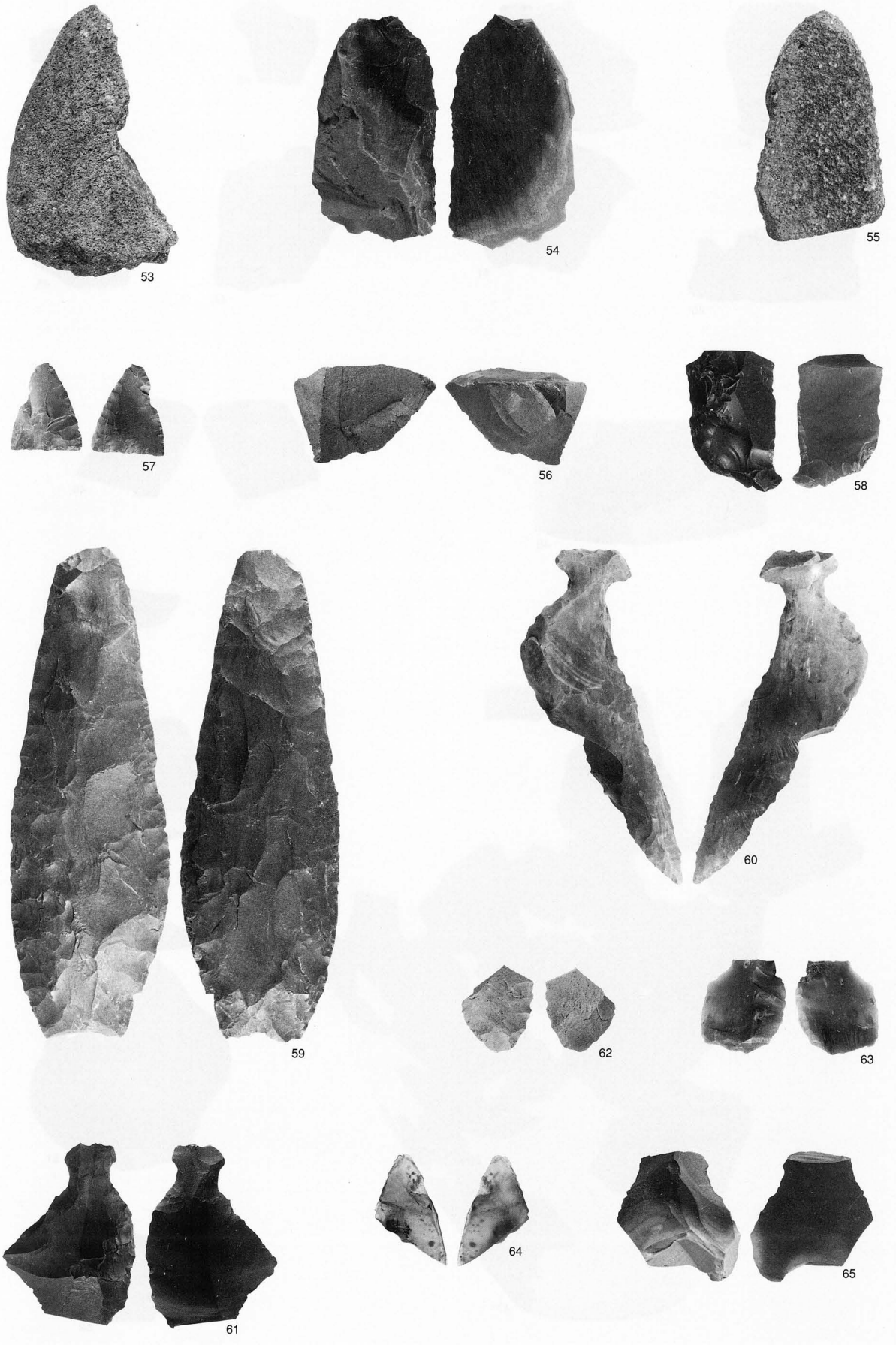
写真図版21　縄文土器（1）



写真図版22　縄文土器（２）



写真図版23　縄文土器（３）



写真図版24　石器（1）

写真図版25　石器（２）

写真図版26　土師器（1）

写真図版27　土師器（２）

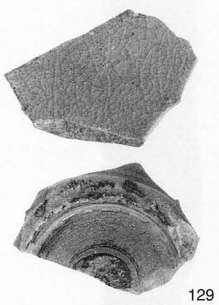
100
101
102
103
104
105
106
107
108
110
111
113
114
109
115
116
112
117

写真図版28　土師器（3）

118

119

120


129

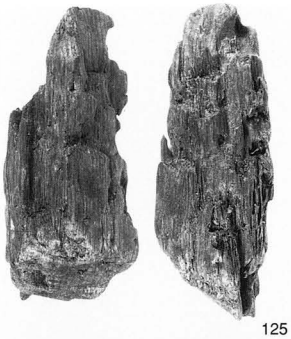
121

122

123

124

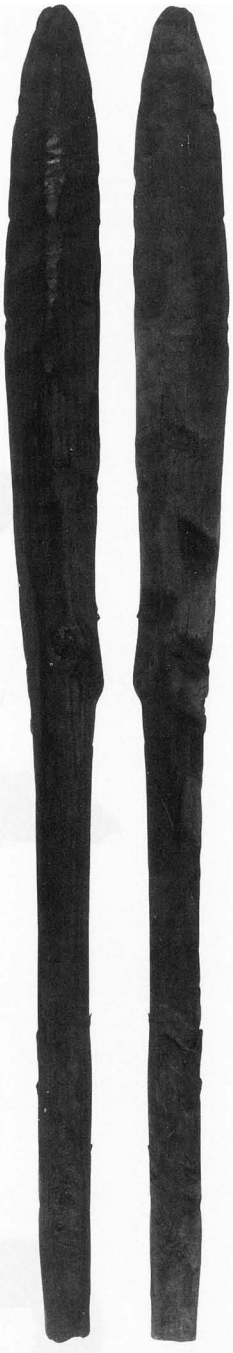
写真図版29　鉄製品、銭貨、磁器



125

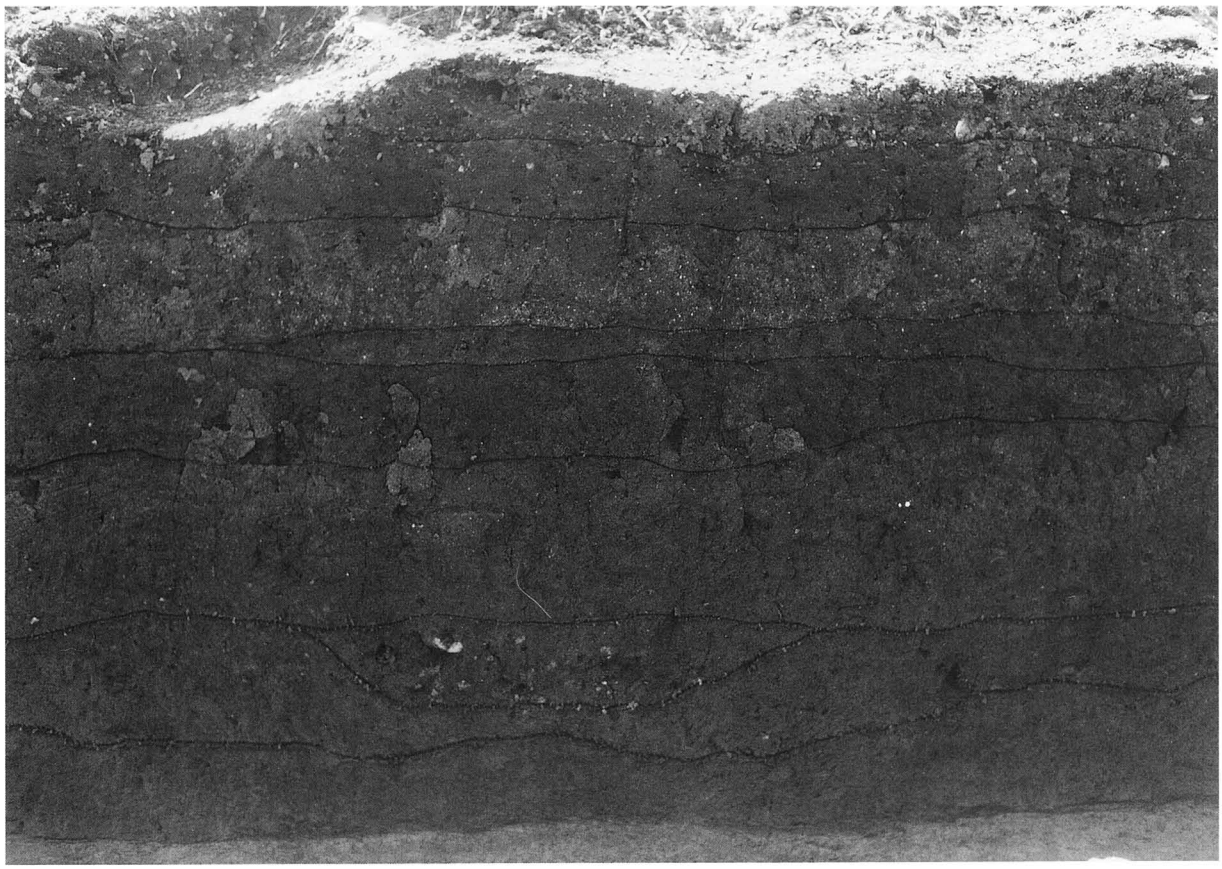
127

126

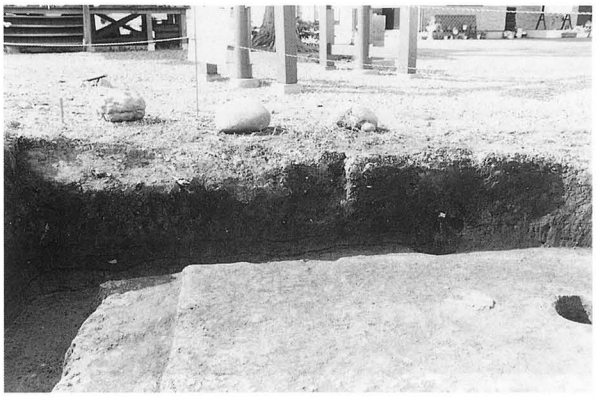


128

写真図版30　木製品

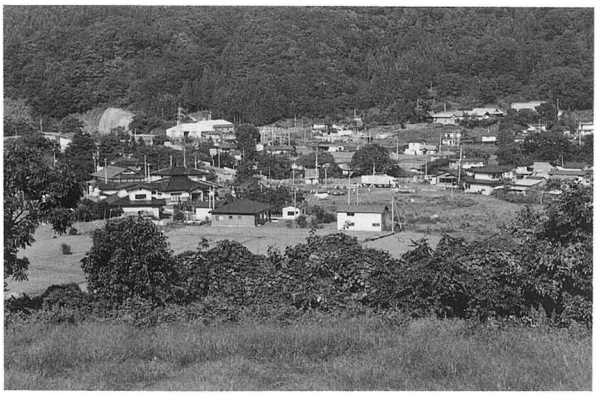


基本土層D　南西壁（北東から）

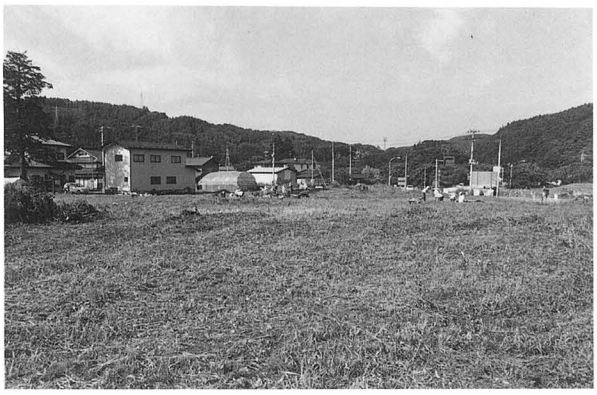


基本土層　北西壁（ＢＶ75）

基本土層　北西壁（ＢＶ38）

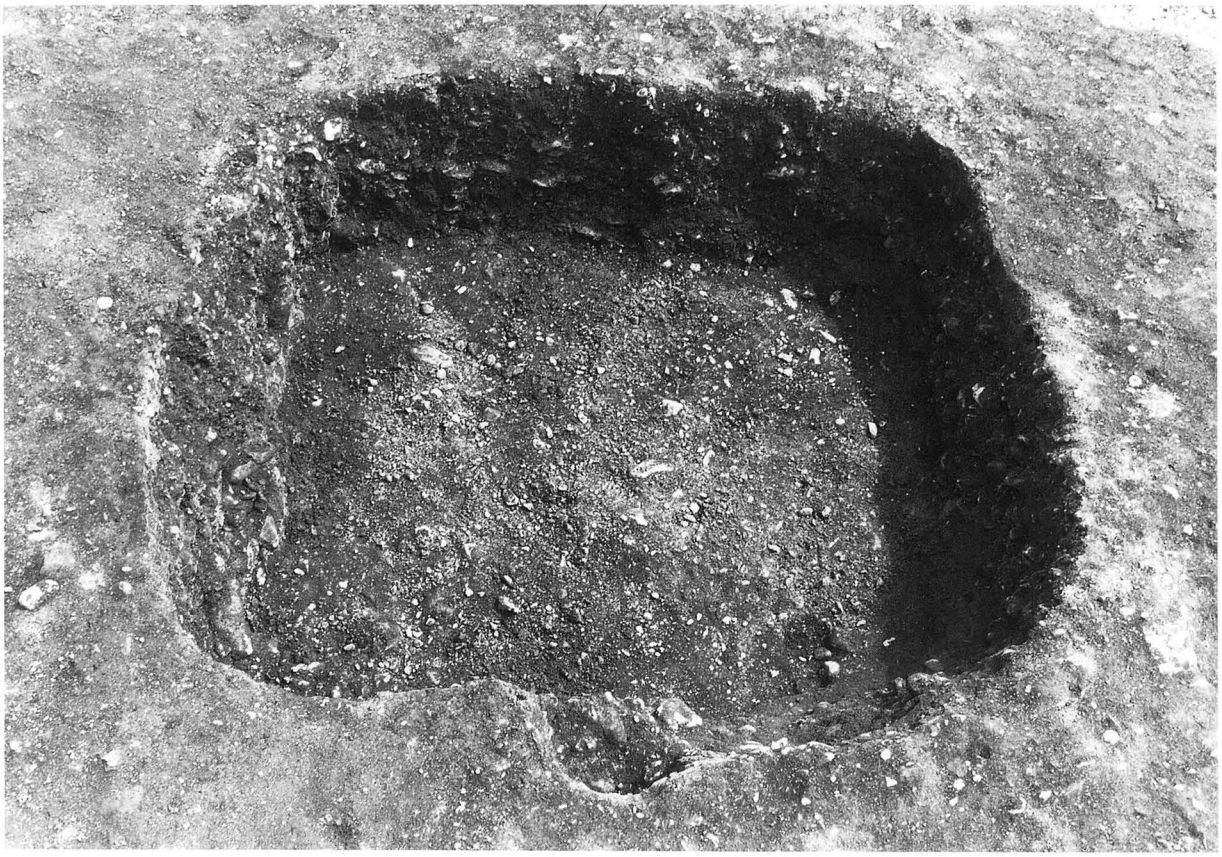


調査前風景（南西から）



調査前風景（南から）

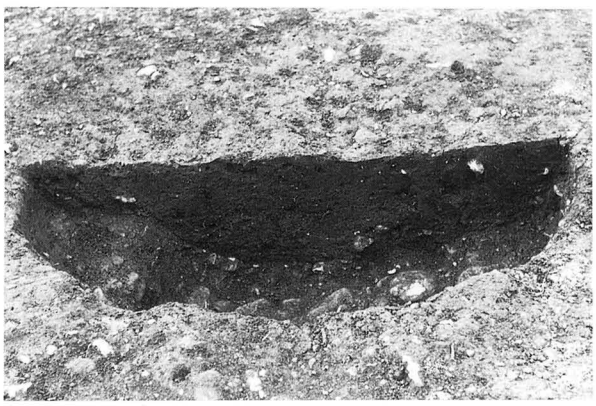
写真図版31　調査前風景、基本土層



ＳＸ01　平面（西から）

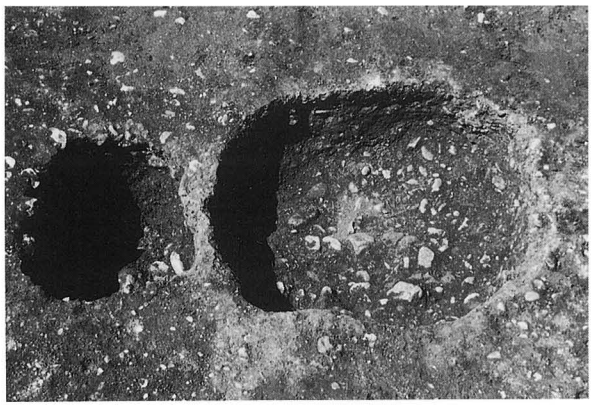
ＳＸ01　断面Ｂ－Ｂ’（南から）

平面（東から）

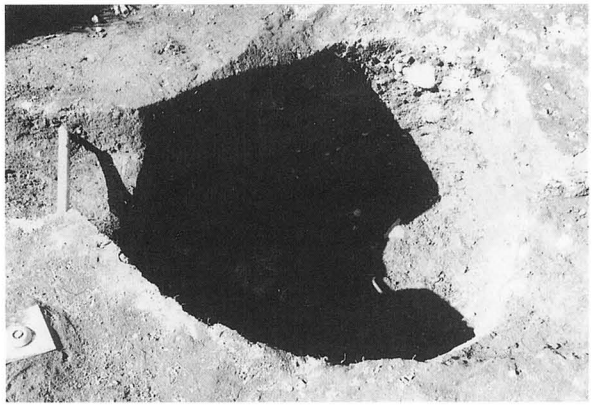


ＳＫ01　　断面（東から）

写真図版32　ＳＸ01、ＳＫ01



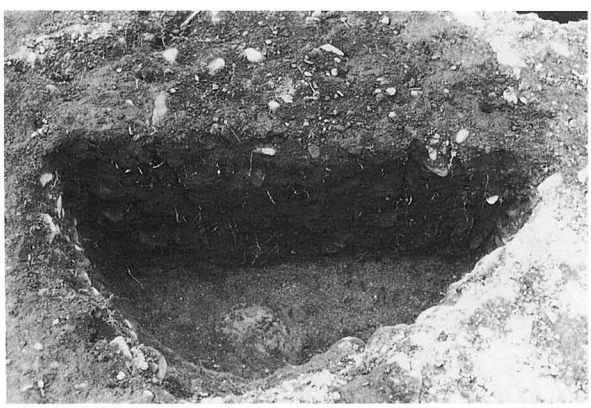
平面（東から）　ＢＶ39Ｐ６、ＳＫ02　断面（東から）



平面（南西から）　ＳＫ03　断面（南西から）

ＳＫ04・05・06　平面（東から）

ＳＫ04　断面（東から）

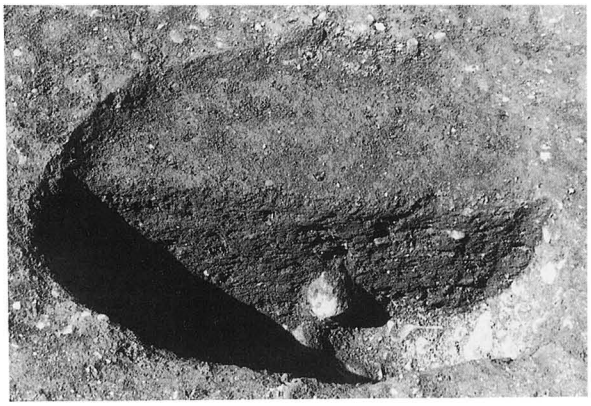


ＳＫ05　断面（東から）

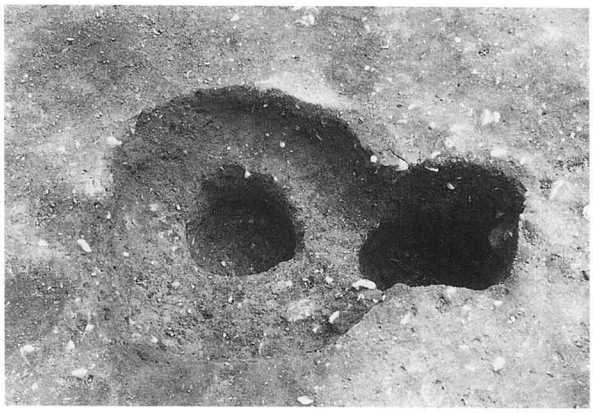
ＳＫ06　断面（東から）

写真図版33　ＳＫ02～06

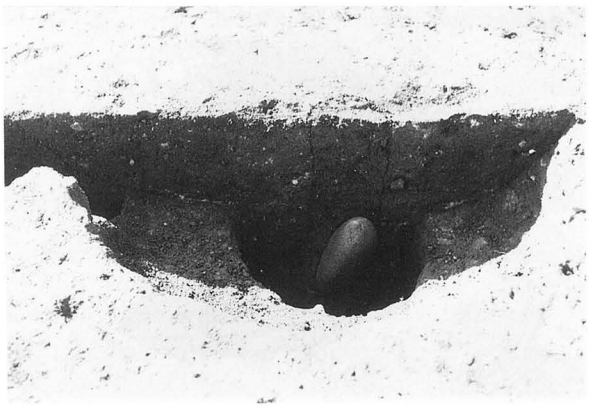
ＳＫ07　断面（東から）



ＳＫ08　断面（東から）

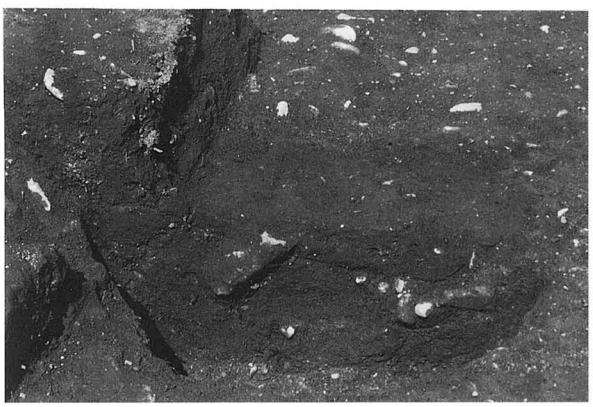


ＳＫ09、ＢＶ30Ｐ20・21　平面（西から）



ＳＫ09　断面（東から）

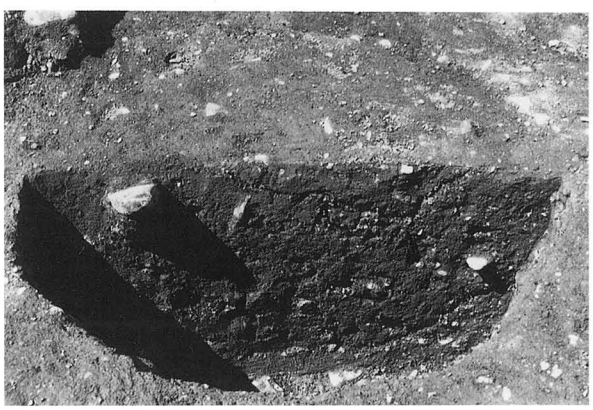
ＳＫ10、ＢＶ30Ｐ25　平面（東から）



ＳＫ10　断面（南から）

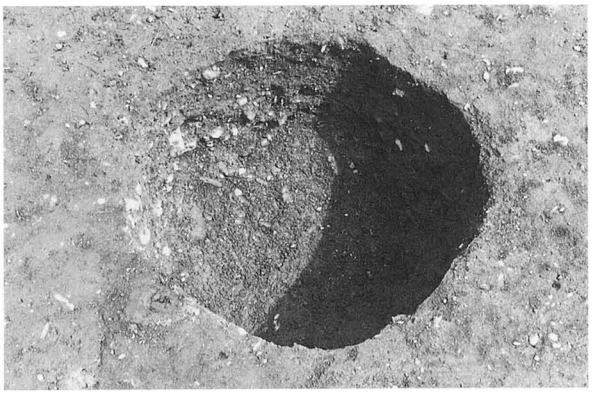
平面（西から）

ＳＫ11



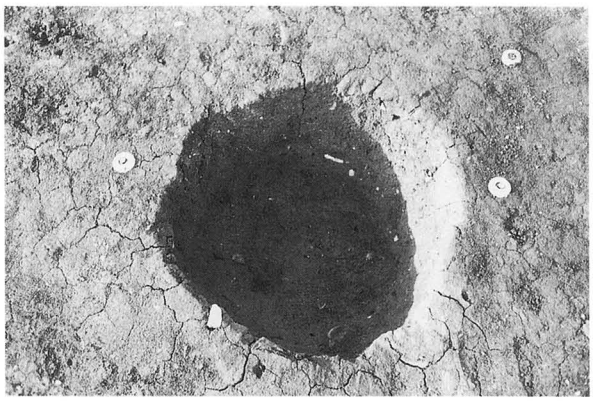
断面（東から）

写真図版34　ＳＫ07～11



平面（西から）

ＳＫ12　断面（南から）

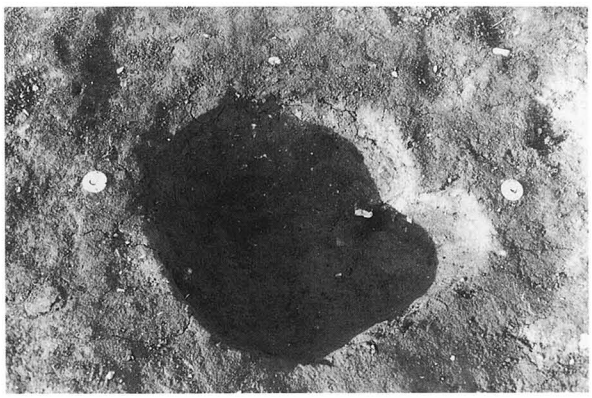


平面（南から）

ＳＫ13　断面（南から）

平面（南西から）

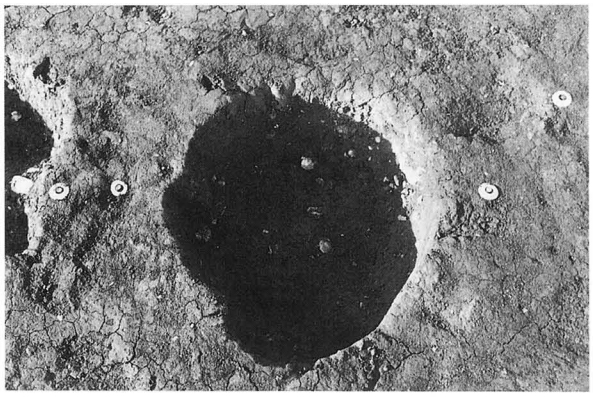
ＳＫ14　断面（南西から）



平面（南から）

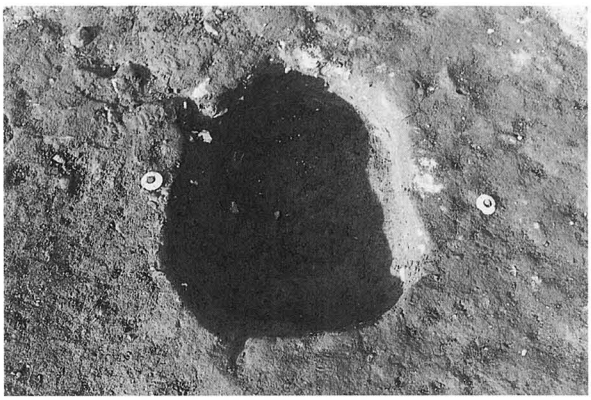
ＳＫ15　断面（南から）

写真図版35　ＳＫ12～15



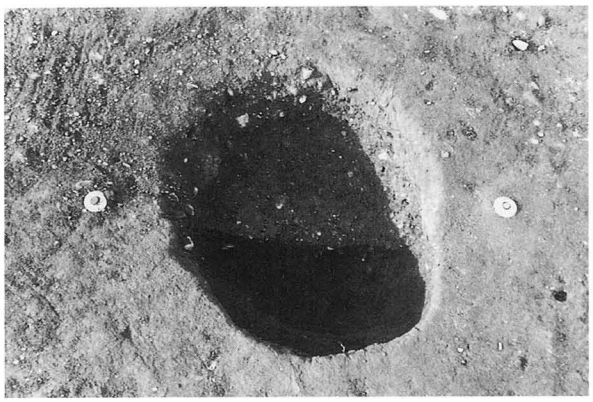
平面（南から）

ＳＫ18　断面（南から）



平面（南から）

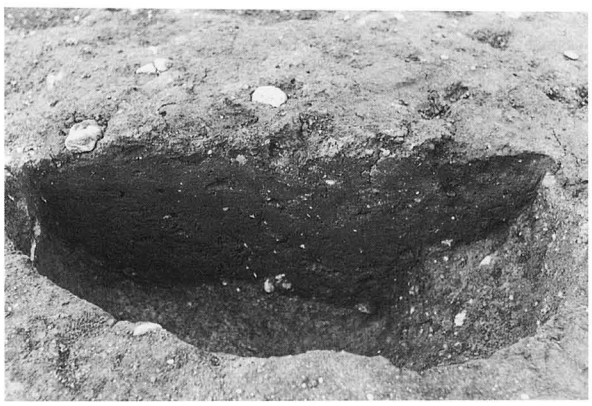
ＳＫ19　断面（南から）



平面（南から）

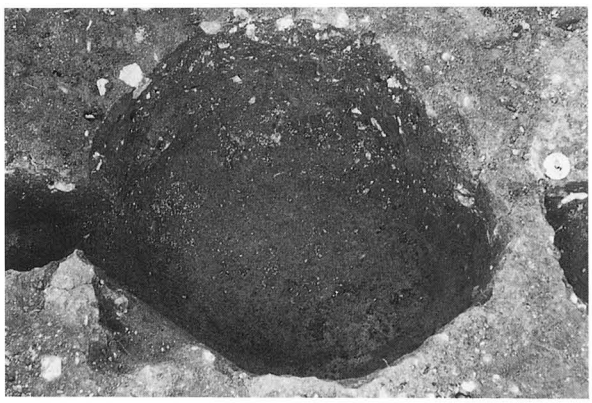
ＳＫ21　断面（南から）

平面（南から）



ＳＫ22　断面（南から）

写真図版36　ＳＫ18～22



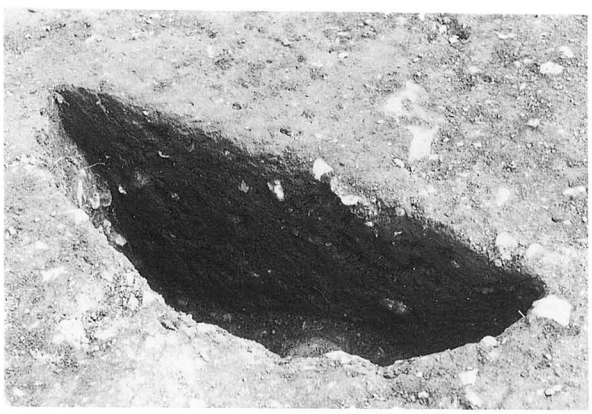
平面（南から）

ＳＫ23　断面（南から）

平面（東から）

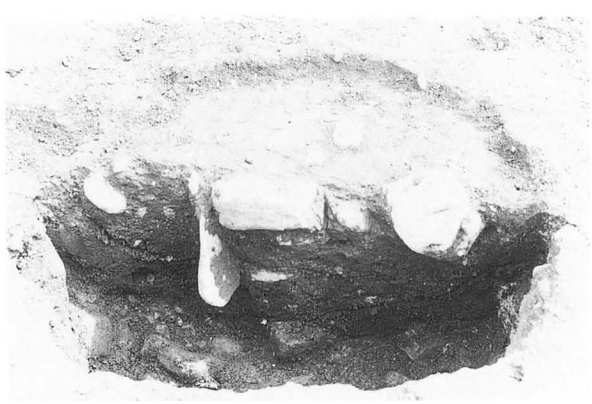
ＳＫ24　断面（西から）

平面（東から）



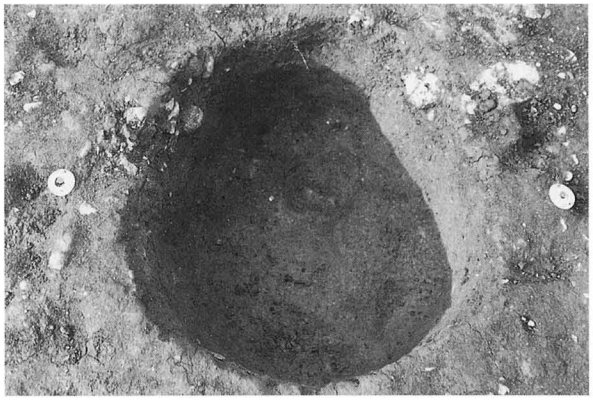
ＳＫ25　断面（西から）

平面（東から）



ＳＫ26　断面（西から）

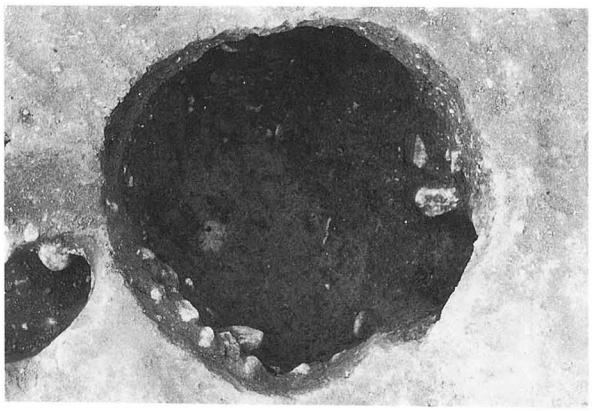
写真図版37　ＳＫ23～26



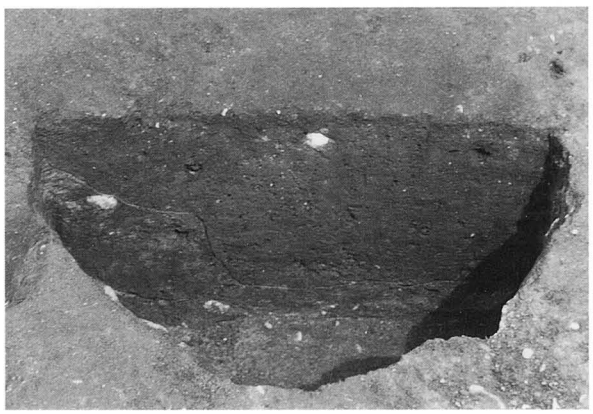
平面（南から）

断面（南から）

ＳＫ27

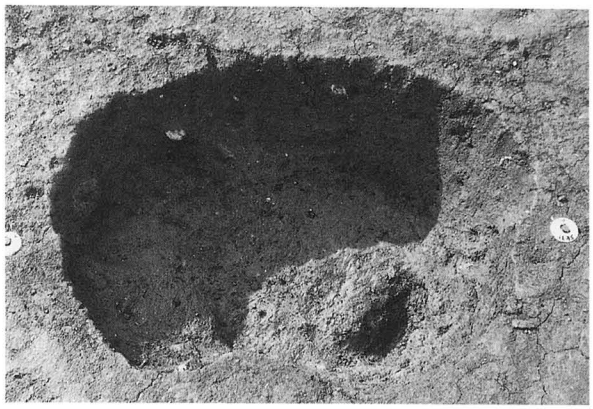


平面（南から）

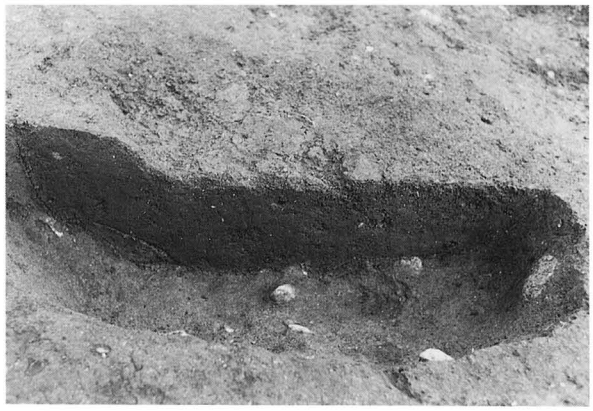


断面（南から）

ＳＫ28



平面（北東から）



断面（西から）

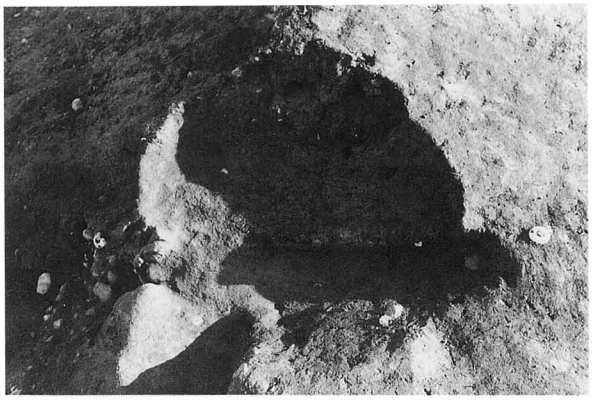
ＳＫ30

平面（東から）

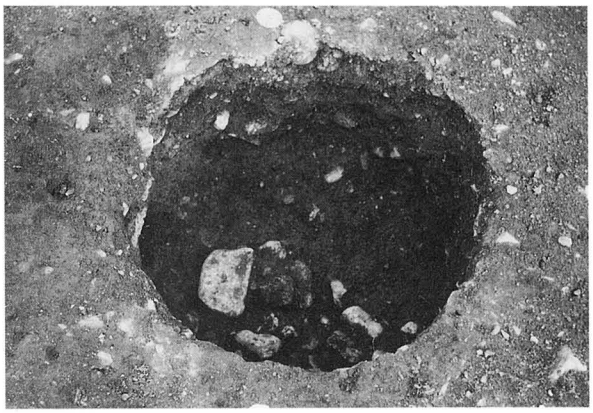
断面（東から）

ＳＫ31

写真図版38　ＳＫ27～31

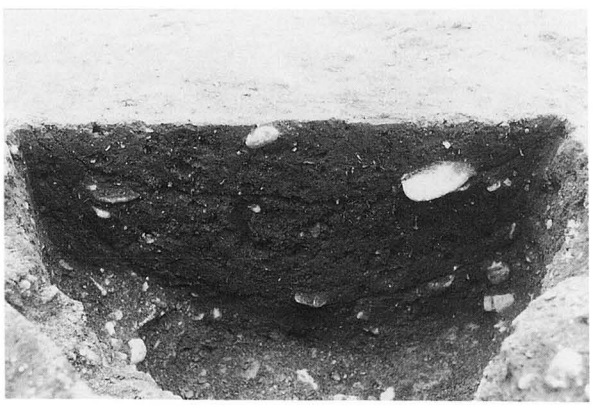


平面（南西から）　ＳＫ33　断面（西から）



平面（東から）　ＳＫ34　断面（南から）

ＳＫ36、37　平面（北東から）



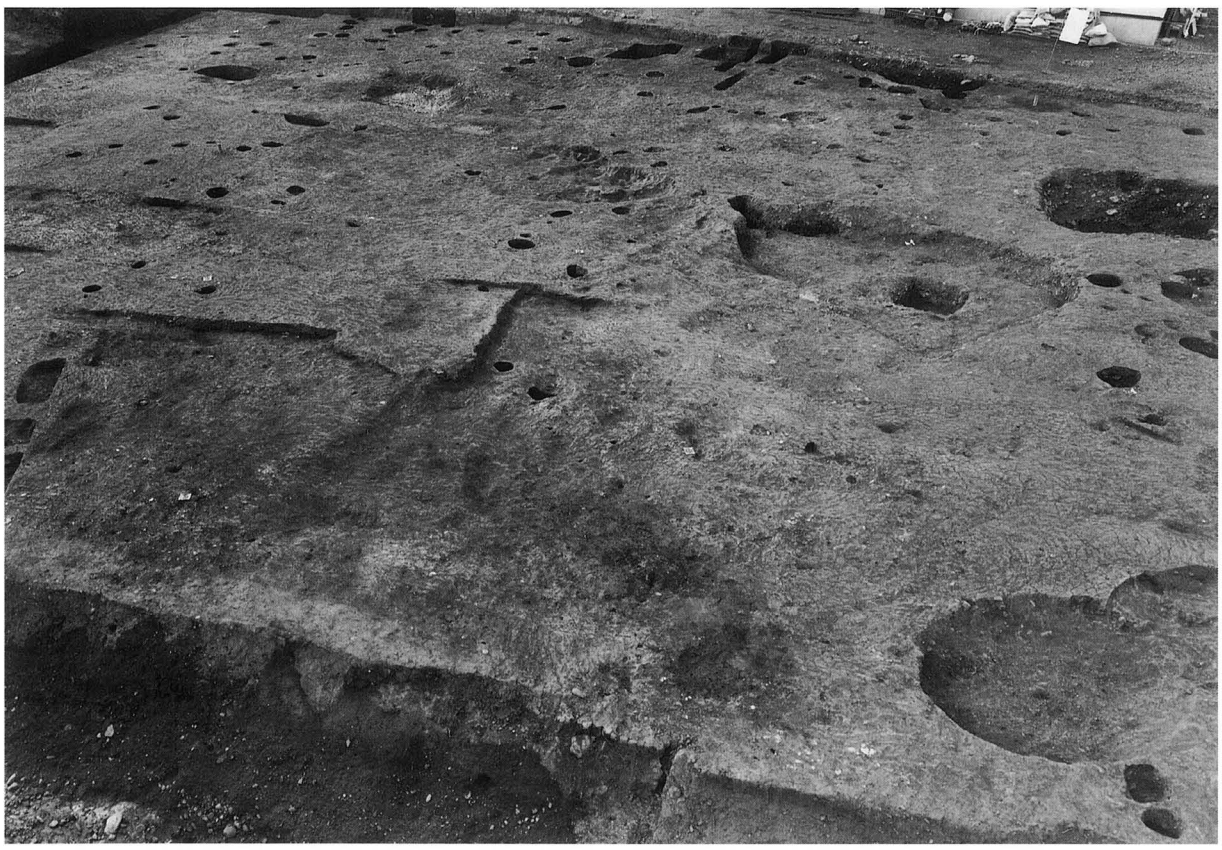
ＳＫ36　断面（北東から）

ＳＫ38　断面（北東から）

ＳＫ37　断面（西から）

写真図版39　ＳＫ33～38

柱穴状土杭群　第１・４群（南東から）

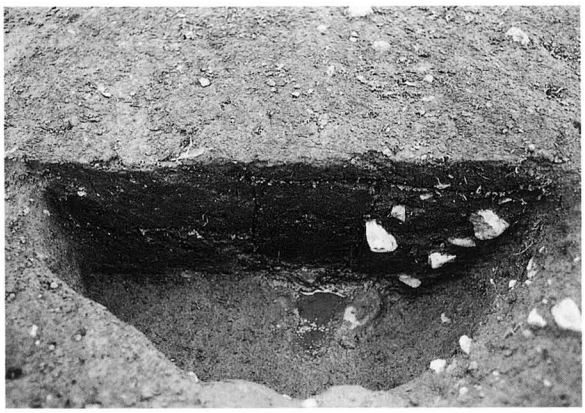


柱穴状土杭群　第２・５群（東から）

写真図版40　柱穴状土坑群 第１・２・４・５・群

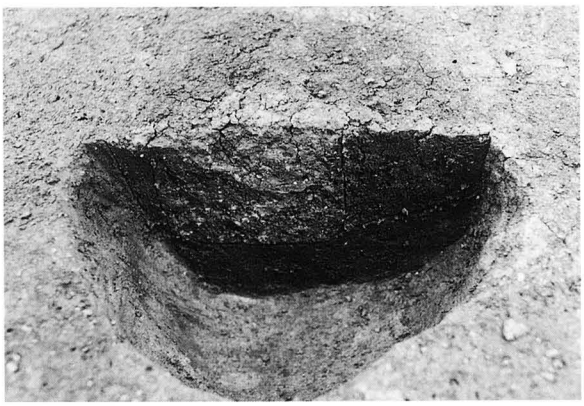
柱穴状土杭群　第３群（南から）

ＢＶ30Ｐ20・18　断面（南西から）



ＢＶ57Ｐ７　断面（南西から）

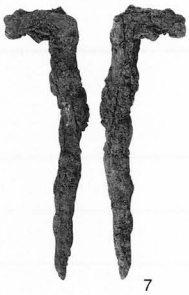
ＢＶ56Ｐ３　断面（南から）

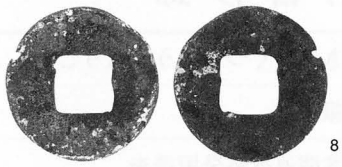


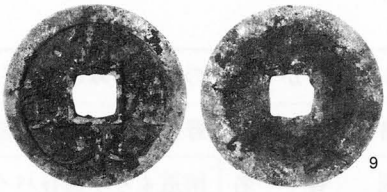
ＢＶ66Ｐ２　断面（南東から）

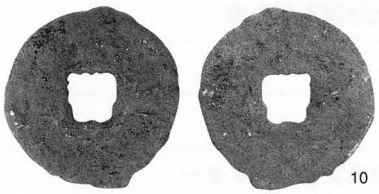
写真図版41　柱穴状土坑群 第３群

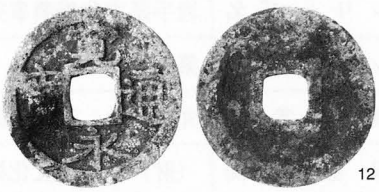
写真図版42　縄文土器、石器

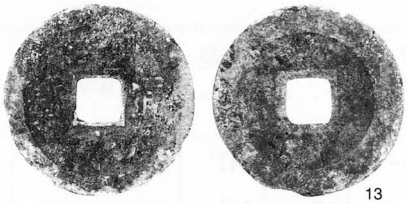

7

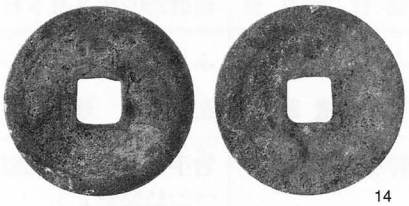

8

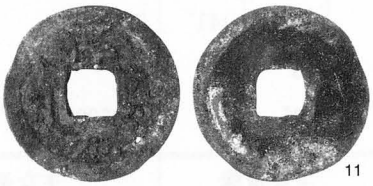

9

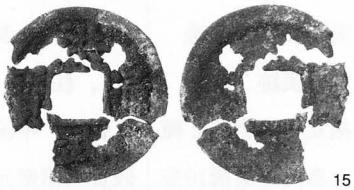

10

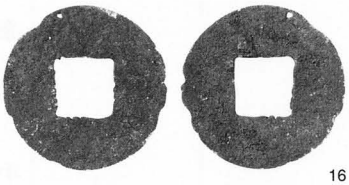

12

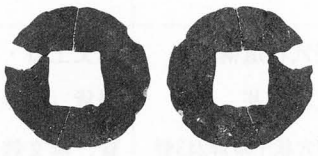

13

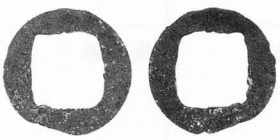

14

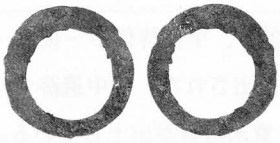

11


15


16


17


18


19

20

写真図版43　鉄製品、銭貨

報告書抄録

ふりがな	のざとかみいせき・のなかいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	野里上遺跡・野中遺跡発掘調査報告書
副書名	国道4号小鳥谷バイパス建設事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第492集
編著者名	丸山浩治　荒谷伸郎
編集機関	（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL019－638－9001
発行年月日	西暦2007年3月5日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
野里上遺跡 （のざとかみいせき）	岩手県二戸郡 （いわてけんにのへぐん） 一戸町字穴久 （いちのへまちあざあなく） 保（ほ）90－2ほか	03524	JF30－ 1081	40° 10′ 27″	141° 18′ 14″	20050414 ～ 20050831	12,230m²	国道4号小鳥谷バイパス建設事業に伴う緊急発掘調査
野中遺跡 （のなかいせき）	岩手県二戸郡 （いわてけんにのへぐん） 一戸町字野中 （いちのへまちあざのなか） 117－3ほか	03524	JF30－ 1033	40° 10′ 40″	141° 18′ 17″	20050901 ～ 20050929	1,685m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野里上遺跡	集落跡	縄文時代 奈良時代 平安時代 中世	土坑1基 竪穴住居跡2棟 耕作痕跡7区画 掘立柱建物跡2棟 火葬関連遺構10基	縄文土器・石器 土師器、鉄製品（刀子、鎌）、柱材、炭化種子 人骨片、中国産青磁皿、銭貨（紹聖元寶、洪武通寶、寛永通寶）	
野中遺跡	集落跡	中～近世	竪穴状遺構1基 土坑38基 柱穴状土坑群243個	縄文土器・石器 銭貨（淳熙元寶、洪武通寶、無文銭、寛永通寶）、炭化種子	

要約　野里上遺跡では奈良時代前～中葉頃の竪穴住居跡、平安時代中～後半・To-aテフラ降下後の耕作痕跡（畠作）と掘立柱建物跡、中世後半の火葬関連遺構が検出された。野中遺跡では小形の土坑と柱穴状土坑が多数検出され、埋土から淳熙元寶・洪武通寶・無文銭・寛永通寶が出土している。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第492集

野里上遺跡・野中遺跡発掘調査報告書

国道４号小鳥谷バイパス建設事業関連遺跡発掘調査

印　刷　　平成19年３月１日

発　行　　平成19年３月５日

発　行　（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電 話（019）638－9001
FAX（019）638－8563

印　刷　杜陵高速印刷株式会社
〒020－0811　岩手県盛岡市川目町23番２号
電話（019）651－2110

©（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2007